

彰子が女御として入内し、ついで中宮に立ち、而も藤壺に居給うたことは正しき事實である。時人が然う稱へたのも眞實でもあつたらう。

大殿の姫君、十二にならせ給へば、年の内に御裳著ありて、やがて内に参らせ給はむと急がせ給ふ。(鑑く藤壺卷)かくて、参らせ給ふ事、長保元年十一月一日の事なり。(同上)

この御方藤壺におはしますに、御しつらひも、玉も少し磨きたるは、光のどかなるやうにもあり、これは照り耀きて、女の人は、御前の方に参り仕うまつるべきやうにも見えす。いとみじう、あさましう、さま殊なるまでしつらはせ給へり(同上)かくて三月に(正しくは長保二年二月二十五日)、后に藤壺立たせ給ふべき宣旨下りぬ。中宮と聞えさす。この侍はせ給ふ(中宮定子)をば、皇后宮と聞えさす。(同上)

中宮(彰子)の参らせ給ひし折こそ鑑く藤壺と世の人申しけれ。(初花卷)

なほ此の段の本文で「源氏の君」と記してあることによつて、もう若宮が愈々源姓を賜つて臣列に下られたことを知るのである。又その母御息所のことを「桐壺の更衣」といふ稱呼で明記したのも、始めてである(後の明石巻の文は前に出した。一二頁参照)。藤壺の御兄兵部卿宮は後に式部卿になる方で、これが紫上の父君である。(附圖三参照)

○つらつきまみなどは……似げなからずなむ。(本文)

種々の解釋があつて、「いとよう似たりし」を「桐壺が藤壺に似てゐた」と解する説もあるが賛し難い。又「通ひて」を藤壺と源氏とが「言ひ通ひて」の意だと解する説(湖月抄師説)もあるが、これは宣長

河内本内源氏

物語(平瀬本)

が駁した通りで(小楠)其他にも變つた解があるけれども、私は大體宣長の説を採りたい。

うせにし更衣のつらつきまみなど、此の源氏といとよく似て有りしかば、又藤壺の源氏と似て見え給ふところも、あやしう母子ともよそへいふべき心地のすれば、然よそへて、母と申し、子といはんに、似つかはしからざるにあらすと宣へる也。(玉の小楠)

「通ひて見え給ふも」は「それに藤と源と面影の通うてゐる様子が亦……」といふ意味である。守部(湖月抄別記)は「源氏君の母として、よく似かよひて見え給ふも」の意とし、

「此子の」つらつきまみなどは「過ぎにし母更衣に」とようになり「更衣も亦君によく似たり」といふ(此子の母としてよく相かひよて見え給ふも)おのづからの親子と見んに「似げなからずなん」。

と釋してゐる。「母としてよく似通ふ」といふのが少しまはりくどくは無からうか。「母として」であつてもなくても、單に藤壺が源氏に似てゐるだけで十分である。

参考の爲、平瀬本の此の條の文を併せ示して解釋に資する。

つらつきまみなどの・いとようになりしゆへ・かよひきこえためるも・にけなからすと・つねにきこえさせ給を・おさなき心ちにもうれしくおもひて・はかなき花もみちにつけても・おかしきさまに心さしを見えたてまつり・こよなう心よせきこえたまへれば・こきてんの女御は・又この宮を心よからすおもひきこえ給ゆへに・うちそへてもとよりの御にくさもたちいてて・物しとおほしたり(きりつほ)

右の文ならば

顔だち目もとなど此の子と母更衣とはよく似てゐましたから、その更衣がそっくり亦あなたに御似申してゐるといふわけだし、二人の面影の通うてゐる様子が亦、丁度眞實生みの母子と言つたつて、虚言だと誰も思ふ者はありませんまいよ。

といつた意味になつて、一層明瞭になる。

ついでに言ひ添へるが、少女巻に夕霧と雲居雁の幼年の戀を敘する條の一節に

幼心地こいこちに思ふ事なきにしもあられば、はかなき花紅葉はかなきはなこうじにつけても、雛遊ひなあそびびの追従おそひをも、戀ろにまつはれありきて、志こころを見え聞きこえ給たまは...

とある。前に指摘した桐壺更衣送と御法卷の紫上のそれとの敘述に於けると同様の重複の筆致である。(だから重複の筆致があるからとて、それが御法卷が後人の手だとの唯一の學證にはなり得ない)或はこんなのは此の頃の人には殆ど慣用のやうになつてゐた表現でもあつたらう。

○世にたぐひなしと見奉り給ひ(本文)

湖月抄に「弘徽殿腹の宮達の事をいふ」とあるのは、無論當らない。眞淵の新釋に「これは帝の藤壺を見給ふ心なり」とある解が今は普通用ゐられてゐる。廣道の評釋にも「此段いとまぎらはし」として、新釋を探りながら

されど又「世にたぐひなしと見奉り給ひ」といふこと、帝の見給ふこととは少し聞えがたきやうなるに、下に又「藤壺ならび給ひて」と云へれば、たしかにさやうにも聞えがたきにや、猶よく考ふべきことなり。

と疑問を残してある。なほ次に引く通り、若し平瀬本のやうなれば、帝でなくて、世の人々が見奉ることになるから、

問題はないことになる。

よになうたくひなしとみたまつり。なたかうおはする宮の御かたちにもなをこの君のにははしさまさりて。たとへんかたなくつくしけなるをよの人ひかる君ときこゆふちつほの御おほえとりくなりとにや。かやくひの宮ときこゆめりし(きりつほ)

この君の御童姿、いと變へま憂

く思せど、十二にて御元服し給ふ。

居起ち思し營みて、限りある事に

事を添へさせ給ふ。一年の春宮の

御元服、南殿にてありし儀式の、

よそほしかりし御響に落させ給は

す。所々の響など、内藏寮・穀倉

院など、公事に仕う奉れる、疎か

なる事もこそと、取り分ぎ仰せ言

ありて、清らを盡くして仕う奉れ

り。坐す殿の東の廂、東向

〔口譯〕 源氏の君の可愛い幼姿を帝はいつまでもこのまゝで置きたいと思召すけれど、慣例に従つて十二歳で御元服になつた。ちつとしておいで

になる暇もない位、父帝は御自分から頻りに世話を焼いて、幾らしてもし

足りないといつた工合で、規定以上に、あれもこれもと支度の御指圖をな

さる。先年東宮の御元服が紫宸殿であつた其

の時の儀式が立派で大評判だつたのと同じ位

にしたいといふので、許處での祝宴なども、

内藏寮や穀倉院などの調進が、型の如くの御

役所仕事では疎略になり勝ちと、さういふ點

まで御心を配らせられて特に御下命があり、善美の限

りを盡くして式は行はれたのであつた。當日の式場は



南殿御古(鐘)子

原・挿圖清涼殿之鐘 附鋪設夢

に御椅子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座御前にあり。申の時にぞ源氏参り給ふ。角髪結び給へる面つき、顔のほひ、様變へ

源氏物語繪入(慶安三年版)



給はむ事惜しげなり。大藏卿藏人仕う奉る。いと清らなる御髪を削ぐ程、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと、思し出づるに堪へ難きを、心強く念じ返させ給ふ。

常の御座所の清涼殿で、その東の廂の間に東向きに御椅子を立てて玉座を設け、その前に元服をする當の源氏の席と、加冠の役の大臣の席とが用意せられてゐる。申の時が来ると、源氏が参入された。髪を角髪に結うてある可愛い顔付、光るやうなその美しさ、此の人形のやうな童姿を、むざ／＼變へてしまふのは、いかにも惜しくつてならないやうに見える。理髪役は大藏卿であつた。綺麗なその御髪の端を切らうとして、勿體ないと云つた様子であるのを、主上は、あの様子を御息所が存命で見ることなると、また御思ひ出しになるのは亡き人のこと、湧き出て来る涙の仕様のないのを、めでたい此の場にと、一生懸命におさへてやつとおこらへになつた。



(編繪源氏物語)



袴(下重ノ尻也) 表袴 同(上)

冠し給ひて、御休所に罷出給ひて、御衣奉り替へて、下りて拜し奉り給ふさまに、皆人涙落し給ふ。帝はた況してえ忍びあへ給はず。思し紛るゝ折もありつるを、昔の事取り返し、悲しく思さる。いと斯うさびはなる程は、上げ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましう美しげさ添ひ給へり。

加冠の儀が終ると、源氏は御休息所を下つて、其處で大人の服に御召替へになり、それから階を下りて、清涼殿の東庭で、陛下に對して拜舞の禮をなさる御様子、其の座に列る人々何れも感涙をとどめ得ぬ。帝の御心地は又尙更の御事、この頃は時折は紛れておいでになることもあつたのを、今日の前に源氏の今日の姿を御覽になつては、あの頃の想出が新たに悲しく御胸に甦る切なさ。斯うもまだ稚い折には、髪を上げてしまつては、美しさが見劣りしはすまいかと氣遣つておいでになつたのに、それどころか、誰も誰も驚く程、一入水際立つた美しさになられた。



清涼殿(源氏物語考繪圖)

原*挿圖清涼殿之圖 附鋪設參照 口*縫腋の黃袍

【十二にて御元服】

周の制では天子諸侯は十二、庶人は二十で冠する定めである。「天子之子十二而冠」(禮記)。左傳にも見える。尤も冷泉院が東宮としての御元服は、十一歳の御齡の二月なる由。淳樞卷に見える。十四五歳で御元服の帝も多くあります。

【南殿】ナテン。紫宸殿(シシイテン)。内裏の中で南面にある正殿なる故いふ。朝賀・即位等此の殿で行はれる(附圖四参照)。【穀倉院】コクサウケン。畿内諸國の調錢や諸國の上納米を納め、年中の糶贖方を勤める所、民部省所管。二條の南、朱雀の西に在る。【おはしま

才殿] 清涼殿(附圖五參照)【引入】ヒキイレ。加冠。當日冠者(元服する人)に冠を初めて被らせること、又其の役。武家時代の烏帽子親に當る。【申の時】午後四時「みづら」髪を左右に分けて各々の耳の上に結び、その耳の前に垂れる。童形の髪結び方である。角髪、總角。【御休所】殿上の次に在る下侍(シモザムラヒ)にあてたのである。下侍東第一間、旋立屏風、其中敷土鋪二枚、茵一枚、井用爲親王換衣所(康保二年八月二十七日、村上天皇御記)なほ下文の「さぶらひに罷出給本家物」爲親王換衣所(康保二年八月二十七日、村上天皇御記)なほ下文の「さぶらひに罷出給ひて……」の「さぶらひ」が即ち下侍で禁秘抄に「下侍三間有炭櫃。四面敷墨。號侍臣亂遊所也。(中略)酒宴等於此所之行。清華人近代不著之」ともある。清華は五攝家に次々名門の總稱(挿圖清涼殿之圖附鋪設參照)【御衣たてまつり替へて】童形の時の赤色調服(ケツチキ)の袍(袖の下から兩



黄袍 舞殿雲初ノ文、夏冬用之



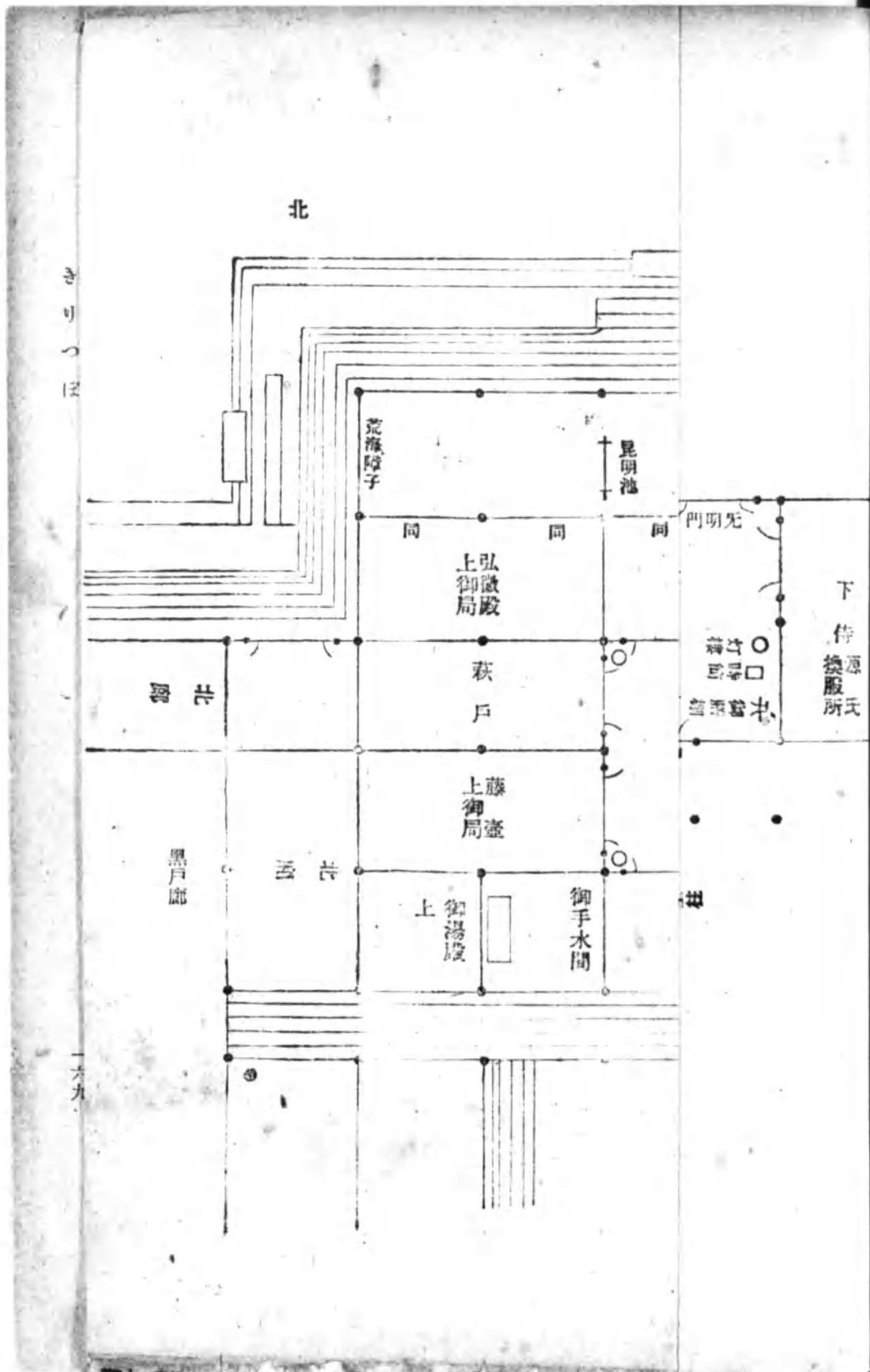
(源氏物語考物氏圖)

腋を縫ひつけ、下に欄を横につけたもの(挿圖參照)を脱いで、縫腋(ホウエキ)の袍(袖の下から兩腋を縫ひつけ、下に欄を横につけたもの(挿圖參照)に著替へる。黄袍は無位の服。【きびは】幼弱「上げ芳り」髪を上げて即ち元服して却つて前より見劣りするをいふ。彈正宮(冷泉皇子爲尊親王、和泉式部が愛を蒙つた方)の童におはしましたし時の御容貌の美しさは、はかりも知らず、耀くと、そは見えさせ給ひしか。御元服芳りの殊の外にせさせ給ひにしをやと大鏡(中巻、太政大臣兼家)にあるその「元服芳り」と同じである。若紫巻に明石入道のことを「なかく法師まさりしたる人になむ侍りける」とあるのも、似た使ひ方で、これは「法師になつた爲に前より器量を上げた」といふ意味である。

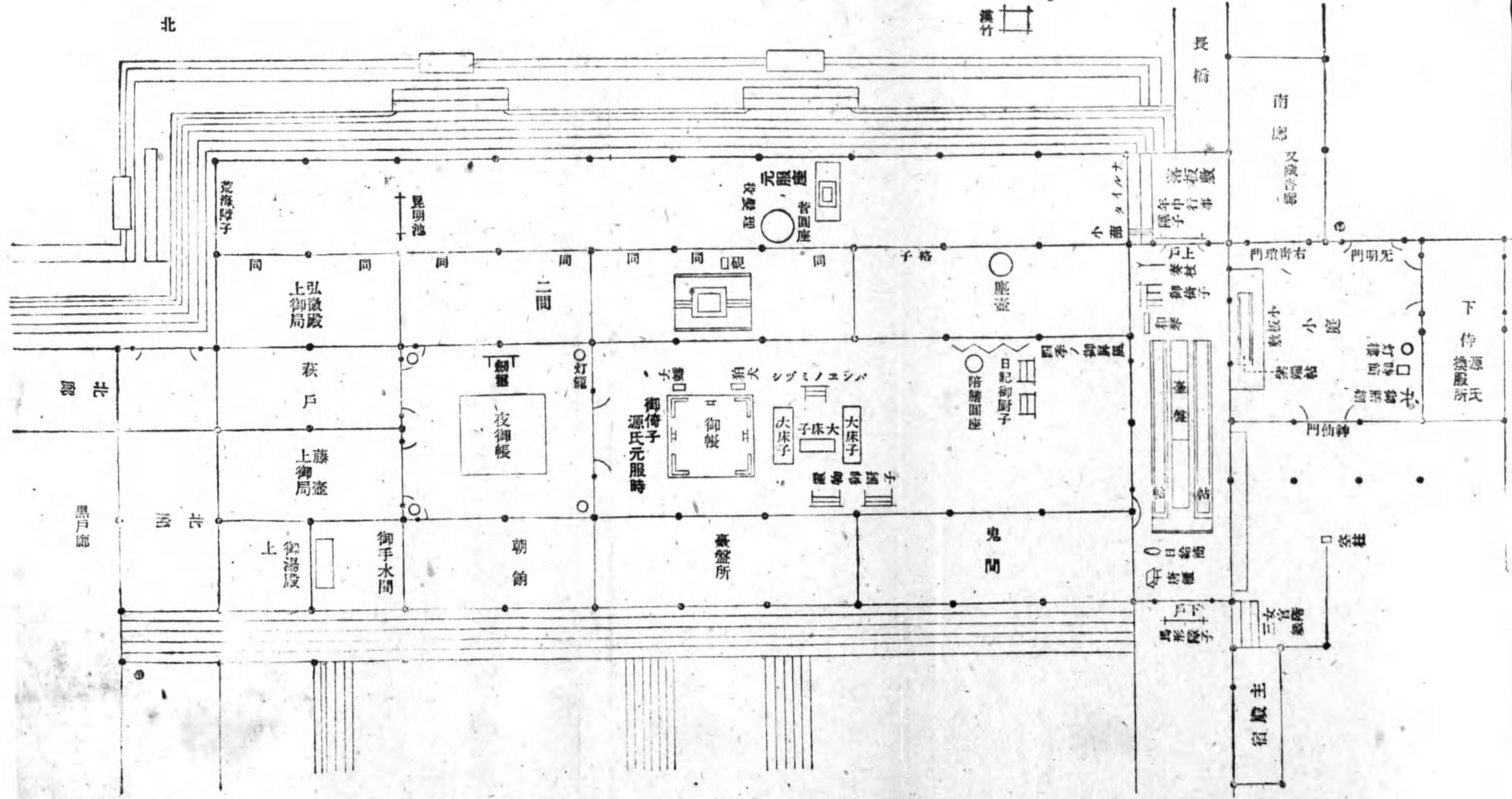
【釋評】

○犬藏卿藏人仕うまつる。(本文)

理髮の役を、大藏卿が勤めたといふ意か、或は大藏卿で藏人頭を兼ねた人が勤めたといふ意かであらう。此の問題は



清涼殿之圖設 (源氏物語考釋圖所載) (平家本圖)



【釋評】

○大藏卿藏人仕うまつる。(本文)
 理髮の役を、大藏卿が勤めたといふ意か、或は大藏卿で藏人頭を兼ねた人が勤めたといふ意かであらう。此の問題は



にあるその「元服劣り」と同じである。若紫巻に明石入道のことを「なか／＼法師まさりしたる人になむ侍りける」とあるのも、似た使ひ方で、これは「法師になつた爲に前より器量を上けた」といふ意味である。

實は既に早く弘安源氏論議の際にも不審の一項として提起せられたもの、而もいづれとも決定を見なかつたところのものである。(弘安源氏論議は弘安三年十月六日夜東宮(伏見院)の御方で左右に分れて源氏物語中不審の條々を十六番論議し合うたのを記したもので、記したのは左方の一人源具顯。文は明らかに古今序に模したところがあるが、事は帚木卷の雨夜の品定に學んだことも確である。群書類従物語部に收めてある)即ち二番左方、侍從三位藤原雅有の間、右方の答は藤原康能朝臣で「大藏卿の藏人」と讀むべしと主張し、左は之に贊せず、「藏人」を「理髮藏人」の意で役名だと解しようといふのである。雙方共確實な典據が無いので、判は

わ。此番、深き故をかくして其理あらはならざれば、勝負定め難し。但し、其記を引かずと雖も、此儀既にあらはれる上は、右強く

といふ苦しい遁口上、右が形勢稍有望らしいが、「深き故をかくして云々」は愉快である。宜長(玉の小櫛、五の卷)は「みぐし上」を「くら人」と寫し誤つたか、或は「藏人」の下に理髮を意味する語があつたのが落ちたか、いづれにせよ、誤脱があるかと言つてゐるが、「みぐし上」を書き誤つたと獨斷的に決するの少し妥當でないかに思はれるし、(湖月鈔別記に、守部が珍しく此の考を五百年來諸學者の窮した疑問を一時に開いた卓見と推賞して、所藏書の本文まで改めてしまつたのは、少し早計の感がある)直ぐ前に「さま變へ給はむ事」とあり、又直ぐ後に「いと清なる御髮を削ぐ程」とあるから、理髮に當る語が省かれてあるとしても意味は通ずる。もし原文に誤脱が無しとして素直に讀めば、如何しても「大藏卿が藏人の役を仕うまつた」といふ意味に讀まれるのが最も自然であらう。論議に右が大藏卿兼任の藏人頭の意だといふに對し、左が

さらば藏人頭の大藏卿とぞ書くべかりける。大藏卿の藏人煩はし。

きりつぽ

と言つて飽くまで「大方は『大藏卿藏人仕』といふにつきて、儀あるべきにや」と不審してゐるのは如何にも尤もであり、又、右から「理髮藏人」の事の見える典據を突込まれてはゐるけれど、

藏人はすべて理髮の名にて侍るやらむ。古き記録に見及ぶ心地す。

と言つてゐる侍従三位の意見も無下に笑殺出来ぬと思ふ。源氏官職故實秘抄(卷二)に至つては、

理髮の役は藏人の職にてつかうまつる也。

と何等の疑問も挟まずに明記してゐるが典據は示してない。

此の理髮の役は、道長の時代にも、敦康親王の際も、後一條天皇の際も藏人頭が勤めてゐる(二七七頁参照)。大藏卿で藏人頭を兼任したことも、康能朝臣は「定めて例侍らむか」とだけ言つてゐるが、現にやはり道長時代にもあつて、御堂關白記の長保元年十一月二日辛巳に「藏人頭大藏卿正光」と見えてゐる。だから大藏卿で且藏人頭だつた人が理髮を勤めることも無論あり得るので、(そして右の關白記に記された官名の稱呼も「藏人頭大藏卿」とあつて、此の點では前掲雅有の論が裏書されることになる)。否、現にやはり道長時代長和二年三月廿三日三條院の二・三宮(敦康・敦平兩親王)御元服の時の理髮は、公信朝臣と朝經朝臣の兩人が奉仕してゐる(御堂關白記)が、職事補任で覽ると、此の頃は藤公信は左近權中將で藏人頭、即ち頭中將、そして藤朝經の方は右大辨で藏人頭、即ち頭辨で、而も此の人は大藏卿兼任なのである。が兎も角、理髮の役は藏人頭乃至藏人が勤めるのが普通といふことになつてゐるとすれば、此の役を勤めるのをさして「藏人仕奉る」と言つたのかも知れぬ(理髮藏人といふ役名があつたのなら論無しであるが)桐壺巻を書いた同じ作者のものした紫式部日記の寛弘七年正月三日宮達の御藏餅の儀を記した條に

藏人は、たくみ・兵庫仕まつる。

とある。此の藏人は女藏人で、前の場合とは同一には言へぬが、當日の儀式の女藏人の勤仕すべき役(即ち、得選御子所)から受け取つた供御を陪膳の役に執り傳へる事)を内匠・兵庫の二人の女藏人が勤めたといふ意味であることは確である。即ち「當日の女藏人は、内匠・兵庫であつた」の意である。女藏人であつて、且當日女藏人の勤めねばならぬ役を二人が勤めたといふのである。斯ういつた意味で、大藏卿が(藏人頭を兼ねてゐても、ゐなくても)當日藏人頭の勤むべき理髮の役を勤めた。即ち當日の藏人は大藏卿だつたといふ意味ではなからうか。

尤も小右記(ラッキ。セウイッキ。小野宮右大臣實資の日録)の天元五年二月十七日庚辰の條に

理髮者納言所奉仕也。納言若無其人、可及參議。而中納言左衛門督重光、已堪其事、可然敷。

と見え、これは其の翌十九日の東宮師貞親王(花山天皇)御元服(御年十五)の時の事である。延喜十六年十月二十二日の東宮保明親王(醍醐第二皇子、初名崇象)御元服(御年十四)の際も、加冠は右大臣藤原忠平、理髮は中納言兼右衛門督藤原定方であつた(西宮記醍醐皇子傳)。なほ、當夜故左大臣時平の女が所謂添臥として参入し、東宮御息所になつた(東部王記醍醐皇子傳・西宮記・北山抄等)。すると、古例は納言の人が理髮を勤めるのが定めであつたのであらう。(道長時代でも、一條天皇の一宮・二宮の御時は藏人頭であるが、三宮敦良親王(後一條皇太弟、後朱雀天皇)の寛仁三年八月二十八日壬子、十一歳で御元服の際は、加冠は右大臣兼東宮傅藤原公季、理髮は中納言藤原經房だつた事が御堂關白記に見える)無論主上・東宮・親王・一世源氏と、格式に差等はあるべきではあるが、同年の翌十一月二十七日第一皇子克明親王御元服(御年十四)の際は加冠はやはり右大臣忠平で、理髮は良峯衆樹朝臣が奉仕してゐる。衆樹は職事補任によると、此の時は頭中將即ち藏人頭で、參議に任じたのは翌年正月二十九日であるから、此の時はその參議よりも下位の人が勤めたわけである。それのみでなく、西宮記「天皇元服」の條の割註に

六位已下以堪能者爲理髮

とある位であり、(江家次第卷一七、御元服)には「殿上四位以下堪能者奉仕之」と割註がある。又、理髮の上手な人が無暗にあるわけではなく、御堂關白記長和五年三月二日丙午の條には、「又被^レ仰云、東宮從者正月未^レ梳^レ頭云々。是依^レ無^レ理髮人也。可^レ然^レ以^レ人可^レ令^レ昇殿。其人是隆佐云々」とあるのでもよくわかる。特に後世は殆ど内藏頭が勤める慣例になつてしまつたやうである。天祿三年の圓融天皇御元服の時がさうで、それからすつと降つて寛治(堀河)・天永(鳥羽)・大治(崇徳)といづれも内藏頭が奉仕し、嘉應(高倉)以後は全くさうなつてしまつてゐる。寛平・延喜以後、寛治頃迄までは、まだそれよりは上位の人のやうで、而も實資も居た道長時代は三度とも藏人頭が仕うまつてゐる(寛平九年七月三日、皇太子敦仁親王(醍醐天皇)の御元服(御年十三)の時も、加冠は時平・道真兩大納言で、理髮は右中將で藏人頭、即ち頭中將藤原定國が奉仕し、(七年正月十九日との説もあり、天皇親ら御元服を養け給うたとの説もあるが)承平七年正月四日、朱雀帝の御元服(御年十五)の時は、藏人少將朝忠、即ち少將で藏人をば兼ねた人が勤めてゐる。)兼任の大藏卿なら納言には及ばぬが、先づ以て申し分の無いところであらう。但し、道長時代の記録でも、此の役を、藏人乃至理髮藏人として記しては無い。且別に當日、所謂「行事の藏人」があつたことは、後世のものだが三條實房の愚昧記(嘉應三年正月三日主上(高倉)御元服の條)には、明記してある。勿論その時の理髮は内藏頭兼右馬頭親信朝臣で藏人ではない。萬一、紫女の時代に此の役を藏人と呼んだ事實があるとすれば、却つて逆に此の桐壺卷の本文が其の故實の一例證の資料を提供することにならぬとも限らぬが、姑く記して後考に俟つこととする。即ち本文に誤脱あれば別であるが、無しとすれば、文の面からは藏人頭兼大藏卿と解するのは少し無理なやうであり、反對に假に文を離れて、事實の方からいへば、さうあることが少しも不當でない、といつたのが先づ結論である。

引入の大臣の皇女腹に、唯一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御氣色あるを、思し煩ふ事ありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも御氣色賜はらせ給ひければ、「さらば此の折の御後見なかめるを、添臥にも」と催させ給ひければ、然思したり。侍ひに罷出給ひて、人々御酒など參る程、親王達の御座の末に、源氏著き給へり。大臣氣色ばみ聞え給ふ事あれど、物の慎ましき程にて、ともかくも得あへしらひ聞え給はず。御前より、内侍宣旨承り傳へて、大臣參り給ふべき召しあれば、參り給ふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御

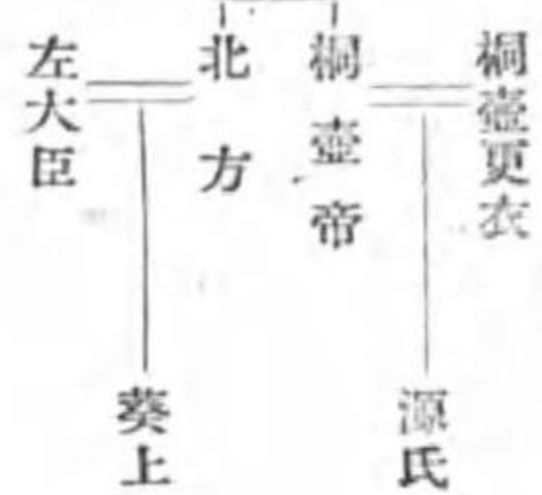
きりつば

〔口譯〕 加冠の大臣の正妻は皇族出の方で、その御腹

原(一)左大臣
(三)葵上

口*桐壺帝の皇妹

の大事な一人娘を東宮からも御所へつてゐるのを、未だに抄々しい御返事も申さぬのは實は、この源氏の君に差上げたいとの下心があつたからである。この事は既に陛下の御内意も伺つてあるので、豈では丁度この際源氏の世話をしてくれる人もないことだし、是非御伽に定めてくれたら」と御催促になるので、大臣も、さうしようと考えられた。



御前を退出せられて、控所の下侍で皆がお祝の

盃を頂戴する時、源氏は親王方の御座の次に御著席になつた。左大臣は、いゝ機を見て源氏の傍で娘の事を

原*挿圖清涼殿之圖
附鋪設参照

それとなく言ひ出して氣を引いて見るが、まだすぐ顔の赧くなる年頃なので、何うとも挨拶の御言葉も出ぬ。丁度そこへ御前から内侍が下つて来て、大臣にお召しの由の宣旨を傳へたので、早速伺候された。主上は非常に御満足の體で、今日の役の勞ひにと、めでたい下され物を主上附の命婦が取次いだ。白い大桂に御衣一揃、例の通りである。陛下は大臣に御盃を下さ

衣一領、例の事なり。御杯の序に、

いとときなき初元結に長き世を

契る心は結び籠めつや

御心ばへありて驚かさせ給ふ。

結びつる心も深きもとゆひに

濃き紫の色し褪せずば

と、奏して長橋より下りて舞踏し

給ふ。左馬寮の御馬、藏人所の鷹

居ゑて賜はり給ふ。御階の下に、

親王達上達部列ねて、祿ども品々

に賜はり給ふ。その日の御前の折

櫃物・籠物など、右大辨なむ承りて

仕う奉らせける。屯食・祿の韓櫃

どもなど、所狭きまで、春宮の御

元服の折にも数増れり。なか／＼

限りもなく厳しうなむ。

りながら、

いとときなき初元結に長き世を契る心は結び籠めつや

【歌意】 可愛い初めての元結を結ぶ時、娘と源氏との幾千代かけて變らぬ縁を説いて結び籠めてやつたか、どうぢや。(世は男女の縁の意。「結び」は元結の縁語)

結の縁語)

御下心があつて、

一首下される。大

臣は畏つて、併し

嬉しさを押へ切れぬやうに、

左結びつる心も深き元結に濃き紫

の色し褪せずば

【歌意】 仰せまでもなく、しつかりと、あの元結には深い意味を籠めて結んで置いたのでございませうが、

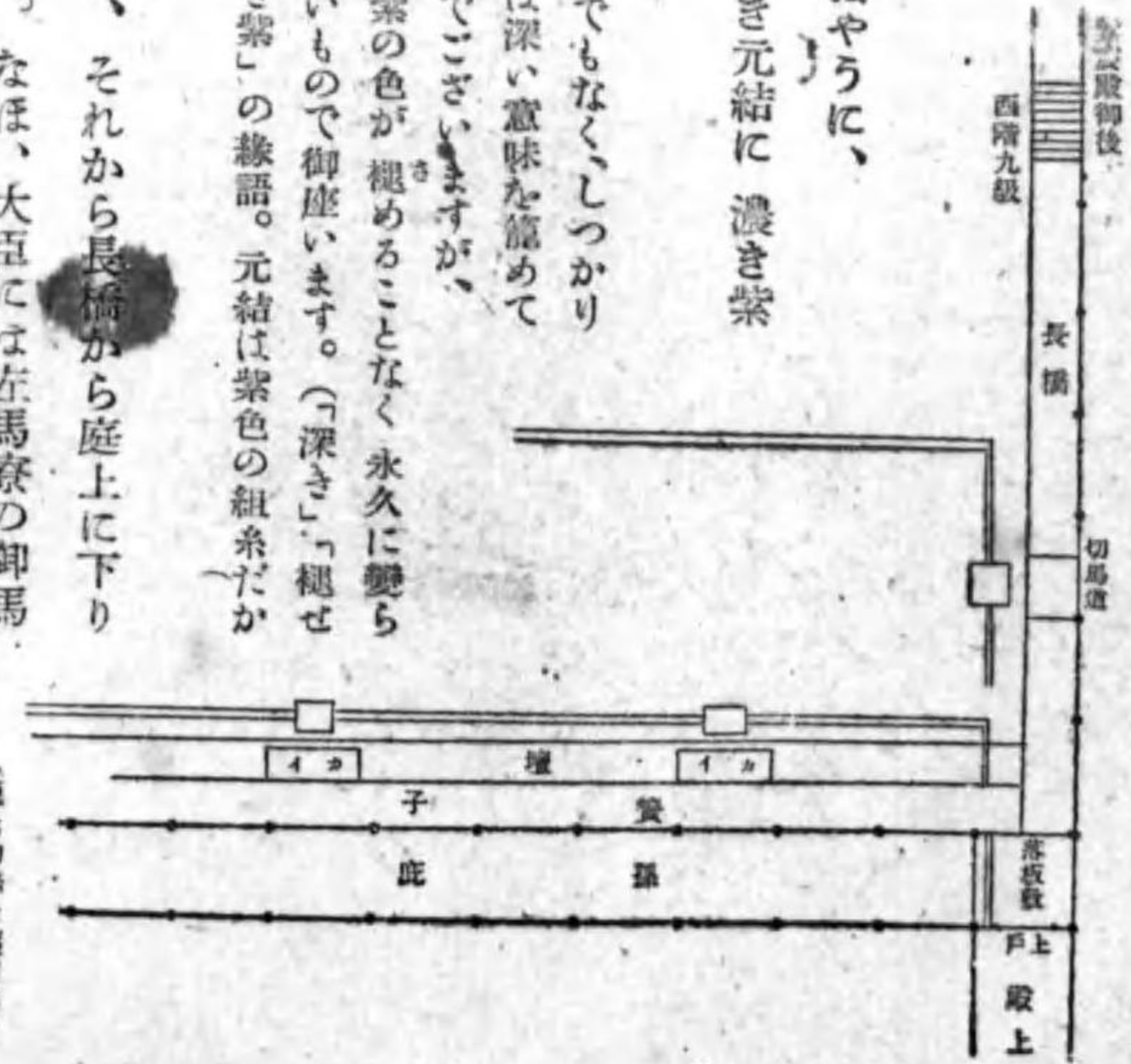
どうぞあの濃い紫の色が褪めることなく永久に變らぬ縁であらざらぬもので御座います。(「深き」「褪せず」ともに「濃き紫」の縁語。元結は紫色の紐糸だからである。)

と御返歌を申上げて、それから長橋から庭上に下り

て拜謝の舞踏をした。なほ、大臣には左馬寮の御馬

と御返歌を申上げて、それから長橋から庭上に下りて拜謝の舞踏をした。なほ、大臣には左馬寮の御馬

(源氏物語考證附)



鷹飼



折櫃物 (古圖録)



折櫃物

と藏人所の鷹を居まつて賜つた。續いて、御階の下に親王や上達部達がすなりと並んで、それ／＼に應じた御祝の品物をいろ／＼賜はる。當日冠者から陛下の御前へ献上せられた折櫃入の物や、籠入の物やなど、一切右大辨が仰せを受けて調進したのであつた。下々の役の者に配られる強飯のおむすびや、諸官に下賜される御祝品を入れた韓櫃など、置き場れぬ程並べ立てられて、東宮の御元服の時より數も澤山であつた。萬事に互つて今度の方が却つてどうも堂々としてゐた。

【語義】

【侍ひ】 下侍(前出) 【内侍】 この内侍は掌侍(ナイシノツヤウ)中の第一番、即ち勾當内侍(カウタウノナイシ)である。もとは宣旨は尙侍が傳へたのであつたが、此の頃は勾當内侍の役になつた。これを内侍宣といつてゐる。【祿】 ロク。御祝の御下賜品 【大挂】 オ

ホウチギ。大きくゆつくり仕立てた挂(婦人の上衣)。祿に賜ふ料である。拜領してから自分の著丈に合ふやうに、こしらへ直す。【御衣一領】 表衣(ウヘノキヌ)。下襲(シタガサネ)。表袴(ウヘノハカマ)の揃 【長橋】 ナガハシ。清凉殿から紫宸殿へ通する廊 【舞踏】 舞踏の方式は、「再拜立左右左、居左右左、立再拜(拾芥抄)と見えてゐる。【左馬寮】 ヒダリノツカサ。馬寮(ウマノツカサ、又、マレウ)は左右あつて、御所の御厩及び諸國牧場の馬の事を掌

る。一二七頁に出した平家物語小管の條の仲國が鞭を掲げた「寮の御馬」といふのは即ち此の御厩の馬のことである。【藏人所】 藏殿天皇の時置かる。禁中側近の御用を勤める。此の所管に「鷹飼」(タカガヒ)があつて、小鳥狩の爲の鷹を飼養してゐる。【居ゑて】 馬は引くのであるが、鷹は鷹飼の腕に据ゑてゐるからいふ。【折櫃物】 ヲリビツモノ、ヲリウツモノ。檜の薄板を折り曲げて作つた櫃に盛つた物。【籠物】 コモノ。籠に五葉(柑・橘・栗・柿・梨)を入れて、松などの枝に付けたもの。【屯食】 ドンシキ。強飯を卵形にした御握り。【韓櫃】 唐櫃。脚の附いてゐる櫃。

【釋評】前の節から此の節へかけて、つまり此の元服の段が、桐壺一卷の中で最も筆の弛れてゐる所といふ感じがする。儀式そのものが既に行事的なのであらうが、文も型の如くといつた氣味がある。作者は斯ういふ事實の敘述はやはり得意でもなく、又餘り自今では興味を有つてゐないらう。

この御元服の儀式に關しては、奥入にも「當代源氏二人元服」として、稍詳しく出てをり(即ち高明・兼明)、又舊註の諸書には、

延喜(延喜は延長)七年二月十六日、當代源氏二人元服の次第うつして書けり。(湖月抄、桐壺)

稱名院殿御説云、盛明親王(醍醐天皇ノ皇子)天慶三年三月十五日申時、綾綺殿の東廂にて、御前において元服を加ふ。此時刻程の事も心をつけてみるべし。先例なき事は書かずと云々。

(同上にも引く)

或抄、西宮左大臣高明・小倉中書王兼明二人源氏にて爰元服。此の皇子達何事も世に勝れ給へれども、更衣腹にて寄せなき故、源氏になり給ふ。いづれも延喜の皇子なり。かやうの事を、なりはへて書ける歟云々。(岷江入楚、第一)

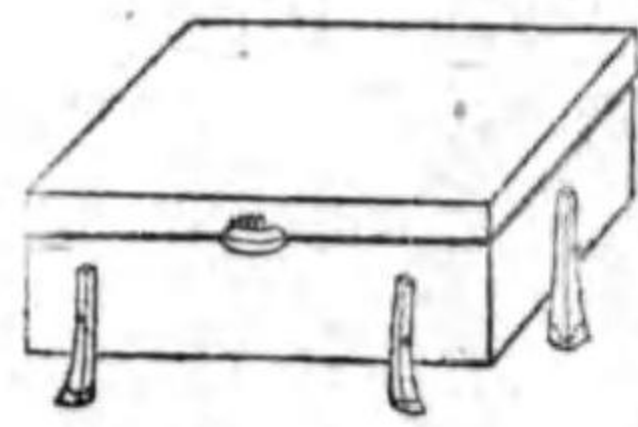
などと、本書の故實的典據の意味を頻りに認めようとしてゐるけれど、それよりも、我々の参考にはもつと手近い適切な事として確實な御手本がある事を注意しておきたい。即ち御堂關白記寛弘七年七月十七日甲午の一條院の一宮(兼康親王)御元服の條と、寛仁二年正月三



籠物



屯食 (説書論玉)



香唐櫃 (抄要集要製)

日丁酉の後一條天皇御元服の條とを併せ讀むと、そして又それに、前にも引いたがその中間の長和二年三月廿三日甲寅三條院の二・三宮(教儀・教平兩親王)御元服の條をも参照すると、其の御模様がかなりよくわかる。一宮は即ち十二歳に、二宮(後一條)は十一歳に當らせられ、偶然か源氏及び冷泉院の場合に恰當する。(冷泉院の、と一六七頁(語義)の項参照) 一宮の御時のでみると、理髮は藏人頭右中辨道方、加冠は左大臣道長で、加冠が終つて親王が退出される際、衣袴が上つて見苦しいので道長が少し進み寄つて引下げて差上げたと自記してゐる。それから

親王就下侍、衣服良久也。次又御出。親王入自仙華門、於庭中拜舞退出。次内侍出殿上戸口、召余(道長)。進著御前座。女藏人衣祿給之。立座下、自長橋内方懸頸執笏出、自道至庭中、拜舞。此間引御馬二疋、立梅樹南方(馬允二人)退出……候殿上。次内侍召道方朝臣。進候戸口。女藏人取祿給之。道方又下自長橋、同拜舞退出……

酒肴が下賜せられ、舞樂がある。

上賜達賜祿(白大鞋)、諸卿等起座、庭中列立、拜舞退出。

とも記され、又親王は位記を賜はり、位袍を著けて、また庭中で奏樂の間に拜舞退出されるといふ事も見えてゐる。なほ詳しくは同記に譲るが、後一條天皇御元服の記もなか／＼委細に載せてある。同條には

申一刻御南殿北廂。二刻召藏人頭右中辨定頼朝臣、令奉仕理髮。

とあり、太政大臣道長加冠、攝政(道長の長子頼通)は「理髮御鬘」と見えてゐる。座席や御冠を入れた柳宮其の他の御調度の位置や、理髮、加冠の順序やなども、右兩度の記述を通じて大略知ることが出来る。(御堂關白記は日本古典全集に上下二卷になつて收められてゐる。前にも一寸言つた通り道長の自ら記した日記で、その自筆本及び頼通の手寫本が共

に近衛公爵家に藏せられてゐる。又、前記の奥入と河海抄の記述及び西宮記(前にも言つた通り西宮左大臣高明の著)の親王元服の儀(廣道の評釋の「桐壺卷餘釋」の末尾にも特に抄出してある)の條は、是非併せて参照せられねばならぬ。今次に新儀式(伊勢皇太神遷宮や祈年祭等の儀式を諸記録から輯めたもの、寫一卷)と西宮記とから節略して抄出して置く。

延長七年二月十六日、兩源氏加冠之時、孫廂第二三間敷加冠座、其南第一間敷圓座二枚、爲冠者座。(新儀式)天皇出御。垂母屋御簾、撤畫御座、舖毯代立大床子。親王著座。東廂南二間敷茵、錦端疊三枚上敷之。……北



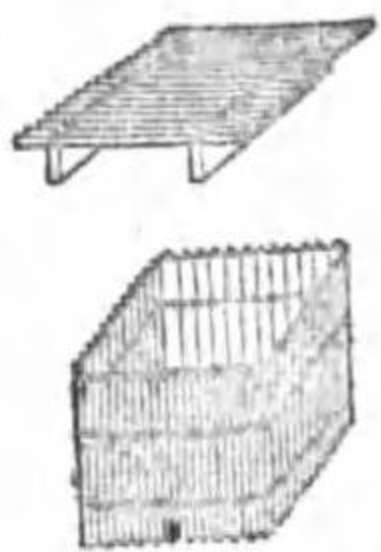
面元服之時東向。引入著孫廂南二間。依召疊一枚置茵。……本家備置加冠具。親王座頭、唐匣一合、泔坏一口、巽角二階御冠、入柳宮。理髮著親王座東。菅圓座。理髮了入巾子。候南小座。戸前。引入進。執冠入了、自座下著本座。……理髮進。搔髮出了。親王退。引入退。親王下下侍改衣。本家立四尺屏風三帖、舖地敷茵著黃衣。親王拜。入自仙華門出於東庭。拜舞。加冠依召著御前座。內侍於廂妻戸下召引入。女藏人授給祿。下長橋不著脊、於庭前拜舞、懸頸出仙華門。白袴一重、御衣一襲、大臣加白袴御衣。……理髮給祿。候南廂小敷敷。白袴加阿古女一重。同拜舞自仙華門退出。牽出物。左右入自北門、牽于庭中。引入取小拜。……又召御前有酒祿。……宜陽殿西廂設饗、春興殿西廂立屯食三十具、給祿男女。……內藏寮備酒饌賜王卿殿上人。(西宮記)



泔坏

註 [一] 圓座(エンザ、又、ソラフダ)。藁や菅などで編んだ圓い座褥。 [二] 毯代(タンダイ)。布を染めて毯(五色の毛織物)の代に用ゐる敷物。 [三] 冠者の家。 [四] 泔坏(ユスルツキ)。泔(ゆ)する。頭髮を洗ひ梳る湯水。 [五] 二階棚の厨

子。 [六] 柳宮(ヤナイベコ)。柳の木で造つた容れ物、形各種あり。 [七] 地敷(ヂシキ)。板敷に敷くござ。 [八] 椽(ツルバミ)。椽(圓栗)の椽を煮た汁で薄黒く染めた染色。



柳宮記には又、一世源氏元服の装束は親王の儀と同様で、但、源氏の座が孫廂の西面北上に在り、前に圓座を置く由も記されてある。又、奥入には「天慶三年親王元服日屯食事」として、

内藏寮十具、穀倉院十具已上檢校太政大臣臣仰之、左馬寮五具御監仰之、列立南殿版位東、其東春興殿西立辛櫃十合。件等物、有宣言、自長樂門出入。上卿仰辨官二分給所々。史二人勾當其事、仰檢非違使令二分給。

註* 版位(ヘンキ・ハンキ)。版(ヘン)ともいひ、百官の位次を示す目標の板、及び其の位次。

と見える。元服の理髮・加冠の詳細な作法は、源氏官職故實抄(卷一)「春宮元服」の項に、「元服記」を引いて載せてある。江家次第「一人若君元服」の項にも其の法式が出てゐる。それから酒宴の席で親王の末座に源氏が著くことは、有酒杯酒御遊、兩源氏候此座四位親王之次、依仰、奥方座下也(奥入)と云ふのに丁度一致する。

参考 以上の他、西宮記の「皇太子元服(醍醐天皇の東宮保明親王)の條及び「一世源氏元服(承平四年十二月二十七日、醍醐皇子源允明、十六歳)の條、親王元服部類記の克明親王(醍醐第一皇子)御元服の模様(延喜十六年十一月二十七日、醍醐天皇御記(別冊全集實記集)や、江家次第(卷一七)の「御元服」、東宮御元服、天皇元服部類(群書類従)主上御元服上壽作法抄(同上)天皇御元服和抄(滋野井公慶著。改定史書集。寛政類聚所收)など直接にも間接にも、参考になる。古事類苑の禮式部の元服(上)の項は、これらの資料を集めてあつて最も便利である。

若し作者の紫式部が、敦康親王御元服の儀をうかつて——自身其の座に侍せずとも——それに據つて此の段を書い

たとすると、桐壺巻は寛弘七年七月十七日以後の作といふことになる。

なかばは女と言はむからに、世にある事の公私につけて、無下に知らず至らずしもあらむ。わざと習ひ學ばれども、少しもかどあらむ人の、耳にも目にも留まる事、自然に多かるべし。(帯木巻)

といふ平生の用意から、斯ういふ方の知識にも父兄なり夫からなり或は他の人からなり聞き取つて通じてゐたとすれば、必ずしも延喜・天慶まで溯らずとも、(或はそれも参考されたかもしれぬが) 近い先例では一世源氏ではないが——前掲御堂關白記載の御儀についてみても、一世源氏の儀でなくても、作者の手本には十分なり得ると思ふ——正暦元年正月五日、一條天皇十一歳で御元服。同二月、定子十五歳で入内(榮華物語さまぐの悦巻) その四年前の寛和二年十二月朔日頃に東宮(居貞親王、後に三條天皇)がこれも十一歳で御元服、そして十三歳の麗景殿尙侍(攝政兼家の女嬪子。後、三條院女御)が「御添臥」に上られた(大鏡中巻太政大臣兼家・榮華物語さまぐの悦巻)のであつた。(人臣では、長保五年二月二十日に左大臣道長の長子頼通が十二歳で元服してゐる)。なほ先進文學中、特に宇建保の俊蔭巻の俊蔭生立と源氏との關係が前に述べたやうであるとすると、俊蔭の元服の年齢が「十二歳」であつたことも、そのまゝ踏襲せられたことにもなるが、それまでもなく前記禮記の本文もある。但し必ずしも曲禮に據つたとせずともよからう。



北野天神新起縁 (土佐光起)

藤原に女房東の五女(イツツギス。鞋を五つ重ねたもの。後には五枚簪に見えらるやうに化立した)を賜は、大鏡

祿の物を賜はつて拜舞することは前に引いた御堂關白記にも西宮記にも明記してある通りであるが、秀歌の恩賞に賜はつた白の大桂を肩に打掛けながら又一首即興の名歌をもつた凡河内躬恒(古今集の撰者で紀貫之と並稱せられることは周知のことである)の逸話は、大鏡に名高い。

同じ御時(醍醐天皇ノ御代)に、御あそび(管絃ノ)ありし夜、御前の御階の下に躬恒を召し

て、月を弓張といふ意は、何の心ぞ。これが由仕まつれ。と仰言ありしかば、

照る月を弓張としもいふことは山邊をさして入(懸ニ掛ければなりけり

と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、大桂賜はりて、肩に打掛くるまゝに、

白雲の此の方(肩ニ掛ク)にしも下り居るは天つ風こそ吹きて來ぬらし

いみじかりしものかな。さばかりの者(ソナナ身分ノ低イ者)を近く召し寄せて、勅祿賜はすべき事なら

れど、譏り申す人の無きも、君の重くおはしまし、又躬恒が和歌の道に許されたる、とこそ思ひ給へし

か。(下巻)



永久年問繪卷

此の逸話は、大和物語(上巻)にも出てゐる。

御袴著といひ御元服といひ、春宮といつても競争の形で而もいつもそれより勝つた盛大さで、弘徽殿の「ものし」と思すのも無理はない。その「春宮よりも御氣色ある」左大臣の女をまで、亦此の君に奪られては、弘徽殿方は重ねく負け籤である。これは源氏の自發的な行爲ではなかつたのであるが、後に今度は源氏自身の手で、又もや春宮に參るべき朧月夜尙侍——而も弘徽殿の妹の六の君——を奪つたのは、益、皮肉である。併し對手が一世に耀く「光君」であるから、何としても競争にならない。その兄弟すら、自分が女だつたらと仰せられたり、皇女の女三宮を托しておしまひなされるのである(若菜上巻)。

兎も角、左大臣は大得意である。帝も御満足である。唯一つの心懸りは、帝も俱に希ひ給ふ「長き世を契る心」を左大臣こそ深くく結び籠めたつもの初元結の、その濃紫が、變らぬめでたさを祝はれながら、今現に結ばれつゝある手の下で、早や何となく漠然とした不安が「色し。褪せ。ずば」と縁起でもない詞を言はせてしまつただけである。左

大臣の遠慮もあらう謙遜もあらう、又眞實多少の懸念もなしとせぬ。何しろ世にもて騒がれる光君、「この御爲には、上
 が上を選び出でて猶飽くまじき」源氏である。今業平の好色者と生立つべく、「今より艶かしく恥づかしげ」な風流公
 子である。子を知るは親に如かず、娘が果して源氏の氣に入つてくれればよいがと、恩愛の闇と權勢の名との界線を踏
 まへて、流石の父大臣も内々は不安、餘りに蟲がよ過ぎる願ながら、心の中には二兎を一擧に獲よう成功を一向念じて
 ゐるのであらう。正に政略結婚の悲哀である。葵上との結婚生活は十一年間であつた。而も彼女は葵巻で死去するを俟
 たず、結婚當夜からもう生きてゐないも同前である。「繪に畫きたる物の姫君」である。魂のない御雛様である。機械的
 に口をきく人形である。「家ゆすりて取りたる婿」君の泊られるのはいつも僅に「二三日」、それも「絶えくば」しか見
 えぬ「すさまじ」さ。濃紫の色はいつまで褪せず保たうやら、作者の筆端は微妙である。

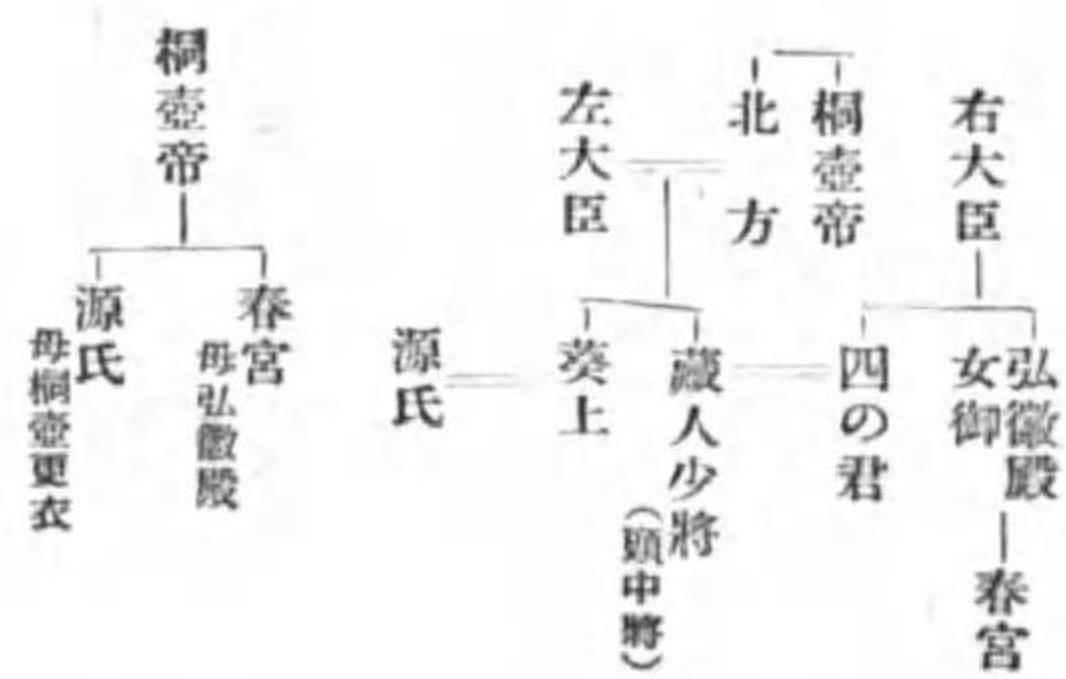
その夜大臣の御里に、源氏の君罷
 出させ給ふ。作法世に珍らしきま
 で、もてかしづき聞え給へり。い
 とさびはにておはしたるを、ゆゝ
 しう美しと思ひ聞え給へり。女君
 は少し過し給へる程に、いと若う
 おはすれば、似げなく恥かしと思
 いたり。この大臣の御覺えいとや

「口譯」 御元服のあつた夜、内裏から退出して源氏の君は左大臣邸へ入
 られた。婚禮の儀式は、稀に見るほど盛大で、大切な婿君と一家中であ
 りやされた。元服したと言つても、まだほんの子供々々した様子で來ら
 れたのを見て、舅の左大臣は實に美しいなとつくづく感心された。配偶の姫
 君の方は、少し年上なのに、夫の君がすつと若いのを、何
 だか不似合なやうな氣がして、恥づかしがられるのであつ
 た。この左大臣は陛下の御親任がこの上もない上に、北の
 方の宮は、桐壺帝と同じ御母後の御腹だつたので、どちらから言つても豪

原・葵上
 口(一)十六歳
 (三)十二歳

んごとなきに、母宮、内裏の一つ
 御后腹になむおはしければ、何方
 につけても物鮮かなるに、この君
 さへ斯くおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて終に世の中を知り給ふべき、右の大臣の御勢ひは、物
 にもあらず壓され給へり。
 御子ども數多、腹々に物し給ふ。
 宮の御腹は藏人の少將にて、いと
 若うをかしきを、右の大臣の、御
 中はいとよからねど、え見過し給
 はで、かしづき給ふ四の君に婚せ
 給へり。劣らずもてかしづきたる
 は、あらまほしき御間どもになむ。

勢なところへ、今また此の天下の光といふ君まで一家に御加はりになつた
 から、東宮の御祖父で、將來必ず政權を握られる筈の右大臣の勢力も俄然
 問題にもならぬ程壓倒された。
 左大臣には姫君の他、嫡妻の此の宮をはじめ
 それらの御腹に、澤山の御子達があつた。
 宮の御腹の男君は藏人の少將で、まだ若くて
 非常に美しいのを、右大臣は此の家と平生あ
 まり仲が良くないのだけれども捨てておけず
 に、秘藏娘の四の君の婿に取つてある。いは
 ば兩家で競争と言つた工合で婿君達を大切に
 つてゐるのは、丁度似合ひの左右大臣家の間
 柄であつた。



【語義】「藏人の少將」近衛少將で藏人を兼ねてゐるないふ光孝天皇和四年十一月始被補之。于時正五位下左近少將源湛・
 正五位下左近少將藤原敏行也(河海抄卷第一)。源氏官職故實秘抄(卷一)には、藏人補任を引いて、五位藏人任少將の例として、敏行の
 他に、在原友子及び執柄家五位藏人任少將の例として藤原實頼と藤原伊尹とを擧げてある。

源氏の君は、上の常に召し纏はせば、心安く里住もえし給はず。心の中には、唯藤壺の御有様を類なしと思ひ聞えて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな。大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にも著かず覺え給ひて、幼き程の御偏心に懸りて、いと苦しきまでぞおはしける。

大人になり給ひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れ給はず。御遊びの折々、琴笛の音に聞き通ひ、仄かなる御聲を慰めにて、内裏住のみ好ましう覺え給ふ。五六日侍ひ給ひて、大殿に二三日など、絶えなく罷出給へど、只今は、幼

〔口譯〕 源氏の君は斯うして御結婚なさるにはなさつたが、今でも父陛下がいつも御側をお離しにならないので、ゆつくり左大臣邸にお落ちつきになることも出来ぬ。而もその上心の中では、たと若い繼親の藤壺の御様子、比べるものもなくお美しいと慕つて、若し叶ふものならあのやうな方を自分のものと思つてみたい。全く比べるものもない御姿だ。大臣家の姫君は、なるほど立派に磨きをかけられた人ではあるやうだが、どうも好きになれないと、單純な一筋の子供心を、藤壺の事ばかりが支配して、何だか始終解放されぬやうな氣がして、苦しい位であつた。

元服の後は、もうこれ迄のやうに自由に藤壺の御簾の内へもお入れにならず、唯管絃の御遊びの折々だけ、其の人の御琴に聞入り、笛の音に合はせて思ひを通はし、或は御簾越しのかすかな御聲にやつと慰められては、いつまでも宮中の生活ばかりしてゐたいと思ひ續けられる。かうして内裏に居る日は五六日、左大臣邸に泊る日は二三日、それも續けてではなくて稀々にしか下つて來られぬのに、大臣邸では深いわけを知らうやうもないから、まだ無邪氣な頃の我が儘に免じて、咎め立てもせずに相變らず

き御程に、罪なく思しなして、いとみかしづき聞え給ふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを擇り調へ選りて侍はせ給ふ。御心につくべき御遊びをし、おふなく思し勞く。内裏には舊の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方々の人々、罷出散らす侍はせ給ふ。里の殿は、修理職・内匠寮に宣旨下りて、になう改め造らせ給ふ。舊の木立、山のたゝすまみ、面白き所なるを、池の心廣くしなしてめでたく造りのしる。かゝる所に、思ふやうならむ人を居ゑて住まばやとのみ、歎かしう思し渡る。光君といふ名は、高麗人のめで聞えて、つけ奉りけるとぞ、言ひ傳へたるとなむ。

きりつば

一八五

大切に款待するのであつた。御附の侍女達も人並以上に綺麗な人々を選び揃へて置きもするし、何かと源氏の氣に入るやうな遊びを催して、せいぜい婿君の引止策に一方ならぬ骨折である。宮中での源氏の御部屋としては、もとの母君の曹司であつた淑景舎をそれに當て、御息所以來の侍女達残らずそのまゝお置きになつてゐる。お里の御殿は、修理職や内匠寮に帝から御下命があつて、あの葎の宿が見ちがへるやうに立派に改築された。もとからこんもりとした木立や築山の恰好がなか／＼面白い所なのを、今度はそれに池を大きく掘り廣げて、みんなわい／＼愉快さうに名譽ある新樂園の工事を急いでゐる。理想の殿堂は斯うして建たうとしてゐる。たゞ中に居ゑられる人が居ない。儘になるなら、かういふ所へあの方のやうな人を迎へて一緒に暮したいものと、さうした事ばかり毎日源氏は淋しく歎き續けて居られるのであつた。

(原) 桐壺

(三) 二條院

(三) 附圖六參照

(四) 同上

さて、光君といふ名は、もとはと言へば、あの高麗の相人が感賞の餘り献上したのだつたと言ひ傳へてゐることである。

語義 【琴笛の音に……】琴は藤壺、笛は源氏(眞淵、新釋)。「おふな〜」出来る限り。想ろに「修理職」スリシキ。内裏の修理造營を掌る。大宮の東、近衛の南に在る。【内匠寮】タクミツカサ。工匠造營、裝飾等を掌る。藻壁門内、左馬寮の北、右兵衛府の南。修理職と共に何れも令外の官である。【になう】無二、一説無似。小節はいづれをも捨てて疑を疑し、守部は無似説である。【思ふやうならむ人】理想になつた人。藤壺を暗に含めて言ふのである。勿論抽象的に自分の思ふ通りの完全な女の意でもある。

【釋評】 左大臣家と右大臣家の對立である。左大臣の北方が當帝の皇妹なら、右大臣の女が同じ帝の女御中で最古參で而も春宮の御生母である。その春宮の弟君の光源氏を左が婿君に迎へれば、その又源氏のワキ役の貴公子で源氏の義兄弟になつた藏人少將(次の卷には頭中將とある人。此の物語では普通には此の頭中將の名で呼ばれてゐる。)を又右は女の四の君に婿取してゐる。が、やはり總和の上から、左方の勢が壓倒的である。かうして互に競うて權貴と縁邊を結ぶことによつて自家の力を擴げ根を固めて拮抗し合ふのが、當代政界の現象であるが、世が變つて新帝が即位せられると、忽ち均衡が破れて一大變革が起る。春宮即ち朱雀院の御代となり(葵卷)、特に桐壺太上天皇崩御(賢木卷)の後、外戚右大臣家の心の儘で、弘徽殿皇太后と二條太政大臣(前右大臣)の專横(賢木卷)に引替へて、今まで上に立つてゐた左大臣は致仕し(賢木卷)、源氏は須磨へ退去する(須磨卷)といふ逆境時代が來るかとするれば、次の冷泉院に御讓位になると(淳樞卷)、得失忽ち地を變へて、致仕の左大臣は改めて攝政太政大臣に、そして源氏は内大臣に任じ(淳樞卷)、旭日昇天の勢となるのである。二條太政大臣は既に薨じ(明石卷)、太后はおりの帝と共に又昔日の威力影も認め難い。現に史上の事實に於ても、而も作者の生存してゐた其の時代の眼のあたりに、道隆派と道長派の勢力の消長隆替、伊周兄弟の左遷、皇后宮定子の失意、讎伏してゐた道長の飛躍、上東門院姉妹の榮達、その間に挟まつての七日關白道兼の邯鄲の夢など、走馬燈のやうに眼まぐるしく時勢は幾轉廻したのであつた。

元服すると一人前になるのであるから、それと共に結婚生活も始まる場合が多い。賢木卷にも「元服の添臥にとりわき」と書いてある。元服當夜嫁娶の例として、寛平九年七月三日、皇太子(醍醐天皇)へ、爲子内親王參入(北山抄)、延喜十六年十月廿二日皇太子保明親王へ左大臣時平の女參入(吏部王記(前出)、村上天皇四宮爲平親王へ源高明の女參入(榮華物語月宴卷)、寛和二年七月十六日皇太子(三條天皇)へ兼家の女參入(大鏡・榮華(前出))等の事實がある。それから結婚といつても後世とは逆で男の方から女の家へ迎へられること、此の物語に語られてある通りであつた。入内の場合は無縁別であるが、親王でも女の邸へ掣入されるのである。榮華物語にも

例の宮達は、我が里におはし初むることこそ常の事なれ。(月宴卷)

と見えてゐる。前記爲平親王の時、女御更衣の入内の様だつたので、特に珍らしかつたとしてある。

【考】 源氏官職故實秘抄(卷一)に江家次第を引いて掣執りの儀式の様子が載せてある。江家次第(卷二十)には「執事(現代)として出てゐる。

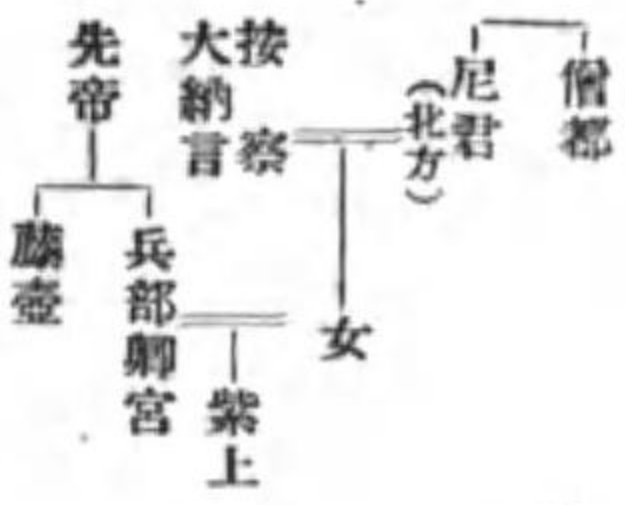
ところで、夫君は十二歳、北方は四つも年長の姉さんである。前に述べたやうに、十一歳の一條天皇に十五歳の定子女御(榮華物語さま)の悦卷には「十六ばかり」とある)、やはり十一歳の春宮(三條天皇)に十三歳の麗景殿尙侍榮華物語さまの悦卷には「十五ばかり」とある)、同じく十一歳の後一條天皇に十九歳の威子女御(彰子の妹)、いづれも女君の方が二つ三つ乃至四五歳以上の年上であつた。髭黒大將の場合でも同じであつた(三二六頁參照)。後見の背景は申分無しであるが、源氏は斯くて無理な結婚を強ひられてしまつた。光君の配偶者には一體どんな方が選ばれるのであらう

と、岡焼半分衆人注目的になつてゐただけに、餘り型の如くの簡単な落着が、獨身の人氣俳優の結婚の決定した時同様、口さがなき世間の女童べどもを、少々がつかりさせながら妙な同情の減らず口をたゞかせるのも是非が無い。いと、いと眞實だちて(イヤニ眞面目クサツテ)まだきに(マダ随分御若イノニ早モウ)やんことなきよすが定まり給へること(歴トシタ奥様ガオキマリニナツチマツテ)さうくしかめれ(ツマンナイヲネエ)。されど(ダケドモネ)さるべき限には、よくこそ隠れ歩き給ふなれ(ヤツバリ陰テハコソくトナカく)闇ニ置ケナイ隠レ遊ビハナサルツテヨ。無理モナイヲネエ。(帚木卷)中川の宿に方違に泊つた夜、聞くともなしに耳に入るのは障子越の女共の聲、「大殿の君」に多く期待の出来ぬのは約束事と諦めもつかうが、斯ういふ陰言にも先づはつとするのは、片時も忘れぬ胸の秘密、「苦しままで」偏へ心に懸る人の御上、何といふ執拗な恐ろしい運命の悪戯なのであらう。

冠者の君(夕霧)一つ所にて(同じ左大臣邸ノ大宮——奏上母即チ左大臣北方——ノ手許テ)生ひ出で給ひしかど、各(夕霧ト雲居雁)十に餘り給ひて後は、御方異にて(居所ヲ別々ニシテ)睦まじき人なれど(イクラ幼馴染ノ仲ヨシダトテ)男子には打解くまじきものなりと、父大臣(雲居雁ノ父頭中將、コノ時内大臣)聞え給ひて、氣違くなりになるを……(少女卷)小さき二人の戀人同士も、年齢の成長が間を引分けてしまつた。「なめしと思さでらうたうし給へ」と特に聞えつづられた頃の樂しかつた夢はまだ昨日のやうなのに、今は隔ての御簾のつらさよ。

暮れぬれば、(藤壺ノ御兄兵部卿宮ガ藤壺ノ)御簾の内に入り給ふを、(源氏が)羨ましく、昔は上(桐壺帝)の御もてなしに、いと氣近く、人傳ならで(藤壺ガ自分ニ)物をも聞え給ひした(今ハ)こよなう疎み給へるも、つらく覺ゆるぞわりなきや。(紅葉賀卷)惱みの増すにつれて、垣は愈、越え難くのみなつて行くのである。さらでも「心にも著かず覺え」る葵上が、源氏の眼中にあらうやうが無い。

月影のみ障らずさし入つた八重葎は痕も留めず掃ひ去られて、其處には壯麗無比の二條院の殿舎が現出した。不足す



るのは此の院に相應しかるべき女王一人である。「思ふやうならむ人」それは到底叶ひ難き恐ろしい願である。けれども天の寵兒は幸せられた。「思ふやうならむ人を居ゑて住」むことの許されなかつた代りに、實は又「思ふやうならむ人を居ゑて住」むべく、北山の尼君の許に「紫の根に通ひける野邊の若草」が一本可愛く生ひ立ちつゝあるのである。

さて此の二條院は、榮華物語に

斯くて(永祚元年)大殿(道長ノ父攝政兼家)十五の宮(醍醐皇子盛明親王)の住ませ給ひし二條院を、いみじう造らせ給ひて、もとより面白き所を、御心の行く限り造り磨かせ給へば、いとさう目も及ばぬまでめでたきを、御覽するまゝに、御心もいとさういみじう思されて、夜を晝に急がせ給ふ。さまじくの世卷)

とある二條京極の法興院(舊名二條院、正曆二年即ち永祚元年の翌々年改稱)に准らへてかと、花鳥餘情に言つてある通りであらう。

○光君といふ名は……言ひ傳へたとむ。(本文)

湖月抄の「師説」に

前に「にははしきは譬へん方なく美しげなるを、世の人光君と聞ゆ」と云へり。又、こゝには、高麗人のつけし名とも人の云ひたると書ける也。兩説の儀也。

としてあるのは滑稽である。眞淵の新釋に、

前に世の人光る君といへるは、其もと高麗の相人が名付け申してよりいふとの意を爰にて明すなり。語を前後していふも文の一つなり。兩説なりといふ註は文を心得ぬ人のさだなり。

と喝破してゐるのは愉快である。眞淵の説には往々印象批評的な傾向があるのが缺點であるが——宣長は飽くまで歸納的、辯證的態度である——併し彼は確に直觀の鋭さを有つてゐる人であつた。少くとも鈴屋よりは藝術家的の素質に勝つてゐた。

世の人が光君と申すのは、現在の事實である。社會的な一箇の現象である。高麗の相人が名づけたといふのは、其の噂の出處である。現象の實相の説明である。而も其の説明を、又一般民衆の傳承的事柄即ち傳説の形にしたのが面白い。又、事實も、誰言ふとなく、光君々と稱へてゐるが、もとは何でもあの高麗の名相人が言ひ始めたとかいふのださうだ——ほんとかどうか保證の限りでないが、まあ其處いらのところだらう、といった程の意味でなければならぬ。評釋の廣道は、源氏の一生の運命を豫言した高麗人に、此の命名もさせる方が「おのづから命數にもあづかるべければ、殊に斯く言ひあらはして結め」たらうと論じてゐるけれど、さうまでは穿ち過ぎではあるまいか。高麗の相人に此の名の出處を持つて行いて結びつけた作者の手際の自然さを寧ろ私は採りたいと思ふ。但し

さて帯末巻に「光る源氏云々」と書き出づべき結構シヤガヤを残されたるなるべし。(評釋)

といふのは同感である。巻の終を縹渺とほかして、而も次の巻の始へ移つて行く氣分を發して置く。斷ゆるが如くして續き、盡くるが如くして湧く、脈々縷々無限の旋律の宛轉自在の調、これが即ち大抒情詩篇源氏物語の一特色である。

なほ「言ひ傳へたるとなむ」といふ形で結んでゐるのを、作者が態と自分を示さぬ爲に用ゐたのであるとか(細流抄)、その爲に三重に書きなした「奇妙」な筆づかひだとか(紙江入楚湖月抄にも「妙」として引かれてゐる)、評釋すら

此例次々にいと多し。深く用意せられたる事なるべし。

などと感心してゐるけれども、賛し難い。なるほど後々の巻にも、結びが、

花散里などにも唯御消息ばかりにて、覺束なく、なか／＼恨めしげなりとなむ。(明石巻)

例よりは日ごろ經給ふにや、少し思ひ紛れけむとぞ。(薄雲巻)

……いかで御覽せさせむと聞え給ふとや。(野分巻)

六條院にも諸心に急ぎ給ひて、御入講など行はせ給ふとぞ。(鈴蟲巻)

此の御中らひのこと言ひやる方なくとぞ。(夕霧巻)

大方の後見は我ならで又誰かはと思すとや。(總角巻)

萎えたる衣を顔に押當てて臥し給へりとなむ。(浮舟巻)

「あるかなきか」と例の獨言ち給ふとかや。(蜻蛉巻)

など殆ど紋切型のやうに屢用ゐられてゐる。若菜上下を假に二帖として計算すれば、五十四帖の内

- 1 「とぞ」で結ぶもの 一〇 (帯木・蓬生・薄雲・梅枝・横笛・鈴蟲・夕霧・幻・東屋・夢浮橋)
- 2 「とや」で結ぶもの 六 (槿・野分・藤袴・眞木柱・總角・手習)
- 3 「となむ」で結ぶもの 三 (桐壺・明石・浮舟)
- 4 「とかや」で結ぶもの 一 (蜻蛉)

計二〇

といふ割合である。「かゝる人々の末々いかなりけむ」(末摘花巻)のやうな、稍これに準ずる結びの形もある。これらは「深く用意せられたる事」といふよりは、物語文學であるが故に、第三者として他人の上を物語る心持、随つて説話形態、説話の表現様式がおのづから遺存してゐると看るべきが自然であると思ふ。

その煙未だ雲の中へ立ち昇るとぞ言ひ傳へたる。(竹取物語)

二條后に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄達の守らせ給ひけるとぞ。(伊勢物語五段) まだいと若うて、后のたゞにおはしける時とや。(同六段)

己が齢を思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。(一一四段) (以上の中後人の書加へたのが或はあるが、中納言の君は兵衛の君と物語し給ひて、曉に歸り給ふとなむ。(宇津保物語、國讓上巻) 残りには次々にあるべしとぞ。(同、國讓中巻)

大將の御心ばへも珍らかに、愈し世になき様にて、親も子をももてなしかしづき給ふ事と思し宜はぬなしとなむ。(同、樓の上下巻) 昔の安濃、今は典侍なるべし。典侍は二百まで生けりとや。(落窪物語卷四)

決して源氏物語に限らぬのである。後のものでも、

……いみじう恐しとぞ。(狭衣物語卷一下)

……數珠おしすり給ふ。しるし如何とぞ。(同卷二下)

……引返さるゝ心地し給ひけりとぞ。(同卷三下)

……これさへ飽かぬ思ひ添ひ給ひぬるとぞ。(濱松中納言物語卷一)

此の御聲に、御堂よりも念佛とどめて出で給ひぬとぞ。(同卷三)

今宵必ず幸て隠してむと思しておはしましぬめり。いかならむとぞ。(同卷四)

憂くもつらくも戀しくも、一方ならず悲しとや。(とりかへばや物語)

昔も今も、人に腹黒なる人は斯かる事なり。これを見聞かむ人々は、かまへて人善かりぬべきなりとぞ。(住吉物語)

純説話集の今昔物語に至つては、「……トナム語り傳へタルトヤ」の定型で押して行つてゐる程である。(なほ各巻の結文に限らず、巻中の或一挿話一段落の結びや中途にも、此の物語る氣持——敘述意識——は隨處にある。くゞくしき

事のみ多かり」(夕顔卷)、「されどうるさくてなむ」(紅葉賀卷)などの類もさうである。

少くとも感心する氣にはなれないのみか、此の作者にしては少し智慧が無さ過ぎるとさへ感ぜられぬでもない場合が多い。唯、夕顔卷の結文や蓬生卷の結文は明らかに作者の意識しての斷り書である。夕顔の方はいやに煩いが、蓬生卷のは微笑させられる。

かの大貳の北の方(末摘花君ノ叔母ガ九州カラ)上りて、(末摘花ガ源氏ノ世話ヲ受ケテノ意外ノ出世ヲ)驚キ思へる様、侍從(末摘ノ舊ノ侍女テ叔母ニ誘ハレテ筑紫ニ下ツタ女)が、嬉しきものの、今暫し待ち聞えざりける(辛抱シテ故主ニ附イテラレバヨカツタノニト)心淺さを恥づかしく思へる程などを、今少し問はず語りもせまほしけれど、頭痛う、うるさくものうければ、今又もついであらむ折に、思ひ出でてなむ聞ゆべきとぞ。

「問はず語りもせまほしけれど」もいゝが、何としても、「頭痛う」は面白い。遁辭にせよ、眞實にせよ、丁度あの舞臺の上から演技中の白に挟んで突然觀客に呼びかけて申譯けの挨拶などをする江戸時代の洒落つ氣たつぷりで大家庭的の大まかな歌舞伎氣分の或場面——復活された古典劇としての十八番の「毛抜」などに含まれてあるやうな——に似た氣持が浮んで来る。

卷々の結びに作者が説話體を用いた用意には——深い用意があらうとも考へ得られないが假にあつたとしても——一向驚かされないが、それよりも、かの斷續的氣分の一段詩的に昂揚して來た時の卷末の表現が、その内容にピッタリと合つた音楽的或は舞臺劇の靜かな幕切的印象を讀者に植ゑつける効果はすばらしいものが往々あると思ふ。

心いる方ならませば弓張の月なき空に迷はまじや

といふ聲たゞそれなり。いと嬉しきものから。(花宴卷)

例の五十寺の御誦經、又かのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那那の。(若菜下卷)

秋つ方になれば、此の君(薫)は這ひるざりなど。(柏木巻)
夕霧「右のすけ(薫)も聲加へ給へや(チト御話ヒナサイヨ)。いたう客人(まらうせ)だたしや(イヤニ御客様アツテキルテハアリマセンカ)」と宣へば、憎からぬ程に、尊神のますしなど。(匂宮巻)

これらも作者がいろ／＼と工夫して、といふよりは、自然の筆の勢ひ、情感のリズムの流れ動くまゝにまかせて、とふべきでなければならぬ。そして又、かういふ手法も恐らく

女限りなくめでたしと思へど、さるさがなき夷心(えびす)を見ては、如何はせん。(一五段)
昔の若人は、さき好ける物思ひをなむしける。今の翁(おきな)まさになむや。(四〇段)

といつた伊勢物語のそれなどに暗示を得、或は少くとも勢語の此の手法から更に一步進んだ姿と言ひ得るであらう。

餘り物言ひがなき罪(とが)所無く。(夕顔巻結文)
宰相はとかくつき／＼しく。(竹河巻結文)

などは、即ちなほ右の勢語の域に在るものといふも不可なきものである。勢語の手法は、又それとしての味があるが、前に示した紫女獨特の抒情詩劇的幕切は、餘韻嫺々と言はうか、恍然として陶醉してゐる甘い快さの中に、音も無く靜かに靜かに緞帳が下りて來た瞬間の、猶夢幻の境に置かれてゐるやうな美趣を感じさせられるのである。

帝木 (二七。夏)

光源氏、名のみこと／＼しう、言ひ消たれ給ふ答多かなるに、いとど、斯かる好色事(この)どもを、末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さむと、忍び給ひける隠ろへ事をさへ語り傳へけむ、人の物言ひさがなさま。さるは、いといたく世を憚り、眞實(まこと)だち給ひける程になよびかにをかしき事は無くて、交野(かたの)の少將には笑はれ給ひけむかし。

まだ中將などに物し給ひし時は、内裏(うち)にのみ侍ひようし給ひて、大殿(だいだん)には絶え／＼罷出給ふを、忍ぶ

は、きぎ

〔口譯〕 光源氏の君と申すと、唯もう素敵もない名ばかり仰々しく世に持囃(もてはや)されて、その爲に亦自然、おつかふせられ貶(けな)されがちの失策(しつじやく)も多く、寧ろ少々御氣の毒の感さへあるのに、これは又態々意地悪(いぢあく)に、御當人にとつては、こんなどうも漁色沙汰(りしやくさた)なんぞ、萬一後世に聞き傳へられて、千載の下あだな浮名を流しでもしてはと、それこそ戒心に戒心を加へて來られた裏の裏の祕密をまで、面白半分(面白半分)喚ぎ出して、斯うやつて今に語り傳へるなんて、人間の口つて全く煩(うる)い爲(ため)様の(やう)のないものだ。だつて眞實のところ、源氏といふ人はもうひどく世間を氣にばかりして、表面はつとめて眞面目(まじめ)くさる性(さが)なので、やんやと言ひたい面白づくめの艶事(えんじ)なんぞ滅多(めつた)に無くつて、まあ昔物語の交野の少將といつた御定連(ごぢやうれん)の眼から見れば、何て甘い小僧(こぞう)つ子(こ)だ位に陰で舌を出される方(かた)なのだらうから。

まだ中將の官などに居られた頃は、何かといふと宮中にばかり居たがつて、左大臣の邸(たて)へは、偶(たま)に思ひ出したやうにしか退出(たいしゅ)られぬので、若しや他に心を分け

一九五

原*春日野の若紫の
摺衣(すりぎ)しのぶの亂れ
限り知られず
(伊勢物語初段)

の亂れやと、疑ひ聞ゆる事もあり
しかど、さしもあだめき目馴れた
る、うちつけのすきくしきなど
は、好ましからぬ御本性にて、稀
には、強ちに引違へ心盡しなる事
を、御心に思し留むる癖なむ生憎
にて、然るまじき御振舞もうちまじりける。

る仇花でも出来たのではと、葵方では疑つてみる氣にもならぬではなかつたが、誰もが通がるやうな浮氣つぽい世間並に露骨な耽溺といった事は、元來が餘り好きでない性分で、唯併し如何した時か、まるで人を見違へるやうに、無理に我から苦勞をするやうな事を、如何しても思ひ断れなくつて弱るといつた困つた癖があつて、つひ、恕せないやうな行ひも稀にはしてのけるといふわけなのであつた。

語義

【言ひ消たれ】光の縁で「消たれ」と言つたのである。【なよびか】なよ／＼、しなやか。【忍ぶの亂れやと……】他に鬼初めた女があつて、それに心を奪はれてもゐる爲ではあるまいかと……。【春日野の……知られず】(脚註)伊勢物語の巻頭にある歌物語で、元服した若い美男が領地の春日の里で鷹狩に行つて可愛い女を見初め、著てゐた忍摺の狩衣の裾を切つて認めて贈つた歌。一首の意は、此の春日の里で若紫のやうな可愛い君を一目見ては、其の根の色に染めた狩衣を着てゐる私の胸は、衣のしのぶ振摺の亂れ模様そのまゝ、抑へきれぬ青春の惱に息苦しく掻き亂されて如何してよいかわからない。若紫は、根から紫色の染料を取る紫草を親しんで呼ぶ名で、可愛い年少の女に喩へられ(若紫卷)の名もそれで、紫上は即ち藤壺女御の由縁の色同族、源氏は丁度此の伊勢物語の歌の場合そつくり、北山で若紫の一本を見初めたのである)、又、此處は狩衣の色にも掛けてある。「しのぶ」は「戀情を忍ぶ」意と「忍摺」とに掛け、「亂れ」は「摺衣」の縁で「しのぶの亂れ」と言ひ掛けた。「忍摺」は「信夫摺」とも書き、忍草の葉で布帛に摺り附けたもの、其の摺り附けられた模様が種々にもちり亂れて面白い趣を出してゐるので「忍摺」又「忍摺」といふのである。なほ右の歌は源融——嵯峨天皇の皇子。河原左大臣の名で知られ、其の邸の河原院に難波から海水を汲み來らせ、陸奥の鹽竈浦の景色を庭園に造り模して娛んだといふ人。謠曲にも「融」があつて其の靈が昔語りをするが、それは能の一般型式ではあるけれど、傳説としても其の

死後亡靈が河原院に棲んでゐたといふ話が今昔物語に見える(二二二頁参照)——その融の詠「みちのくのしのぶもぢ摺離ゆみに亂れそめにし我ならなくに」から出てゐる。(伊勢物語に引いてある歌は上の如くであるが、古今集戀四には下旬が「亂れむと思ふ我ならなくにとある)君故でなくて離ゆみに亂れそめた自分ぞ。今我が心はもぢ摺の亂れ模様そのまゝであるの意。信夫は例の「白石噺」の宮城野・信夫の姉妹の名でも知られてゐる通り奥州(今の岩代國)の地名であるから「陸奥のしのぶもぢすり」と掛けたのである(一説には信夫は振摺の産地なる故とも)。「うちつけ」露骨な。「御本性」コホンジャヤ。御性質。

【釋評】これが源氏物語の第二巻目である。前巻とは全然違つた行き方をしてゐる。物語つて行く心持も態度も筆觸もかなり異なつてゐる——勿論同じ作者の筆たることは確で、其の範圍内のことであるが、前の桐壺卷は明らかに序曲的で——序曲とは言つても單に申譯的に添へたのでなくて、發端として十分力の籠つた作で、これだけ切り離してもよく纏つた佳篇である——そして抒情詩的である、音楽的であり、繪卷的である。此の帚木卷は前半は評論的、講說的、後半から次の空蟬卷へかけては描寫的——客觀的にも心理的にも——、小説的である。總じては此の卷の方が前の卷よりすつと散文的である。即ち桐壺卷は、竹取以後の昔物語の骨髄を成す抒情的傳奇物語の總收であり、その文學形態並に表現形式としての完成であり、抒情詩の物語化といふことの異常なる成功を觀た典型的な一篇である。そして帚木卷は更に作者が新しく開拓した獨自の世界で、その前段は批評と創作とを、論と詩とを、理想と實際とを、調和させ渾融させ合一させよとの試であり、後段はそれと交渉を保たせつゝ、物語から進んで小説の域に、歌ふばかりでなく、觀、且寫す態度へ飛躍しようとし、幻想の帳を破つて現實の中に突入しようとし、外廓の解説を捨てて内面の分拆に力を注がうとしてみた——つまり童話に満足せず成人の述作にまで伸び上つた——成果で、無論、猶抒情物語の境域を離脱しきつてはゐないし、結局、物語文學ではあるが、併し従前の物語小説史上にあつては想見し能はざる分野

の展開であり、大きな收穫であり、現代小説に觀るやうな人間心理の微妙な動きをまで筆尖に描き分ける知的な勞作や後世の自然主義的態度に近い官能描寫にまで押進まうとし、遂にそれらの將來の確立の可能を豫示してゐるものすらあるのを多とせざるを得ない。而もそれが一千年前の日本の一女流なるに於て、寧ろ驚異を感じしめられる程である。極言すれば、桐壺・帚木二卷は即ち源氏物語の文學形態・創作態度・表現手法の主要な様式・文體・語法・藝術味等を最も端的に讀者をして覗はしめ得る。此の二卷を精讀すれば源氏物語の本質と形態とを掴むに、或はそれほどなくとも、少くとも源氏物語といふものの感じ、概念に通ずることが不可能でないといふことは斷言し得られるであらう。

そして帚木卷の前段つまり本講話に收めて口譯を施した部分が即ち有名な「雨夜の品定」である。源氏の作者は物語の中で作中の人物の口を通して時々諸種の論評を試みる。物語論(巻卷)、技藝論(帚木卷)、音樂論(若菜下卷)、文字書道論(梅枝卷・帚木卷)繪畫論(帚木卷繪合卷)、自然——春秋優劣——論(薄雲卷・若菜下卷)、妻室論(帚木卷)、婦人論・女性觀(帚木卷・權卷・卷卷・若菜上卷・権本卷)、子女教育論(卷卷)、男性批評(帚木卷・梅枝卷)等、なほもつと斷片的には諸卷に散見してゐるが、最も纏まつてをり、長くもあり、又熱心に論ぜられてゐるのは、此の品定の條で、古來甚だ大切な訓を説かれてあるとして尊重せられ、舊註には

帚木と云ふ名は惣ては源氏一部の名にかけて見るべきなり。一切衆生の有るかと思へば無き有様によく叶へり。桐壺卷は序分まで入立たす。此帚木卷、物語の序分也と見えたり。作者の本意、盛者必衰の理り、此の帚木の題號に收まれり。凡そ莊子が胡蝶の夢の詞も、此の有り無しに同じかるべし。世間の有様を思ふに、唯帚木に始まりて夢浮橋にさまると見るべきなり。(細流抄卷二)と説いたり(岷江入楚には此の稱名院の説や祇註を引いてもつと詳述してある)新註でも眞淵などは

強ひて言はば、本意を帚木の品定に置きて、先づ桐壺の卷より、そ書きつらめ。(新釋、惣考)
……中に品定は妙なる物なり。(同上)

と言つたりしてゐる位で、近くは藤岡作太郎博士の國文學全史平安朝篇にも

源氏物語の本意は實に婦人の評論にあり、著者が深く憐愍の態度進止に注意して、みづからその見聞を筆に残せるは、紫式部日記これを證す。著者は觀察を積み、考察を重ね、こゝに一篇偉大の小説を作りて、婦人に對する意見を發表せり。(源氏物語(五)——その評論)

雨夜の品定が源氏一篇の總評ともいふべきは論なし。(同上)

と論じてある。だから宗祇の帚木別注や、縣居門下の加藤宇萬伎(美樹)の「雨夜のものごとりだみ詞」のやうに特に此の條の爲の註釋書すら作られてゐる。安藤爲章が源氏物語創作の要旨を、國史に「似つかはしき物語を作りて、閨門の風儀用意を教へたる」と斷じたのも(紫女七論其四文章)、つまりは此の品定などが論據の主な目標であることは否まれな。そして此の品定の所論が、以後婦人の大切な庭訓として遵奉せられ依據せられるに至つた社會的價値は意外に大きく、又、これに摸し或は學んだ一般婦人の修養の爲の訓蒙的述作、言はば彼等の實踐倫理、作法處世の教科書とも看すべき庭の訓(一名乳母のふみ。阿佛尼作)めとのさうし身のかたみ・御伽草子の小式部中の「よろづの事、女房の振舞」、更に近世へかけて女五經・女今川・女大學・女徒然草・女重寶記・女小學など一系統を成すいろ／＼の類種の書を次々と生んで來た——これは無論、品定だけの影響ではなく、同じ著者の紫式部日記も其の共祖であり、又、徒然草や今川大雙紙(今川了俊著、武家の作法式禮を訓へた書)や、儒教其の他の感化影響も錯綜して積加して來たのではあるが——事實を觀る時、その各人の胸に食ひ入る力の根強いものがあり、訓として普遍妥當性を有するもの尠少なからざるを肯定せぬわけに行かない。「品定が源氏物語全篇の主體・骨髄であるとしてしまふことに無條件で賛することは出来ないが、——全説話から觀れば無論一部の挿入的な形をとつた、全筋立に直接の關係は無いものであるが、少くとも源氏全篇に對する作

者の自家批評としては看ることが可能であり、作者が十分氣を入れて論を行筆を執つてゐることは明確に認め得られ、そして此の段を通じて、批評家としての作者、教育家としての作者、論文家としての作者、人生特に女性に對する紫女の觀察眼・理想、男性に對する判斷・希望等を觀得ることが出来るのである。而も古來難解の段とせられてゐて、讀みなすにかだりの努力が要る。桐壺卷を閑了した餘勢を以て簡単に讀破しようとする初學者があるなら、恐らく豫期を裏切られ、倦厭して繙讀の望を放棄したくなるかも知れない。その代りに此の卷を反復熟讀することは即ち源氏物語の難しい表現法に慣れ、ほんたうに源氏物語の内廓に入り込んだといふ自覺を持し得るに到らしめるであらう。

そして品定の釋には在來のやうに單に新舊の諸註だけでは不十分で、必ず同じ作者の紫式部日記を併せ讀むことによつて、始めて正しい此の段の理解が出来るであらうことを切言したい。

扱、此の卷冒頭の一節は、前卷の終にも説いたやうに、前卷の「光君といふ名は云々」の卷尾の文を承けて書き起されたものであるが、高麗人の事がある故であらうか花鳥餘情(第二)に「忍び給ひける云々」をまで前卷に結びつけて考へ

忍び給ふ隠るへ事は、源氏の君を高麗人に相せしめ給ひし事なり。隱密の子細は桐壺の卷に見え侍り。

と註したなどは滑稽である。上文にも「斯かる好色事どもを……」ともあり、少し注意して讀めば紛れる氣遣ひはない筈で「忍び給ひける隠るへ事」とは、以下に述べようとする源氏の好色生活に於ける獵奇的秘話を意味するのであり、直接には此の卷の後半から次の空蟬卷へ互る人妻空蟬君との無理な戀の切なさ、それに引續く夕顔卷に於ける夕顔上との儚くあやしい契の歎かしさを指し、間接には末摘花(末摘花卷)や源内侍(紅葉賀卷)などの事とも觀てよいのである。そして此の起首の文は夕顔卷の結語、

かやうのくだしくしき事は、^{あなが}強ちに隠るへ忍び給ひしものとほしくて、皆漏しとゞめたるを、など(ナセニ)帝の御子ならむからに(皇子テイラセラレルカトテ)、^{あなが}見む人さへ片はならず、物譽めがちなる(不都合ナ側ハ目ヲ瞑ツテ善イ側ダケ書キ立テテ譽メツヤス傾ガアルノダト)作りこめきて取りなす人のし給ひければなむ。(作りバナシダラウト、本氣ニセメ方ガアリマシタカラ、ソレテハト真相ヲ公平ニ殘ラズ斯ウシテ書クコトニシタノデス)餘り物言ひさがなき罪避りどころなく。(餘り遠慮會釋ナク喋ツテシマツタ罪ハ、何トシテモノガレラレマスマイヨ。ホンニ御氣ノ毒テ、ドウモイ、氣持ハ致シマセヌ)

の一節に相應するので、此の結びの文で再應辯疏してある詞で觀ても「忍び給ひける隠るへ事」が何であるかが甚だ明白で、所謂お安くない話、戀愛秘譚といふ所である。

即ち帯木卷の起首の一節は形の上では品定のはしがきのやうなものであり、實は帯木から夕顔に至る三卷を通しての物語(空蟬が井一、夕顔が井二として昔から帯木の附屬の卷として觀られてゐる)の序である。だから一寸取つて附けたやうな形をしてゐるのである。そして、夕顔卷の終に又もう一度殆ど同じ言ひわけめいた文を添へて結んでゐるのは、自作の主旨の辯明心理として一應肯ける點はあり、馬琴なぞにしたら殆ど常套の態度であるが、源氏の作者にはこれほど入念なのは稍珍らしい感じがする。戯れに非難した人が事實あつたのに對する應酬的な心持が含まれてゐたとしても——恐らくは然うでなくやはり餘りに立ち入つた主人公の性生活を忌憚なく描出してみようと企圖に對する自分の大膽な態度についての防衛的鐵條網、實生活に於ける作者の周到な消極的保守的慎獨的な言行と少からず矛盾するやうな驚くべき創作上の縱横自在な解放的天眞的暴露的積極的敢行の自家辯護と觀るべきである——餘りにくど過ぎる嫌があり、厭味に墮しさうな蛇足の感ありとの論難を與へられても、作者は微苦笑して甘受せねばなるまい。一面、作者が未ださうした遠慮がち、すつかり放膽になりきれない心境に止まつてゐることがしをらしいとも言へるし、作者平生の用意がやはりおのづから自身を隠しきれずに出してゐるとも觀られるし、他面、物語文學の一手法、物語り手の語り方、讀者への

呼びかけ方の一つの姿の機宜の使用とも言ひ得るのであるが、さうでありながら而もその中に例の皮肉な氣持を見せて、暴露者自身済ました顔で「人の物言ひさがなまよ」餘り物言ひさがなき罪避り所なくなどと、人を食つた十分な餘裕をも示してゐる所、やはり軽いユーモラスな氣分が覺えず讀者の口邊を緩べる。

○交野の少將には笑はれ給ひけむかし。(本文)

在來の諸註多く混錯して説いてゐる節があるから、一言を費す必要があるやうに考へられる。結論を先へ掲げると、此の交野少將といふのは、(一)落窪物語中の人物を指すのか、或は(二)散佚物語の「交野の少將物語」の主人公を指すのか、いづれかであるといふことである。在來之を殆ど無批判に同一と見做してゐるやうに感ぜられるが、深い交渉があり、或は同一人であるかも知れないけれど、唯無造作に同一と説いてしまふことは不賛成である。

河海抄(卷第二)に一説として、(1)業平朝臣が惟喬親王に扈從して交野を狩し歩いた事から此の名が有る(伊勢物語八二段に見える)、(2)英明中將を號し交野少將、(3)或説、交野勝任といふ者があつた等の諸説を擧げてあるが、河海自身「何れも不足信用」と附言してゐる通り、確な根據あるものではない。又、黒川春村の古物語類字鈔(墨水遺稿卷一)「かたの少將物語」の項に

按に尊卑分脈云、左大臣藤武智麻呂公男、參議巨勢麻呂卿流、左少辨兵雄孫、左中辨千乘チシヤ按作者部二男、季繩チシヤ右近少將從五位下、世と見えたるは仁和頃の人なり。此人の事跡を作れる物語なるべし。玄旨法印の百人一首抄にも、右近が父季繩少將を、交野少將といふといへり見えたり。

とあるが(玄旨法印は題)、或は此の片野羽林が交野の少將物語の主人公のモデルではあつたか知れぬが、縦、さうであつた

にしても、其の人の傳記物語であつたか如何かは疑はしい。素材としての事實は兎もあれ、交野の少將物語はやはり一の作り物語で、その主人公は、伊勢物語の昔男の後身たると共に、源氏物語の光君の一の意味での前身でもあるやうな好色貴公子である事だけは、以下に引くやうな資料に觀ても疑ない所である。

さて其の交野少將物語であるが、枕草子の「物語は」の段に、

物語は、住吉ウキキ・つぼの類、殿うつり・月待つ女・交野の少將・梅壺の少將・人め・國讓クニユヅリ・うもれ木・道心す、むる・松が枝。こまの 狛野の物語は古き編かはり編かはりさし出でて去にしがなかしきなり。

と見えて、枕草子及び源氏物語以前の昔物語の一たることは確で、色葉集(卷三)の「物語名」の項にも「かたの少將」、又河海抄(卷二〇)に引いてある水原抄の文中にも「かたの物語」と見えてゐる。右の枕草子に見える物語名の中、住吉・宇津保を除き、他は皆散逸して今日傳存してゐない。住吉物語は現存の物は昔物語のまゝでは無いらしいが、源氏物語に引かれてある部分の記述を通して大體昔物語の面影を傳へてゐると思はれ、又、異本に「住吉・空穂の殿うつり、國讓はにくし」とあるに隨へば「殿うつり」と「國讓」は宇津保物語の卷名であらうし、「國讓」だけは現存の宇津保にもある。若し此の「國讓」が「殿うつり」と共に獨立した別箇の小説のなら、これらも散佚した古物語である。前田家本(尊經閣叢刊)では

ものかたりは

すみよし・なとき・うつほのるい、月まつ女・くにゆつり・殿うつり・梅つほの大将・道心す、むる松がえ。こまの、ものかたりはふるきはほりさかして、もていきしかおかしきなりくひものまうけたるそにくき。かはほりのみや・むもれ木・人め・かた野・少將と、少異があり、「をとき」かはほりのみや(これは狭衣物語卷四や風葉集にも見える「かはほり物語」である)の二種も加はつてゐるが、これにも「くにゆつり」殿うつり」は別になつてをり、且「交野少將」もある。其の他、源氏物語・狭衣物語・

更級日記・赤染衛門集・勸女往生義等によつて、尙多くの散佚昔物語があつた事を知るのであるが、それらの中でも、狛野の物語と交野の少將物語とは、特に喜ばれた小説らしく、兩書ともに源氏にも枕にも、僅かづつではあるけれども内容に觸れた記述を留めてゐるのでもわかる。

源氏物語に交野の少將の事が出てゐるのは、帚木卷の此の條の他には、野分卷に、夕霧中將が明石姫君の御局の硯と紫の薄様の紙を借り受けて一首の歌を案じつゝ雲居雁への文を認める條、

吹き亂りたる苺置に附け給へれば、人々「交野の少將は、紙の色にこそと、のへ(花ヲ戀文ノ紙ト同ジ色ニ揃ヘ)侍りけれ」と聞ゆ。
(夕霧)「さばかりの色も思ひ分かざりけりや(イヤ、ソナナ細カイ所マデハ不粹ナ私ニハ智慧ガマハラナダ)。何處の野邊のほとりの花よ(テハト、何處ノ野邊ノ花ナラヨイカ知ランテ)」など、かやうの人々にも言少なに見えて、心解くべうもてなます、いとすくく(生眞面目)けだかし。

とある一節である。之を花鳥餘情(卷一五)に註して、

これは紫の薄様に書きて苺置に附けたるが、紙の色に違ひたると、人々咎めたるなり。なみのしめゆふといふ物語に、

よそへつゝ見れど甲斐無しかくてのみ獨りはいかゞ井田の山吹
舊りにたる事なれど、紙の色に似たるこそなかしけれとて、山吹に附け給ふ。かたの、少將にやなるらむ。今按に、交野少將は紙の色に似あひたる枝に附けたるを、夕霧の心には必ずしも然るべからず、何にても其時に隨ひたる花に附くべきと思ひ給へるにや。

としてある。これで覺ても、交野少將といふのはかなりの風流者として、物語の世界には——同時に實際の風流事の手本としても——評判の人物であつたらしく思はれる。

それから先に引いた河海抄を通しての水原抄の文といふのは、源氏物語蜻蛉卷の
行方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけぬ。

の註として、

水原抄云、かたの、物語に有り。可_{かんが}勘_ん。

とあるだけで、詳しい事がわからぬけれど、これは浮舟君が入水した事を侍女等が噂する所で、幸に風葉集(卷一六、戀四)所收の唯一首の詞書が恰も此處の條を説明してくれる感があつて、臆氣ながら交野少將物語の構想の一部を窺知し得るのである。

故一本 故中納言便の序に一夜泊りて復とも訪ひ侍らざりければ、身を投げんとしける所に、鷄飼を見つけて、

袴の腰を引き破りて、袴の松の墨して書きて、かの中納言に傳へよとて取らせ侍りける かたの、大領が女

かつ消ゆるうき身の沫と成りぬとも誰かは訪はん跡の白浪

即ちやはり女主人公の入水する所があつて、これが浮舟の粉本の一(萬葉卷九や卷一六、又、大和物語卷下に見えるやうな菟原處女式の妻争説話も、其の構想の粉本であつたと推定し得られるが)であつたらう事が想測せられる。但し、右の風葉集のそれと、水原抄の「かたの、物語」とは必ず同一であることが信じ得られるが、其の「かたの、物語」とは、所謂「交野の少將物語」と同一のものを指すのであるか、或は別に類似の題名を有つ物語があつたのであるか、明確に決定は出来ない。「かたの、大領」及びその女と「交野の少將」と如何なる關係の間柄であるのか、交野の少將が物語の主人公たることは疑無しとして、此の女がそれとは別の説話を展開させる副主人公的な女性であつたのか如何か、自由な想像を恣にすれば兎も角、これ以上確實な内容は捕捉し難い。が、「交野の少將物語」を略して「交野の物語」と呼ぶことは有り得るし、寧ろ普通でもあり、且、風葉集に交野の少將はもとより、交野の少將物語中の人物らしい人の歌、即ち交野の少將物語中の歌と目して誤り無い歌が他に無いのと、「かたの、大領が女」とあつたとしても、他の物語中

の人物たることも有り得るが、水原抄並に源氏蜻蛉巻と對比して、かたの物語中の歌たることだけは少くとも認めてよいと思ふ。又、交野の少將物語ほどの知られた物語なら、一位は當然あるべき筈である。右の水原抄並に風葉以外に「かたの物語」といふ名が別に所見が無いことなどからして、やはり同一の物語と見做され得る可能性が少くないと考へられる。

ところが、枕草子月の明きにに又、

げに交野の少將もどきたる(批難シタ)落窪少將などはなかし。

とあつて、此の交野少將は少くとも直接に昔物語の交野少將、即ち交野少將物語の主人公を指してゐるのではなくて、落窪物語(卷一)に

誠に此の世の中に恥かしきものと思し給へる辨少將君、世の人は交野少將と申すめを……

とある辨少將のことであるに違ひない。それは落窪君の許で侍女の少納言が交野少將の噂をした後で、落窪少將即ち落窪君の夫なる左近少將が、女君に向つて交野少將を皮肉まじりに評する事が落窪の同條にあるので一層判然する。此の辨少將と交野少將物語の主人公との間にどんな交渉があるのか、言ひ換へれば、落窪物語中に此の他の昔物語の主人公をも採り入れて来たのか、或は名前だけを借りて落窪物語中に全然別箇の一人物として創作せられたのであるか、明確にし難い。そして帯木卷の「交野の少將」はその散佚物語の主人公を指すか、或は此の落窪中の人物を指すかが當然問題とならざるを得なくなるのである。

併しながら落窪物語中の交野少將は、少納言の語によれば、

御容貌のなまめかしさは實に類あらしとこそ見侍りしか。

又左近少將の語では、

都の内に女といふ限りは交野少將めで恋はぬなきこそ羨ましかれ。

とあるやうな美貌の主である上に、

文だに持て来初めなげ限りぞ。(交野少將カラ艶書アモ一度来初メタラ、モウ最後ダ)かれはいと怪しき人の癖にて、文一行遣りつるが外る、やうなければ、人の妻、帝の御妃も持ちたるぞかし。さて徒らになりたるやうなるぞかし。そがうちに、私物と聞ゆなれば(ソノ中テ貴女ハ彼人が私物ト最愛シテルト話ダカラ)、いと覺え殊におはするは。(イヤ、偉イ御威勢サウナ)

と左近少將が落窪君を揶揄ひ半分に一寸いちめてみる位のみならず、異性に對する凄く魅力をも有つてゐる好色貴族であるらしいから、所謂交野の少將物語の主人公を落窪の作者は十分豫想して書いたものと考へられる。「人の妻……ぞかし」さて徒らに……ぞかし」といふ筆使ひも、或昔物語のかなり人に知られた説話の筋を豫想してゐるやうに讀まれる。野分卷の方には確に昔物語の主人公であるが、その艶書の紙の色と折枝の花の色とを整へるといふ用意が、右のやうな一行の戀文で異性を魅惑せず措かぬ不思議な力を有つ人の行爲として、極めて自然に結びつけて考へ得られるのである。然らば即ち落窪の交野少將は、落窪中の人物であるとしても、それと同時に昔物語の所謂交野少將でもあり、或はさなくとも殆ど同一に近い——若し變つてゐるとすれば僅に外面的に改變せられたやうな——人物と見ていゝのではないかと思はれる。

特に注目を逸する事の出来ないのは、末摘花卷に、夕顔上を死なせた後の源氏の事を敘した文中、

少し故づきて聞ゆる邊は(一寸シタ所ガアルトイフ噂ノ女ガアレバ)、御耳とまり給はぬ限なきに、さてもやと(此ノ女ナラト)思し寄るばかりの氣はひある邊にこそは、一行なも仄めかし給ふめるに、靡き聞えずもて離れたるに、なまめく有るまじきぞ、いと目馴れたるや。(珍ラシクナイコトデアル)

とある一節がある事で、此の意味でも交野少將は——帚木卷の巻首の文と照合して愈々——全面的にはなくも、一面から觀ての光源氏の本生たること疑を容れぬと思ふ。そして此の源氏の文で覽て、それは落窪中の交野少將からの繼承であることは無論であるが——此の意味で帚木卷の交野少將は落窪のそれを指すと見ることが可能となるが——併し又、或は落窪からの繼承でなくして、落窪を通して知り得られるやうな交野少將物語からの直接の繼承であるかも知れぬ事は、同じ源氏に直接昔物語のそれを承けてゐると見る他はないやうな前記野分卷の詞句のあるのでも推斷し得られる。然らば結局、落窪の交野少將と、それを題名とする散佚物語の交野少將とは根本に於て同一であるらしく、随つて帚木卷首の交野少將は、散佚物語の主人公たる人物を指すのであらうし、同時に恐らく落窪物語中の人物を意味したと見ても、大きな謬ではないであらうと言ふことが出来よう。

○内裏にのみ侍ひようし給ひて、大殿には絶え／＼罷出給ふを(本文)
前卷の終にも

内裏住のみ好ましう覺え給ふ。五六日侍ひ給ひて、大殿に二三日など、絶え／＼に罷出給へど……
と見える。清少納言も「頼もしげなきもの」の一に、

婿の夜離れがちなる。(枕草子)

と數へた。掣取りの當初こそ「只今は幼き御程に、罪なく思ひなして」、「覺束なく恨めしく」は思ひながらも、心長閑に待たれもしたであらう。それでも、

いみじうしてて婿取りたるに、いと程なく住まぬ婿の、さるべき所などにて身に逃ひたる、いとほしとや思ふらむ。(枕草子) いみじうしてて婿取りたるに、いと程なく住まぬ婿の、さるべき所などにて身に逃ひたる、いとほしとや思ふらむ。(枕草子) 此の段(一)にも同様の記述がある。

の氣味合が、幾度禁中であつた事か。結婚後四五年経つても、やはり少しも變らぬ同じ有様では、さう／＼何時までも

「幼き御程に、罪なく」思ひなしてばかりはをれぬ。如何に人が善過ぎててもそれでは餘りな最良目、まして父大臣だけではない、葵上付きの口さがない侍女達がうよく／＼してゐよう。

或人のいみじう時に逢ひたる人の婿になりて、一月もはか／＼しうも來て止みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ、乳母などのやうの者は禍々しき事ども言ふ(不祥ナ悪口ナソスル)もある……(枕草子) 或人のいみじう時に逢ひたる人の婿になりて、一月もはか／＼しうも來て止みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ、乳母などのやうの者は禍々しき事ども言ふ(不祥ナ悪口ナソスル)もある……(枕草子)

のが一般、「忍ぶの亂れやと疑ひ聞ゆる」も無理ならぬ事であつた。まことに、左大臣の厚遇も、其の邸内の綺麗も若き風流公子を引留め得る力としては、懐かしき亡き母君の幻を逐うて止まぬ淑景舎の獨り住にだも如かなかつた。「うるはしく」かしづかれた皇女腹の姫君ながら、これも尊貴の皇女の而も再生の母君の慕はしさの前には、見かへりもせられぬは是非も無い。「亂れそめにし」青春の胸は、紫匂ふ藤壺の由縁の色に怪しく染められてゐるのを、君の他に知るは唯作者と讀者のみである。

○さしもあだめき目馴れたる……うちまじりける。(本文)

光源氏名のみこと／＼しくて、世界無比の——少くとも日本第一の好色漢と目されてゐるやうであるが、勿論此の評判は全然虚構のものではないのみか、我が子同然の秋好中宮や玉鬘にまで言ひ寄る厄介な性癖は、實際釋明の餘地があらうやうもないが、併し宛然專賣本職の色事師の看板を掲げる事などは思ひもよらぬどころか、表面は飽くまで聖人君子で居られれば、實は居たいのである。「いといたく世を憚り、まめだち」て通したいのである。空蟬の場合は無論の事、夕顔でも、

忍ぶとも世にある事隠れ無くて、内裏(父帝)に聞召されむ事をはじめて、人の思ひ言はむ事、よからぬ童べの口すさびになりぬべきなめり。あり／＼て(今マテハ無事に通シテ來メガソノ最終ニナツテ)痴がましき名を(世間ノ物笑ニナルヤウナ評判ヲ)取るべきかな

と思しめぐらす(夕顔卷)

惱みに苦しむのである。思ひきつて大膽に殻を脱ぐ勇氣は無いのである。況んや自分から面白をかしく躁ぎまはり踊り狂ふことは出来ないのである。此の點正に反省的理知的な作者紫式部の性格と生活態度をおのづから反映してゐる感がある。此の異常の嚴重な戒心、窮屈な抑制だけでなく、事實亦露骨な漁色、大つびらな耽溺、豪快な遊蕩といった事が元來好きでないのも眞實で、此處にも作者が明白に居るが、さういふ點から言へば如何にも非世間的な、話せぬ男で、男性的な壯快味に乏しく、而も自らの情炎に己れを焼き盡くすやうな純一な直情は先づ無い。これが在中將から出て在中將と異なる所、又、交野少將の後を承けて交野少將と同じからざる所である。それでゐて朧月夜や藤壺やに於てのやうに、自分でもどうする事の出来ぬやうな本能的な衝動に驅られて、不義破倫の行爲をすら稀に敢へてしてしまふことを禦ぎ得ぬのが、人性の自然でもある一面、誇らしい完全を傷け、嚴かな統制を破綻させる自家矛盾の悲しく恐ろしいそして同時に解放された嬉しい不思議な體驗であり、生き甲斐あらしめる併しながら痛ましく愚かしい記念であり、己が爲に兒孫の爲に慶すべきか將た弔すべきか俄に定むべからざる一の與へられたる命題である。結局、光源氏の性生活は獨りを娛しむ抒情詩人の藝術である。茨木屋幸齋・紀文・奈良茂の遊樂でもなく、無論黄表紙、洒落本、乃至は人情本式、或は八笑人・七偏人式の、をつに通がつたり、でれ／＼と流れて融けたり、茶番氣分に消遣する類のあそびでもない。やはり女性的で貴族的な、即ち消極的で上品な、反省的で冷たい、靜かな戀、青白い戀、古今集の戀、情趣的な性愛、物の哀れへの憧憬、自己を忘れきつてしまへない、自己にも相手にも溺れきつてしまへない、而もねち／＼としてゐて、さら／＼した所の無い、つまり平安朝そのものを象徴したやうな性生活、それが光源氏の創造する愛欲の世界である。何としても時代意識と共に作者が偽りなく現れてゐるのを、蔽ふ事が出来ない。光源氏は到底時代の志嚮の結晶

である。同時に紫女は又、自らの創作した主人公に關して交野少將から浴びせられる冷笑を、恐らくは孌然と黙して甘受するものであらう。

唯、なほ源氏にはこれに關聯して特記すべき一の賦性と、其の現はれとしての事實とがある。それは一度自分が愛したことのある人は決して見捨てることなく、精神的にも經濟的にもいつまでも目をかけてやる一事である。「普賢菩薩の乗物」と間違へる程の末摘花でも、最初は好奇心と空想とが接近の動機を大部分を占めてゐたのが、幻滅の哀愁を漫ろに感じた後は却つて憐憫の情に轉化して、須磨から歸つてからも、化物屋敷のやうな蓬生の宿を通りすがりに思ひ出して訪れた以後は、遂に引取つて扶持してやつたり、夫の死後尼になつた空蟬をも保護して餘生を送らせたり、春夏秋冬の好みをそれ／＼に見せた庭園や室々を有つ六條院の大邸宅に、紫・明石・花散里をはじめ多くの妻妾達を共棲させたりする。

年月を経ても、なほ斯うやうに、見しあたりの情は過し給はぬにしも、なが／＼數多の人の物思ひ種なり。(花散里卷)

假にも見給ふ限りは、おしなべての際にはあらればにや(尋常普通以上ノ女バカリテアル爲カ、ソレトモ亦)、さまざまにつけて、言ふ甲斐無しと思さるゝは無ければにや、憎げなく、我も人も情を交しつゝ、過し給ふなりけり。(同卷)

これは源氏の御氣に入りで、いつも此の道の御供の役をば一手に引受けてゐる惟光をしてすら感歎措く能はざらしめる所である。

殿の御心掟を見るに、見初め給ひてむ人を、御心とは忘れ給ふまじきにこそ、いと頼もしけれ。(少女卷)

必ずしも愛の深淺に因るのではなく、もつと廣い大きい心持からである事が又目に立つ。

さしも深き御志無かりけるなだに、落しあふさず(取り殘サズ)取りしたゝめ給ふ(面倒ヲ見テヤル)御心長さなりければ……(玉鬘卷) 怪しきまで御心長く、假にても見初め給へる人は、御心とめたるな、又さしも深からざりけるなも、方々につけて尋ね取り給ひ

つ、數多集へ聞え……(若菜上卷)

其の「集へ聞え」た邸内のそれ／＼の室々を訪ね廻つては、一人々々に萬遍なくやさしい言葉の一つもかけてやる心配りも並大抵ではあるまい。

斯様にても御蔭に隠れたる人々多かり。皆さし覗き渡し給ひて、覺束なき日數積る折々あれど、心の中は怠らずなむ。唯限りある道の別れ(死別)のみ、さうしろめたけれ(氣ガカリテナラヌ)。命ぞ知らぬ(ながらへば命ぞ知らぬ忘れじ)など、懐かしく宜ふ。いづれなも程につけて、哀れと思したり。我はと思しあがりぬべき御身の程なれど、さしも事々しくもてなし給はず(無暗ニ威張リ散ラサズ)、所につけ人の程につけつ、週く懐かしくおはしませば、唯斯ばかりの御心にかゝりてなむ、多くの人々年月を經ける。(初音卷)

これは然し光源氏のやうな身分境遇の恵まれた人、権力と經濟生活と併せ具へた人でなければ、望んでも叶はない事であるし、六條院の豪奢な造營は、或は河原院にも模したらうし、或は宇津保物語吹上卷(上)の神南備の種松が吹上の濱の春夏秋冬の山や林にまで數寄を凝した園莊にも學んだらうし、又は御堂關白の邸宅の壯麗さの投影でもあらうし、特に妻妾を一つの第に共棲させたのは、宇津保の藤原の君卷の

右大將藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世の中に心にく覺え給へる、限りなき色好みにて、廣き家に多く屋ども建てて、良き人々の女、方々に住ませて棲み給ふありけり。

の先蹤を追ふものでもあらうしするが、同時に又、伊勢物語六三段、即ち九十九髪の段の結文、

世の中の例として、思ひ思ほぬ人あるを、此の人は、その差別見せぬ心なむありける。(朱雀院繪籠御本)

の一節、なほ流布本ではもつと詳しく

世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、此の人は思ふをも思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

とある一文が、若し後人の添加で無いとすれば、確に光君の對異性態度の偏愛的でない根源を既に夙く此處に明示して

ゐると言ふも不可なきものである。而も右の段に於ける九十九髪は即ち紅葉賀卷の好色老女源内侍の前身と推定し得べく、且、「此の人」は同段ではいつもの漠然たる「昔男」でなくて、「在五中將」と明記せられてもゐる。然らば此の點でも伊勢物語と源氏物語とは密接な關係があり、主人公の性格的方面、それが單なる漁色だけでなく、斯うした意味の部分までも、業平から光君への進展があることは注目すべき事實で、文學史的立場からも興味深い現象である。必竟六條院の共棲などは、時代生活相の一面の反映でもあらうと共に、伊勢や交野少將や宇津保等を経て次々に成長進展して來た物語文學の主人公の理想的賦性の一の具現とも看られ、或意味では發生當初から物語の主人公に與へしめられてゐる童話性の殘滓でもあり、又その發展の極致だとも言ひ得る。

斯く光源氏の對異性態度は、從來言はれてゐるやうに、源氏獨特の世に有り得ぬ感心な仕打として推賞する事に俄に同意し難いのであるが、併しながら又、前掲の如く、作者が隨所にくどい程、光君の性格中此の點を特に指摘し、批評し、推賞してもゐる事は、此の性行が物語の世界に於ての業平からの伸張である無しに係らず、又伸張であつたとしても、やはり作者の普遍愛の理想の宿らしめられてゐる重要な點であり、或意味で輕薄な一般の時代男性へ投げた紫女の皮肉でもあり、彼女の常に異性に對して斯くありたいと望んでもゐた事實でもあらうことが疑ひないのを證するものである。

「兎に角光源氏は好色者の或典型には違ひない。在中將や交野少將を先輩として見習つてゐることも確であるが、それらの何れとも亦異なつた形相を成す好色振を示し、一面にはそれら先輩から觀れば如何にも微温的、穩健的、平凡的、保守的、善人的であると同時に、他面にはもつと包容性と粘著性と同化性と、實意と技巧と複雑な感受性と、加ふるに變態的狂暴性、反動的激情性すらをも具有して其の點出藍の譽ある、やはり斯道の雄たり範たる人物たることは否定し

得られない。

かゝる古事(昔物語)の中に、まろ(私)がやうに實法(篤實ナ)なる癡者(オ馬鹿サン)の物語はありや。(巻卷)

とは、玉鬘に向つての源氏の戯言であるが、噴飯なほどアイロニカルに響くと同時に、源氏並に作者の私かなる自讃の気分が何處か裏に漂うてゐるのが感ぜられ、同じ條の紫上に對しての

まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ。(同卷)

に至つては、正に明白な「我れぼめ」であると共に、これは又全然の出鱈目な放言では無いことも認め得られる。最眞目に見てもどうしても美人とは言へぬし、事實源氏も亦美人なるが故にそれを愛してゐるのでは無いことが夕霧にまでわかる花散里に關して、

容貌の眞ならずもおはしける(尋常テナク、勝レテハヲラレヌ)かな。斯かる人なも、人(源氏)は思ひ捨て給はざりけり。(少女卷)

と父の愛の博さに敬服せしめずには止まぬ程、確に所謂「實法」な偉さがある。それだけに、時々突風のやうに捲き起つて来る發作的な衝動が生憎に激しくて、あなやと思ふ瞬間に無上命令の王座を蹴覆して超理性の行爲に彼を驅るのが別人の感がある位に際立つのである。繰返して約言すれば、形の上では殆ど感情の奔放に流れ動くまゝに振舞ふやうに見えるが——若い時は事實多少其の氣味もあるが、それは一面母から要め浸りたいやさしい愛情に憧れて止まず、而もそれが滿されない淋しさからも來てゐた——かなり理性の掣肘を受け、周圍を顧慮し、自身を反省する努力を吝まぬのが源氏の本性である。而も、近づけば近づく程厭がる秋好に對して、自分を「似げなき事」と嗜めつゝも、斯う強くなる事に胸塞がる癖の猶ありけるよと、我ながら思ひ知られる苦しさは如何ともし難い。此の理想と現實との矛盾、靈的なるものと肉적なるものとの争闘、光源氏に於て觀る不完全人と、同時に觀る不完全人との共存——併しこれが爲光

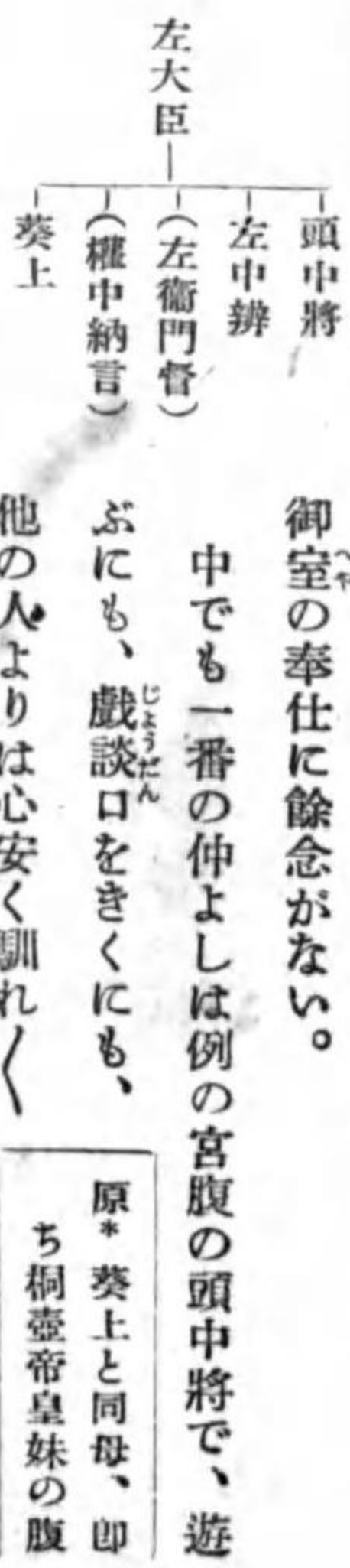
君をして章話化せしめることから辛うじて救うてゐる事、恰も紫上に嫉妬の賦性を與へてゐると同様の對照であり、それが作者の用意でもあり、はたらくきでもある——これこそ作者の人生に於て體驗してゐる謎であり、偽り得られざる人間的生活の實際であり、又此の物語の主人公の描出に於て作者が或破綻をすら感じてゐる筈の重點でもあらう。だから光源氏は好色家の割に眞面目にも見え、而も亦實意があるやうながら次から次へと異性の變つた味を漁り歩くエロの總本山にも見えるのである。

長雨晴閒なき頃、内裏の御物忌さし續きて、いとゞ長居侍ひ給ふを大殿には覺束なく恨めしと思したれど、萬づの御装ひ何くれと、珍らしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君達、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心安く、馴れ／＼しく振舞ひたり。右大臣のいたはりかしづき給

は、きぎ

〔口譯〕 五月雨が毎日々々降り續く頃であつた。禁中の御物忌が次々と

重なつて、源氏ももう随分長く内裏に籠居してをられるので、葵上の邸では物足なく恨めしさうに愚痴を言ひ／＼、装束調度萬端何かと心を配つて珍らしい物を新調しては届けるし、左大臣の子息の若君達は何れも光君の御室の奉仕に餘念がない。



しく振舞ふのであつた。斯うまで似た二人と言はうか此の人も、娘共々大騒ぎして歡迎する右大臣の邸へは、どうも餘り足が向かず他處の女を追ひ廻つては浮かれ歩く風流公子で、里の邸で

口(一) 四の君

(二) 左大臣邸

ふ仕處すまかは、この君もいと物憂くし
 も自分の室を目の覺めるやうに磨き立てて、源氏が見える折にはいつも連
 て、好色すきがましきあだ人なり。里
 れ立つて出入りしては、夜晝、學問も一緒なら管絃も一緒と、なか／＼負
 にも、我が方のしつらひ眩まぼろしくし
 けず劣らず肩を並べ、何處へ行くでも影の形に添ふやうに離れない程の親
 て、君の出で入りし給ふに、打連
 密さなので、自然、他人行儀にもせず、御互の胸の中まで打明けて、睦み
 れ聞え給ひつゝ、夜晝、學問をも
 合つてゐるのだつた。
 遊びをも諸共にして、をさ／＼立ち後れず、何處いづくにても纏まつはれ聞え給ふほどに、
 自おのづから畏まりも置か
 ず、心の中に思ふ事をも隠しあへすなむ睦むづかれ聞え給ひける。

語義

【物忌】モノイミ。齋戒。神を祭る前、不祥な夢見の折、凶兆變事等のあつた時、穢れに觸れた場合、又陰陽道(オンヤウ
 ダウ)でいふ天一神(ナカガミ)・太白神(ヒトヨメダ)の塞(フメガリ)を犯すのを忌んで其の日が過ぎる(之を「方明く」といひ、それらの神
 の遊行してゐる爲、方位の塞るを「方塞る」といひ、それを避けて他の家に宿るのを「方違へ」といふ。本巻後段の源氏が紀伊守の中川の宿
 に行つたのは、天一神の塞りて方違へをしたのである)まで、など一日或は數日身心を清淨にして慎み籠居すること。物忌をしてゐる
 標に柳の木しらしの札しるしや忍草や紙などに「物忌」と書いて、冠や簾に掛ける習俗もあり、その札を「物忌の札」とも亦單に「物忌」といひ、
 札を附けるのを「物忌附く」とも呼んだ。「内裏(ウチ)の御物忌」とは主上を始め奉り禁中すべて物忌に籠るのである。禁秘抄(下)「御
 物忌」の項には、
 御物忌之時、惣不出御他殿舎中。諸事於籠中_ニ有_レ之。或出御_ニ廣廂_ニ、不_レ開之時例也。
 御物忌諸陣立札、御殿之御籠毎_ニ間付_ニ物忌_ニ書紙_ニカシヤ。外宿人不_レ參_ニ御前_ニ。凡依_ニ物忌_ニ淺深_ニ。堅固時殊重也。主上勢々不出_ニ御籠_ニ
 外。毎日御拜時、不_レ上_ニ御籠_ニ。
 とある。が、同じ項に又

不_レ重_ニ被_レ破常事也。御物忌數日相續、不快例也。少々依_ニ輕_ニ可_レ被_レ破事也。
 禁中御物忌時、諸禮近代公卿參籠極難_ニ難_ニ叶_ニ。仍多不_レ重_ニ破_ニ之。近代萬事如此。

とも見えてゐる。蜻蛉日記に兼家から手紙の来た條に「六月朔の日、御物忌なれど、御門の下よりもとて文あり」とあるのは、兼家が
 禁中の御物忌に籠つてゐたのをいふのである。【御宿直所】オントノキドコロ。源氏の宿直してゐる部屋。舊桐壺更衣の曹司淑景舎。
 桐壺卷に「内裏にはもとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方々の人々、罷出散らす侍はせ給ふ」と見え、又、須磨から歸つてから
 後でも、澤標卷に「此の大臣の御宿直所、昔の淑景舎なり」とある。【しつらひ】室飾り、鋪設。「しつらふは」設け装ふ」意。

【参考】室内裝飾の模様は類聚雜要抄(卷二)群書類從に詳しく出ゐる。

【釋評】

禁秘抄に仰せられてゐるのもわかるやうに、物忌には淺深輕重があつて、淺く軽い時には來客にも面
 接することがあるが、深く重い時は固く籠居して他行もせぬのである。御堂關白記の一節を例に引いてみると、

廿七日癸酉。雨下。依_ニ御物忌_ニ候宿。上達部、中宮大夫・源中納言・修理大夫・左宰相中將等、未_レ時除目議初如_レ
 常。事了退下。候宿。他人々退出。(寛弘七年八月)

一日丙子。依_ニ固物忌_ニ籠居。天晴。(同九月)

廿五日庚午。依_ニ物忌重_ニ籠居。

廿六日辛未。秋季御讀經初。依_ニ物忌重_ニ不_レ參。(以上同十月)

四日己卯。參_ニ大内_ニ退出。渡_ニ頼光朝臣宅_ニ。(戌時)是從_ニ明日_ニ依_ニ可_レ犯_ニ土也。(これが即ち方違である。頼光は大江山鬼道治に名高いかの武將である)

六日辛巳。依_ニ物忌輕_ニ外人來。(以上同十一月)

物忌は元來嚴肅な心持で懼れ慎み、緊張した精神を以て心身を清淨に保つべき筈のものであるが、陰陽道の流行と迷信

に拘はれ易い人間——特に弱い時代人の——心理とから無暗に何かにつけて物忌したがる傾向があり、餘り屢、で慣習となると、形式的にも流れ、又無刺激にもなるのである。如何に愚にも勿體らしくそれが餘りにも断え、繰返され連続せられてゐたかは、やはり同關白記の寛弘九年十月及び閏十月の二月の中から物忌の日を拾ひ出して次に掲げるのを一瞥しただけでも知ることが出来る。相似た記述ばかりで而も前掲のものとも大して變らぬ嫌があるが、姑く煩を厭はず列挙してみる。

- 四日戊戌。依_ニ物忌_一籠居。但外人來。
- 五日己亥。依_ニ物忌_一無_ニ他行_一。
- 六日庚子。雖_ニ物忌重_一成_レ祈、詣_ニ妙覺院_一。
- 七日辛丑。依_ニ物忌重_一籠居。
- 十四日戊申。依_ニ物忌_一籠居。
- 十五日己酉。依_ニ物忌_一籠。
- 十六日庚戌。物忌如_レ昨。
- 十七日辛亥。物忌如_ニ昨日_一。
- 廿四日戊午。物忌也。而故冷泉院正日也。仍_ニ參_ニ入南院_一。
- 廿五日己未。依_ニ物忌_一籠居。
- 廿六日庚申。物忌、無_ニ他行_一。
- 廿七日辛酉。物忌如_ニ昨日_一。外人來。
- 廿九日癸亥。……奏云、……明日物忌侍、不能_ニ參候_一……。
- 一日乙丑。昨今日物忌也。
- 六日庚午。入_レ夜參_ニ大内_一宿。今明御物忌也。
- 十一日乙亥。昨日物忌、無_ニ他行_一。
- 十四日戊寅。物忌也。外人來。
- 十五日己卯。參_ニ大内_一……次候宿。而依_ニ方忌_一退出_ニは古_一。
- 廿二日丙戌。依_ニ物忌_一無_ニ他行_一。
- 廿三日丁亥。物忌依_ニ昨日_一。

(以上閏十月)

十月などは四・五・六・七と先づ續き、十四・十五・十六・十七と復四日つき、更に廿四・廿五・廿六・廿七と重ねて四日連續した上、中二日置いて復々三十・閏の一日と兩日引續いてゐる。三十日の内十三日間を算し、一箇月の約半數といふ激しさである。毎月これ程ではないが、少くとも六七日平均を下らぬ。兎も角公私交、の物忌がこんなに煩さくは厄介である。暢氣な中古時代だからよいやうなもの、生活苦と高速度文化の現代などには、嚴重に靜養を醫師から申渡された病人でもない限り、とても辛抱など出来ぬ御勤めである。後世に下るほど漸次形式も頽れ、意味も薄くなつて來たのも寧ろ當然であらう。

が、當時の人々だとて皆が皆、心からどれだけの眞摯な信を以て此の習俗に對して居たか甚だ怪しいものである。勿論、時と場合によつては十分まじめに守られ勤められたことも疑ひ無いが、既に物忌そのものに深淺輕重があるのであるから、それに對する態度も一概に總括してはしまへない。而も物には裏表がある。御方便なもので、外出が都合の悪い場合や、嫌な人に面會謝絶の口實には、持つて來いの殊勝らしい假面である。巧妙な脱法行爲は三百代言が創始者ではないらしい。

母屋の籠は皆おろし渡して、物忌など書かせて附けたり。母君もや自らおはするとして、夢見騒がしかりつと言ひなすなりけり。(浮舟卷)

これは匂兵部卿官が宇治に薰大將の隠して置く浮舟君の許へ、薰と偽つて訪ね近づき、遂に本意の如く女を手に入れた翌日、其の日は實は浮舟の母が石山の觀世音に娘と同行して參詣する約束が出来てゐて、迎をよこす筈になつてゐたのを、折角の機會を掴んだ際として、むさく歸れようかと無理を言ふ宮が、「御返りには、今日は物忌など言へかし」と命令的に智慧を授けられたからであつた。迎の車だけならよいが、母君自身出かけて來られては事である。侍女の右近が獨りで氣を揉んで返事を認め、母君からの迎の人々に渡して還してやる。

昨夜より穢れさせ給ひて、いと口惜しき事を思し歎くめりしに(生憎ト穢レノ爲、物詣ガ出來ナクナツタノ心カラノコリヲシイ

ト残念ガツテキラシタノニ、カテテ加ヘテ今宵夢見騒がしく見えさせ給へれば、今日ばかり慎しませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返すく口惜しく、物の妨げのやうに(何カ障リテモアルノテハナイカト)見奉り侍る。

よくも白々しく言へた文の詞である。女は月やくといふ絶好の口實の武器が一つ餘計にあるから始末に悪い。さなくとも「夢見騒がし」なら手輕でいつでも間に合ふ。母を欺き、神を偽り、物忌を悪用する、二重三重の不埒、而もその物忌の簾の中で男女の密會とはいふ氣なものである。「初瀬の觀音」今日だけどうぞ無事で過せませうにと「大願を」立てる右近が、平生の信仰からでもあらうが、流石に石山の觀音に御頼り申さぬところは、やつぱり何處か空恐ろしい氣はすると見える。戀の爲なら黙殺して下されうと獨り決めに、「逢ひにきたやら南やら」觀音様を託けにしてお染までが野崎村近邊をうろつく熱の高さ。いかな抜苦與樂の大悲の菩薩でも、かう誰も各自得手勝手な御願づくめでは、呆然として苦笑します他はあるまい。

源氏に人妻の空蟬に會ふ機會を與へたのは、中川の宿の方違へであつた(帯木卷)。夕霧大將の北方雲居雁が夫の心變りにむしやくしやして、實家へ歸つてしまつたのも、方違へといふのが口實であつた(夕霧卷)。又、朧月夜の尙侍と再び源氏が情交を新にし得たのは、彼女が癩病の加持の爲、里の邸に退出してゐた間であつた(賢木卷)。染殿后(明子。藤原良房女)に奇怪な不敬を仕う奉つた天狗傳説も、后が惱ませられる御靈氣の祈りに金剛山の奥から態々招き寄せられた護法の聖の驗徳が却つて禍したに因るのである(今昔物語卷二十、第七話)。したり顔で祈り立てても何の効めも現れず大欠伸してゴロリとなつたり(枕草子すまじ)、商賣の物怪にちと御疲れとあつて、坐ると早や眠り聲の甚だ心許ない驗者殿(阿のくま)が、さらにあれば、一方、御堂關白でも一目置く程の「賢人の大臣」と名に高い小野宮右府(實資)でも、「女人に賢人なし」と變つた「賢人の御振舞」で好色の御手本にもならう(古事談第二、十訓抄第七、東齊隨筆好色等)といふ

柄の両面がある世の中である。物忌・方違・修法加持、殊勝尤もらしい其の陰に隠れて、否それらの名目が利用、悪用せられてすらも、如何に屢、男女の交會や、陋策の相談やに没頭せられた機會が尠くなかつた事であらう。方違へに行つた先方は有難迷惑な事もあらうに、御馳走してくれぬと不平をいふ此方の勝手(枕草子すまじ)、願の落ちさうな寒さにぶるる震へながら、さうまでしても氣休めの方違へから歸つて來ると深夜でも眞赤におきた埋火が欲しい我が儘(同方違へなど)男の打さるがひ(道化タリ)、物よく言ふが來るは、物忌なれど入れつかし。(枕草子つれづれ)

と物忌中でも面白可笑しく御機嫌を伺つてくれる幫間的な慰み相手なら、却つて除外例で來訪歡迎とは呆れたもの、「内裏の御物忌」といふのに、宿直所でゴロ寝の人まじり、各自のおのけを發表し合つて腹を捻る不謹慎さは、御通夜の晩の高笑ひ同様、時を構はず場所柄を辨へぬやうながら、平氣で作者が斯うした構圖を案出したのも、それほど神經を尖らせるにも當らぬ程珍らしくない馴れつこの事になつてしまつてゐたからであらう。

宮腹の中將とあるのが前卷の末に「宮の御腹は藏人の少將にて、いと若うをかしきを」とあつた其の人で、此の卷では藏人頭で近衛中將を兼ねてゐる。即ち頭中將で——本文には「頭の君」とある箇所もある——既に述べたやうに左大臣の息男、源氏の正妻葵上と同腹であるから、源氏とは最も近い縁族であり、年輩から言つても少し頭の方が上であるが丁度頃合ひの一番の親友であるし、源氏物語の正篇を通じて、いつも光源氏と相並んで、其のワキ役を勤める主要な人物である。之を小さくしては、各、の子息たる夕霧大將と柏木右衛門督との關係が之に似てをり、(それは作者も盤卷にさう言つてもゐる)更に續篇に於ける薰大將と匂兵部卿宮との對立關係は、つまり源氏と頭君との再生と言ふも不可なく、唯、全體から觀れば、柏木も匂宮も、ワキの役柄を越えた事をもやつてゐるが、頭中將は權中納言となり、大將

となり、内大臣に任じ、太政大臣に昇り、致仕するに至るまで、常にワキの本職を決して忘れない、否、作者がそれを忘れさせないといった形に見える。又、宇津保物語の藤原仲忠と源涼の間柄にも匹敵する関係である。

一人は源氏であるが實は皇子、一人は藤氏であるがこれも母君は内親王、但し此處にそれだけの高下が自らついてゐると丁度相應じて——此の點、薫と匂とは大體逆である——容貌・才藝・人物・官等・信望・宿運・異性關係、あらゆる點に於て、殆ど優劣は無いやうながら、やはり常に頭は源に一籌を輸する。恰も天才と穎才ほどの差異とも言へよう。その癖、學問でも遊戯でも音楽繪畫でも、或は娘の入内にも自分達の戀のたはむれにも、何から何まで一々競ひ合ひ挑み交さずには居れない二人の仲である。憎らしい睦ましい、互に優越を争ひつゝも、力になりなれば、許し合つた同志である。前卷の本文にもあつたやうに、正妻の實家も相對立した權門なら、その又正妻がどちらも氣に入らず、隙さへあれば籠から飛び出して野山を心ゆくまゝ浮れ廻りたいところまで伯仲の關係に出來てゐる。

公事、私事、二人は常に影の形に添ふやうに離れない。文集の句を「諸聲に誦じ」て別れを惜しむ日もあれば(須磨卷)笛を吹き合はせつゝ一つ車に同乗する折もある(末摘花卷)。夕顔を物怪に奪られて我も病みついてしまつた源氏は、面會を謝絶して引籠つてゐても、

頭中將ばかりを、「立ちながら此方に入り給へ」と宣ひて、御簾の内ながら宣ふ(夕顔卷)

のである。北山の徳の巖窟へ瘡病の加持に行つた源氏を迎に出かける公達の中の筆頭は、無論頭君でなければならぬ(若紫卷)が、父方の失意時代でも、妻に繋る縁で弘徽殿大后方にも疎まれず、今は宰相として時めきながら、親友の没落に「世の中いと味氣なく、物の折毎に戀しく」て、

事の聞えありて(此ノ事ガ人ニ噂サン公ニ知ラレテ)罪にあたるとも如何はせむと思しなりて、(須磨卷)

急に思ひ立つては、遙々須磨の浦まで謫居の人を訪れて、「うち見るより、珍らしく嬉しきにも、「一つ涙」を流し合ふのである。晴れの藝の腕較べも似合ひの相手、

源氏の中將は青海波をぞ舞ひ給ひける。片手には大殿の頭中將、容貌用意人に異なるを、立ち並びては、花の傍の深山木なり。

(紅葉賀卷)

親王達・上達部より初めて、その道のは皆探讃賜はりて、詩作り給ふ。宰相の中將(源氏)「春といふ文字賜はれり」と宣ふ聲さへ、例の人に異なり。次に頭中將、人の目移しも徒ならず(衆目ヲ惹クト)覺ゆべかめれど、いと目やすくも鎖めて、聲づかひなど、物々しく勝れたり。(花宴卷)

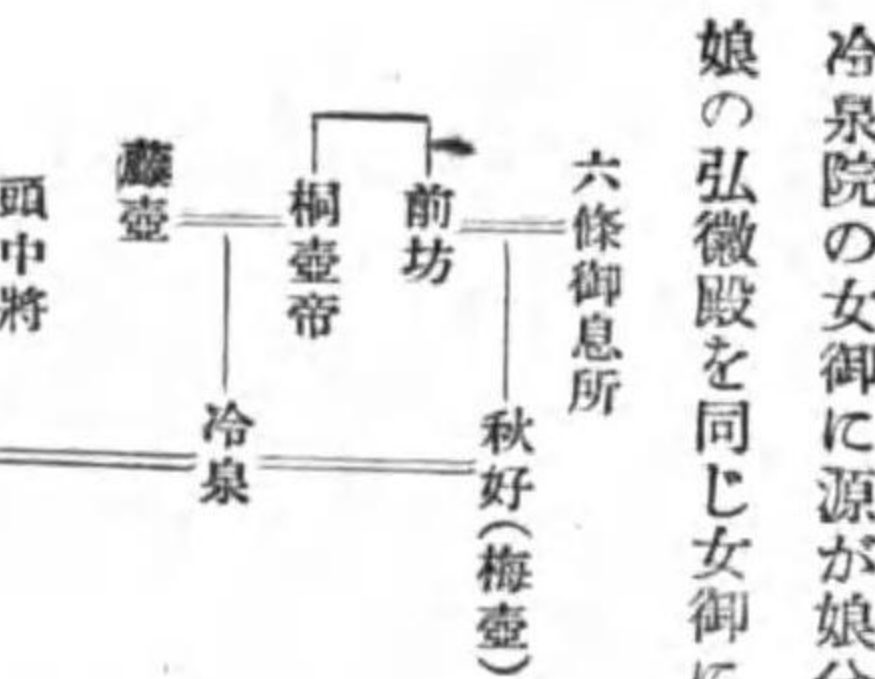
その花宴の折も、東宮が紅葉賀の日の事を思ひ出して、切に御責めになるので、源氏も辭みかねて、ほんの氣色ばかり舞つただけで舅の左大臣は感極まり日頃の不満も忘れて落涙をとどめ得なかつた次に、

「頭中將いづら(何處ニ居ルカ)。遅しとあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少し打過して、斯かる事もやと心遣ひやしけむ、いと面白ければ、御衣賜はりて、いと珍らしき事に人思へり。

源氏の方は自然で天性で、頭中の方はどうしても努力で意識的である。恰も薫大將の體內から發する自らなる芳香に劣るまいと、匂宮が人工の薫香をいろ／＼焚き染めて挑まれると同じである。韻塞ぎの遊びに負けて、頭は源に負けわざ(負ケタカラ勝者ニオゴツチャル響應)した(賢木卷)。宮中の繪合の催しにも、頭は娘の弘徽殿方に勝たせたいと種々苦心したが、最後に源の須磨の繪日記が出て、勝は梅壺(秋好女御)方のもとなつた(繪合卷)。常夏の女夕顔は、先づ頭の手に入つて玉鬘を設けたが、姿を晦ました後、却つて偶然源の懷に抱かれ、生命こそはかなく消えたが、遺孤の娘まで實父には見出されずに、繼父光君の許に引取られて養育せられ、頭は代りに近江君の厄介物を拾つてしまつた。隠れ遊びの滑稽な競争では、末摘花にあくがれ寄る源の後に、覺られぬやうに跟けて來た頭の探偵意識(末摘花卷)、六十近い姥

櫻の源内侍を中に、双物まで振り廻しての茶番過ぎた鞘當的一幕(紅葉賀卷)、いづれは若き日の忘れぬ想ひ出の種である。

(奏上ノ)御法事など過ぎぬれど、正日(四十九日)まではなほ(源ハ)籠りおはす。ならばの御つれづれを心苦しがり給ひて、三位の中將(頭中)は常に参り給ひつゝ、世の中の御物語など、まめやか(真面目)なるをも、又例のみだりがはしき(フザケタ、エロガカツタ方ノ)事をも聞え給ひつゝ、慰め聞え給ふに、かの内侍(源内侍)ぞ打笑ひ給ふ種は(互ノ腹ヲ撫ラス話題)にはなるも。大將の君は「あな、いとほしや、祖母殿の上ないたう輕め給ひそ(オバアサマノ事ヲアンマリ輕蔑スルト罰ガ當リマスヨ)」と諫め給ふものから(モノノ)、常になかしと思したり。かの十六夜のさやかならざりし秋の事(末摘花ノ許ニ行ツタ夜見ツケラレタ時ノ事)など、然らぬもさまじくの好色事どもを、互に隈なく言ひ顯はし給ふ(雙方カラスツバ抜キアフ)果てくは、哀れなる世(奏上ノ死ニ際會シタ)を言ひくゝて、打泣きなどもし給ひけり。(奏卷)



冷泉院の女御に源が娘分の秋好(六條御息所と前坊との間の遺孤、初め齋宮。即ち梅壺)を入内させれば、これより先に頭は娘の弘徽殿を同じ女御にして後見する。繪合はつまり此の兩女御の競争なのである。が、終に后争ひもやはり秋好中宮の勝となつた。可愛い戀仲をも強ひて隔てて、頭が娘雲居雁を源の息夕霧に容易に與へなかつた(少女卷)爲に、父と父との友情にさへ聊か動搖が來かけた(常夏卷)が、最後にはやはり頭君が我を折つて二人の縁を祝福してやらねば濟まなかつた(紅葉賀卷)。兎にも角にも、事大小となく、いつも源と頭とは、仲よしの辯に下には互に負けじと張合ひ、相手に鼻を明かさせようと隙ばかり狙つてゐるのである。

この中將(頭)は、更に(源ニ)おし消たれ聞えじと、はかなき(ツマラヌ)事につけても、挑み聞え給ふ。この君一人ぞ姫君(奏上)の御一つ腹(同母兄妹)なりける。帝の御子といふばかりに、こそれ(光君ハ)

皇子ダトイフダケノコト、我も同じ大臣と聞ゆれど仰おぼえ(帝ノ御親任)殊なるが、皇女腹(桐壺帝皇妹の子)にて又なくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際(源ニドレホドノ劣ツタ身分)と覺え給はぬなるべし。人柄も有るべき限り整ひて、何事も有らまほしう、足らひてぞ(十分具足シテ)物し給ひける。この御中どもの挑みこそ怪しかりしか。(紅葉賀卷)

殿(頭中)は遺すがら思すに、(雲居雁ヲ夕霧ニ)婚セルコトハ、いと口惜しく悪しき事にはあられど、珍らしげなき間に(普通當然ノ縁組ト)世の人も思ひ言ふべきこと。大臣の(源ガ秋好ヲ支持シテ)強ひて女御(娘ノ弘徽殿)を押禦め給ふも辛きに、わくらばに(若シカ爾ガ一ニモ)人に優る事もや(雲居雁ヲ入内サ、セテ次の御代ノ皇后ニテ)モナレルヤウナコトハ望メマイカ)とこそ思ひつれ、妬くもあるかな(夕霧ト斯ウナツテハ其ノ望モ承泡ニ歸シタ。イマノシイコトヨ)と思す。殿の御仲(源ト頭トノ友情)の大方には昔も今もいと善くおはしながら、斯様の方には、挑み聞え給ひし名残も思し出でて、心憂ければ、寢覺がちにて明し給ふ。(少女卷)

かやうの事にてぞ、うはべはいとよき御仲の、昔より流石に隙ありけるに、まいて中將(夕霧)をいたくはしたなめて、わびさせ給ふつらさを(源ガ)思し餘りて……(常夏卷)

そして頭の源に優る點は恐らくは殆ど無い中に、唯一つだけ源を降参させて辛うじて溜飲を下げる大得意の技があつたことを、六條院に准太上天皇の尊貴に上つた後の源氏が逃懐してゐる。

どうもスポーツマンといふ側からは、源は頭の敵では無ささうに思へる。

元來、頭の本性は源の女性的なのに比して男性的であり、源の圓滿で滑らかなのに對して一徹で圭角がある。此の點が兩者の性格の大きな相違點で、頭の負け嫌ひと嚴正几帳面なことは、母宮も流石に我が子ながら遠慮を感じ、源氏も動もすれば打解けた仲にも或壓迫を覺えて自然堅くなる時が生ずる。夕霧對雲居雁の問題でも、玉壺の養育並びに結婚

問題でも、なか／＼源の特望してゐるやうに旨い工合に好轉して來ないのも、前にも一言した如き、「此の世をば我が世とぞ思ふ」御堂殿を、常に正面から正義感を以て堂々と牽制する。「賢人の大臣」小野宮實資の或姿を映してゐるやうな内大臣(頭中)が當の相手であるからである。

人柄いとすくよかに(剛直テ)きら／＼しくて(端正テ)、心用ゐなども賢く物し給ふ。學問を立ててし給ひければ、韻塞ぎには負け給ひしかど、公事に賢くなむ。(少女卷)

いと物きら／＼しく、甲斐有る所つき給へる人にて、善き悪しき差別も、けさやかにもてはやし(風味ニシテオカズ、テキバキト片ヅケ)、又もて消ち輕むることも人に異なる大臣なれば(一旦、信用出來ヌ不正ト見ルト、極端ニ頭カラ輕蔑シテシマフ點モ餘人トハ違フ大臣ダカラ)……(常夏卷)

かの大臣、何事につけても、際々しく(キツパリシテ)、少しも片はなるさまの事を思し忍ばず(チツトデモ歪ンダ事ガアレバ斷然敵サヌ)など物し給ふ御心さまな……(行幸卷)

少しアツしうあざやきたる(ハキ／＼シタ)御心には……(少女卷)

といふ人物であるから、

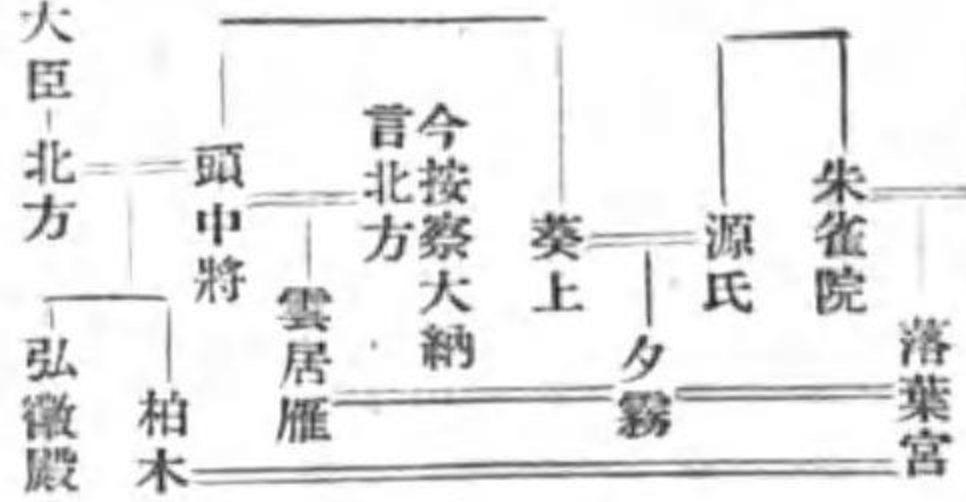
人柄あやしう花やかに、雄々しき方によりて、親などの御孝なも、嚴めしき方さまをば立てて(孝行トイフ務デモ、外見ニ目立ツ嚴肅尊敬トイツタ方ヲ主ニ立テテ)人にも見驚かさむの心あり(他人ニモ示シ感心サセヨウトノ下心ガアル)。誠に泌みて深き所は無き人(形式的ノ孝行テ、眞ノ腹カラノ親愛情味ハ薄イ人)になむものせられける。さるは、心の隈多く(奥ガアツテ智慧ノマハル)いと賢き人の、末の世に餘るまで才たぐひなく、うるさ(巧者)ながら、人として斯く難(缺點)無きことは難かりける。(野分卷)

と源氏をして評せしめ、又、夕霧を戒めては、

さこそおいらか(寛容)に大きな(博大ナ)心捉と見ゆれど、下の心ばへ雄々しからず癖ありて(實ハ内心ハ決シテ淡泊セヌ變ナヨサ

レタ性癖ガアツテ)、人見えにくき(附合ツテ行クニ骨ノ折レル)所つき給へる人なり。(藤裏葉卷)

一條御息所



と引切りに(一徹ニ)花やい給へる(思慮淺クズバ／＼ヤル方ノ)人々にて、(自分ノ雲居ニ對スル仕打ヲ)めざまし(不埒ダ)、見じ、聞かじ(承知出來ヌ)、など、僻々しき事どもし出で給ひつべき。(トシテモナイ離婚沙汰ナド持上ツテハ大變)(夕霧卷)

飽くまで才々しく今めき給へる御心にて(繪合卷)

寧ろ一面源よりは進取的積極的な所もある。而も表面は飽くまでも嚴正謹直の君子、そして裏ではこつそり撮み食ひをして廻る。源と競争するだけではない。單獨行動も決して人後に落ちぬ。夕顔上の最初の發見者も彼だつた(帯木卷)。妹葵上の侍女中務の君は、此の「頭の君心かけたるをもて離れて」却つて光君を慕つてゐたのだつた(末摘花卷)。母大宮を見舞つても、歸るふりをして「忍びて人に物宜ふとて立ち」と

御前驅迫ふ聲の嚴めしきにぞ、「殿は今こそ出でさせ給ひけれ。いづれの隈におはしましたらむ。今さへ斯かる御あだけ(浮氣)こそし(少女卷)

は、きき

と、女房達をさめめかし、夕顔の遺れ形見玉鬘の行方を戀しがつては、

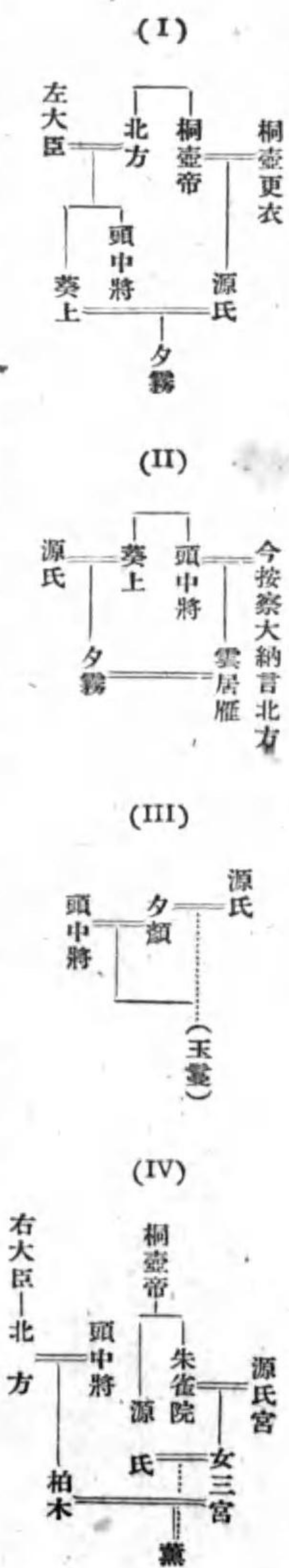
もしさやうなる名告りする人あらば、耳とよめよ。心のすさびに任せて、さるまじき(不シダラナ)事も多かりし中に……(巻卷)

と若氣の故埒を子供等の前に懺悔した末が、我から名告つて出た近江の君のやくざものを背負ひ込んでしまった(常夏卷)。「戀の山には孔子も休る」、此の點亦、「女人に賢人なし」の小野宮右府の好色さながらである。(古事談 第二・十訓抄 第七・東齋隨筆好色等参照)

心おのづから驕りぬれば、思ひ鎮むべき種はひ無き時、女の事にてなむ賢き人昔も今も亂る、例ありける。(梅枝卷)
賢しき人も、女のすぢには亂る、例あるな……(藤裏葉卷)

と源氏も我が子の夕霧の實直さを賞める引合に、斯う皮肉つてゐるのは、例の作者が又一寸顔を出してみたのであらう。但し實資の右大臣に任じたのは後一條天皇の治安元年七月(太政大臣藤公季・左大臣頼通・内大臣教通。道長は其の三年前の寛仁二年二月に致仕してゐる)で、即ち更級日記の著者が源氏物語五十餘卷を讀んだのは此の春三月のことであるから、實資の或姿が頭中に映つてゐるとしても、槐門に昇らぬ前でなければならぬ。そして彼が毅然として左大臣道長の權勢に屈せず正義を主張したのは、權大納言兼右大將だつた時(三條天皇の御治世)既にさうなのであることは、彼の手記小右記によつて明らかであるから、不都合はない。勿論、さうであつたとしても、作者が頭中のモデルの主體として此の人を寫し取らうとしたのでは無いことも確である。又、實權者として右府が廟堂で對立したのは、道長の息の時代(道長が背景になつてはゐるが)であつた。萬一、兩者の關係が殆んど作者の腦裡に意識的に餘り交渉が無かつたとすれば、我等は寧ろ源氏物語に於て、略同代の實在人物たるそして稍遅れて完成した「賢人右大臣」を、早くも鮮かに描上げた作者の手腕に歎服させられることになるのである。それを別にして、頭中は源氏の完全さに一步譲る所があるだけ、理想

化された童話の人形から離れて、光君よりは確に現實の人間に近い人物に描かれてゐる。時代の生きてゐる人々の中に最高の標準を求めたら、先づ頭中將ぐらゐのところが恐らくは典型的な平安貴族の生粹として、何人も之を推すに躊躇せぬであらうし、實際としても探して獲られ得る範例であつたであらう。



さて光源氏と頭中將、二人の風流公子は、其の父母に於て先づ兄妹であり(系圖I)、次に當人同士は妻によつて結ばれた義兄弟であり(系圖II)、更に其の子女に於て婚姻關係を重ね(系圖III)た緊密な間柄であるばかりでなく、一方、頭中の實子玉鬘は却つて源の養女となり(系圖III)、他方にあつて、表面源の息たる薫大將は、實は頭中の子柏木が物の紛れの報の記念であるに於て(系圖IV)、兩貴公子の連繫は、複雑數奇を極め、正續編に跨つて物語の樞要なる骨子を成してゐる。

つれづれと降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさく人少なに、御宿直所も例よりは長

は、きぎ
「口譯」 今日も朝から終日淋しく降り通して、たうとう暮れた。まだしとくと小止みなく降つてゐる。禁中も今宵は伺候の人影がすつと少なくて、光君の御室も、いつものやうに賑やかでなくて少し暢々し過ぎる位なので、

閑やかなる心地するに、御殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き御厨子なる、いろ／＼の紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべき、少しは見せむ。片はなるべきもこ

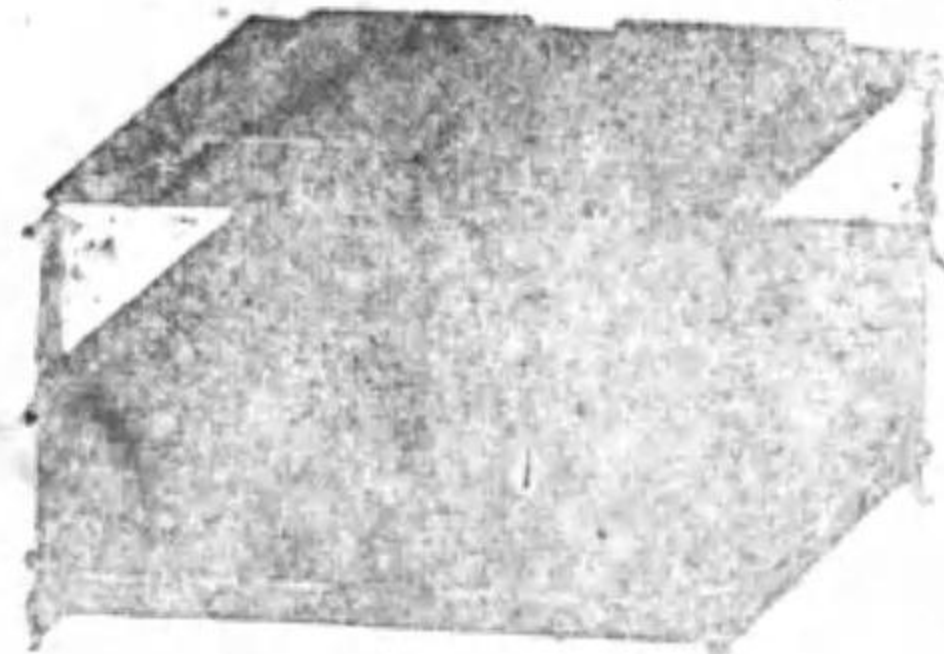
十帖源氏御繪



そ」と、許し給はねば、「その打解けて、傍痛しと思されむこそゆかしけれ。おしなべたる大方のは

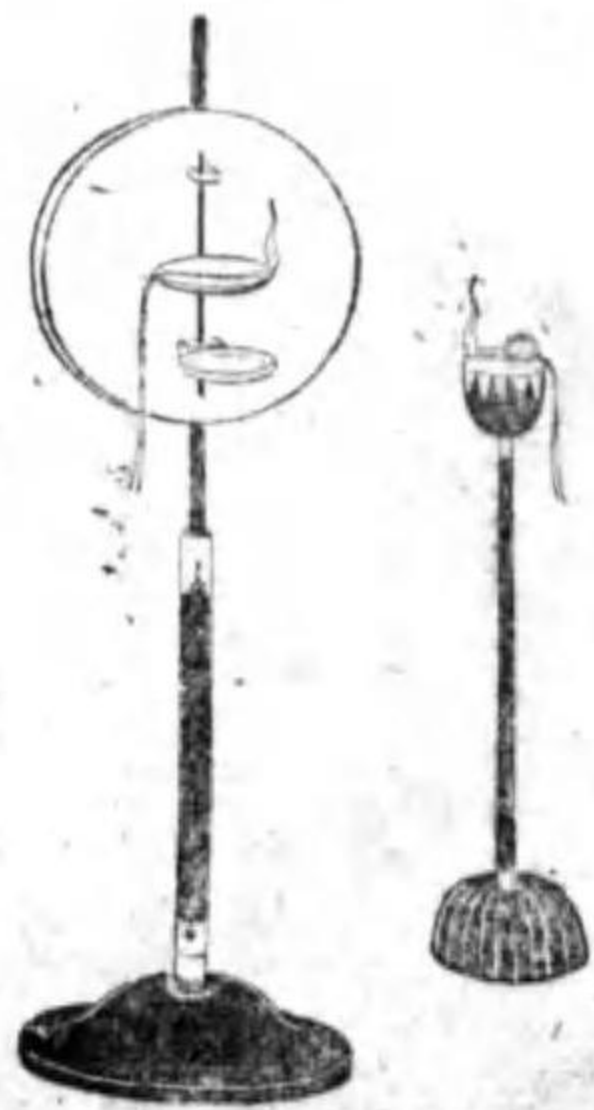
中將と二人つきりて、燈火の近くで書見などしてをられると、いつのまにか傍の厨子の中から紅だの紫だのいろ／＼の紙に書いてある手紙をば引張り出し、中將がわけもなく喜んで是非とも内容を見たいと面白がるので、「ちや、ちよいと見られるのを、ほんの少しだけよ。ろくでないのもあるしするからなあ」と如何しても肯かれぬ。源中「その心安い、嫌だとおつしやるのが見たいんです。尋常一様の戀文なら、憚りながら物の數でない私だつて、分相應の取り遣りは致して居るつもりです。各自、顔を見せない男への怨み言、待ちきれずに焦々してる幕方の手紙なんていふところが、それ／＼に、一番讀み甲斐があらうつてものです」あゝまりひどくせがまれて、仕方なしに少々出してやられる。勿論、大切にして絶対に見せられぬのなんぞ、こんな手近にある常用の厨子の中などに投げ込んだまんにして置かれる氣遣ひはなし、きつと人の知らない處へ秘めてあるに違ひないから、これはまあ、いはば第二流處の大して困らぬ種類の物なのであらう。端から一つ／＼次々と披いて行きながら、源中「やあ、こんな面白いものがいろ／＼あるんですね」と大満悦で、一々自分の思ひよりを「ふむ、これはあの女ぢやないですか。あゝ、これあ、あれですね」とさも愉快さう。圖星を指すのもあれば、時にはとんでもない見當違ひを、すつかり獨

數ならねど、程々につけて、書き交しつゝも見侍りなむ。おのがしし、怨めしき折々、待顔ならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やんごとなく、切に隠し給ふべきなどは、斯様におほさうなる御厨子などに、打置き散らし給ふべくもあらず、深く取り置き給ふべかめれば、これは、二の町の心安きなるべし。片端づつ見るに、「斯くさま／＼なる物どもこそ侍りけれ」とて、心當てに、それかかれかなど問ふうちに、言ひ當つるもあり、もて離れたる事をも思ひ寄せて疑ふもをかしと思せど、言少なにて、とかく紛らはしつゝ取隠し給ひつ。



御厨子

【語義】「殿土」テンシヤウ。清涼殿の南廂。昇殿を許された人々(即ち地下でない人々)が伺候してゐる間。(附圖五参照)「御殿油」オホトナアラ。オホトナアラの約。大殿油。大殿にともす油火の燈。燈臺にともすのである。「厨子」ツシ。書畫を入れたり調度を載せたりする料の置戸棚。下段が觀音開きの扉になつてゐる。寢殿造の室内裝飾の一として貴人の座側においてある。もと厨の食物棚の形に模して作つてあるからの稱呼であらう。「おほさう」おほさう。普通、一通り、なほさう。「二の町」一の町の次。次位、第二流。



御殿油

「其所にこそ多く集へ給ふらめ。

は、きき

【口譯】

「あなたこそ薄山おありになるだらうぢやありませんか。少し

少し見ばや。さてなむこの厨子も心よく聞くべき」と宣へば、「御覽じ所あらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふ序に、「女の、これはしもと難つくまじきは難くもあるかなと、やう／＼なむ見給へ知る。唯うはべばかりの情に、手走り書き、折節の答へ心得てうちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見給ふれど、そも眞にその方を取り出でむ選びに必ず漏るまじきはいと難しや。わが心得たる事はかりを、おのがじし心をやりて、人をば賤しめなど、傍痛き事多かり。親など立添ひもてあがめて、生ひ先籠れる意の内なる程は、唯片かどを聞き傳へて、心を動かす事も

見たいなあ。したら、快く此の厨子も開きますよ」頭中「いやあ、これは。お目にかけるやうなものなんぞ、どうして〜」などと他愛もない事を言ひ合つてゐるうちに、いつか話題は少し身が入つて来た。

頭中「女で、これこそは申し分なしと、批點の打てない完全な女性なんて、なか／＼ありさうもないものだ」と、此の頃やつとわかつて来かけたんです。そりやあ唯表面だけの御世辭愛嬌で、手もすら／＼と一通りは書けるとか、其の時々々の應待も旨く呑み込んで調子を合はせるとかいふだけなら、それ相當かなりにやれるのが澤山あるやうに思ひますがね、それだつて、いざ其の點を審査の目安に嚴選する段になると、大抵は怪しくなつて、合格保證附つてのは、いや減多に無いものですよ、ほんとに。まあ其の、十人が十人、自分の僅かばかり仕入れて精々持ち合はせてるものありつたけを各自々しい顔をしてひけらかしちや、他人を無茶に扱き下して、いゝ氣になつてゐるんだから、とても鼻持ちのならぬ事だらけですよ。親とか叔母とかが附添ひ、娘大明神とかしづき奉つて、祝福さるべき未來を籠めた深窓時代は、唯そんな女のほんの一面を人から噂に聞くと既う直ぐ惹きつけられる事もよくあります。容色が美しいし、何處となくおつとりしてゐて、まだ無

原*楊家
兼在
(長恨歌の句)

あめり。容貌をかしくうちおほほどき、若やかにて紛るゝ事なき程、はかなきすさびをも、人眞似に心を入るゝ事もあるに、自ら一つ故づけてし出づる事もあり。見る人後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をば繕ひて、まねび出すに、それ然あらじと、空に、如何は推し量り思ひ朽さむ。眞かと思もて行くに、見劣りせぬやうは無くなむあるべき」と、呻きたる氣色も恥づかしげなれば、いとなべてはあらねど、我も思し合はする事やあらむ、打微笑みて、「その片かども無き人はあらむや」と宣へば、「いとさばかりならむ邊には、誰かは賺され寄り侍らむ。取

は、きき

邪氣一方の、これといつてする仕事も無い頃で、琴なり繪なりつまらない慰み半分の稽古事でも、他人がやれば自分もと、一心になつて習ふこともあるもの、それがその、好きこそ物の上手なれで、いつの間にか何かしら一かど見られる藝をし出かす事もあります。と、平常それを見てゐて觸れ廻る人は又、きつと御本尊の不得手な方面は暖氣にも出さず、幾らかでも取柄のある點だけを、此の方は尾に繕付けて吹聴するので、聴く方では「それでは少し話が旨過ぎる」とは、全くの見ず商ひちやあ、如何してけちが附けられませう。うかと釣られて愈、ぶつかつてみると、見事期待を裏切られて、接すれば接するほど、だん／＼後込する段取になるが定のもので「す」と嘆息する中將の體、流石に好色者といった様子。一々とまでは行かぬが、自分にも餘程思ひ當る節々があると見えて、莞爾しながら、その、一かどの取柄も無い女つてものがゐるでせうかしら」頭中「何をおつしやる、そんな女の處なんぞ、拜まれたつて誰が誘惑されるのですか。まあ、おですね。てんで問題にならないくだらない連中と、無類飛び切りといふとは、丁度其の數が同じ位で、どつちもたんとは無いでせう。一體、上流の家に生まれますと、やれ傳や乳母と、澤山の人にはちやほやされ、無類で缺點も蔽はれることが多く、自然と其の様子がみんな同じやうに氣にな

る方なく口惜しき際と、優なりと
 覺ゆばかり勝れたるとは、數等し
 くこそ侍らめ。人の品高く生まれ
 めれば、人にもてかしづかれて隠
 る、事も多く、自然にその氣はひ
 こよなかるべし。中の品になむ、人
 の心々おのがじしの立てたる趣
 も見えて、分かるべき事かたぐ
 多かるべき。下のさざみといふ際
 になれば、殊に耳立たずかし」と
 て、いと隈なげなる氣色なるもゆ
 かしくて、「その品々やいかに。い
 づれを三つの品に置きてか分くべ
 き。もとの品高く生まれながら、
 身は沈み、位短くて人げ無き、又
 直人の上達部などまで成りのぼりたる、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、その差別をば
 いかゞ別くべき」と問ひ給ふ程に、左馬頭・藤式部丞、御物忌に籠らむとて參れり。世の好色者に

えるものです。其處へ行くと、中流は違つて、此の階級の人には、各自個性々々で持つてゐる趣味なり心がけなりの特色が出てゐて、いろ／＼複雑な差別が分明する筈です。下層階級とやらになりますと、これは縁遠い方で格別耳も働きませんがね」と、斯の道にかけては隅から隅まですつかり心得盡くしてるといつた語りつ振りに、愈々興味を湧かして、馬その階級つて如何いふんです。何を標準に三通りに分けようつて言ふんです。例へば、もと／＼高貴の身分に生まれながら、現在は零落して官位も低く、人らしくもない生活をしてゐると、又、平の人間で時に遇うて運よくめき／＼と上達部などまで成り上つた者が、得意満面、家邸を堂々と飾り立てて、大公家氣取りで力み返るなぞいふのなどは、どちらを如何區別しようと言ふのです」と尋ねられる折柄、左馬頭と藤式部丞が連れ立つて御物忌の籠りに上つて來た。これが又當世斯の道の玄人で、辯は達者なり、舌巧舌せる方だから、中將は待つてましたとばかり、早速問題の階級辨を出して意見を闘はせ始める。調子に乗つて随分突込んだ處まで勝手放題な議論もなか／＼出た。

て、物よく言ひ通れるを、中將待ちとりて、この品々を辨へ定め争ふ。いと聞き悪き事多かり。

語義

【其所】ソコ。其許(ソコモト)、貴所。【よろしき】相應な、かなりな。【おほどく】大やうでこせつかぬ。おつとりしてゐる。四段活用の動詞で(下二段にも活用する)、副詞になると、おほどかである。【見る人】媒の人をさす。【まれぶ】眞似をする。そのま、語る。【空に】想像で。【くたす】觸す。杓す。「言ひくたす」思ひくたすなどと用ゐられる。「眩す」意で「下す」ではない。【恥づかしげ】中將が恥づかしさうにしてゐるのではない。此方がれる位だといふ意味。中將の色男然たる様子が源氏から見て恥づかしさを覺えさせられる程だといふ意である。餘り其の道の通な所を見せた中將の話し振の鮮かさに、流石に源氏も聊か度肝を抜かれて稍恐入つた形といふわけである。桐壺巻にも幼い源氏の様子を「今より艶かしう恥づかしげにおはすれば」(一三六頁参照)と敘し、少女巻には頭中の母大宮(桐壺帝皇妹)から觀て、娘の弘徽殿女御(昔の桐壺帝の女御即ち朱雀院の御母后とは別人で、冷泉院の女御)であり、又、常夏巻にも今度は其の頭中から觀て、娘の弘徽殿女御(昔の桐壺帝の女御即ち朱雀院の御母后とは別人で、冷泉院の女御)を「子ながら恥づかしげにおはする御様」とある。兎に角、「對する此方が氣恥づかしくなるやうな相手の様子」といふ意味である。【自然】シネン。【中の品】ナカノシナ。中流、中層、中産階級。【三つの品】上の品、中の品、下の品であるが、原は佛語の上品(シヤウホン)・中品(チュウホン)・下品(ゲホン)から出てゐる。即ち極樂へ往つて九品(クホン)の蓮臺に生まれるに、現世で積んだ功德に應じて最上級の上品上生(シヤウウホンシヤウシヤウ)から、上品中生(チュウウシヤウ)・上品下生(ゲウシヤウ)と上品に三品、次に中品に又上生・中生・下生の三品、其の下に下品に同じく三品といふやうに九等の段階即ち九品があり、それに隨つてそれ／＼の臺座に迎へ取られて往生するといふ教になつてゐる。それを現世の人間社會の階級に推し當てたので、馬頭の詞中の「上が上は打措き」又、地の文の「この御爲には上が上を遣り出でて」とあるは上品上生、又後段の藤式部丞の詞「下が下の中には」(四〇四頁参照)とあるは下品下生に應ずる語のつもりである。【直人】ナホヒト。ただ人。貴族でない普通の人の。【左馬頭】ヒダリノウマノカミ。即ちサマノカミ。左馬寮の長官。【藤式部丞】トウノシキブノシヤウ(又、ソウ)。藤は藤原。式部丞は式部省の判官。大丞と少丞とある。大丞は正六位下相當、少丞は從六位上相當の官であるが、丞で五位に敘せられると式部大夫(メイフ)といつた。なほ式部省の長官は式部卿で、親王四品以上の御

方がならぬ、次官は式部大輔(ダイフ)、式部少輔(セウイフ、又、セウ)で、大少丞は其の下の官である。だから式部大輔と式部大夫とを混同してはならぬ。大夫(又、太夫)は五位の稱で無官大夫教盛の大夫と同じである。職(シキ)の長官の稱たる大夫(ダイフ)即ち皇太后宮大夫・皇后宮大夫・中宮大夫・東宮大夫・左京大夫・大膳大夫などの大夫とも混同せられてはならぬ。「物よく言ひ通れる」達辯。明快に説きなく論辨する。後段には「隈なき物言ひも」ともある。「世のすき者にて」といふのは漢然兩人を承けてもぬるが、やはり中將の目あても、作者の注文も、馬頭を主として指してある事は明瞭である。此の「物よく言ひ通れる」並びに「隈なき物言ひも」とある句でも、亦以下の品定の全文でもわかる。

【釋評】 外では朝から降り続いてゐる雨がまだ止まぬ殿上の宵に、當代きつての好色者の青年公子が二人つきり、たわいも無い戯談を言ひ合つてゐるのんびりした情景が眼に泛ぶ。腐子の中から引張り出した数々の戀文を、好奇心を赫やかしながら中將がひろげ、手跡の主を一々呑み込み顔で名指しては悦に入る邊、下宿屋の二階で親しい同士が女から来た手紙の束を前にしてからかひ合ふ場面をつくりで、ちと不良學生じみるが、品定は先づ此のラヴレターの品定から始まつたといふ形である。

夏の雨のどかに降りてつれづれなる頃、中將(頭中)さるべき集ども數多持たせて参り給へり。殿(源氏)にも文殿(書庫)開けさせ給ひて、まだ開かね御厨子どもの、珍らしき古集の故ながらぬ(相當面白物)少し選り出でさせ給ひて、其の道の人々、わざとはあられど數多召したり。……

とある賢木卷の韻塞ぎの遊び、及び六條院に營兵部卿宮が冊子を持参してつれづれの源氏を訪れ、源氏を始め人々の手跡を評し書道を論ぜられる梅枝卷の一節、

書き給へる冊子ども、隠し給へべきならぬば、取う出給ひて、互に御覽す。

とある條などは、帚木卷の此の一節と稍重複の感無きにしても非ずで、特に前者は主要人物も同じく源氏と頭中である。そして三つの場面ではやはり此處の品定の條が最もよく寫されてゐる。

話がいつのまにか真面目になつて来て、頭中の完全女性物色難の歎聲が吐き出される。必ずしも藝妓やカフェーの女と限らずとも、外交辭令の巧いのや、なか／＼話せるわいと座席的に思はせるやうな女は、今でも世間にはあり餘る程ある。女子の教育程度が高まり、一般社會文化が進んで來た現在の方が其の率はぐつと大きいであらう。昔ならば、しかく教養せられてゐる宮廷女流に然ういふのが多い譯合で、つまり「ちよつとした」と思ふ女はかなりにあるが「これは」と折紙の附けられる女となると雨夜の星、相手を煙に巻いたり、すつかり一時まゐらせてしまふやうな、兎にも角にも一かどの魅力を具へてゐるらしく見える女文珠や翼衣の天使も、一皮剥けば正體は貧弱な田舎廻りの手品遣ひの大夫、たつた一つ虎の子の變相術の種を何處へでも持ち廻つてゐたとは笑止の限り、改めて擴大鏡を掛けて見直せば、可愛い顰が忽ち痘痕と早變り、周章で眉に唾をつけてみる御客様方の間抜け面は餘り頼もしいものではない。マルクス仕立てのモダン女學生が居たとて、赤い氣焔の文學藝者が評判だとして、將た又、「ピツテ・ゲーベン・ジー・ミア・アイネチガレット」と黄色い聲を張上げる女給が現れたとて、

そも眞にその方を取り出でむ選びに必ず漏るまじきは、いと難しや。

正に眞を穿つた評語で間然する所は無い。而も其の手合ひに限つて憫むべき自薦大天狗、動もすれば、へし折られる事に氣がつかずに頻りと出しやばつては長くも無い鼻先端を臆面も無く振り廻すのが一般である。「わが心得たる事はかりを、おのがじし心をやりて人をば貶しめ」は痛快な鋭い一抉り、此處の頭中なか／＼辛辣に急所を刺す、そしてそれはやはり紛れもない紫式部其人である。式部日記(消息文と言はれる部分)の顰濟を品臨した條を覽れば想ひ半ばに過ぎ

よう。

やもせば腰離れぬばかり折れかゝりたる歌を詠み出で、えも言はぬよしばみごととしても、我れかしこげに思ひたる人、憎くもいとほしくも覺え侍るわざなり。

などと全く同じ口氣である。日記には又、

すべて人をもどく(非難スル)方は易く、我が心を用ゐむ事は難かべい(べき)わざを、さは思はで、先づ我れさかしの人になきになし世を誘ふ程に、心の際のみこそ見え顯はるめれ。

とも言つてゐる。特に帚木卷の右の論難侮蔑の主標的として、所謂

したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、眞字書き散らして侍るほど、よく見れば、まだいと堪へぬ事多かり。斯く人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみ侍れば……

の清少納言などが暗に——少くとも其の随一人として——目ざされてゐるであらうことは想像に難くない。

才(學問)ある人の前にて、才なき人の物覺え顔に人の名など言ひたる。殊によしとも覺えぬ我が職を人に語り聞かせて、人の譽めし事など言ふも傍痛し。……また吾も弾き整へぬ琴を、心一つをやりて、然様の方知りつる人の前にて弾く。

を「かたはらいなき(笑止ナ)もの」に數へ、

物語などするに、さし出でて我れ獨り才まぐる(オラ振りマハス)者。すべて、さし出では、童も大人もいとにくし。昔物語などするに、我れ知りたりけるは、ふと出でて言ひ朽しなどする、いとにくし。

と「にくきもの」の段で難詰した枕草子の才媛が、同輩の紫女から觀れば、事毎に又傍痛く憎らしく映じて槍玉に揚げらるゝのが如何にも面白い。否、當の清女の前言は、一面又意識せず自己批評をしてのけてゐるのだとも言へる以上紫女に嗤笑せられても憤懣の持つて行き場はあるまい。燈臺の下は暗い。清少は確に善人である。

「親など立ち添ひもてあがめて……」の一節も、狂ひの無い實相の把握である。「箱入娘」といふ事、それだけで好奇心がそゝられ、何となく有り難さうな感じが興へられるに十分、それが上流ならば、やれ乳母よ傳よと大騒ぎの陰に、「隠る事も多く」で、「自然にその氣はひこよなく」遠目には見えるが常、押載いた桐の箱の中の寶物に飛んだ蟲などが附いてでもゐた日には、それこそほんたうに有り難過ぎた仕合せ、「眞青になつて浦島くやし」つても追つかぬ。外の風にもなりたけ當てぬやう、深窓に帳を垂れ籠め、學校通ひも御抱への自動車で御供付きの姫御前は言ふまでもなく、其處まで行かぬ下町の今様小町でも、まだ山の物とも海の物ともつかぬ鬼も十八といふ頃は、誰でも何かしら一つ位の技藝には打ち込みたるもの、勿論後々それで身を立ようといふ心算からではなく、唯若い時の凝り氣から人の見眞似に始めた御稽古の面白さに氣がはいつて、素人藝には垢抜けのしたのが、ちよいとあるものである。やれ何處そこの令嬢は個展を開いたの、獨唱會をやるさうなの、誰それの娘は常盤津の名取だの、藤間流は師匠の代稽古をやるつてよなど、小うるさい噂の主達も、一度新家庭にをさまると、いつのまにか半ダースほどの小さな悪戯連のよきマ、になりすまし、處女時代の天才藝は雲霧の如く消散して跡かたも無いのが先づ定例である。媒人の口上手は通り相場であるが、一寸でも引懸りのあるやうな吹聴の種があれば、無論得たりと大切な資格の一に數へ立てるに、何の抜目があらう。「後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をば繕ひてまねび出すに……」媒酌、口入屋の正體を分析暴露して餘蘊無しである。斯くて先方は黄金を握るか糞土を掴むか、渡るも危い木曾の棧、戀の懸橋は何の道冒險を免れられぬ。雨はまだ小止みなく降つてゐる。品定の端緒は開かれた。折もよし、新會員が二人來り加はる。而も斯の道にかけては人に譲らぬ大先達、話の花は益、咲かうとする。五月雨に取り圍まれた此の宿直所の内だけは、値千金の春の宵らら

「成りのほれども、もとより然るべき筋ならぬは、世の人の思へる事も、さはいへどなほ異なり。又もとはやんごとなき筋なれど、世に經るたつき少なく、時世移るひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、惡びたる事ども出で來るわざなめれば、とり／＼にことわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の國の事にか、づらひ營みて、品定まりたる中にも、又ささみささみありて、中の品のけしうはあらぬ、擇り出でつべき頃ほひなり。なま／＼の上達部よりも、非參議の三四位どもの世の覚え口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬが、安らかに身を

【口譯】馬頭は咳一咳「先づ成上り者の方ですが、如何に俄大盡と威張り散らしましても、元來の筋目が正しく無うては、世間の思はくも、何と申しても其處はやつぱり違ひますからな。又、先祖は歴とした家系ながら、生計向が兎角不如意、時世時節で人氣もがた落ち、其の辨氣位ばかり減法高いつもりでも何かにつけて不足がち、つひ外聞の悪い事などまで出て來ようといふものですから、兩方それ／＼條件附中流階級といふ事に判定致すべきで。受領と申して、地方の政務に携はり勤め、隨つて其の階級・地位もきまつてしまふといふわけの連中にも、實は又その中にピンからキリまで幾通りもの段階がありましてな、所謂中流處の相應に載ける女を拾ひ出すに、まあ丁度そこいらが恰好の當今の御時勢さうに御座ります。なかに、何も公卿でなくつちやといふものでもありませんよ。なまなかの上達部などよりは、非參議の三四位連で、世間に人望もあり、もとの家筋も卑しくない人達が、生活には困らず、樂々と身をこなしてゐるなんぞ、見た目もさつぱりして氣持のよいもので御座いますよ。さういふ家庭は、不自由といふ事など無論ありますまいから、特に節約するでなし、思ふ存分眩しい程に磨き上げた娘などが、ちよいと斯う缺點の無い美しさに成長するのも随分あらうといふわけで、適、宮中に御奉仕に上つて、偶然思ひも

もてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事などはた無かめるまゝに、省かす、眩きまでもてかしづける女などの、貶しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ、取出づる例ども多かりかし」など言へば、「すべて、賑ははしきによるべきななり」とて、笑ひ給ふを、他人の言はむ様に、心得ず仰せらるゝ」とて中将憎む。

よらぬ幸運の主になりすます例は、實はこんな仲間に多いんで御座いましたななどと辯じ立てると、萬事金づく、一切合切、景氣がいゝに限るらしいですな」と源氏が笑ふのを、餘人なら知らぬこと、君のおつしやる事とも覺えませんが、中将が憎らしいと言つた顔でちらと睨む。

語義

【とり／＼にことわりて】それ／＼に判定して。【受領】ズリヤウ、又、ズラウ。ジュリヤウ。國司(コクシ)、又、クニノツカサ)の長官。守(カミ)。即ち地方官で今の府縣知事のやうなもの、其の任命の式が縣召(アガタメシ)で、春季に行はれ、之に對して秋季に行はれる京官のそれが司召(ツカサメシ)である。國府(コフ)で政務を執るので、任期は近國四年、遠國(太宰府・陸奥・出羽)五年、重任もすれば、場合により延任(年限を一年なり二年なり延べられるをいふ)といふ事もあつた。又、遙授(エウシユ)或は遷任(エウニン)といつて、公卿などが國守を兼ねながら自身は京に在つて赴任せぬ場合もある。さういふ場合、若しくは守が缺員の時、次官(ウチケ)を受領と呼ぶ事もあつた。「受領」とは勅命を受けて國事を管領する意とも、或は前任の國守から事務を引繼いでウケオサル義とも言はれてゐる。「受領す」とも活用する。【人の國】京以外の地方。【品定まりたる】地方官であるから中の品と位置が定まつて動かぬわけである。【けしうはあらぬ】悪くはない。相當な。馬鹿に出來ぬ。【なま／＼の】なまなかの。なまじつかの。花鳥餘情に「始めて公卿などに成りたる家をいふなり」と註し、又、だみ詞に「もとは筋目なき人の、公卿になりたるをいふ」と註したのを、小櫛が共に僻事として採らなかつたのは正しい。名稱だけは立派な公卿に違ひなくても、實はあれども無きが如く、生きてるか死んでるかかわからぬやうな連中よりはの意である。【非參議】ヒサンギ、參議は四位以上の才幹ある人が任するのであるが、四位で參議たり

得る資格のある人、並びに曾て参議たりし人、及び三位以上で未だ参議に任ぜぬ人などを非参議といつた。なほ参議以上の官で其の任を辭した即ち前大臣等をも非参議といつたやうである。此處は上達部即ち現官の公卿に對して聊か地位の低い職に在る人といふつもりで言つてある。「三四位」青表紙本には「三」の字が無い。(河内本にはある)。四位と限らるべきでなく、「三」とある方が適切であると小楠は論じてゐる。尤も前項に述べたやうに、非参議には四位も三位も、亦一位二位もあるわけである。廣道は本文は小楠に隨ひ、帯木卷餘釋には寄居歌談の近藤芳樹の意見を載せて、三位の非参議は公卿補任で見ると、前官が散三位(位のみで職の無い三位)かであるが、四位の非参議は、大辨・藏人頭・衛府督などの顯職に居て近く参議に進むべく豫想される立身の見込著しい人々であるから、此處は青表紙の方が妥當で、「三」の字の無きを正しとすべきであるといふ説に賛意を表してゐる。「かはちか」小ざつぱり。類例「尼姿いとかはらかにて貴なるさまして(若菜上卷)」、「ちうたげなるけはひ物清くかはらかに(紫式部日記)。「思ひかけぬ幸ひ」帝の寵幸を得て皇子を生み奉るなどないふ。「賑ははしき」富裕の意。「ななり」なんなり。「なるなり」の約。

【釋評】 三つの品の分類を現實の個々の場合に當てて試みるとなると、いろいろ疑問が生ずる。源氏の質問など、先づ以て提起されて然るべき尤もな論題の一であらう。頭君がそれに答へぬうちに、上には上の斯道の豊富な經驗家馬頭達が登場したので、答辯を「好色者の物言ひ」に譲つて、中將は聴き役に廻る。大鏡の世繼翁が左の馬頭なら、繁樹老が藤式部、そして「よくあどうつめりし」といふ青侍の役處が、此の熱心に耳を傾けては絶えず「言ひはやす」若き貴人に相當する。佛教の講説や論議の形も摸されてゐると同時に——それは又此の品定の場面の構想の臨本でもあらうが——彼の歴史物語を對話式に展げて行く主役達は、此の雨夜の物語の人々の後繼者たることも事實に違ひない。

成り上り者の新男爵が、わかりもしない骨董品を、道具屋にしてやられたも御存じなしに高値に買ひ上げて客來毎の御自慢、田島芬々たる腦溢血型を勿體ぶらせながら、俄に召使共に「御前様」の敬稱を強制する喜劇、世が世であらば御妾も得拜めぬ三位様も、時勢と御手許の前には、背に腹は替へられず、卑賤の又者と侮つてゐた奴輩に手をついて一粒種の姫君を何百萬圓で身賣もせねばならぬ悲劇、何時の世、何處の國にも珍らしからぬ事と見える。「我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる」と、「心は心として事足らず、悪びたる事ども出で来る」と、何れも實相を道破して餘す所は無い。「世の人の思へる事も、さはいへどなほ異なり」も實情、「もとの品高く生まれ」た血統はこゝ亦争はれぬ、兩者を共に中の品に置く馬頭の裁斷も、先づ公平な所であらう。

受領が手頭とは馬頭らしい觀察、頭中將が述べた「中の品になむ人の心々おのがじしの立てたる趣も見えて……」の考を一層具體的に説明する爲に、作者は受領と、非参議の三四位とを擧げたのである。此の品定の翌夜、方違に行つた源氏が

かの中の品に取り出でて(馬頭ガ)言ひし、此の列ならむかし。

と眺め入つた中川の宿の主人、紀伊守が繼母——伊豫介の後妻——空蟬は、即ち光君に未見の世界を覗く好奇心をそゝらせるに、此の馬頭の「けしうはあらぬ」と説き立てた藥が靨面に利き過ぎた爲に、實驗室の解剖臺上に載せられた最初の第一人であつたのである。

京にてこそ所得ぬ(得意テナカツタ)やうなりけれ、そこら邊に嚴しう占めて造れる様、さはいへど(何ト言ツタツテ)、國の司にてし置きける(地方官トシテ、シヨタマ溜メ込シタ)事なれば、殘りの餘豊に經べき(國守ヲ辭メテモ餘生ガ樂ニ送レルヤウナ)心がまへも、二なく(此ノ上ナク十分)したりけり。後の世の勤も(坊サントシテ、アノ世ノ御勤ノ方モ)いとよくして、なか／＼法

備まざりしたる(却ツテ俗ノ時ヨリアツト見上タタ)人になむ侍りける。(若菜卷)
と今の播磨守の子良清が源氏に語つた前の播磨守、所謂明石入道こそは、正に馬頭が推薦した中の品級で而も受領たる條件に恰當する立派な典型である。「けしうはあらず、容貌心ばせなど侍るなり」といふ其の一人女こそ、父入道が素志

が逃げれば海に飛び込めと大した意氣込で住吉の神に幸運を祈つた效空しからず、春の御前紫上に次いで光君の冬の御方とをさまるのみか、帝の中宮の御生母として無上の光榮を擔うた明石上なのであつた。

「さは言へど、國の司にてし置きける事なれば」の一句に時代相が鮮明に映つてゐる。現世來世二道かけての福運を慾張る蟲のよさ、「世の僻者」ながら此の入道なか／＼經濟學の心得も淺からず、頭腦の抜目なくはたらく男であるらしく、牛後とならむよりは寧ろ雞口となるに如かずと、容易に出世の出來さうもない京生活に見切りをつけて、さつさと都落、明石の浦は歌どころであるばかりでなく、入道の爲には「秋の田の實を刈り納め、残りの齡積むべき稻の倉町」(明石巻)の方も、態々「近衛の中將を捨てて、申し賜はれりける司」(若紫卷)がものは十分にあるらしい。そして内閣が變つて地方官大移動のこぼれ幸ひに、久しい間の浪人生活からやつと新任知事に浮び上つた時の「したり顔」は、大正・昭和の新世だけではないやうである。

あり／＼て(長イ間獵官運動ニ痺ヲキラシタ果テニ、ヤツト)受領になりたる人の氣色こそ嬉しげなれ。僅にある從者の無禮に侮づるも、妬しと思ひ聞えながら(タントモ居ナイ家臣共ニマテ、働キノナイ貧乏主人ト馬鹿ニサレキツテキルノガ、イマ／＼シクテマアラヌナガラモ)、如何せむと念じ過しつるに、(ドウニモナラヌト我慢シ通シテ來タノダガ、一旦、斯ウシテアリツクト)我にも勝る者どもの、長まり、唯、仰せ承らむと追従するさまは、ありし人(昨日マテノ同シ人)とやは見えたる。(俄ニ)女房うち使ひ、見えざりし調度・裝束の湧き出づる。(枕草子たるもの)

といふ松旭齋天勝の看板を横取りしたやうな鮮かな藝當、「さて又申し金の欲しさよ」、そして「も一つおまけに名譽の欲しさよ」の世の中、長官や先輩を突き落してでも進出しようといふ獵官熱のきつても無理ならぬ事か、行政整理でも緊縮内閣でも、政務官は簡單には廢止されまい。明石入道は思ふ所あつて我から近衛の次將を打捨てて國司を望んだが、一般には、逆に、

受領したる人の中將になりたるこそ、もと公達の成りあがりたるよりも氣高うしたり顔に、いみじう思ひためれ。(枕草子同)

といふが普通で、成り上る人の心理は皆共通と見える。それに、位といふものは妙なもので、それが上ると自然箔が付き、ひれが備はる。

同じ人ながら、大夫の君や侍從の君など聞ゆる折は、いと侮り易きものを、中納言・大納言・大臣などになりぬるは、無下にせむ方なくやむことなく覺え給ふ(ドウニモ仕様ノナイホド尊貴ニ感セラレル)事のこよなきよ。(枕草子同)

と清少を頻りに感心させてゐる通りで、其處から類推しての歸結は、

程々につけては、受領もさこそはあめれ。數多國に行きて、大貳(太宰大貳)や四位などになりて、上達部になりぬれば重々し。(同)

といふのである。併しながら、いくら羨ましいとて高は知れてゐる。又誂へ通りの立身が何時も出來るとは限らぬ。それは清少も皮肉りがたら言ひ添へずには居なかつた。否、大臣・納言にしながら、必ずしも垂涎に値する羨望の極致であるか如何かは、俄に斷すべからずである。公卿といへば、威程體裁はよい、名前は如何にも御大層で、現官の羽振よさが、さも威張れたもののやうに思へるが、中には人物・力量・聲望の相應せぬ、その上、内證は見かけ倒しのびいながらも無きにも非ず、結局、名を取るよりは得を取れで、名目ばかり殿めしい木偶關白・看板攝政・素強大臣・伴食參議の、而も御寶藏から黄金白金が喰りを立てて溢れ出るでもないなぞいふのよりは、現官でなくとも、家系・人望・財力と三拍子揃つた非參議の三四位の方が、落ちついて子女の教育にも身がはいり、資本も注ぎ込め、道理、斯うして磨きをかけられた齋き娘が、尙侍とか更衣とか召されて忽ちどえらい幸運を掴む實例も珍らしい事ではなかつたのであらう。

大悲者(觀世音)には、仙事も申さじ。吾が姫君(玉鬘)、大貳の北の方ならずば、當國の受領(大和守)の北の方になし奉らむ。(玉鬘卷)

と泊瀬の御堂に一心になつて拜み入る玉鬘の侍女三條の祈は、田舎びた願と右近夕顔上の侍女に笑はれても當人いつかな肯なかつた程、受領の北方も羨ましいものの譬に世間はしてゐたらしいが、勿論これに比べれば雲泥の隔たり、清女もやはり枕草子の前と同じ段に、

受領の北の方にて下るこそ、よろしき人の幸ひには思ひてめめれ、直人の上達部の女にて、后になり給ふそめでたけれ。と言つてゐる。

○擇り出でつべき頃ほひなり。(本文)

砥江入楚(第二)

中の品にえり出づるによき比と云ふなり。その比、受領の人の娘に可然が多かりしにや。

と註してある。大體此の解でよいのであらうが、玉の小櫛は「頃ほひ」の語に「現時」といふ意味を判然と有たせて解した。

當時のさまをいふ也。又「ほど」といふ意にて、受領の分際をさしていへる如くにも聞ゆれど、上よりの語のはこびを思ふに、なほ然にはあらし。(五の巻)

評釋は更に之を敷衍して、

國の守・介は外官なる故に、内官よりはこまなく賤めたること也。然れども他國へ出て自ら政を執行ふ故に、おのづから勢ひも強く家も富み榮えけるによりて、後にはいと貴くなれり。此の作者の時も、大方は昔のまゝにはあらしさま、卷の中所々に見えたり。さるからに「ころほひなり」とは書けるなり。心をつくべし。世の勢ひを見るに足る事多かるべし。(評釋)

と文化史的觀點にまで足を踏み入れてゐる。(内官(ナイクワン)は京官のこと、外官(ゲクワン)は地方官である)。守部も

此に「ころほひ」といへる詞、諸注解得ず、皆違へり。こは氏素性を専らとして、身貧富には拘らざりし昔とはたがひ、やう／＼世くだち人情卑しきに推移り、近年は位よりも富を欲するならひとなりければ、と云ふ意を下に含めて、中の品ながら高貴の御爲にもえり出づべき、今此ころの世の風儀ぞ、といへる詞也。されば此詞どもの次に、此ころほひと云ふをうけて、源氏君「すべて賑ははしきによるべきなり」と笑ひ給ふ」とは書ける也。賑ははしき、即ち富める事なり。(湖月鈔別記卷二)

と略、同じ見解で、なほ一段深く突込んである。

宣長は上からのほこびから観て「當時のさま」と解すべきだと言つてゐるが、上からのほこびといふ側からすれば、寧ろ單に「丁度頃合ひ」といふ程の意味に讀まれるが自然のやうにも思はれる。

中の品と定まつてしまつてはゐるが、その受領にも各種各様の段階があつて、中通りのかなりな女を擇り出すに、好きなのを擇り取りといった工合に、丁度恰好の階級だ。

といふ意味に解せられなくはない。が、

殿上人なども、物の上手多かる頃ほひにて……(初音卷)
怪しく有職ども生ひ出づる頃ほひにこそあれ。(同)
御方々いづれとなく挑みかはし給ひて、内裏わたり心にくくをかしき頃ほひなり。(眞木柱卷)

とある類例は、明らかに「時節」「時世」「當今」の意である。又、

公私のどやかなる頃ほひに、薫物合はせ給ふ。(梅枝卷)
静かなる頃ほひなれば、遊びせむなどにや侍らむ。(藤裏葉卷)

も、いづれも「閑散な時分」の意である。

春の花いづれとなく、皆開け出づる色毎に目驚かぬはなきを、心短く打捨てて散りぬるが怨めしう覺ゆる頃ほひ、この花(藤)の綱は、よきき

り立ちおくれ、夏に咲き懸る程なむ怪しく心にくく哀れに覺え侍る。(藤裏葉卷)
朱雀院の帝、ありし行幸の後、その頃ほひより例ならず惱み渡らせ給ふ。(若菜上卷)

などは無論、「時」「季節」「前後」などの意に用ゐられてゐるが、これは此處の場合とは少し違ふ。兎に角「頃ほひ」が「當節」の意に用ゐられてゐたことは確である。當時の時勢が宣長・廣道・守部等の言のやうになつてゐたことも否定出來ないし、その心持が馬頭の詞中に含まれてゐることも十分認められる上、明石入道父子などが豫想せられ、或は少くともこれに應ずるものであることは疑を容れない。なほ「頃ほひ」が時節の意だとしても、「擇り出で、べき」に自然「恰好」「頃合ひ」の意味は含まれても來る。

○他人の言はむやうに心得ず……(本文)

古人は意外に此の一句の解に頭腦を悩ましてゐるやうである。

こと人とは色好みならぬ人の言はんやうにと、頭中將の源氏を云ふ也。賑ははしきによるにはあられども、女のさのみ落ちぶれるはよからぬといへるなり。(河海抄卷第二)

といふ妙な釋を、稱名院なども承けて、

源氏は好色の身にして斯く宜ふは似合はざるなり。(細流抄卷一)

と言ひ、岷江入楚は稍當つてゐるが

是は賑ははしきを言ひ立つるにはあられども、先づ色々の人の上を申して見るに、無分別なる人の言はむやうに、心得ず仰せらるると、中將の言ふ詞なり。(第二)

と猶一息言ひ足りない。流石に眞淵(新釋)は

源氏は何の意もなく右の論どもにつきて、賑ははしく富める方によるべきなりけりと戲れて宜ふを……。

と可なり素直に解しかけてゐるかと思ふと、馬頭の引く例證がおのづから母桐壺更衣や頭中將の家の事などに當る節があるのを源氏が心中に思ひ當つて口を挿んだので、中將が憤らしく「心得ず仰せらるゝ」と反駁し、馬頭も源氏の詞を取直して、今度は貴族の大して感心出來ぬ由を述べるのだと、惜しい所で横道に深入りしてしまつた。「何の意もなく」も一應は正しいが、又少し不十分である。餘滴になると、末摘花卷に「こと人の言はむやうに咎なあらはされ」と形だけの類例があるのを採つて、

こゝは中の品の女の上などは、源の知らせ給ふべきにあらば、口入れ給ふべきにあらずと思ひて然言へるにや。(卷二)

などと、飛んでもない方向へ外れてゐる。小楠は

今、馬頭の言へるは更に賑ははしきをよしといふにはあらざるものを、其の意を得ずして仰せらると、中將の源氏君に言ふ也。

源氏君は、よく心を得給ふべき事なるに、心も得ぬこと人の言はんやうにと也。色好みならぬ人の言はんやうといふ註はひがごと也。(五の卷)

と大體正しいが岷江入楚と同様今一息の感がある。廣道は此の師説をも採らず、新釋・餘滴をも否認し、

この處少し紛らはし。若しくは、源氏君は賑ははしく富み榮え給ひながら、さもあらぬこと人の言はむやうといふ意にもあらんか。猶考ふべし。さて「憎む」といふは、何れにしても唯假初に憎む眞似する意なり。實に憎むにはあらず。(評釋)

と、解釋に苦しんで却つてあらぬ牽強に陥らうとさへし、餘釋にも同じ解を詳しく再びしてゐる。但し、右の「憎む」の解は誤りでない。

要するに此の條を先覺達は餘り眞面目過ぎて解釋してゐるのが缺點である。眞淵と廣道とだけは、部分的にユーモラスな筆を認めてはゐるがそれが徹底してゐず、他の人々は皆その氣持を注視してもみない。これは馬頭は必ずしも十分

意識して資本主義、ブル生活を謳歌し主唱しようとしてゐるわけではないのであるが、其の論旨の歸結が、乃至引例のどれもが、どうやら動もすればさうした形にばかりなつて來るので、馬頭の本旨は——今論じてゐる意味、目的は——さうでないのを十分承知してゐて態と、チラと頭腦のよい所を見せつゝ、源氏が戲談半分に彌次つたので——熱心に説き立てる眞面目な馬頭の顔を見い／＼ニコ／＼しながら面白半分一寸ひやかしてみたのである——それを又、頭中將が眞面目くさつて、「下衆共かなんぞの言ひさうな事を。光君ともあらう方の御詞とも覺えぬ」と彌次りかへしたまでである。眞淵が「何の意もなく」といふのが、「深い意味があつてではなく」の意味ならば賛成出來るが、文字通りに、「唯何となしに」の意ならば首肯しかねる。

もとの品、時世のおぼえ打合ひ、やんごとなき邊の、内々のもてなし氣はひ後れたらむは、更にも言はず、何をして斯く生ひ出でけむと、言ふ甲斐なく覺ゆべし。打合ひて勝れたらむもことわり、これこそは然るべき程と覺えて、珍らかなる事と、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上は

〔口譯〕 馬頭ところで、氏素性も世間の人氣も、雙方揃つて申し分なしといふ高貴の家庭で、萬一、娘達の身の舉動、躰に行き届かぬところのあつてなのは、論にも及ばず、如何してまあ皮肉にあんな娘御が生ひ立つたことやらと、落膽してしまひませう。かと申して、家柄相應に立派に育つたところで、それこそ當然過ぎる位當然な事として、誰も珍らしいと別段驚きもしますまい。いや、やつがれ共の及びもつかぬ事ですから、上の上といふ部の御話は、まあ御免蒙らせて頂きませう。その代り、上つ方とは事變りまして、私共の世界には、随分珍種も御座います。世間からは全く忘れてしまつたやう、淋しく茫々と荒れ果てた草の屋に、驚くべ

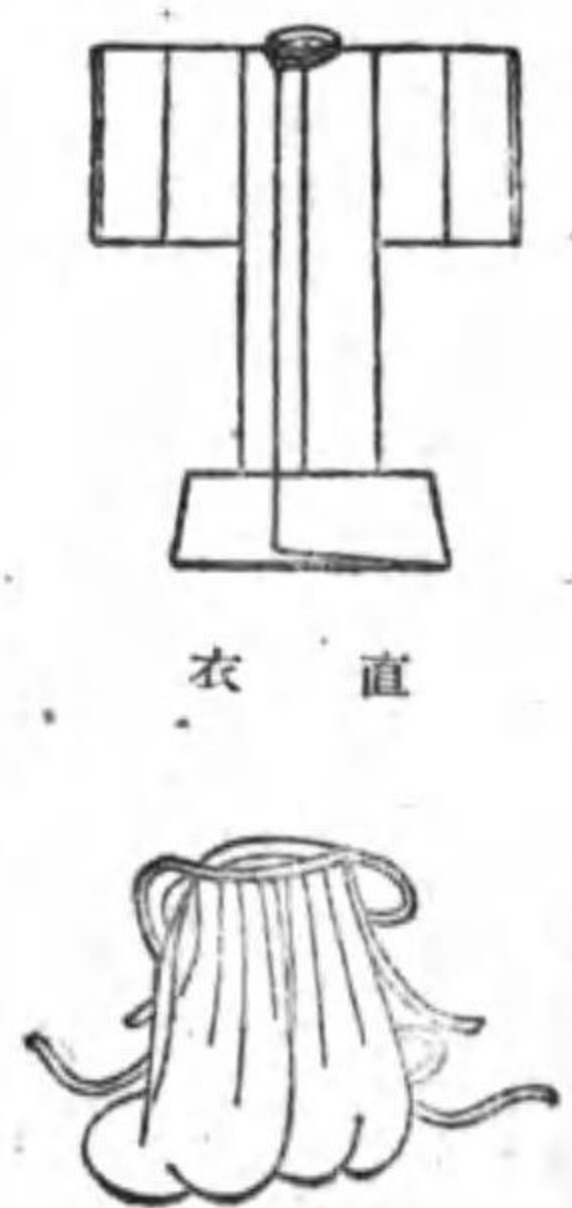
打措き侍りぬ。さて、世にありと人に知られず、寂しくあはれたらむ葎の門に、思ひの外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなく珍らしくは覺えぬ。如何ではた斯かりけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心留まるわざなべき。父の年老い、物むつかしげに肥り過ぎ、兄の顔憎げに、思ひやり異なる事なき聞の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見えたらむ、片かどにても、いかゞ思ひの外にをかしからざらむ。勝れて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨て難き物をば」とて、式部を見やれば、我が妹

は、きき

き哉、可憐妙齡の娘御前が閉ぢ籠つて居るなどは、素敵滅法珍らしく感ぜられるに相違ありません。如何して又このやうな所にこんな女が、と豫期に反しただけに一入餘計に心が惹きつけられるものでしてね。而もこれに背景まで御談へ向に添うてゐて、いやに太つちやうの白髮老爺、人相の感心出來ぬ兄者人、如何考へても一寸見には、何の變哲も無い聞の奥に、御話にならぬ程氣位を高く構へ込んで、ちよいとした藝事の一つ手すさびにやつても、なか／＼輕蔑出來ないといふやうな場合、それが假令一面だけとしても、如何して豫想以上の興味を惹かずにおきませう。完全無缺の最上の理想からは無論選にも入りませぬが、これは又斯うした意味で、萬更捨てたものではありませんからなねえ、君、と言はむばかりに式部の方を見やると、自分の妹に一寸した評判のあるのがゐるのを思ひ寄せてでも言のぢやないかと氣が付いてか、默然してそつぽを向いてゐる。「なあに、あんな事を言つたつて、上の部にだつて理想的な女って滅多にない世の中に、まるでお伽噺みたいな」と、さうした世界には未だ無經驗な源氏の君は半信半疑で聽いて居られる。白い御衣の柔らかなのに、直衣だけをだらりと被つて、紐なども解き放したまゝ、物に倚り添うてゴロリと横になつて居られる御姿が、灯影にくつきりと浮び上つて一際美しく、女にして見

どものよろしき聞えあるを思ひて、まほしい御様子である。此の君の仇配には、上の上を選び出しても猶不足宣ふにやとや心得らむ、物も言はに見受けられる。

す。いでや上の品と思ふにだに難げなる世をと、君は思すべし。白き御衣どものなよ、かなるに、直衣ばかりを、しどけなく著なし給ひて、紐なども打捨てて、添ひ臥し給へる御火影、いとどめでたく、女にて見奉らまほし。この御爲には、上上を選び出でても、猶飽くまじく見え給ふ。



直衣 衣

指 指 指

あばれたる家は即ちあばらや。「思ひやり」推察、想像、豫想。「直衣」ナホシ。ノオシと發音する。貴人の通常服。袍に似て稍短く狭きもの。袴は貫、指貫(サシヌキ)を用ゐる。指貫は一名奴袴(ヌバカマ)ともいひ、裾を縁で括り窄めて着用する。

【釋評】 螢卷の源氏の詞に、

由なからぬ親の(家柄、身分ノ低クナイ親ガ)心とどめで生ふし立てたる人の(教育ニ細心ノ留意ヲシテ成人サセタ娘ガ)、兒めかしきをいつける 徴にて(無邪氣ナ點ダケハ、大切ニチャホヤサレタ事が見エテヨイガ)、後れたる事多かるは、何わざなしてかしづきしぞと、親の仕業さへ思ひやらる、こそいとほしけれ。げに然言へど、その人の氣はひよと見えたるは(何ト言ツテモ、氏素性ガモノハアル、争ハレヌモノダト誰ニモ見エル女ハ)、甲斐あり、面立たしかし(親モ育テ甲斐ガアリ、面目ガ施セルトイフモノ)。詞の限り 眩く譽め置きたるに、し出でたる業、言ひ出でたるの中に、げにと見え聞ゆる事無き、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人譽めさせじ。(ツマラヌ人間達ニドシナニ譽メラレタツテ始マラヌ。シツカリシタ人ニ譽メラレル

ヤウデナクテハ)

とあるのも、此の段と同じ主旨である。樞密顧問官子爵某氏だの、陸軍大將伯爵誰それだの、大學教授法文學博士何先生だのいふ人達の子女が普通以上の人物に生ひ立つても、世間は當然過ぎた事として、子猫が大鼠を捕へた程も驚かぬ代りに、そんな家庭から萬一大それた不良兒でも出ようものなら、社會風教上忽にすべからざる問題とばかり、争つて諸新聞の紙面を賑はし、輿論の波を揚げることに、今に始まつたわけではない。紫女は六條御息所が娘齋宮に附添うての伊勢下りを評して、

世の人は例なき事と、もどきも(非難モ)哀れがりも、さまざまに聞ゆべし。何事も、人にもどき扱はれぬ際は安けなり(世評ニ彼此トノホセラレヌ下タノ身分ハ氣樂ダ)。なか／＼(却ツテ)世に投げ出でぬる(高貴ノ)人の御あたりは、所せき(窮屈ナ)事多くなむ。

(賢木卷)

要するに上流貴族や、社會的に地位の高い人々の家庭は環視の中、注目的、威張れる代りには家族の端くれまで又、動きのとれぬ窮屈さを甘受せねばならず、世間の批判も容赦がないどころか、なか／＼公平に相當にすら観てくれない。兎に角、當然の事は當然の事で、興味の立場からはまことに平凡、餘程變り種でないとは好奇心の刺激にはならない。少々御伽式で、それこそ昔物語には注文にびたりと合ふ題材であるが、馬頭が持ち出した化物屋敷の天人など、實際あれば確に伯了が見つけた三保の松が枝の羽衣ほどの堀出し物には違ひない。なよ竹のかぐや姫も先づ此の部類の方と言つてよ。横になりながら半信半疑で耳を傾けてゐる光君の獵奇癖は、「大殿の姫君」の「心にも著か」ぬと、若き繼母上の膝下へ「ありしやうに近づけぬ苦しさとから、愈、あらぬ餘處へ趨らうとしてゐる矢先に、神祕的な童心をすら満してくれさうな誘惑に迎へられむとしつゝある。だから

假にても、宿れる住居の程を思ふに(一時ノ寓居トシテモ隨分ト粗末過ギルノカラ見レバ)、これこそ彼の人(馬頭)の定め、悔りし下は、きき

の品ならぬ。その中に、思ひの外にかいさ事もあらば、など思はずなりけり。(夕顔巻)
かの下が下と、人の思ひ貶しし住居なれど、その中にも、思ひの外に口惜しからぬを見つけたらばと、珍らしい思はずなりけり。(同)
と、夕顔の花のほの白く咲き纏はる「あやしき垣根」に心惹かれ、

あはれなる人(可愛イ兒「紫上」)を見つるかな。斯かれば此の好色者共は、斯かる歩行をのみして、よく然るまじき(豫想モツカヌヤ
ウナ)人をも見つくるなりけり。(自分ガ)たまさかに立ち出づるだに、斯く思ひの外なる事を見るよと、をかし(興深ク)思す。さ
てもいと美しかりつる兒かな。何人ならむ。かの人(藤壺)の御代りに、明春の慰めにも見ばやと思ふ心深うつきぬ。(若紫巻)

と、北山の漫ろ歩きに偶然若紫の初草を垣間見て、自由に羽を伸して飛び廻れる從臣の惟光等が身の上を羨みもするの
である。又、當の御本尊が所謂「普賢菩薩の乗物」と優劣を競ふやうな女シラノのお化けで、容れ物のお化け屋敷の逢
生の宿に至極うつてつけと来てゐるをも知らず、常陸宮の遣してゆかれた末の齋き娘で、「琴をぞ懐かしき語らひ人」に
してゐるといふ昔物語めいたゆかしさに空想をそゝられ、頭中將に後をつけられるのも氣がつかずに、十六夜の月にあ
くがれ出るのである。それが折角の豫想を見事に裏切つて、幻滅の喜悲劇を展開するところ、天公は常に悪戯好き、作
者は一寸その氣まぐれな命令を眞面目くさつて執行してみたまでである。蜘蛛の巢の中から印を結んで、將軍太郎良門
が妹瀧夜叉や、大友の遣れ形見若菜姫が現れ出ないのが、時代の差もあるけれど流石に紫女の手柄であらう。

かの人々(馬頭等)の言ひし葎の門は、斯様なる所なりけむかし。實に、心苦しうたげならむ人を此處に居て、うしろめたう
戀し(何ダカ氣ニカ、ツテ戀シイ)と思はばや。あるまじき物思ひ(藤壺ニ對スル空恐シイ煩悶)は、それに紛れなむかしと、思ふ
やうなる住處に(住處ハ馬頭ノ言ツタ通りテ、自分ニモ豫想シタヤウ申シ分ナシダガ)合はぬ御有様は取るべき方なし(末摘花ノ赤
鼻姫デハ注文ガシツクリ來ズ、ドウ鼻目ニ見テモ閉口頓首ダ)と思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや(誰ガ辛抱シキレ
ルモノカ)我が斯く見馴れけるは、父親王(常陸宮)のうしろめたしと備(置き給ひけむ魂の毒べなめり)娘ノ上ヲ不安ニ思ワテ自分

ニ結ビツケヨウトナサレテ亡魂ノ御尋キノセキアガナラク)とぞ思ふ、。(末摘花巻)

蓬生卷の荒れ果てやうは愈、言語道斷、狐狸の巢窟と殆ど採ばずであるが、此處の女主人、「世にありと人に知られぬ」住居から「はかなくし出でたる事わざ」の方までは、どうやら「故なからず」の及第點には漕ぎつけ得たやうであるけれども、「限りなく珍らしく」覺え、「怪しく心とまる」工合が、「思ひの外」にも一つ輪をかけて「思ふより遠へる事」だつたのが、是非も無さう。

せめて末摘花君には、高利貸みたいな老爺と、默阿彌好みの兄貴が黒衣を着て操つてゐる様子がないのは、光君にとつて物怪の仕合せであつた。葎の門に住まつてゐなくても、父兄が馬頭の誂へ通りで而も一人娘が錦繪から脱け出たか、内裏雜が口をきくか、いやもつと人間らしい初々しい天真の美しさに耀いてゐるといつた場合は、正に對照の妙、皮肉な自然を示して、一きは可憐さが増すのは當然である。矢口の渡場の舟宿の赤面爺頓兵衛は、愛し娘の戀と命とを犠牲にしても構はぬほどの強慾親父、三位中將維盛様と知らずに、すつきりした彌助の姿に思ひを焦す鮎屋のお里が兄はいがみの權といふ院本作者の筋書を、紫式部は定めし地下で微笑してゐることであらう。少し建前を變へてかゝれば、一つ家の老母茨に娘淺茅あり(これは安達ヶ原傳説や石の枕の口碑が主體であるが)、小堀彌平次が妾おみつ、實は湯島のおかには、湯灌場吉三といふ苦みばしつた情人の他に、同じ狸の齋坊主辨秀といふ悪黨の御兄さんが附いてゐるといつた譯合である。但し、今品定の席上、如何に馬頭の話が上手だとして、さう涎を垂して面白さうに聞き入つてゐるは大變、式部丞が、急にむつと口を緘して「物も言はず」に外つぽをそらすのは尤も千萬、何となれば、「我が妹どものよろしき聞えあるを思ひて」馬頭が言つてゐるとすれば、「ねえ、君」と呼びかけられて、うつかり「さうですとも」とでも口を滑らさうものなら、「顔憎げ」なる「兄」たることの自家證明を皆の前で麗々と御披露に及んだも同然だから

○女にて見奉らまほし。(本文)

この「女にて」を(A)「女になりて」と(B)「女にして」と兩様の解が昔からある。細流などは兩説を掲げて、(A)説に賛してゐる。祇注には

我女になりて見奉らば猶無類なるべき義也。

と明言し、湖月抄の旁註にも之を採用してゐる。之を否認して(B)説を採つてゐるのは源注餘滴の雅望で、

此の説非なり。こゝは源氏君のしどけなくおはして、もとより美しき容し給へるを賞めて、女とも言はまし、女なりとも斯ばかりなるは上の品なるべしと言へる也。(卷二)

と註し、紅葉賀・繪合・賢木等の諸卷の類例を擧げて自説を立證しようとしてゐる。それを又玉の小櫛補遺(上卷)は葵・賢木の用例によつて駁して(A)説を主張し、評釋の廣道は之を支持して、

おのれも始は「女にして」の意と思へりしがど、いとわろかりき。(帯木卷餘釋)

と舊自説を訂正してゐる。併し餘滴以下が「女にて」を常に唯一つの解し方しかないやうに断定して自説を固執するのは、いづれも偏してゐて共に誤である。實は兩説とも全然の誤ではない。だから食ひ違つて來るのは當然で、これだけでは結局水掛論に終つてしまふ他は無し。

今、他の類例をも加へて實例について考察してみると、先づ現今の言ひ方にもある「女にして見まほしい姿」「女にしてみたい優男」といつた釋で十分に解ける場合は、かなりにある。紅葉賀卷に源氏が兵部卿宮(藤壺の兄、紫上の父)と對面する條に、

(宮ハ)いと由あるさまして、色めかしうなよび給へるを、女にて見むはなかしかりぬべく、人知れず(源ガ心ノ中ニ)見奉り給ふにも、かたぐ(紫上ノ縁モアリ旁ト)睦まじう覺え給ひて、細やかに御物語など聞え給ふ。宮も、この御様の(源ノ様子ガ)常より殊

に懐かしう、打解け給へるを、いとめでたしと見奉り給ひて、婚になどは思し寄らで、女にて見ばやと、色めきたる御心には思はず。と、雙方から互に「女にて見ばや」と見惚れ合ふ一節がある。(餘滴には後の方のみを引く)。「色めかしうなよび」及び「婚になどは……」の詞句が、「女にして」の意即ち(B)説で解するが不自然でないことを説明してくれる。又

院(朱雀)の御有様は、女にて見奉らまほしきを、この(秋好女御)御けはひも似げならず、いとよき御間(あはれ)なめるを(似合ノ御配偶ト見エルノニ)、内(冷泉、即チ今上)はまだいと幼稚くおはしますめるに、斯く引違へ聞ゆるを(院テナク今上ノ女御ニ秋好ヲ差上ゲルノヲ)(院ガ)人知れず物しと思すらむと……(繪合卷)

これも餘滴に引いてあるが、(A)説で無理に解けぬことも無さうであるけれども、やはり(B)説の方が一層自然である。次に賢木卷に春(冷泉)の幼時の御容貌を描寫して、

御髪はゆらくと清らにて、まみの懐かしげに匂ひ給へるさま、大人び給ふまゝに、唯かの御顔(かほ)を脱ぎすべ給へり(源氏ノ顔ヲ面形ニテモシテ脱イテクツツケタヤウデアル)。御齒の少し朽ちて、口の内黒みて、笑み給へる薫り美しきは、女にて見奉らまほしう清らなり。

とある。これは餘滴に自説の好例證として特に擧げてゐるものであるが、小櫛補遺には却つて之を反對の舉證にしようとしてゐる。が、右の文は母后の藤壺中宮の春宮に對する觀察として書かれてゐるので、さうすると、「女になつて見奉りたい」などと迂遠で拙劣な表現が試みられる筈はない。中宮は即ち女性なのである。假想などして見る必要はない。どうしても「女にして」の意でなければならぬ。鈴木説は無論負けであり、廣道が、單に冷泉院の幼時の美しさを主にして書いただけだと言つてゐる(餘釋)のも、かなり粗漫な考察で、(A)説の根據としては頗る薄弱である。

そのうへ「女にて」といへる語はおのづから然るてにをばして、「女に爲て」といふ意にはならぬ物をや。(餘釋)

と一概に斷言することが、これでもなほ可能であらうか。

それならば、(A)説は非かといふと、小楠補遣が葵巻から引いてゐる例證は、立派に餘滴の、どんな場合でも「女にして」の意で、「女になりて」などといふ馬鹿な解釋はあり得ないといふ論を破り得る。それは葵上の死後、忌中で籠居してゐる源氏を頭中將が訪問する條、

君(源氏)は西の妻戸の勾欄に押懸りて、霜枯れの前栽見給ふ程なりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたる程、涙も争ふ心地して「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」(別馬場が女を)と打獨り言ちて、頬杖つき給へる御さま、女にては、見捨てて亡くならむ魂必ず留まりなむかしと、(中將ノ)色めかしき心地に打まもられつ、(シツト)視ツメラレツ、(中將が源ノ)近うつい居給へれば、(源ハ)しどけなう打亂れ給へるさまながら、紐ばかりを差直し給ふ。

「見捨てて……」は「妹の上を思ひ寄せての事であらうし、此の「女にては」是非「女になつては」「女だつたら」「女からすれば」の意でなくては不相當である。更にこれは補遣に引かれてはないが、手習巻で横川の僧都の母大尼君には孫に當る紀伊守が、匂宮のことを尼君や浮舟の居る前で語る詞に、

兵部卿宮(匂)ぞいといみじくおはするや。女にて馴れ仕う奉らばやとなむ覺え侍る。

とあるのなどは、愈、「我を女にて」「女になりて」の意であること明白である。紀伊守が匂宮を「女にして」と想像するのは不敬でもあり、「仕う奉らばや」の語があるのでも誤解の恐れはあるまい。

即ち(A)(B)兩説ともに正しいので、岷江入楚所載の「箋」の

「女にて見奉らまほし」といへる、所によりて心變るなり(場合ニヨツテ意味が異ナル)。爰は、見る人が女に成りて源を見たまふなり。又、源を女になして見たきと云ふ所もあるなり。

といふ三光院の説が、却つて新註を凌いで、一般論としては妥當と認められねばならぬ。

すると、此處の場合であるが、(A)(B)兩様の解とも當嵌らぬことはない。何れでも甚だしい不自然さなしに許され

得る。特に其の源氏の姿態は葵巻に於けるその描寫と殆ど同じ印象と言つていゝから、その聯想からも(A)説の解に導かれ易いのであるが、「女にて見る」特に「女にて見奉らまほしう」といふ口氣は(B)説の常套の形のやうであり、姿態の似たといふ場合でも葵巻に限らず、須磨巻にも、

白き綾のなよかななる……こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御さまにて……御涙の零る、を搔拂ひ給へる御手つき……故郷の女戀しき人々の心地皆慰みにけり。(五二四頁参照)

とあつて、これは家來達が源氏の印象中に女らしさ、女性的なものを感じて——即ち源氏を「女にして」——の事であるから、やはり此處の本文は(B)説に隨つて解して置くが自然であらうと思ふ。

さまざまの人の上どもを語り合はせつゝ、「大方の世につけて見るには各なきも、わが物と打頼むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世の固となるべきも、眞の器ものとなるべきを取り出さむには、難かるべしかし。されど、賢しととも、

は、きき

【口譯】「品定はいろ／＼の女の上に互つて、彼此と較べられる。馬頭單に一個の普通の女性として観るには結構無難でも、いざ自分のものとして頼りになる人を選び出さうとなると、数多い女の中でもなか／＼決められないものです。それは、男だつて實は同じで、つまり廟堂に上つて奉公を抽で、儼然と國家を背負つて立つ大柱石たる位置に据ゑるに、眞の器量ある人材を得ることは、決して右から左へおいそれといふやうな工合には、やはり参りません。けれども、いくら賢いと言つても、一人や二人で世の中の政治がやれるものではありませんし、上司は下役に助けられ、又、下僚は上官に服従し、事務の範圍も廣汎な爲、御互に譲り合ひ分擔して、處

一人二人世の中を政ちしるべき
ならねば、上は下に助けられ、下
は上に靡きて、事廣きに譲らふら
む。狭き家の内の主人とすべき人

・たさな源氏 挿繪(寛文十年板)



一人を思ひ廻らすに、足らばで悪
しかるべき大事どもなむかたぐ
多かる。と有れば斯かり、あふさ
ざるさにて、斜に然てもありぬべ

理されて行くのです。ところが、狭い一家の主婦たるべき唯一人の方をよ
く考へ合はせてみますと、これは上下融通つてわけには参らず、缺け
ては困る肝要な資格が、あれやこれや澤山にあります。こゝが善ければ、
あそこが悪し、一つ叶へば一つが足らず、帯に短し褌に長しで、曲りなり
にも此の程度で我慢の出来るといつた人すらも少いので、女好きの慰
み半分から、あゝでも無い、かうでも無いと、いつまでも選り好みを
するわけでは更々ありませんが、兎に角これから一生苦樂を共にしよ
うといふ女房なので、同じ事なら自分で骨折つて缺點を矯正せ
ずに済むやうな、稍理想に近い女が、若しやゐるのではと、最初から
厳選するので、愈、決定がむづかしいのでせう。必ずしも自分で満足
してゐるといふのではなくても、何も縁あつての事と、馴れ初めの昔
を忘れずに辛抱してゐる男は、細君孝行と感心に見え、斯うして棄て
られずにゐる女にしても、あれでやはり何處か善いところがあるの
だらうと、世間體もよからうといふものです。です
が、何が何だつて、世の中の有様をすつと斯う見聞
き致して居りまして、想像もつかぬ程、有難涙の零
れるやうな話なんて、とても其處いらに轉がつてゐ

原*そへにととすれ
ばか、りかくすれば
あないひ知らずあふ
さきさきに
(古今一九、誹諧歌)

き人の少なきを、すきくしき心
のすさびにて、人の有様を數多見
合はせむの好みならねど、偏に思
ひ定むべき寄邊とすばかりに、同
じくは我が力入りをし、直し引續
ふべき所なく、心に叶ふ様もやと、
選り初めつる人の、定まり難きな
るべし。必ずしも我が思ふに叶は
ねど、見初めつる契りばかりを捨
て難く、思ひ留まる人は、物眞實
なりと見え、さて保たるゝ女の爲
も、心にくく推し量らるゝなり。
されど何か、世の有様を見給へ集
むるまゝに、心に及ばず、いとゆ
かしき事も無しや。君だちの上なき御選びには、まして如何許りの人かは偶ひ給はむ、所狭く思ひ給
へぬだに。容貌きたなげなく若やかなる程の、おのがじしは塵も附かじと身をもてなし、文を書けど、
おほどかに言選をし、墨つき仄かに、心もとなく思はせつゝ、又さやかにも見てしがなと、すべなく

待たせ、僅かなる聲聞くばかり言ひ寄れど、息の下に引入れ、言少ななるが、いとよくもて隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、餘り情に引籠められて、取り成せばあだめく。これを初めの難とすべし。

語義

【あふささるさ】合ふと離れると。一方善ければ一方悪い。十全が望まれないこと。似た慣用語に「ゆくさくさ(往來)又、ゆくささるさ(同上)」がある。これは往く時と來る時、或は往きしなと來しなの意で、接尾語の「さ(時の意)」が反對の兩語を對立させた丁度同じ形式になつてゐる。【そへにとて……ささるさに】(脚註)さうと思ひ定めて、あ、すればかうなるし、かうすれば又あ、なるし、左かと思つてやれば右、一方が合へば片方が離れる、あ、焦れつたい。「そへ」は「其方」。故に「そへにとて」は其れだと定めて、さうだとして、さうだと言つての意。【なのめに】斜に。「なのめならず」が十分の意であるから、「斜に」は、不十分でも、十分とはいへなくとも、曲りなりにもの意。【保たる、】離別せられず、これまで通りにして置かれる。【所狭く思ひ給へぬだに】トコロセク……。選擇の範圍がかなり廣く自由である私共ですら。(釋評)参照)【おほどかに】大やうに。【言選】コトエリ。用語をあれこれ吟味すること。文辭をあ、でもない、かうでもないと氣にして、自分を卒直に示さぬをいふ。類例)句宮が北方(宇治の中君)への詞に「いみじく言選して聞ゆとも(タトヘ詞ヲイロクニ繕ツテ言ウテモ)、いと著かるべきわざぞ(眞ノ心底ハ隠サレズ自ラ判然スル管ダノニ)。(宿木卷)【又さやかに……】もつとはつきりした手紙を、もつと眞實の心底を明白に見たいと。【初めの難】先づ最初に擧ぐべき難點。

事が中に、斜なるまじき、人の後見の方は、物の哀れ知り過し、はかなきついでの情あり、をかしきに進める方、無くてもよかるべし

口譯

では、さういふ仇々しいのではなくて、何は措いても良い加減にして置けぬ、夫の世話といふ大切な務の方からは、餘り趣味があり過ぎて、何かといふ折節の風流氣が、隅に置けないどころか、ちと恐れをなして引退らざるを得ないなんていふ側は、まあ、無くてもよささうにちよい

と見えたるに、又實々しき筋を立てて、耳挿みがちに、美相なき家刀自の、偏に打解けたる後見許りをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたゝすまひ、善き惡しき事の、目にも耳にもとまる有様を、疎き人に、わざと打まねばむやは、近くて見む人の、聞き分き思ひ知るべからむに、語りも合はせばやと、打ちも笑まれ、涙もさしぐみ、若しはあやなきおほやけ腹立たしく、心一つに思ひ餘る事など多かるを、何にかは聞かせむと思へば、打背かれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、哀れとも打獨言たるゝに、何事ぞなど、あはつかに差仰ぎ居たらむは、

は、きき

と思はれますが、それかと言うて、餘りに又型の如くの所帯本位、明けても暮れても甲斐々々しいおさんどん姿で、額髪を耳に挟み、何處から見ても美しいとは御世辭にも言へぬ御家さまが、一途に色氣抜きで旦那殿の身の廻りの世話ばかり焼いて、――元來、男つて者は、朝の出動晩方の歸宅、いつの時でも、勤め先なり家庭なり公私の人の形装舉動、善いにつけ悪いにつけ其の日の出來事、街くも目に觸れ耳にした模様をば、全然の他人に何で態々話して聞かせませうぞ。そこは誰よりも先づ第一に身近い、而もよく辨き分け理解してくれる女房といふものに、聽いて貰はう話し合はうと、ニコリとなつてみたり、ホロリとしてみたり、乃至は劍突の持つて行き場も無い他人事が無暗に觸つたりして、胸一つに如何も疊んで置けない事も随分多いのを、いそぐと門を潜りは潜つても、さて聞いてくりやれと言はうにも、此のおさんどんではなあ、と思ふと勇氣頓に挫け、覺えず顔が横を向いて、自分だけでウツと思ひ出し笑ひもしようし、「あーあ」とつひ獨り言も出ようつていふ其の鼻つ先へ、しゃくり出て、「何ですえ、あなた」と、きよんと孔のあく程夫の顔を見上げてゐるなんぞ、全くいやになつちやうちやありませんか。

【語義】「事の中に」妻としての要望せらるべき諸資格の中で。「物の哀れ」情趣、風流、藝術心、感受性。「まめくし」實直で勤めに専一なこと。此處は主婦としての經濟的事務的勤勞的方面に傍目も觸らず甲斐々々しく立働くをさす。「耳挟み」ミ、ハサミ。活動の邪魔にならぬやう、頭髮の前に垂れ下るのを掻きやつて耳にはさむをいふ。「がち」は、ともすれば耳挟みをしがちの意で、寸時もちつとしてゐず家の中の仕事に精出すをいふのである。類例 横笛巻に柏木の衛門督の靈が遺愛の笛の音に惹かれて夕霧の夢に現はれた瞬間、夕霧の若君が寝おびれて泣き出すと、母の雲居雁が大騒ぎして出もせぬ乳房を合ませて機嫌を取る條に「乳母も起き騒ぎ、上(北方、雲居雁)も御殿油近く取り寄せさせ給ひて、耳はさみして、そ、くりつくりひて抱きて居給へり。(北方ハ)いとよく肥えて、つぶ／＼となかしげなる胸を開けて乳などく／＼め給ふ。」「美相」ビササ。美しき相好。「家刀自」イヘトワジ。妻の尊稱。主婦。家とし・家のとじ・家刀自女(イヘトツメ)刀自は「戸主(トメシ)」の轉。「近くて見む人」妻をさす。「あやなき」わけのない、確たる根據の無い、漠然とした、無暗な。「おほやげばら」公腹。自身に直接利害關係の無い世間の事に腹の立つこと。公憤・義憤。上流の用語でなく卑俗な人々の語らしく、紫式部日記に「すゝろに心疾しう、おほやげばらとが、よからぬ人の言ふやうに、憎くこそ思ひ給へられしか(齋院の中將の君の消息の條)とあるので推知される。小節には「法界」に當ると言つてあるが、今でも薩摩の方言には「世間腹(セケンハラ)がきいわく」といふ慣用がある。「きい」は意味を強める(語調だけに止まらず、稍投げやり、又は侮蔑、或は強制壓伏の意味を加へる)接頭語で、「きい」抜かす「きい」取るなど言ひ、「切抜く」「切取る」なども「切い」抜ける「切い」取る」と發音するが、それとは別である。單に「逃ぐ」「言ふ」取るの意で「はよ(早)きい逃げんか」「まだきい抜かすか」「其方(そなた)からきい取れ」などと命令や禁止・反語の場合等に用ゐられる事が多い)又、「きし」とも用ゐられ、「きしわく」「きし食ふ」「きし賣る」「きしかやす」「かやす」は「反す」の意で「理窟を抜かすな」「大口たくな」「舌をかへすな」論をかへすななどの意に「きしかやすない」「きしかやせ」「ぎ(議)なきしかやすな」「馬鹿きしかやせ」など言ふ「きし」面倒臭(キシメンドクセ)。「七面倒臭い」の意)「きし小癩(キシコシヤツナ)、又は、キシコサクナ、又、キシコサクナ」などと使はれる。「きいわく」の「きい」は或は竹取物語の「腹をきりて笑ひ給ふ」の「きり」、即ち「腸をきる」の「きり」の訛とも一寸思はれるが、これは「腹を」であり、且笑ふ意味の同地方の方言の場合にも此の形は用ゐられな

い(「腹がきい笑ふ」とも「腹をきい笑ふ」とも言はない。無論單に「きい笑ふ」とは言ふが、それは前の「きい」「きし」と同じ意味の時である)。又別に、腹の聯想から「切り」の語も自然に導き出されるが、さう解することは通俗語源説的附會に陥る嫌が無しとせぬ。やはり前述の如く強める意味の接頭語と看るべきであらう。原は恐らく「き」で、これが連接する音の種類によつて「きい」とも延び又は「音が入つて来たものであらう。「わく」は「沸く」で、沸き立つ、煮えくりかへる意、これは明瞭である。單に「腹立ない」といふ場合は「腹がきいわく」といつてゐる。そして「世間腹」といふ方言は正に此處の「おほやげばら」と全然同義に用ゐられてゐるのが興味深い。なほ他にも同じやうに用ゐられてゐる地方があるかもしれないが、開知する所が無い。「あはつかに」無心に、ホカンとして。あは／＼しげに。廣道は「あは」を「あわつ」「あわたし」と共通する語幹と觀て、腹がしく静かならぬ意とし、假名も「あは」は誤で「あわ」でなければならぬと言つてゐる(評釋)、守部は「は」と「わ」と通替なりとし、心のしまりなくは／＼したる事」と解してゐる。(湖月鈔別記)

唯一向に兒めきて、柔かならむ人を、とかく引繕ひてはななどか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし。實に差向ひて見む程は、さてもらうたき方に罪免し見るべきを、立離れては、然るべき事をも言ひ遣り、折節にし出でむ業の、あだ事にも、まめ事にも、我が心と思ひ得る事なく、深き至

は、きき

【口譯】 結局、無邪氣一方で柔順な女を、良人たる者が彼此と面倒を見て、缺點を繕つてやるに越した事はありません。始終氣がかりで、厄介には遠ひありませんが、直し榮えはします。但し斯うした女は、家庭で差向ひで居る間は、ちつとやそつとつそりでも、却つてそれが可愛く見えて責める氣にもなれませんが、一朝夫が遠く旅へでも出たとすると、さし當つた用事を言ひ送つたり、其の時々の臨機に辨ぜねばならぬ要件の、趣味的の問題にせよ、實生活の問題にせよ、その女房自身では何の思ひつきも無く、爲る事にちつとも深みが無いとあつては、からもう齒痒く、いくら無邪氣に可愛くても、大事な時の頼みにならぬ此の缺點だけは、やはり困

り無からむは、いと口惜しく、頼りものでせう。それとは反對に、平常は少し刺々しくつて、氣にくはぬやもしげなき谷や、なほ苦しからむ。うな女房が、時と場合によつては、あつといふやうな人一倍の大働きを、常は少しそばくしく、心づき無き人の、折節につけて、出で榮えき人の、折節につけて、出で榮えするやうもありかし」など、隈なき物言ひも、定めかねていたく打歎く。

語義

【そばくしく】角のある、刺々した。【心づき無し】氣に食はぬ。氣に入らぬ。【出で榮え】イデマエ。パツとする。此處は賞讃を博するやうな事をやつてのける意。その反對が「出で消(ギ)え」で、パツとせぬこと。出来ばえ、しばえのはかしくないことに言ふ。行李巻に玉鬘が大原野行幸の行列を見物する條に「貴なる人は皆物清げに氣はひ異なべい(様子か庶人トハ違フ管ノ)ものとのみ、大臣(源氏)・中將(夕霧)などの御句に目馴れ給へるな、(平常玉鬘ハ源氏ヤ夕霧ヤ特別ナ貴公子ノ目馴レテキルマ、ニ、今マデハ貴族トイフモノハ皆スメテガサウイフ人違バカリナノガ當然ノ事ト思ツテホタニ、今眼前ヲ通過シテ行ク人々ハ)出で消えども片はなるにやあらむ(帝ヤ源ノ前アハ光ガ消サレテ醜ク見エルノカ)同じ目鼻とも見えす(同シ人間ノ顔トモ思ハレヌ位)、口惜しくぞ壓されたるやは、前の方のバツとせぬ意に、又、若菜下巻の「斯かる折ふしの歌は、例の上すめき給ふ男達も、なか／＼(却ツテ)出で消えて」は後の方の意味に用ゐられた例である。これらと對照して「出で榮え」の意味を一層よく理解することが出来る。

【釋評】「上が上は打措き侍りぬ」と馬頭が言へば、「下のきさみといふ際になれば、殊に耳立たずかし」と頭中は嘯く。而も

女のこれはしもと難つくまじきは難くもあるかな。
の歎聲に至つては共通である。源氏も亦後に

言ふ甲斐なき(殆ド問題ニモナラヌ)際の人はまだ見ず。人は勝れたるは難き世なりや。(横巻)

と、つく／＼思ひ入つて頭中と同じやうな語を吐いてゐるのも、品定の夜が今更の如く思ひ當られるのであらう。單に容姿も心立ても無類完璧の麗人といふだけで、既に入選の資格を具へたのは、殆ど絶無と言つてもよい位である。それに「我が物と打頼むべき」といふ條件が重なれば、愈も探すだけが徒勞かも知れない。一段讓歩して、最上でなくとも、十人並以上といふだけの、而も「我が物と打頼」まぬ限りに於てなら、知人の中でも直に指は折れようし、知らぬ世間からもそれほど骨折らずに拾ひ出せよう。が、向う岸の火事見物の間はよいが、火の子が此方へ振りかゝつて來るとなると暢氣では濟まされぬ。

多くはあらねど、人の心の、とあるさま、斯かる趣を見るに、ゆゑよしといひ、さまざまに口惜しからぬ際、心ばせあるべかり。皆各、得たる方ありて、取る所なくもあらねど、又取り立てて、我が後見と思ひ、まめ／＼しく選び思はむには、有り難きわざになむ。(若菜上巻)

とは、これも源氏が品定の夜から二十有四年を経過した四十一歳の春の述懐である。作者式部は日記の中でも同じ事を言つてゐる。これは妻定めではないが、
これらを斯く選りて侍るやうなれど、人は皆とり／＼にて、こゝなう劣り優る事も侍らず、其の事敏ければ、彼の事おくれなどぞ侍るめるかし。

一長一短、あふさきるさで、全く「なのためにさてもありぬべき人」すら少いのである。「人物」の獲難きは男女の區別なし、萬卒は雲集しても、之を手足の如く動かす將軍や軍師はさらには無い。廟堂の大字相亦然りであるが、併し大將ばかりでは軍は出来ぬ。大臣が少し鷹揚でも、次官・局長に敏腕家があれば、寧ろ實績は擧らうといふもの。「狭き家の内の主人とすべき人一人」に至つては、然うはならぬ。これだけは、次官・局長に頼めぬどころか、そんな代理人が數々あつ

ては、忽ち御家騒動の不祥事は眼前、小姑や老婢などにだつて實權でも握られようものなら、虚器を擁する奥方の惨めさ、走り使ひの小娘にまで内兜を見透かされるやうでは、御臺所の權威を奈何。何としてもこれだけは、一人でなければならぬ。そして、何としても八宗兼學、具足圓滿の大軍師であつて欲しい。然う鹿爪らしい肩書を竝べずとも、兎に角、良き妻であり、良き母であればよい。ところが、此の良き妻、良き母たる資格の完備がなかく、むつかしいのである。そして又、その良き妻、良き母として今日を送り明日を迎へることが決して容易ではないのである。

すきくしき心のすまびにて、人の有様を數多見合はせむの好みなられど、偏に思ひ定むべきを寄邊とすばかりに、同じくは我が力入りをし、直し引續ふべき所なく、心に叶ふやうもやと、選り初めつる人の、定まり難きなるべし。

とは、まことに至言である。馬頭の自家辯護以上に眞實性が十分含まれてゐる。けれども、その代りに餘り何時までも大事に大事を取ると、機會は常に禿げた後頭をのみ向け／＼して、其の間に此方の春秋は徒らに白駒の蹄を鳴らさせる。三度食ふ飯さへ強し柔かし、其の思ふやうなる飯を焚いてくれる人を得る、亦難い哉である。

どうせ三十二相揃つた人などは思ひも寄らぬとあれば、未婚者は配偶の相手の條件を餘り高くむづかしく要求せぬがよし、又、既婚者は足らで事足る悟りに安住して、糟糠の妻は堂より下さず、御互に我が儘が出る折は、馴れ初めの昔を想ひ出せ、といふのが馬頭の切諫である。ところで、一體、男が直ぐに軟化して自在に手玉に取られるに至る最初の陥穽は、如何にも初々しくおとなしうに花も恥ぢらふ處女姿を過當に賣りつけられるに在る。焦れつたい程嬾やかにつゝましく喉の奥から微に漏れる「さうさあす」の淑女の假面を眞向から振り翳して迫つて來るに在る。蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲、美人は人を食ひ、城を食ひ、黄白を食ひ、國家を食ふ。

蟲も殺さぬ猫撫で聲が、眞に恐いよ虎よりも。

油断大敵「なよびかに女し」と維茂將軍が氣を許して、紅葉の下蔭に快い微睡を食ふ間に、更科姫は忽ち戸隠山の惡鬼と變じて猛然と掴み懸る。美しい鬼だけに始末が悪い。さればと言つて、掃除番やピラ撒きの人造人間では又助からぬ。所謂おまんまさへよく焚ければ重疊でありさうなものだが、然うはいかぬ。「物の哀れ知り過し」で、おまんまなぞそつちのけ、星が瞬きをしては愛の詩を誦し、花が一ひら散つたとは惜春賦に筆を染め、「何が何だかわからないのよー」「知らず／＼に泣けて來るのよー」で日を送らされては、勿論頓首閉口悲鳴を揚げざるを得ないが、全然婆娑つ氣一方、實利一點張、臺所務は精勤證表彰もの、銀婚式の今日が日まで、且に明けて夕に暮れ、雨の降る日は天氣が悪いと、型を型の如く爲來り爲去る根氣よさ、内閣總理大臣の名も知らねば、亭主の職業の輪廓さへ理解出來ず、良人の慰藉どころか、子女の教育どころか、そんなものは最初から旗亭と學校とにさつぱりと御預け、適、えらい知識を傾けるかと思へば、和歌を上下に二分すれば俳句が二つ出來、放送局の手あきの時、GKに中繼して貰つて朝鮮鮎を注文しようといつた程度、鼓は齒入れ屋の叩くもの、長唄の師匠なら義太夫でも新内でも何でも語れるつもり、福助といふ役者は足袋屋の商標みたいな顔で、左團次はお爺さん、梅幸は子役と心得、伊勢物語は旅行案内、古事記はお貰ひさんの日記、ダンスホールはミルクホールの少し大きな奴、ドストイェフスキーが強い洋酒で、ヘーゲルが舶來の毛生へ薬ときめてゐるなどと來ては、これ亦そとろに人生の無常を感じさせる。「物の哀れ」を「知り過し」でこそ鼻にもつき、センチメンタリズムの奴隷にもされてしまふが、徹底的の人情無用、藝術亡國、一から十まで唯機械の如く動き、そして豚の如く食ふオタンチンは竟に是れ濟度し難き「あまのじやく」、その辯必ず萬事呑み込み顔で、來客でもあると態、しやく／＼り出て何かと口を挟み、相手は極度に困惑、亭主の面目玉まで十二分に踏み潰してゐながら、當の「美相なき家刀自」は一向に御存じ無く、得々として團扇の風に自分ばかり涼をいれてゐるなど、よくある圖で、「口惜し」なんと言ふばかり

なり。

「初めの難」も馬頭の所説一々掌を指すが如しであるが、「耳挟みがち」の賢「山の神の描寫は眞に出色である。目にも耳にもとまる有様」出勤の途での省線の事故から、晝の食堂の漫談、課長殿の今日の御天氣模様、級友の結婚ばなし、歸りにシヨウウキンドで觀て來た流行のネクタイの柄、さては同僚への辭職勸告を引受けた苦衷、會社の更生企畫の立案を一手に委ねられた責任、乃至は直接利害の關係を離れても、選舉干渉の義憤、電車争議の解決に飽き足らぬ不平の飛ばつちりに至るまで、「全く近くて見む人の」而も「聞き分き思ひ知るべからむに」語り合はせたいのが夫の所願、それが「何にかは聞かせむ」といふ有難い代物に待受けられるのでは、豈長大息せざるを得んやである。「何事ぞなど、あはつかに差仰ぎ居たらむは」は正に傑作、光景眼前に髣髴たるものがある。

そこで無邪氣柔順な子飼ひから手しほにかけて、自身理想通りの良妻教育を施すが安全第一、無上の名案、夕顔上は此の馬頭の授けた秘策を試みるに恰好の候補たる有資格者として、先づ源氏に選ばれかけたそして果さなかつた一人であつた。

はかなびたる(弱イ)こそ女はらうたけれ可愛イモノダ。かしこくに靡かぬ(キツク意地張ルノハ)いと心づきなきわざ(好カヌモノ)なり。自らはかくしく、健かならぬ心慣らひに(私自身意志が鞏固アナクギスノシナイセキト見エテ)、女は唯やはら(柔和)にて、とりはづしては(ウツカリスルト)、人に欺かれぬべきが(男ノ口車ニセラレサウナオトナシ家ア)、流石に物づつみし(慎マシク控ヘ目ニシテキナガラ)、見む人(夫)の心には従はむな哀れにて(言ヒナリニナルヤウナガイナラシイモノア)、我が心のまゝに取り直して見むに、懐かしく覺ゆべき。(夕顔卷)

と亡き人の上を偲びつゝ源氏が述懐するのを聞いて、夕顔に死別した侍女の右近も、

この方の御好みには、もて離れ給はざりけり(亡キ主人ハ、今御話シノヤウナアナタ様ノ御好ミニハ、ウツテツケテ御座イマシタ

モノヲ)と思ひ給ふる(考ヘマスル)にも、口惜しく侍るわざかな。(同卷)

と言つて泣くのである。さうして北山の僧都の庵の小柴垣に佇んで、偶然、瘧病の惱ましさも忘るゝばかり懐かしく見入つた「いみじう生ひ先見えて美しげなる」初草こそは、馬頭が此の定めに適ふ無比の珠玉のみか、その理想的な都合と教育の結果とは馬頭なぞにも到底想像もつかぬやうな奇蹟的の出現でもあつた。即ち

さらば其の子なりけりと思し合はせつ。親王(兵部卿親王)の御筋にて、かの人(藤壺)にも通ひ聞えたる(似テキル)にやと、いと哀れに(一入ナツカシク)見まほしく、人の程(人柄)もあて(上品)にをかしう、なか／＼のさかしら心なく(ナマジツカナ小マツチヤク)レタトコロモナク、ホントウニ素直ニ純テ、打語らひて心のまゝに教へ生ふし立てて見ばやと思はず。(若菜卷)

希望にとゞまらず、遂に手許に引取つて愛育し、

見るまゝに、いと美しげに生ひなりて、愛敬づき、ちう／＼じき心ばへいと殊なり。直かぬ所なう我が御心のまゝに教へなきむと思すに叶ひぬべし。(花宴卷)

而もその骨折は決して徒勞でなかつた。

對の上(紫上)の御有様を猶有り難く、我ながら生ふし立てけりと思す(若菜上卷)

やうな満足に到達し得たのである。女三宮に對しても手を執るやうにして訓へ(若菜下卷)、玉鬘をば「活けみ殺しみ誠めおはす」(巻卷)のも、此の理想の子女薫陶・良妻教育の精神と趣味とに根ざしてゐる。現し世を厭ひ後の世を願ふ心切なるにかゝはらず、

末の君達、思ふ様にかしづき出して見むと思召すにぞ、疾く捨て給はむ事は難げなる。(繪合卷)

と自身にも此の矛盾が不思議にさへ思はれる程、子女の訓育に源氏が深い關心を有つてゐることは、やがて作者紫女の本性の偽りなき反映ではなからうか。馬頭が此の段の

は、きき

唯一向に見めきて柔かならむ人を、とかく引續ひてはなどか見ざらむ。心もななくとも、直し所ある心地すべし。

の意見も、作者が此の方面に少からざる興味と意義とを感じ且効果を認めてゐることを語るものである。そして其の教育の目標、理想は源氏物語全篇を通じて隨處に言及せられ、特に此の帯木卷の品定が即ち其の概論であるとも觀られ、紫日記の特に子女に與へた消息文の部分にも親身に説き訓へられてあるところのものであるが、なほその要領は、源氏常夏卷に、娘の明石姫君に對する光源氏の教育方針を指示して、頭中将が娘雲居雁を戒める詞によく顯れてゐると思ふ。女は、身を當に心づかひして守りたむむよかるべき(身晴ミガ大切ダ)。心安く打捨てたるさまにもてなしたるは(放縱ニ自墮落ニシテキルノハ)品なきわざなり(品格が無クテ卑シイ)。さりとして、いと賢しく身固めて(不自然ニソザト勿體ラシク信心家ヲツテ)不動の陀羅尼讀み(眞言ノ呪ヲ唱へ)印つくりて(印ヲ結ンテ)居たらむも憎し。うつゝの人にも餘り氣違(アンマリ俗人ヲナレシ過ギテ)物隔てがましきなど、氣高きやうとても(イクラ氣高ク見エルツタツテ)、人にくく心美しうはあらぬわざなり。太政大臣(源氏)の、后が(皇后候補)の姫君(明石上臈ノ姫、後、明石中宮)習はし給ふなる教は、萬づの事に通はしなだらめて、(一事ニ偏セズ何事モ一ツタリ通ズルヤウニシ)、かどくしき故も附けじ(得意ナ方ニダケオヲ振廻サセメヤウ、同時ニ)、たどくしくおぼめく事もあらせじ(何事ニ關シテモ相當心得ガアツテ昏クナイヤウニ)と、觀かにこそ掟て給ふなれ。(一般教育ノ大本ヲ偏狭ニセズ大處高處カラ看テ確立シテ居ラレル)

「不動の陀羅尼云々」は紫日記の

萬づつれくなる人の紛る、事なきまゝに、古き反古引き捜し、行ひがちに口ひゞちかし、數珠の音高きなど、いと心づきなく(厭ヤニ)見ゆるわざなりと思ひ給へて……

とあると同じ心持である。又、玉鬘卷にも源氏の詞として、

姫君(明石)の御學問に(歌學ハ)いと用無からむ。すべて女は、立てて好める事設けて染みぬる(没頭スル)は、さまよからの事な

り。(カト言ツテ)何事もつきながらむ(話セマ)は口惜しからむ。唯、心の筋を漂はしからずして鎮めて(アヤフヤニセズ、底ニツカリシタ所ヲ踏マヘテ置イテ)、なだらかならむのみなむ、目やすかりける。

とも見えてゐる。即ち教養ある人物の長所、模範として歎稱せられる美點は、實に「かどくしき故も附」かず、將た「たどくしくおぼめく事も」ないといふ所に在る。紫上は此の理想に天性適つても居り、又源氏の懇篤な訓育によつて此の理想にまで完成し得たのもあつた。所謂

かどくしき故も附、句ひ多かりし心さま(幻卷)

と源氏が追慕の念に堪へない紫上の賦性——それは又式部が自身の奉仕した上東門院に於ても略、之に近いものを看得て満悦を感じてゐたところのものである(紫日記)——それは一見前述の理想と矛盾するやうであるが、言ひ方の違ひで實は大略同じ意味である。「おぼめく事」のないのは、「かどくしき」なのである。「かどくしき故」の附かぬのは、「らうくじ」い自然さ天真さなのである。式部が娘大貳三位を育て上げるにも、前述の方針に基づいてゐた筈である。即ち此の要諦を解し、此の主張を有し、此の興味を感じ、此の努力を吝まぬ紫式部は、立派な女子教育家であり、實踐倫理の先生であり、而も所謂先生でない、所謂教育家でない、新しがりやではないが、乾からびてゐない、ほんたうの人情味豊かな、今ならば先づ女子大學の學長として最適任の得難き偉材だつたに違ひない。少くとも舊日本を代表する典型的教育家——典型婦人であるは勿論、それと同時に——の鮮々たるものと斷言し得る。現代に居ても恐らくは新しい時代にも相當理解を持ちつゝ、そして同時に傳統を生命とする固有精神を生かさうとする教育方針を樹立するに相違ない。所謂皮相なる尖端婦人を蔑視すると共に、決して固陋に舊習のみを墨守せず絶えず新しき理想へと創造の道を拓き進んだことを確信し得る。

ざれくつがへる今様の由ばみよりは(ハネツ返リノモダンナ氣取り家ヨリハ)、こよなう奥ゆかしう思しわたるに、(末摘花卷)と末摘花に對してすらも感ずる源氏、

心淺げなる人眞似どもは、見るにも傍痛くこそ(螢卷)

と峻烈に批評する紫上からも、紫女の姿を看取することが出来るからである。

が、紫上のやうなのは、事實なか／＼減多に在るわけでない。無邪氣一方、柔順以外に自己の無いいつまでも娘のやうな妻女は、憎めない代りに張合が無い。いざといふ時、一人歩きが出来ぬとあつては、如何にも厄介。第一、主人が公用で出張なぞした場合は、直にもう困る。留守に事故が突發した時、否それほどでなくても、兎も角何か處理せねばならぬつまらぬ雜用、片附けられるものは片附けて置いて貰ひたいものだし、偶には旅先のホテルの一室で、フウム、味をやるわいと相好をくづすやうな自畫のはがき位受け取つてみたい。一から十まで保護者附のねんねえでは、やつぱりじれつたさ齒がゆさが、離れてみるとしみ／＼感じられる。つまり源氏の中の人物にすれば、女三宮などは「かどくしさ」の無い「らうくじさ」で、「頼もしげなき咎や、なほ苦しからむ」といふ方の適例であらう。柔順そのものの如き女性には、嬉しくて物足りぬ。夫に食ひつく危険は無いけれど、夫を支へる力は弱い。男に引きずられて生きて行くが全生命で、夫の代理なぞは夢にも望まれぬ。三度に一度、夫に口應へしかねない、動もすれば男を引きずりさうなちと平生敬遠に値するやうな女人の方が、一旦緩急あれば、一家を背負つて立ち、弱き夫の爲に氣を吐き、有聲男子を後に瞠若たらしめて、大に手腕を發揮した例は一再にとどまらぬ。上毛野形名が妻は如何、山内一豊が妻は奈何。女は弱きが是か、強きが非か。柔和果して不安なきか、感傷主義全然排すべきか、生計第一主義、臺所合理化これ家庭生活の全部なりや、細君選擇の最大要件の標準を何處に置くべきか、流石の「物言ひ」も、つく／＼嗟歎せざるを得ないのである。

である。

○所狭く思ひ給へぬだに。(本文)

此の句は青表紙本に無く、河内本にある。花鳥餘情に「馬頭が世間狭き身にだに」の意に解してあるのは無論誤で、所せくとは狭き心なり。上臈は萬づに身を輕々しくし給はぬによりて、其身はせべき心なり。馬頭など踐しき身は、所せべき事なく見ありき侍るだに、思ふに叶ふ女は無きとなり「所せく思ひ給へぬだに」と云ふにて句を切り、心を上へ掛けて見るなり。下へは續かぬ詞なり。

といふ細流(卷二)の説が舊註では最も有力で且妥當で、小楠も此の細流に賛して、

我がが賤しき身にだに、然思ひ侍るを、まして君だちのかみなき御選びにはといふ也。(五の卷)

と註し、且「所せく」の意味に關して、

だみ詞に「あまれく女を見集むるだに」といへるは逸へり。そは所せく思はぬを、廣く見集むる意にとりて言へるなれど、さる意にはあらず。すべて「所せし」といふ詞は、言の本の意は所の狭き意より出でたるなれども、用ふる意は必ずしも然らず。こゝは、貴人は身の重々しくて萬づの事たやすからぬを「所狭し」と當にいふ其意にて、妻を擇び給ふことも貴人は何くれとむつかしくてたやすからぬを、我がが如き下さまの人は、さやうに事むつかしくはあらざるを、それだにといふ意にて言へるなり。

と詳説してゐる。これで正しい解なのであるが、併し結局の意味はだみ詞の釋と殆ど重なり合ふことにもなる。選擇の仕方、態度が窮屈でない、隨つて其の標準も貴人よりは制限が嚴重でなく、條件がむつかしくなくなり、又一面候補者に對する接觸の機會、選擇の範圍も廣く自由になるわけで、だみ詞の解は十分正しいとは言へぬが、事實の歸著する所から言へば、略、同じやうな結果になるとは言へる。唯、選擇の範圍が比較的自由だといふことが、直に、出来る限

り普く見集めるといふことにはならないだけである。

評釋の廣道は、此の條に必ず誤脱あるべく、その爲意味が徹底しないが暫く上のやうな説に隨ふこととすると言ひ、なほ試に一の提案をしてゐる。それは「所せく……」の句は、「世の有様を……集むるに」の下にあつたのを、いつか寫し誤つて今のやうな位置になつたのではあるまいかと推測し、且、「されど何か」といふ言ひ方も穩かでないから、これは河海抄に「なにがしがといふ心也」とある解を探つて、もとの字があつたのが脱落したのであらうとなし、斯うして本文を次のやうに改めると意味が一貫すると述べてゐる。即ち

されど馬頭なにかし世の有様を見給へ集むるに、かく所せく思ひ給へぬ身にだに、心に及ばずいとゆかしき事もなしや。まして君たちの上なき御えらびには、いかばかりの人かたぐひ給はん。

といふ意味で此處は書かれてゐると觀られないだらうかといふのである。なるほど、これならばすらくとして意はよく通ずる。その代りに文の生氣と味は稀薄になつてしまふ。「し」を補つて「されどなにがし……」などは如何にも稚拙な表現である。やはり「されど何か」の方が面白い。そしてそれで意味が通ずるのみならず、その方が下の「ゆかしき事もなしや」ともよく應ずる。又、「所せく……だに」を誤つた箇所に入つたといふ推定から移動させるとすれば、「されど何か」の次に持つて來ることも許されないではない。寧ろ筋も立ち口調もよくなる。要するに此の廣道案は最善のものとは看做し難い。さればとて、細流や小櫛のやうに、

君たちの……まして……偶ひ給はむ、所狭く思ひ給へぬだに。

と上文の添句として讀み切るのも、不自然さは減じ、且、談話の口氣として許され得ないことではないけれども、なほ何となく一寸何か足りないやうな感じも與へられる。即ち「所狭く思ひ給へぬだに」を倒置法と見て上文に附屬させて釋

する事も、形の上からは甚だしい無理ではなく、苦しまぎれの糊塗の解とのみは輕視せられない。當時でも特に男性の會話には普通に用ゐられたであらう——無論當時に限らず、何時の時代でも、現代でも盛んに用ゐられる——様式であることは、世繼の翁の談話の形式に假りてある大鏡には、隨處に見出されるので容易に想像せられ得る。

元慶三年己亥五月八日御出家、御年三十、水の尾の帝と申す。この御末ぞかし、今の世に源氏の武者の族は、(上卷、清和天皇)

安和二年己巳八月十三日にこそは位に即かせ給ひけれ、御年十一にて。(同、圓融院天皇)

さやけき影を眩く思召しつる程に、月の顔に霞雲の懸りて少し暗がり行きければ、わが出家は成就するなりけりと仰せられて、歩み出でさせ給ふほどに、弘徽殿の女御(恆子)の御ふみの目ころ破り殘して御目も放たず御覽じけるを思し出でて、「暫し」とて取りに入らせ給ひける程ぞかし、栗田殿(道兼)の如何に思召しならせおはしましぬるぞ。只今過ぎさせ給はば、おのづから障りも出でまうで來なむ」と虚泣きし給ひけるは。(同、花山院天皇)

誰も參り給ふに、小野宮の大臣(實賴)ぞかし「參らじ、御前の汚きに」とつぶやき給へば、後にこそ帝思召し合はせけめ。(中卷、太政大臣公季)

此處も談話中の一句で、且話者が馬頭であり、特に調子づいた議論の一小段落と看れば、さうした表現と解しても非常に不自然とは言へない。唯、語勢の上から見て——意味の上からも其の氣味はある——稍蛇足の感を如何しても免れぬやうに思ふ。「まして」は下の「だに」に應ずるとも看られるが、下の句が無くて、上文「されど……無しや」までに對應してゐるとしても十分解釋はつく。否、その方が寧ろきつぱりする。

すると残る所は、細流が否定した讀み方、即ち下の「容貌きたなげなく……」へ續けて讀む行き方であるが、これは以下の全文と直接には何の關係もない一句を、機械的に取つて附けたやうな形にも見えて、愈、筋が通らぬこととなる。唯、併し、上を承けて、我々風情の賤しい者共の社會で申して見ますと——上流の方の事は一向存じませんが、まあ大

じた變りもなからうやうにも思はれますけど、ま、それは兎も角もとして——と總括的に言ひ起しておいて、それから「容貌……」以下「出で榮えするやうもありかし」までの論を説き進めるといふ意味に理解すれば、容認出來ぬことはない。話の工合では、さうした場合も屢々ある。

原文に誤脱があつたとすれば別問題であるが、(若し「所せく……」の一句だけが誤つた箇所に分れ入つたとすれば、其の還元箇所を廣道案或は愚案いづれかにし、且「なにか」は「なにがし」に改めないで置くのが先づ無難であると思ふ。)さなくば、前の倒置法的の解か、右のやうな下文の總括的冒頭句としての解か、何れかで満足しておく程度にとゞまる他は無い。(有朋堂文庫本源氏物語の頭註は、前説でなく、先づ後説の方であるが、右に述べた卑見とは少し違ひ、「これを初めの難とすべし」までに掛かる句と觀てあるやうである。)口譯には兩方の間を取つたやうな獨立の文にして置いた爲、解釋が曖昧になる憾を感じるので、此處で稍詳しく説述しておく。併し、原文が既に多少の鮮明さを缺く所があるは止むを得ない。尤もそれも我々に正確に讀破するだけの力がない爲かも知れないが、先學も亦同じ責務を感じさせられるであらう事を思へば、幾分の荷の輕さは覺えるけれども、それが自分の能力の貧しさと不勉強との辯護、釋明には少しもなり得ないことを愧ぢる。

「今はたゞ品にもよらじ、容貌をば更にも言はじ。いと口惜しく、拗げがましきおぼえだに無くば、たゞ偏に物眞實に、靜かなる心の

「口譯」 馬頭もう階級も問題に致しますまい。容色の好き嫌ひなんて決して申しますまい。てんで御話にならぬ程ひねくれて我慢が出来ぬといつたところさへなけりや、臨目もふらず夫大事に仕へてくれる氣立のやさしい女をば、友白髪まで仲よう連れ添ふ女房として定めて置が最上。萬が

趣ならむ寄邊をぞ、終の頼所

には思ひ置くべかりける。餘りのゆるよし、心ばせ、打添へたらむをば、喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、強ちに求め加へじ。後やすく長閑けき所だに強くば、うはべの情は、おのづからもて附けつべき業をや。艶に物恥して、恨み言ふべき事をも、見知らぬ様に忍びて、上は強顔く操作り、心一つに思ひ餘る時は、言はむ方無く凄き言の葉、哀れる歌を詠み置き、忍ばるべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海面などに這ひ隠れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いと哀れに悲しく、心深き事かな

一にも其の人に、趣味・品格の景物が餘分に添うてでもれば、福を引き當てたと仕合を悦び、縦し又、少々位缺點があらうとも、無理な注文をつけるのは止しにしませう。餘事は兎もあれ、御互の間の根本の愛について、安心して信じてやる事が出來るといふ點さへ大丈夫なら、表面の技巧などは、自然と後から結構付け足せるものですからね。變に嬌態をつくつてはにかむことばかりして、夫に對して當然恨みを言ふべき筋があつても、わざと力めて知らぬ風をし、外見は無關心さうに自分を抑へてゐるが、さうく己を偽つても押通せず、たうとう小さな胸一つに藏めて置けなくたると、忽ち書置一通の事、御定まりの恐しく凄く捨ぜりふとか、無暗に感傷的な歌などを遺すやら、涙を誘ひさうな形見の品を留めて置くやらして、山里の奥深くや、娑婆を離れた海岸などに、こそくと姿を隠してしまふものです。まだ私が子供でした頃、女房達が小説を讀んでるのを聞いて、其の女主人公が斯んな女ですと、唯もう氣の毒で無性に悲しく、普通の人には出來ぬ事だと、涙まで零したものです。今になつてみますと心深いどころか、あんまり見え透いてきざな御茶番氣たつぶり過ぎますからね。元來が大切にしてくれる男を置きざりにして、如何に稼へられない辛い目を一時見せられたからつて、夫の心を汲んでも見ないかなんぞのやう

と、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと軽々しく、殊更びたる事なり。志深からむ男を置きて、見る目の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隠れて人を惑はし、心をも見むとする程に、長き世の物思ひになる、いと味氣無き事なり。心深しやなど譽め立てられて、哀れ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つ程は、いと心澄めるやうにて、世に顧みすべくも思へらず。

『いであな悲し、斯くはた思しなりにけるよ』など様に、相知れる人來訪らひ、一向に憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落せば、使ふ人、古御達など、『君の御心は

に、姿を晦まして大騒をさせ、心底を探つてみようなぞとするうちに、お芝居が過ぎて、取り返しつかぬ眞實の長い嘆きの種になるなんて、全く馬鹿げきつてるぢやありませんか。それへもつて来て、おせつかひ屋にでも『全く感心な御人だ。貴女はえらい』などと油を掛けられようものなら、逆上が昂じて其の場を去らず、俄仕立の尼さんが出來上ります。氣の立つてゐる發心の當座こそ、なる程綺麗さつぱりと清々しい心持になつたやうに思はれて、あんな娯婆へなんぞ誰が二度と再び御目にかゝるもんかと、すつかり殊勝な善知識になり濟まして居りますが、そこへ『あれまあ、お氣の毒に。こんなにまで思ひ詰めなさらなくつたつて』などと、知り合ひの人が見舞に來て言つてくれたり、自分から飛び出しはしたものの、未練は申すまでもなく十分にあらうといふ夫の君が、此の發心騒ぎを人から聞いて涙を零しますと、その話をしながら女の召使や老女共が寄つてたかつて、『そうれ御覽なさいませ。殿は御本心はおやさしくつていらつしやいますものを。早まつたことを遊ばして、可惜御身を此のやうに』などと代る代る口説き立てたりしますので、覺えず自分の手をやつて、短い額髪のあるたりを、そつと撫でまはしてみても、がっかりして、急に心細くなつて深い溜息と一緒に情氣かへつてしまひます。のみ込んで、後から、

哀れなりけるものを、あたら御身を『など言ふに、みづから額髪を搔探りて、あへなく心細ければ、打撃みぬかし。忍ぶれど涙零れせぬれば、折々毎にえ念じ得ず、悔やしき事も多かめるに、佛もなかなか心ぎたなしと見給ひつべし。濁に染める程よりも、生浮びにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿世淺からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがて、その思ひ出で恨めしき節あらざらむや。悪しくも善くも相添ひて、とあらむ折も、斯からむきざみをも、見過したらむ中こそ、契り深く哀れならめ、我も人も、後めたく心置かれじやは。

と涙が出て來て、今更後悔しても始まらず、一旦斯うなると既う、何かの折毎に抑へきれず、ともすれば愚痴の出たがる事だらけ、これでは佛様だつて却つて、思ひ断りの汚い女だなあと、苦笑ひをなさらうつても。濁惡の世にひたつてゐた在俗の間の方がまだしもで、此の生半可の似而非悟道では、罷り違つて地獄行きになつてしまひさうに思はれますな。若し亦切つても断れぬ宿縁が深くつて、幸ひと尼にもならぬうちに探し出して、舊々通りの鞘に納まつたところで、一遍罅隙の入つた斯うした想ひ出は、そのまゝ消えずに何時までも融け合はぬ所が何處か無しには濟まされましまい。善かれ悪しかれ、一旦夫婦となつた以上、そりやあ長い間には、氣に障る事もありませうし、つむじを曲げたいやうな時もあるませうが、其處をじつと踏みこたへて、御互に恕し合ひ譲り合ふ仲こそ、眞實の夫婦といふもの、情愛も却つて濃かに深くなるものです。一度氣まづい事件が持上つてしまへば、雙方とも心から許し合へず、何となくこだはりが出来ずにはおきませんからねえ。又少し夫の愛が他へ外れてゐると知つた場合、眼の色變へて女菩薩が夜叉の角を生やすなど、これは又、愚の骨頂でさあ。縦ひ今、男の心が自分を離れてゐるにしても、曾ては自分でなけりや夜も日も明けぬ時あつた夫ぢやないかと、馴れそめの昔を思ひ出したら、

又斜に移ろふ方あらむ人を恨みて
 氣色ばみ背かむ、はた痴がましか
 りなむ。心は移ろふ方ありとも、
 見初めし志いとほしく思はば、
 さる方のよすがに思ひてもありぬ
 べきに、さやうならむたじろぎに、
 絶えぬべき業なり。すべて萬づの
 事なだらかに、怨すべき事をば、
 見知れる様に仄めかし、恨むべか
 らむ節をも、憎からずかすめなさ
 ば、それにつけて、哀れも増りぬ
 べし。多くは、我が心も、見る人
 から治りもすべし。餘り無下に打
 緩べ見放ちたるも、心安くらうた
 きやうなれど、おのづから輕き方
 にぞ覺え侍るか。繫がぬ舟の浮
 きたる例も、實にあやなし。然は

その樂しかつた夢に免じてでも、さうした縁と辛抱してゐられさうなもの
 に、斯うしたいさこさで破鏡の悲しみの段取になるのが紋切型です。何に
 つけても、女は萬事穩かにしてゐて、怨みを言ふべき事があれば、それと
 なく言葉素振の端々にちらと見せ、食つてかゝりたいた筋があつても、不快
 を與へぬやうにしてチクリと釘を打つて置くといふやり方なら、却つてそ
 の爲に夫の愛情も増して来るものです。大抵の場合、男の心つてものも、
 まあ妻の態度次第で尻が落ち著くものでしてね。かと言つて、餘り絶對不
 干涉主義は又、安心の大有難で、愛い奴と言つてやりたいやうですが、自
 然と見くびることにもなるわけでして、男の自墮落は募り放題、丁度岸に
 繋ぎ留めてない舟が風のまに／＼ふらつく譬そつくりで、全く御話にもな
 りませんや。ねえ、さうでは御座いせんか」と一座を見渡すと、中將は
 さも／＼我が意を得たと言はんばかりに大きく頷く。

原* 澹乎若深淵之靜、
 泛乎若不繫之舟、
 (文選一三、鷗鳥賦
 の句)
 無情水任方回器、
 不繫舟隨去住風、
 (文集三六、偶吟)

侍らぬか」と言へば、中將頷く。

「さしあたりて、をかしとも哀れ
 とも、心に入らむ人の、頼もしげ
 なき疑ひあらむこそ大事なるべけ
 れ。我が心過無くて見過さば、さ
 し直してもなか見ざらむと覺え
 たれど、それ然しもあらじ。とも
 かくも違ふべき節あらむを、長閑
 やかに見忍ばむより外に、増す事
 あるまじかりけり」と言ひて、我が妹の姫君は、この定めに適ひ給へりと思へば、君の打眠りて詞
 交せ給はぬを、さう／＼しく心やましと思ふ。馬頭、物定めの博士になりて、ひゞらぎ居たり。中將
 は、この理聞き果てむと、心に入れてあへしらひ居給へり。

根を引き直すことが必ず出来さうに思へるのだが、どうもさうは行かぬも
 のと見えてね。仕方がないから、如何にかかうにか氣に食はぬところを、
 氣長に我慢するより外は無いものですなあ」斯う言つて、心では、自分の
 妹の姫君は丁度びたりと此の條件にあてはまると思ふので、何とか言つて
 貰ひたいところを、何て憎らしい事か源氏の君は知らん顔で眠りこくつて
 ゐて、一言も言葉をかけられぬのが、物足りなくつて不平でたまらぬ。馬
 頭は品定の座長氣取で大得意にべら／＼と辯じ立てる。それを又中將は、
 此の面白い議論の底の底まで聞き盡くさうと、乘氣になつて

原* 奏上

語義

「もて附く」附け加へる。「おのづから……」は、後天的に添加し得るの意。「上はつれなく操づくり」表面は冷然と抑制
 し、強ひて平氣な風を装ひ。守部の湖月鈿別記に「下の心には怨を含みながら、うへは知らず顔しての意也。みさをつくりとは、こゝ
 は眞實の操にはあらず、作りこしらへてもて附けたるを云ふ」とあるが正しい解である。「海面」ウミヅラ。海上のことにもいふが、
 此處は海邊の意。「古御達」フルゴマチ。老女等。「額髪を搔探りて」髪を肩の邊で短く削ぎ棄てた尼即ち下尼(サゲアマ)が惜しさう
 に自分の額の上をいちくりまはすのである。「え念じ得ず」我慢がしきれず。「濁りに染める程」濁世の俗生活當時。「悪しき道」邪
 は、きき

道。悪趣(アツシユ)。現世で悪事を爲した者が死後に墮ちて行く所、即ち地獄道・餓鬼道・畜生道(以上を三惡道といふ)及び修羅道(これを加へて四惡道といふ)。「見る人」妻。「澹乎若……」(脚註)「澹乎」若「深淵靜」。若「不繫之舟」。泛「泛」に「池」に作る。「澹乎」は水の靜かな形容。「泛乎」は浮きくくと漂ふ形容。賈誼(漢の文帝の時の大學者)の鵬鳥賦の句である。鵬は鷲(けう)ふ。鳥)の事を楚人が然う呼んでゐるので、賈誼が賈才を忌まれて長沙に謫せられてゐた頃、此の鳥が賈生の屋舎に飛び入り坐隅にとまつたのを見て感あり、胸臆の鬱を吐いたのが此の賦である。文選(二三)にも史記(屈原賈生列傳第廿四)にも載つてゐる。「無情水……不繫舟……」(脚註)白氏文集(卷三六、半格詩、律詩)に「偶吟」と題して收めてある。全詩は「人生變改 故無窮、昔是朝官 今野翁。久寄形於朱紫内、漸抽身入蕙荷中。無情水 任方圓器不繫舟隨去住風。猶有鱸魚專菜 興來春或擬往江東」。「朱紫」は衣服印綬の色、高官の義。「蕙荷」は楚の詞で荷衣蕙帶、「朱紫」に對したので、荷蓮、蕙は蘭に似た蕙艸、此處は田舎漢の仲間入をした意。「去住」は去くと住まると。「專菜」は國語では「ぬなは」「ぬなは」などと言ひ、池沼に自生する睡蓮に似た植物で食用に供する。「さうぐし」寂しい、物足りない。「ひららぐ」へらへら喋り立てる。名義抄には「嘩」の字をあて、「ヒビラケ」サハツル「カマイビスシ」などと訓じてある。

【釋評】馬頭の詞の通り、昔物語にも此の段の話のやうな筋書はよくあつたのであらう。それと同時に想ひ浮ぶのは、これは「作り物語」の方ではないが、日記體の告白小説と言つてもよい蜻蛉日記——前にも既に述べた——の著者が自身同日記中に記しつけてゐる鳴瀧籠りの一段である。眞實味と母性愛とに満ちた右大將道綱の母と、此の少し断引のあり過ぎる生浮びの尼御前と、性格に、態度に、断ちきれぬ可愛い絆の有無に、もとより同日の談でない點は一にして足りないが、薄れ行く夫の愛を怨んでの家出、深いやうで浅いは女のする事、心の淨まり安まるやうでなほ悔やし悲しの涙をとどめかねる折々、すんでの事で尼にならうとしたところを、所謂「絶えぬ宿世淺からで、尼にもなさて尋ね取一つたは、先づめでたいが、それで夫が眞底から謝つて再び我が手に歸つて來るところか、幾日も経たぬに「山ならましかば、かく胸ふたがる目を見ましや」と、また悔やまれる相も變らぬ物思ひさへあるに、無邪氣で拘はれぬ夫は、大して何とも思はぬばかりか、持前の茶氣を出して、尼になり損ねて俗へ還つた記念に「山籠の後は蛙腿(あまがへる)といふ名を付け」る始末、正に「やがて、その思ひいで恨めしき節、あらざらむや」ではなからうか。

それは圓融天皇の天祿二年六月初から末まで約一ヶ月、去年元服した愛息道綱が十七歳の夏、夫の兼家は四十三歳の時である。兼家といへば九條師輔の第三子で、所謂東三條の大臣、大鏡に「大入道殿」とある人、即ちかの道長等の父である。道綱はその次男で、道長には異腹の兄なのである。

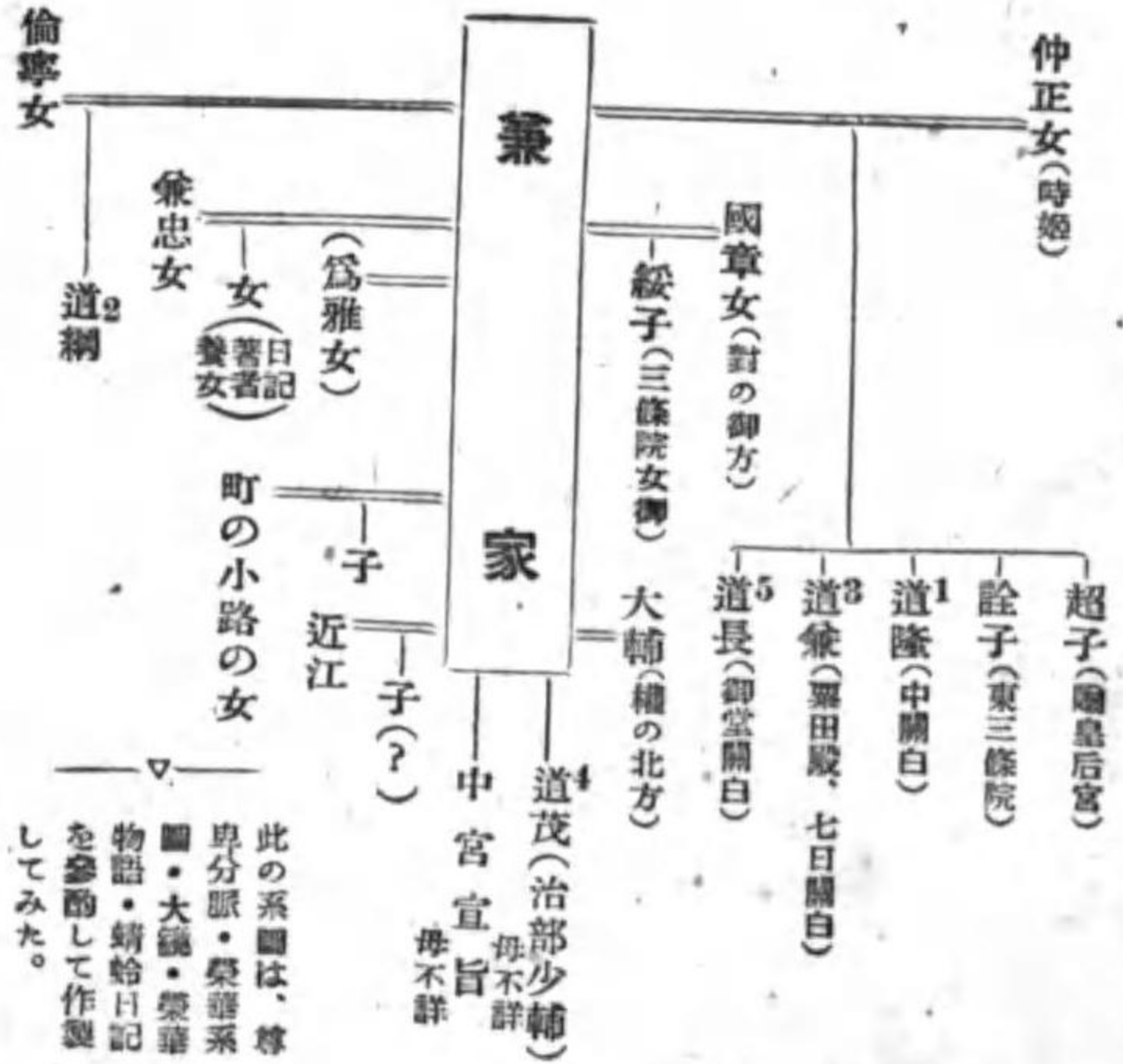


次郎君は陸奥守倫寧の女の腹におはせし君なり。道綱と聞えし。大納言までなりて、右大將かけ給へりき。この母君極めたる和歌の上手におはしければ、此の殿(兼家)の通はせ給ひけるほどの事、歌など書き集めて、かげるふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。

と大鏡(中巻、太政大臣兼家)に見えて、百人一首で誰も知る歎きつゝ、獨りぬる夜の明るまは、いかに久しきものとかは知る

の歌と兼家の詠とを載せてある。その時の事は日記にも自ら記してゐる。(ついでに、此の人の妹と菅原孝標との間の女が更級日記の著者である) 當時の習俗であるから不思議はないが、兼家は關係した女性が數人あつて(同時でないものもあるが)、道綱母の他に、攝津守藤原仲正の女(時姫)、皇后宮大夫藤原國章の女(大鏡及び榮華物語には「對の御方」とある。甚だ浮華ですぎく)しい女で、兼家の長子道隆とも通じて、一女(中宮の御匣殿)を擧げてゐる。その血を承けてか兼家との間の尙侍緩子(三條

院が未だ東宮で御元服あらざられた夜参入した方。一八〇・一八七頁参照は源宰相頼定と浮名が立つた話が大鏡(中巻、太政大臣



ある女梅壺女御(所謂東三條女院詮子)の侍女で「權の北方」と時めかされた大輔やなどがある。以上の中かも知れぬが母の不詳の子もあつて、中宮の宣旨などは、自ら「殿の御女と名のり」出て、「殿の御心地にも然もやと思しける人」(榮華、さまざまの悦巻)なのである(源氏物語の近江君はこれに示唆を得たものであらう)四男も「外腹」と大鏡にあるし、此の男女、共に各別腹なら、又他に二人の女があつたわけである。兎も角正妻だけでも三人(時姫・道綱母・對の御方)あつたやうで、世

兼家)にも榮華物語(鳥邊野巻)にも見え、源氏物語のモデル研究家堀内昌郷(藤井高尙の門人)は、これが臚月夜尙侍と源氏のモデルになつたらうと推定してゐる(源氏紐鏡(鳥邊の子)の刊)のは、見顯す人が一方は道長、一方は右大臣なまでの、酷似したところもあり、無下に否認は出来ない)源宰相源兼忠の女(日記)、中納言爲雅の女(日記附録に見えるが、疑問の餘地もある)、それに日記に見える「町の小路の女」——光源氏の通うた夕顔の花咲く宿の女の類とも言ひたいやうな、そして前記「敷きつゝ」の歌は兼家が門を叩き乞ひて、その女の家へ行つて泊つた翌朝著者から贈つたのである——や、同書の小野宮太政大臣實頼の召人(妾)で實頼の薨後兼家の思ひ人となつた近江といふ女や(後に子を産んだことの見える女もこれか、別人ならば今一人)、榮華物語(花山巻)に記されて

に三妻鍾と語はれた程である。就中、超子(冷泉女御・詮子(贈皇后宮)それに道隆・道兼・道長の三關白を生んだ仲正の女の權勢の壓倒的なのは無論の事で、到底蜻蛉日記の著者の敵でなく、道綱の出世も、長男道隆は別としても、三男・五男(四男治部少輔は「世の白痴」で社交界にも出ずじまひだつたと大鏡に言つてある)とすら比較にならぬ(道綱も東宮傳から皇太后宮大夫とまではなつたが)。それも夫の愛さへいつまでも特に他に勝つて濃かなら満足されやうもあらうが、「いにしへ人」あまましき人「音なき人」絶えにし人」と絶えたる人と屢、怨んでゐる位、ともすれば漸くかれぐになりがちで、それに新しい女は次々と出来てくるし、暫くも胸の明く隙もない淋しさ苦しさ、

かく年月は積れど、思ふやうにもあらぬ身をし敷けば、聲改まるも(和元年ガ巻レテニ)よろこばしからず。猶物はかなきを思へば、有るか無きかの心地ぞする、かげるふの日記といふべし。

と著者自ら題名を命じてゐるにも知られる鬱悶の連続、僅に「になく思ふ人」頼もし人「唯此の一人ある人」の道綱に愛著と責任と慰藉と希望とが繋がれて、死ぬにも死ぬべからぬ思ひを懐へて來た果てが、たうとう堪へきれずに決行したのが此の鳴瀧の山籠の一條だつたのであつた。

おとなしいやうで氣の勝つた、つゝましいやうでなか／＼倍氣のすさまじい、表面は強くつれなくて、下は弱く涙もろな、彼の六條御息所にも劣るまじき此の大將道綱の母は、毎日公用に託けて、我が方には今宵こそと外を通る車の音毎に空しく胸を蕩かさせながら、かの近江とやらが許へは十夜も續けて通うたと人の噂を耳にするにつけ、愈、あぢきな身の上を思ひまはして、「長精進して山寺に籠り」、ならう事なら世間と絶縁して「背く方にもやなりなまし」と思ひ立つたのは、二月の半ば、親族に出産があつたり、父の家へ行つたりして、漸く精進を父の家で道綱と始めたのが、四月朔からだつた。昔は他人の佛いちりを頭でなしに笑ひ散らした自分が、今は數珠引提げ經ひろげて、一向來世を願ひ急

ぐとは何たる皮肉であらう。

我は初めしよりも、ことごとくしうはあらず、唯土器に香打盛りて、^{けふそく}膈息の上に留きて、やがて押しかりて、佛を念し奉る。その心ばへ、唯「極めて幸ひ無かりける身なり。年頃をだに心ゆるびなく憂しと思ひつるを、かく淺ましくなりぬ。疾く死なさせ給ひて、菩提叶へ給へ」とこそ。行ふまゝに、涙ぞほろ／＼と零る。あはれ、今やうは(當節ハ)女も數珠引提げ、經引提げぬなしと聞きし時、まさり顔な。さる者ぞ、^{やまひ}寡には成るてふ。(ナンテ出来過ギテ恰好ダラウ。ソナナ人が寡婦ニナルンダツテサ)など、もどきし(悪口ヲ言ツタ)心は、いづちか行きけむ。夜の明け暮る、も心もとなく、眼無きまで、そこはかともなけれど、行ふとそのまゝに、あはれ、さ言ひしを(昔ア、言ツタノヲ)、聞く人如何にをかしと思ひ見らむ。はかなかりける世を、などて然言ひけむ(ナセアンナ不眞面目ナ事ヲ言ツタラウ)と思ふ／＼行へば、片時涙浮ばぬ時なし。人目ぞ、いとまさり顔なく(大威張テラレズ)恥づかしければ、押し隠しつゝ、明し暮す。

註*「まさり顔」の上に契沖は「あま」の二字を補つて、「尼増りかほ」と傍注し、坂道の蜻蛉日記解環(此の日記の註釋書)にも之に従つてゐる。さうならば、「尼サン以上ノ氣取りテキル」の意に解せられることになるが、當時の「法師まさり」といつた用法とは異なるわけである(一六八頁「語義」「あげ劣り」の項参照)。若し上にそんなやうな語を是非二字補入するとすれば、寧ろ「あなし」とありたいところで、語氣もその方が落ちつくし、字津保物語(國讓中卷)にも「あなまさり顔にこそ」の用例もある。但しこれは本文批評の問題で、善本の發見に待つべきであらう。

眠る夜の夢には、頭を刺つたり、腹の内に蛇がゐて、それが歩き廻つて肝を食べたりする變な事ばかり現れた。留守宅からは五月の節句に萬蒲を葺かねば忌々しからう。如何しようかと言つて來ても、「世の中にある我が身」でもないに、「更にあやめも知られ」ぬものを、「いで何かゆゑしからむ」とつひ言ひたくなる。その變り榮えもせぬ家へ歸つても、待つてゐるのは、ましてつれ／＼に心淋しい長雨時のみである。その間にもつれない夫は面あてのやうに態々門の前を前追ひ散らして通り過ぎたり、申譯的に文をよこしたり、却つて益、胸は焦れるばかり、決行し得ぬ悔やしさを責めつゝ、

遂に六月四日西山へと出て立つた。流石に長精進の爲に家に殘し留めて置く道綱からの消息に添へて、我も一筆、にくい人に最後の詞をと、

身をし嬰へれば(生レ變ラネバ)とぞいふめれど、前渡りせさせ給はぬ世界もやある(若シヤ私ノ眼ノ前ヲアチコチ憚カラズ往反ナサルアチタノ影ヲ見ナイテ濟ム世界テモアリハモメカ)とて、今日なむ(今日家ヲ發チマスル)。これも怪しき問はず語りにこそなりにけれ。

と認めてやつたのも、なほ忘られたくない未練が心の何處かで煽りを掛けるのであらう。驚いた兼家から、「無理も無いが、何處に行く氣だ。今度だけ思ひとまつてくれ。相談もある。直ぐ行く」といふ返事が來たのを披き見る間も心せかれて、そゝくさと家を後にしたのだつた。

登つた山寺の様は珍しげもないが、却つて想ひ出されるは、憎や、昔二人して時々此處へ來た折の事、二三四日も泊つたのさへ、丁度また今的时候だつたではないか。今日の御籠りも夫が公務の休暇で一緒だつたらなど、ふと思ふさへ何たる心弱い馬鹿な自分だらう。而も初めて今夜から勤行に身を入れようとする此の山まで、時の貝四つ吹く頃、大門の方が俄に騒がしくて、かの「ひたすらに憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて」自身でたうとやつて來ようとは。弱身を見せまいと迎を却けた代りに、物忌の穢を遠慮して車を下りぬ父との間に板挟みになつて、一町ばかりの石段を往き反り／＼昇り降りしては、二人の親の機嫌を取り結ばうとして、雙方から役立たずと叱られ追ひ返され、果ては困つて泣き出してしまつた程に、生命とも頼む獨り子の大夫道綱をいぢらしい目にあはせた不憫さ苦しさ。大夫をのみ留めて、淺まし人は力無く引返して行つた。翌日からは心安く行ひは出來たが、垣根の花散り果てた龍膽草、時過ぎた深山鶯、驚くまで照らす螢火、里では二聲と聞かせずに腹立たせた時鳥の打解け鳴き、其處と思ふまで叩く水鶏、夕暮の入相

の聲、鯛の音、めぐりの小寺の小さな鐘、前なる岡の社の法師輩の讀經、見るもの聞くものすべて「いとみじげさ増る物思の柄」であつた。物もえ食はずにだん／＼瘦せ細つて行く愛し子の姿の悲しいのに、母を案じて物思ひ入れさせまいと、わざと「寝も寝／＼」と言つてくれるのが胸に針でも刺されるやう、死ねもせず尼にもなれぬのも、おまへ一人に障つてではないかと、母子は我を忘れて泣き合ふ。

勿論「人やりならぬ(他人ノシマ事アナイ、自業自得ノ) わざなれば、問ひ訪らはぬ人ありとも、ゆめにたらくなど思ふべき」ではないが、それでも折々訪問の人はあつた。而もいづれもが諫め慰めて心を鈍らせる人ばかり。京の叔母が来た。五六日居て歸つて行く車の後影をつく／＼と見送つてゐるうち、急に気分が悪くなつて苦しくなつて来たので、同じ山籠りの禪師を頼んで護身の御加持までして貰ふ情なさ。昔は繪にも話にも嫌な顔をしたやうな事が、其の儘そつくり我が身に経験させられようとは誰が夢にも思ひかけよう。兄(長能か)と、又かの叔母が再び歸つて来て、里では心配で来てみれば此の不吉さと、枕上に這ひ寄つて、よ／＼と泣くので、我も「人やりにもあらねば、念じ返せどえ堪へず。泣きみ笑ひみ、萬づの事を言ひ明し」、急ぐ連れもあるから、又こそ見舞はうと、翌朝叔母は歸つた。入れ代つて夫から食物や僧達への布施物が二車来た。又、西の京の人々からの見舞品も澤山届いた。「山の末と思ふやうな自分へ逢々送つてくれる人々の親切の嬉しさは、却つて身の憂さを餘計に思ひ知らせるやうな情の罪科」世間並にこれが御壽命の終といふ時なら御出家も致し方はなしとして、さうではなうて、尼まがひの山住から又京へ歸つての御住まひは馬鹿らしい話。殿も今一度は御迎に御出でなさうに、それでも山を御下りにならなんだら、世間のいゝ物笑になりますぜ」と傍若無人に言ひ散らした殿の御使の詞も耳が痛く、何より御可愛さうな若君と、我が心強さを口説き泣かれると、今度の名残惜しさ心細さは一入で「我ならぬ人は、ほと／＼(殆ど)泣きぬべく思ふ」のも無理はない。唯、自分だけは嘲

られても泣かれても、つとめて平静を失ふまいとした。十八日頃、心深く物を思ひ知る「生親族だつ人」が来た時だけは、會ふと先づ「如何で斯くは(ドウナスツタンテス、マア)。何となどせさせ給ふにかあらむ。異なる事あらでは、いと便なきわざなり(コレテハ濟ミスママイ、ホンニ御氣ノ毒ナ)」と同情してくれるので、胸にためてある數々や、身の上の切なさを打明けて存分泣いて貰つた。その人からの文の

世の中は思ひの外になる瀧の深き山路を誰知らせむ

の歌にも、

身一つのかくなる瀧を尋ねれば更にかへらぬ水もすみけり

とも答へてやつた。夫からの文に、その返事を無理に書かせて大夫が折も折大雷雨の日に自分で京へ使した日もあつた。西の京の人の文、昔の女中から山の侍女の許への手紙も来た。貞觀殿の尙侍(登子、師輔女、兼家妹)からの消息、御嶽から熊野へ大峯を越える知人の修行者が落して行つた歌の訪らひもあつた。關白殿(兼家の兄兼通が、但し關白は翌三年十一月である。兼家が後日此の記事を書いたとすればそれとも前關白故小野宮實頼か)の公達兵衛佐(頭光正光等の内か。此の頃右兵衛權佐には兼家は無い。兼家の長兄兼盛の孫、兼家がなつて来た)とかが兼家の傳言を齎して、今日直ぐ山を下れ、御供致さうと懇願した日もあつた。

これで「人も訪らひ盡きぬれば、又は訪ふべき人もなし」と思つてゐると、留守宅から愈、今日兼家が迎に行くとの知らせ、今度濫つて、後から下山したら、どんなにか人笑へにならうと言ひ添へて来た。誰も／＼二つ口なのも怪しく、さうは世に拗ねても居れまいと思ひ煩つてゐるところへ、唯一の相談相手と「我が頼む人」の父倫寧が地方の吏務を終へて歸京した足でそのまゝ来てくれた。暫らくは山寺の行ひも悪くはなからうと思つてゐたが、孫殿の様子が餘り可愛さうなで、一刻も早く下山するがよからう。今日ならば一緒に歸らうか、それとも明日にするなら明日も迎へに来よ

う」と勤める父の志、無下にもしかねて返事を躊躇するのを、「では、やつぱり明日」と言つて歸つて行つた。其の後へ引違へて果して彼の人が出来た様子、亂れる心俄にときめきする隙もあらせず、先夜と違つてつか／＼と入つて来た。几帳を引寄せて隠れても間にあはうぞ。香を盛り、數珠を引提げ、經を置いてある其の場の光景を見るなり、もういつもの口悪「やれ／＼恐や。これぢやあ御迎ひに參つて罰が當りさう」と散々出まかせに並べ立てて、大夫を促して荷物を矢場に引掻き集め、茫然と惘れてゐる妻に、「さあ／＼佛様に御暇乞／＼」と、「天が下の猿樂ごと(世間ニアツクサケト言ヒタイホドノ諧謔)を言ひの／＼し」つて、さつさと車を京へ急がせてしまつた。車の上でも滑稽な事はかり言つて笑はせるが、夢見心地に物も言はれぬ。申の時(午後四時)に山へ来て、家に歸り著いたのは亥の時(午後十時)、家はもうちやんと掃除して待ち受けてあつたが、氣分が悪いので几帳を隔てて打臥すと、留守の一人がひよつこり傍へやつて来て、「覆麥の種を採つて置かうと存じましたに、根もなくなつてしまひまして……。それに吳竹も一本倒れて居りまして……。繕はせたくて御座いますけど」と報告。今言はなくなつたつていゝ事をと、少し業腹でわざと黙つてゐると、眠つてゐるかと思つた意地悪男が耳聴く聞きつけて、障子越に悴の大夫に高聲で呼びかけた。

開い給へや。此處に事あり。此の世を背きて家を出でて菩提を求むる人に、只今此處なる人が言ふを聞けば、覆麥は撫でおほしたりや。暮れにければ立てたりや(吳竹)をもちつた酒器であらう。一本吳竹はなでたりや)とはいふものか。

聞く道綱は興じて笑つた。可笑しいけれど「露ばかり笑ふ氣色も見せず」に怵へた。夜半ばかり、ふと誰かが今夜は西山からは此方が塞つてゐるんだつたと思ひついて言ひ出した。今から近い所へでも何處か方遠にと催促されるが、惱ましくて動くのもいやである。では方が明いたら又來ようと、男は一人で出て行つた。折角迎へ下された其の夜から又かうして別れねばならぬ約束に出來てゐたのか。思へば／＼あぢきない我ながら可愛さうな我が身だつた。鳴瀧籠りの喜

悲劇の幕は斯くて閉ぢた。そして焙きつけられた想出が、あまがへる一の有難い諱名に悔やしく留められた。

源注餘滴(卷二)に、大和物語(上卷)の平仲(平定文)が武藏守の女に逢うて後行かなくなつたので、女が怨み侘びて尼になり、男が尋ねて行つたけれど、塗籠に隠れて會はず返答さへしなかつた話を指摘して、此の段の「女房などの物語讀みしを」とあるのは、それや蜻蛉日記の記事などをいふかと言つてあるが、(平仲の話と似てゐるとは、源注拾遺(卷二)にも既に指摘してある)純昔物語といふ點からなら、大和の話の方が先づ挙げられるに論は無いが、山里、海面に遣ひ隠れる方からや其の他の點からも、餘滴には單に漠然と「蜻蛉日記にもさる事見えたり」とだけしか書いてない此の有名人な鳴瀧籠りの一條が寧ろ興味多くそして直ぐに聯想されて來る。尤も平仲の方も、「いと香しき紙に、切れなる髪を少し搔いわがねて包み」、それに

あまの川そらなるものと開きしかど我が目の前の涙なりけり

と一首を添へて持たせてやるなどは「言はむ方なく凄き言の葉、哀れなる歌を詠み置き、忍ばるべき形見を留め」る方で、これこそ所謂「いと輕々しく、殊更びたる事」の標本、塗籠に閉ぢ籠つて飛んだかぐや姫の出來損ひをやるどころ、手一杯の御芝居で、馬頭から槍玉に上げられる資格は十分ある。つまりこれは「哀れ進みぬれば、やがて尼になる」方の部類、前の方は「尼にもなさで」の方の部類、大和も蜻蛉も、源氏に對する影響關係を他の部分についてみても、或は紫女の腦裡に兩話とも何等かの姿で思ひ浮べられてゐたらうかと思はれる。餘滴にはなほ「人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて」といふ句に關して、枕草子の「むとくなるもの(見ラレタザマテナイモノ)」の段の一節を指摘してある。今枕草子の本文から全文を引けば、

人の妻などのすするなる物怨じして隠れたるを、必ず尋ね懸がむものと思ひ(ソノ女ガ)たるに、さしも思ひたらす(夫ハソレホド

は、きき

思ッテハキズ) 妬げにもてなしたるに(コツクノヤキモキニカマハズ案外平氣ニ落チツキ拂ツテキルオマ(シサ)、さてもえ旅立ち居たられば(サウイツクマテ家出シタマ、デモヲラレモノテ)、心と(自分カラノコ(ト) 出で來たる。

昔物語どころか、事實としてもやつぱりよくある、誂へ向きの曾我廼家仕立の一場だつたのであらう。そして又一千年の昔だけでも限らないこと勿論である。

又新釋(帚木)の眞淵は、此の條は伊勢物語の家出した女が再び舊巢へ舞ひ戻つて來たが終に復離別の結果を來した話(二段)と、紀有常の妻が夫を棄てて尼になつた話(一六段)などに基づいて、それに事を添へて想を構へたと見ると觀てゐる。これも決して單なる類話とだけで看流しては置けない點をも含んでゐる。前話は、相愛の間であつたのが、

如何なる事ありけむ、いさゝかなる事につけて、世の中を愛しと思ひて、出でていなむと思ひて、かゝる歌をなむ詠みて、物に書きつけける。

出でていなば心輕しいひやせむ世の有様を人は知らねば

と詠み置きて出でていにけり。

といふので、平仲の尼が、孰れかといへば「凄き言の葉」組なら、これは差し詰「哀れなる歌を詠み置き」の模範でもあらうし、自分から輕々しいと局外者にもどかれることを危懼してまでゐる。それが女の方から「念じ、わびてにやありけむ」たうとう歌を贈つてよこし、「又々ありしよりけに(前ヨリモ以上)言ひかはしたといふので、男の方は「いといたう泣きて」女の影を慕ふ所は「さしも思ひたらず」とは似つかぬが、やはり「さてもえ旅立ち居たらねば、心と出で來たる」部類の家刀自で、「むとくなるもの」の數から保障地域に避難しきるわけには行かない。而も結末が不芽出度では、「その思ひ出で恨めしき」段どころではない。兎に角、一部に於て源氏の此の條の説話構成に影響を與へたらうとの想像は可能であらう。なほ此の段は一面、前にも言及した通り(一二五頁参照)頭中の自ら語る常夏の女——即ち夕顔

上——との關係(三七六頁参照)にも或は間接に些少の影響があるかも知れない。少し穿ち過ぎた臆測をすれば、女を戀うて、

人はいさ思ひやすらむ玉がづら面影にのみいと見えつ、

と「何處をはかり(ナテド)とも覺え」ず尋ねあぐんで、「ながめ」て居る男の歌の中からも、「藤原の瑠璃君」と假に名づけて其の幸運を侍女の右近が祈り奉る夕顔上の忘れ形見、玉鬘の姫君は誕生しさうにすら思はれる(三八五頁参照)——無理にさう考へてしまはなくてもよいが。(此の段の「ありしよりけに言ひ交はして」の詞句、「忘るらむと思ふ心の」の歌、「中空に立ち居る雲の」の歌は又、若菜上卷の紫上が源氏の朧月夜に逢うて來たのを、知りながら角めだたぬ條の文に影響してゐると思はれる。)

後話は、「年頃あひ馴れたる妻やうく床離れて(仲がマツクナツテ)、遂に尼になりて、姉の先だつて尼になつてゐた許へ行くのを、貧しい夫が、流石に別れ際に氣の毒になつて餞別をやらうと苦心して親友に相談する話で、これは別れた妻が尼になる點が、此の條の本文と類話をなすのみで——而もこれは夫が承知の上での事であるが、此の段は却つて馬頭が後に語る指食女の話と必ず關係があるに違ひない。現に同條の「手を折りてあひ見し事を數ふれば」の歌は上句そつくり此の段の有常が親友に贈つた歌の上句を拜借してある(三二七・三二八頁参照)。これも少し亂暴かも知れないが、かの品定の「左の馬頭」も、源氏物語の臨本としての伊勢物語を通しての、その主人公格の「右の馬頭」(在原業平)の後身と一面見られなくもない。昔男の豊富な戀愛道の經驗は、亦雨夜のつれづれの一席を賑はすに足るべく、左馬頭の代役を勤めさせるに十分であらうことを疑はぬ。がさう言つたとて、業平即ち品定の馬頭と言はうとするのではない。それは寧ろ——在五の君の後繼者は光の君であらねばならず、又、品定の馬頭は、作者の紫女自身でもあらねばならな

事勿論である。

ついでに今一つ附け加へる。

昔、女、あだなる男の形見として置きたる物どもを見て、

形見こそ今はあなれこれなくば忘る、時もあらましものを(伊勢物語二一九段)

これは男女が反対であるが「忍ばるべき形見を留め」るは一、有名な歌ではあり、勢語と源語との影響關係が既に前から詳説した通りであるとすれば、紫女の念頭に此の一節が有意的でなくとも往來してゐたことを否認する必要はあるまい。

扱、昔物語の御手本があるにせよ、寫實の好資料があるにせよ、此の本文の一段「心深しやなど譽め立てられて」の一句、穿ち得て妙、「みづから額髪を搔探りて」の光景覺えず讀者を失笑させる。流石に旨い筆である。怖い程心にく。

馬頭の細君詮衡の目安論は歸著する所、非階級本位・非容色本位、そして最も平凡な併し百パーセント安全な人物本位といふことになる。而も最少限度の安全地帯を踏まへて、温順主義・實實主義・貞淑主義である。何よりも夫婦愛が根本で、其の他は第二第三義といふわけで、何の奇も無く、甚だ常識的通俗的論結であるが、さりとしてそれは誰も反駁の必然的理由を見出すことが出来ぬ大きな真理である。御互に理解し合ひ宥し合ふ心持、それが夫婦生活の破綻を永久に禦ぎ得る唯一の道で、而もその心持の根ざす所は、理窟抜きに好き合つてゐるといふ至極簡單明瞭な而も重要な事實でなければならぬ。此の出雲の神様の封印がちぎれたりほどけたりしさへせねば、先づは家内安全息災延命、いつもホー

ム、スキートホームを譲つて居れる。敢へて似た者夫婦に限らぬ。似ぬ者夫婦の方が却つて不足を補ひ合つて立派に和合の實を擧げる場合も珍らしからざる事、複雑な社會生活が家庭生活と二重三重にも營まれる世でも、將た又階級意識のやかましい國でも、夫婦生活といふ點だけからいへば、此の原則から決して自由勝手に離れて遊弋する事を許されぬ。不幸にして——幸か不幸かほんとはわからぬが、常識的には少くとも——自身の性格や生活に撞著が生じたり、又自身は懸命に努力しても環境や不可抗力がそれを牽制したり破壊したりすると、慘ましい悲劇の奈落に落ち込まねばならぬ命運を背負はされる事にもなる。まして自分から消極的挑戦を夫君に宣して籠城の水の手斷ちの兵法に出ると、天晴れ女孫子が贏ち獲た利得は、精々三面材料式の芳しからぬ名譽に、とどの詰りの泣き寝入り、若し亦積極的に勇敢な直接行動に訴へると、女夜叉の角は火を噴いて、胸倉に掛かる俄柔道の手、殺さば殺せの大度胸は、平和な愛の巢を一瞬にしてジュッルム・ウント・ドラングの世界に劇變させるのは裏店國の茶飯事のやうである。だから和樂を好む者は互に須らく努力を吝んではならぬといふのである。「見初めし志いとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに」は、少し男性の手前勝手過ぎる感もあり、當世には抗議も出かねまじく思はれるが、併し此處をじつと踏みこたへて忍従し、冷靜に果して全然自己に責任が少しも無いかを反省してみることが一番大切、そしてやがては悔いて夫が再び暖い胸に歸つて来るのを徐に待つのが眞の深い愛、思慮ある妻としての態度、それが戀の窮極の凱歌だ、一時の息齋に取亂してはならぬといふ意味でなら肯定は出来る。それよりも何よりも、さうならぬうちが肝腎、夫の行動もつまりは妻の心掛一つで、右へも行けば後へも返る。家庭が楽しい天國なら、何を苦しんで餘處外へ慰めを求めに浮れ廻らう、夫の足を引留めて置くには、夫を心から悦ばせるに限る。さうなると、いつも家庭は和氣霽々、よき夫であり、よき父であることが、そして又社會に出てはよき公人でありよき國民であることが立派に出来る。女の力、妻の力といふ

ものは、これほどに絶大なものである。此の尊い力を完全に發揮させてこそ妻としての歡びであり誇であり満足であらねばならぬ。そして自分は此の責務と誇との中に常に謙讓で眞摯で温和でなければならぬが、萬一にも夫に些少の過失が見出された場合は、誠の愛を基礎として、婉曲に穩かに責めて夫に自省を求めらるやうに仕向け、夫が心から濟まなかつたと悔いて爾後を自らの胸に誓ふやうにさせる、それが却つて夫にとつては嬉しくもあり有難くもありそして一番痛くもある。夫君七縦七萬の秘策、夫婦愛の濃度増進の注射療法、所謂夫婦生活の妙諦茲に存すといふ次第である。

此の理想に恰當すべく描かれてゐるのが即ち本篇の女主人公紫上である。所謂「かどくしう、らうくじう」(幻卷)無邪氣で柔和で而もピリツとしたところがある。全身の愛を夫に捧げ、且努めて自己を謙虛に保ち、他人をいつも理解しようとし同情し愛しようとし、決して夫の行動を束縛せず、寧ろ自分の愛を譲り預けて夫の他の愛人達にも自由の時を許してやりたい寛容な心にならうともし、明石上の所生の姫を手許に引取つて自身の子として撫養し訓育し(松風卷、薄雲卷)、又その母君とも仲よく融け合ひ親しまうとし(薄雲卷・玉鬘卷・藤裏葉卷・若菜下卷等)、或は義理を辨じて女三宮(源氏の兄弟朱雀院の姫宮)を見舞はせに自分から夫を勧めて出してすらやつたり(若菜上卷)する一面には、「怨すべき事を見られるさまに仄めかし、恨むべからむ節をも憎からずかすめな」す行き方で、柔かにじわくと嫉妬し、時々チクリと痛い所に觸ることを決して忘れないから、流石の源氏も手を焼いて降参してしまふのである。末摘花君を見舞ふと託けて、朧月夜を源氏が訪ねた時などは(若菜上卷)、いつもとは少し違つた夫の素振に、怪しいと早くも感づきながら、わざと見知らぬ風をし、歸つて來ても、

女君(紫上)さばかりならむと(大方ソコイラダラウト)心得給へれど、おぼめかしくもてなして(ロザトホシヤリ何氣ナイ様子ヲシテ)おはす。なか／＼打ちふすべなどし給へらむよりも心苦しく(ナマジ、角メダツテ嫉妬ヲ燒カレルヨリモ氣ノ毒テ)、など斯くし

も見放ち給へらむと(ナセコソナニマテ解放シテケルノダラウト)思さるれば、ありしよりけに(今マテヨリモ一層)深き契りなのみ、長さ世をかけて聞え給ふ。

つひ隠しきれず朧月夜の事を打明けてしまひ、無論ありのまゝにはないが、「物越しで、久し振にほんの一寸ばかり會つて來た名殘惜しさ、どうぞして人目につかぬやうにして、もう一度位は」と源氏が言ふと、笑つて、

今めかしくもなりかへる御有様かな(ママ、急ニエライ當節カアレノ遊バシ様ナノネ)。昔を今に改め加へ給ふほど、中空なる身のため苦しく(イ、ロ。又昔ノ御辭ガ出テ、アノ頃ヨリカマダモ盛ンニテモ發展シテ御歩キ遊バサウナラ、エエ、苦勞スルノハ頼リナイ此ノ私バツカリナンテスカラ)。

どうぞ御氣隨にと言つた口吻をしながら、睫毛に零れ落ちさうな露が白く光つてゐる様子が、たまらなくいぢらしくて、斯う心安からぬ御氣色こそ苦しけれ。唯、おいらかに(手ツトリ早ク)引抓ひきつかなどして教へ給へ(憎イナラ憎イテ、此ノ手ヲ抓ルナト何ナトシテオクレヨ)。

今更そんな仲ではないぢやないか。いやに奥齒に物の挟まつたやうな言ひ方なぞしてと、「萬づに御心とり給ふほどに(ダマシ難シ機嫌ヲトルウチニ)、何事もえ殘し給はずなりぬめり(到頭、何モカモ白狀シテシマフ破目ニナル)」。我れ他人共ひとに許す天下の風流才子、戀愛大學の優等卒業生も、苦もなく旗を捲いてしまふのであつた。

此處のコツのわからぬ御難様が即ち葵上である。そして過ぎたるは猶及ばざる御手本は六條御息所である。嫉妬にも様式が要る。忍従にも限度がある。寛容にも場合がある。餘りしつこい邪推は却つて己れの身まで壞り、さりとして縄だけは何時も岸邊にしっかりと繋ぎ留めて置くことを忘れぬやうにせぬと、誘ふ水に得たり賢し、風に任する浮き舟は何處まででも流れて往つてしまふ。兎角、自由に游がせ潛らせても、綱の端はちやんと手の中にあり、而も捕へた鮎を呑み込ませぬ鶉飼の使ひ振が肝要と申すものである。あなたはあなた、私は私、絶對不干渉のモンロー主義は、如何にも開

化的事務的でさばくしてをり、將た又、神格に近い涙のこぼれる程有難い博大な精神のやうであるが、

根もぬも疑はしくも(ぞい)思ほゆる頼む心の無きかと思へば(拾遺集卷一五戀五、讀人不知)

却つて何だか氣になつて、一度疑の片雲が淨玻璃の鏡をチラとかすめ初めたが最期、見る／＼入道雲のやうな大暗鬼がムク／＼と頭を擡げて、目茶苦茶に心の平和を掻き亂し、神の御國にサタンサタンの魔軍が突如として侵入して来る。商賣用を好い口實に、河内國高安郡の女の許へ繁々通ひ出した男が、女房の悋氣はおろか、毎晩いやな顔一つせず自分から勸め立てて送り出すのを、己が後暗い心から、此奴、留守に旨い事をしてゐるんではと邪推し、河内へ出かける風をして、庭の植込に隠れて覗つてゐると、夫を送り出した後女房は、頻りと綺麗に御化粧をする様子——さてこそと拳を固める男、簀敷に膳を食はれるも御存じなし——、良あつてすつきりした容姿を縁に現すと、女は河内の方の空を見やつて、

●風吹けば沖へ白波立田山夜はにや君がひとり越ゆらむ

と口ずさんだので、嬉し恥づかし、身も世もあられず我を忘れて飛んで出て、それから河内通ひもふつに思ひ止まつた。その上、稀に高安へ行つてみると、初めこそ勿體ぶつてゐたが、此の頃ではとんと身だしなみもなく、捲上げ髪まきあげの馬面女が、杓文字で御飯を手盛りにする無作法な恰好を目撃してから、すつかり愛想が盡きてしまつたといふのは伊勢物語(二三段)で有名な話(大和物語(下巻)にも少し異つて出てゐる)。此の男、謠曲井筒から、近松の戯曲になると、もう、井筒業平河内通かほろと外題にまで謳はれてたうとう業平朝臣にされてしまつたが、その外題にも知られる通り、此の夫婦が所謂「筒井筒井筒にかけし」といふ振分髪おきりの昔馴染の仲だつたので、一葉女史の「たけくらべ」も、其の題名の來由は此に在り、源氏物語の少女卷の夕霧(源の息)と雲居雁(眞中の女)との可愛い戀も、物語史の上では此の男女や、今は傳はらぬ狛野の物語の「重どち」(此の物語を繪に畫いたのに、小さな姫の晝寝してゐる場面があるのを、紫上が源氏と二人で覽

るところが巻卷にある)などを先輩として見做つてゐるのである。ついでだが「風吹けば沖つ白波」まゝでは、「立つ」といふ爲の序詞で、「白波」を「緑林」の類と解釋したりなどしてあるのを見受けることがあるが、何も黙阿彌流行の餘勢を此處までもつて来るには及ばぬこと、如何に商用の掛金を狙はるればとて、追剥おしなどが割込んで此の詩的な歌物語も全く色消しである。但し、立田山の夜道が實際に於て危険皆無だつたか如何かそれは保證の限りでない。これは男の方が我から語るに落ちた醜態を曝露したわけだが、先づは却つてめでたい落著で、所謂「見初めし志といはしく」夫を守つた貞淑で品格のある糟糠の妻が、面倒な沖つ白波も家庭に立たせる事なしに結局凱旋曲を奏したといふ夫婦讀本の好資料でなければならぬ代りに、葵上式に御上品一點張りいちひんで夫が何をしようかと「餘り無下に打撻うちたがべ見放ち」してゐるのは、却つて自らをも輕んぜしめ、又、夫をも彌、放縱に墮落させて行く、一舉兩損の貧乏圖うらを引かねばならず、兄君が齒がゆがつて縁の下の力持に汗をかくのも尤も千萬である。

○やがてその思ひ出で……(本文)

一本の「やがて」の下に「あひそひて」の五文字のあるのがよく、下の「あひそひて」と重複しても、此處にも此の詞が無くては「やがて」の意味が通ぜぬと玉の小櫛(五の卷、帯木卷上)には言つてあるが、廣道(評釋、帯木卷餘釋)が、文章の上からしてもそれは拙で、恐らく下の「相添ひて」がいつか紛れて上に混入して來たものであらうと斷じ、「やがて」は「相添ひて」に係るのではなくて、「うらめしき……」に係るので、それで立派に意味が通ずるから、強ひて一本を採るに及ばぬと論じてゐるに賛したい。なほ「やがて」は「その思ひ出で……」以下の全文にかけて讀むべきが至當で且寧ろ自然であらう。

○繫がぬ舟の浮きたる例……(本文)

文選の「泛乎若不繫之舟」の句(二八四頁「語義」参照)を出典として挙げたのは河海抄(卷第二)が最初であるが、玉の小櫛(五の巻)には、此の文選の句は本で、直接には白氏の「無情水任方圓器、不繫舟隨去住風」(二八四頁「語義」参照)の意を採つて書いたものと推定してある。白氏の方も恐らく鵬鳥賦の影響があるのであらうと思はれるが、そして兩詩のいづれかが、或は雙方ともが、此處の源氏の本文の出典であるかも知れないが、兩者とも、人生を達觀し、運命の時々の變移に靜に順應すべきであるといふ悟りの心境を論はうとしたので、馬頭の所論と直接の關係は無い。唯、詞句を借り用ゐたまでである。「例」と言つてゐるなぞから觀れば、寧ろ文選の方の成句が當るやうに思はれる。「浮きたる」も「去住風」よりは「泛乎」の方が端的である。なほ別に何か典據になるやうな適切な故事でもあれば「例」の語の意味も一層明瞭であるが、「……の若し」とあるのを「例」と言つたと看られぬことはない。奥入には

觀^{クハ}身岸^{ミヅノ}額離^ノ根草^ノ論^ハ命江頭^ノ不^レ繫舟^ノ

の句を出典として掲げてある。朗詠集(卷下、雜、無常)にも載せ、作者は唐の羅虬(朗詠集註には「羅維」)で、これは題意の通り、人生の無常を詠じた詩句で、前二者とは又異なる。故に河海抄は不適切として之を捨て、文選を引いたのであるが、單に詞句だけを借りたとすれば、此の方が却つて「げにあやなし」の心持には通ずる點無しとせぬものがある。近來は殆ど引かれぬやうであるが、少くとも一顧には値するものと思ふので、茲に併せて掲げて置く。

○さしあたりてをかしも……増すことあるまじかりけり。(本文)

此の頭中將の詞は、男の上に見ると女の上に見ると兩説があり、新註は新釋・小櫛・評釋等いづれも「頼もしげなき疑あらむ」といふのを、女のあだくしくして一人の男を守らぬのを意味してゐると解してある(新釋などは頭中が夕顔上の

ことを腹に思つて言つてゐるのだと言ひ、舊註でも、例へば細流抄や宗祇の別注などには、朧月夜尙侍を其の例として擧げてゐる)が、概して新註は常に舊註に勝る解釋が多いけれども、此處などは舊註の中で

繫がぬ舟の詞にかけてみれば、男の頼もしげなからむ事と見えたり。如何。(咲花抄)

又「ともかくも……」は

これは女の男のたがひたる事あるを腹だち怨ぜずして見忍ぶをいふ也。葵上の心むけこれに叶ひ侍れば、中將我が妹の姫君は此の定めになひ給へりと思へり。(花鳥餘情)

とあるが妥當の見解であらう。

○君の打眠りて詞交せ給はぬを(本文)

此の「打眠りて」といふのに對して、諸註とも殆ど注意を拂つてゐないやうである。廣道は觸れてはゐるが、文字通りに解したらしく、

此の定め、葵上のさまにかなへれば、源氏君に聞かせ奉らんと思ふに、打れぶりて語を交給はぬを、中將のさうくしく心やましく思ひ給ふよし也。「さうくしく」はものさびしき意、「心やましく」は起きて聞き給へかすとやうに心の焦らるゝ意也(評釋)と釋した。唯、守部のみは

わがいもうとのひめ君(葵上)は、此さだめにかなひ給へりと思ひて、源氏君にき、給へがしにいへば、「源氏君の」わさと「うちれぶり」たるふりをし、ことばまぜ給はぬを、「中將」さうくしく心やましくおもふ。(湖月鈔別記)

と明快に補譯してゐる。廣道が文字通りに解したのは、次の段に馬頭が愈々經驗談を始めようと座を進めると、「君も目覺し給ふ」とあるにもよるのであらう。併し、品定の全段が終つて、翌日天氣も晴れたし、久し振で左大臣邸へ源氏が歸つて葵上に對面した條に、源氏の葵上觀を記して、

大方の色(大體ノ感シ)、人の氣はひもげざやかに(人品モサツパリシテ)氣高く、亂れたる所交らず、猶(ヤハリ)これこそは、かの(昨夜)人々(馬頭等)の棄て難く取り出でし眞實人には頼まれぬべけれ(忠實ナ本妻トシテ生涯ヲ托スルニ足ルテアラウ)と思すものから(モノ)、餘り麗しき(キチントシ過ギタ)御有様の、解け難く(サチトケニタク)恥づかしげに思ひ鎮まり給へるなまじうしく(物足りナク)て……

とあるのは、恰も品定の指食女の追憶と共に又この「打眠りて……」と同段の馬頭が詞

……たゞ偏に物まめやかに、靜かなる心の趣ならむよるべきを、終の頼み所には思ひ置くべかりける……

にも相應するものである事明らかである。だから源氏は右の馬頭の詞も、亦それから後の馬頭の話も、聞いてゐる筈で、それに引續く中將の言も、無論耳に入れてゐると考へてよからう。前の「添ひ臥し給へる御火影」といふところも、寝ながら馬頭の話に耳を傾けてゐて「いでや上の品と思ふにだに難げなる世を」と思つてゐるのを、推測の形で作者は敘してゐるのである。「打眠りて」といふのも單に寝てゐるといふだけではないやうに聞える。守部の解は甚だ面白く、光景を躍如として浮ばせるが、ちつとも眠くないのに故意に狸を極め込んでゐるといふ風にまで取る必要は無からう(守部の補譯ではさうとも取れさうでもある)。源氏は氣樂にゴロリと横になつたまゝで、人々の話を聞いてゐる。事實だんだんいゝ氣持になつて益々、眠たくもなつて來る。が、うとくしなから、やつぱり話だけは聞いてゐる。そのうちに馬頭に合槌を打つて中將が聲高に喋り始めた。それはどうやら——處ではない明らかに自分へあてつけに言つてゐる。相手になつたつて始まらず、第一折角横になつてうつら／＼してゐる最中、けだるくつて口をきくのも面倒臭いと思つて目を瞑つたまゝ黙つて眠り續ける、といふのでいゝと思ふ。すれば、後の「目覺し」といふのも撞著しなくなる。「目覺し」は、はつきり目を覺して起き直つた意であらう。後段の馬頭の經驗談に對する寸評、頭中將の談話に對する質問

など、起きて居ての發言の體と十分受けとれる。兎に角「添ひ臥し」「打眠り」「目覺し」いづれも一貫して首尾相應する描寫で、其の間、時間的推移と共に、源氏の上に連續的に起りつゝある生理現象を語つてをり、かくて作者は拔目なく、品定の席では口舌の上で最も謙讓な役廻りを勤めさせてある光君の姿を、絶えず印象的にチラつかせて、其の存在を皆の前に意識させるに努力してゐる。

「萬づの事によそへて思せ。木の道の工匠の、萬づの物を、心に任せて作り出すも、臨時の翫弄物のその物と、跡も定まらぬは、そばつき戲ねばみたるも、實に斯うもしつべかりけりと、時に付けつゝ、様を變へて今めかしきに、目移りて、をかしきもあり。大事にして眞に麗はしき、人の調度の飾とする、定まれるやうある物どもを、難なくし出づる事なむ、猶眞の物の上手は、様殊に見え分かれ侍る。

は、きぎ

〔口譯〕 馬頭「世間の萬事に譬へて考へて御覽なされ。先づ細工物をする人がいろ／＼の物を自分の心のまゝに製作する場合もです、流行の翫弄品の、斯うと形式がちゃんと定まつてゐないのは、一寸觀の恰好が洒落れてゐるなど、成程かういふのも拵へてみると存外面白いなど、其の時々に応じて變へてみた型の現代式なところに目がとまつて、興味を覺える事もありません。併し、まじめな、眞實にきちんとした表だつた裝飾道具一式の、微塵も型のくづせない本格の物を、間違ひ無く作り上げるといふ段になると、何といつてもやつぱり眞の名人は、斯ういふ時に段違ひの腕が歴然見えます。

又、繪の側から申しましても、御所の繪所に上手達が揃つて居りますが、選ばれて下繪の墨がきを勤めますのに、次々と比較致しても優劣の差別は一瞥しただけではとてもわからぬ程、皆うまいものです。けれども、人の

又繪所に上手多かれど、墨書きに選ばれて、次々に更に劣り優る差別ふとしも見え分かれず。斯かれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國の烈しき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろ／＼しく作りたる物は、心に任せて、一きは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。尋常の山のたゞすまひ水の流、目に近き人の家居有様、實にと見え、懐かしくやはらびたる形などを、靜かに書きませて、すくよかならぬ山の氣色、木深く、世離れて疊みなし、氣近き籬の内をば、その心しらしひ掟などをなむ上手はいと勢ひ殊に、わろ者は及

見た事のない蓬萊の仙山とか、荒海の中のいかつい魚の姿だとか、唐天竺の猛獸の形だとか、或は眼に見えない鬼の顔などの、恐い怪奇な、つまり空想から生まれる創作は、畫家の想像力の動くまゝに自由に書きなぐつて、一段、人をあつと言はせれば、それでよいので、實體にはどうせ似ても似つかぬものでせうが、それでも結構御構ひ無しです。ところが、普通の平凡な山の容、水の流、見慣れてゐる人家の様子などを、眞に迫つて見せ、親しみのある穩やかな景色などを、しつとりと配つて、遠景には斯う餘り餘しくないやうななだらかな山影を、こんもりと木深く、塵外の彼方まで幾重にも重ねて畫き、近景には又籬の内の草花なり何なり取合はせの用意法則一絲亂れず、巧く描き上げる手際など、名人上手は筆力が實に格段で、下手な奴は何といつたつて敵ひつこの無い點が多々あります。

今度は書道ですが、これも、特に修業が十分積んでるところか、實は甚だ危つかしい辭に、彼處此處態とひつばつてすらすら／＼と筆を走らせ、何處やら勿體ぶつた氣取家さんは、見た目は派手で才筆らしく見えますけれども、やつぱり本格の筆法を外さぬやうに丁寧に書きおふせたものは、ふと見た時は表面の筆使ひが物足りないやうにも感ぜられますが、もう一度、走り書の方と二つ並べてよく見くらべますと、争はれぬもので、やつぱり眞面目な實力の勝です。一寸とした、こんな事でさへ此の通りですもの、まして人間の心の、利いた風のお座なりの好意なんぞに有頂天になつては、いやはや飛んだ目に遇ひます。若い時の恥を御話申すのも、面目も無い事ですが、皆さんの御爲、一つ洗ひさらひ、昔の色懺悔を致しますかかな」と膝を進めると、横になつてゐた源氏も目を覺まされる。中将はえらい信者振りで、頬杖をつきながら對ひ合つて熱心に耳を澄ます。何だか有難いお上人が有爲無常の世の定めを説法して聞かせてくれる場所にも居るやうな氣がして、ちと變にくすぐつたいけれど、かうした機會には、各自とつときのお安くない話まで、興に任せて互にぶちまけるのであつた。

ばぬ所多かめる。手を書きたるにも、深き事は無くて、此處彼處點長に走り書き、そこはかとなき氣色ばめるは、打見るに、かど／＼しく氣色立ちたれど、猶眞のすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、猶實になむ寄りける。はかなき事だに斯くこそ侍れ、まして人の心の、時に當りて氣色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思ひ給へて侍り。その初めの事、すき／＼しくとも申し侍らむ」として、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中将いみじく信じて、頬杖をつきて對ひ居給へり。法の師の、世の理説き聞かせむ所の心地するも、且はをかしけれど、斯かるついでには、各々睦言もえ忍び止めすなむありける。

【跡】形式。型。【そばつき】「そば」は傍。側。「つき」は「手つき」「顔つき」「口つき」「目つき」等の「つき」。傍から一寸見た目の形。【ざればみ】洒落た。奇抜な。【麗しき】きちんとした。「人」でなく、「調度」の方にかゝる。「御帳御几帳より始めて、此處の綾錦は交ぜさせ給はず、唐土の後の飾を思しやりて、麗しく事々しく、輝くばかり調へさせ給へり」(若菜上卷)【繪所】エドモロ。宮中にて繪畫の事を司る所。式乾門(シキケンモン)内の東脇、御書所の南に在つた。長官を繪所別當(一名、繪所預り)といは、つき

ひ、五位の藏人之に補す。【墨がき】彩色畫の下繪を墨で書くこと。それに彩色を加ふるを「作り繪」といふ。(五二三頁參照)【蓬萊の山】支那渤海の東、幾億萬里の海上に在りと想像せられてゐる仙山。方丈・瀛洲(以上三壺)・岱輿・員嶠と五山各々大龜の背に支へられて隣居したと傳へられる(列子湯問篇)。長恨歌の方士が貴妃を宛めて到つた仙島が即ちこれである(九七頁參照)。【すくよかならむ】
 艱阻でない。【わろ者】未熟者、下手。【點長】テンナガ。點畫を長く引張つて書くこと。【かどくし】オタシ。オ氣ある。【眞のすぢ】眞正の筆法。「唐穆宗問筆法」柳公權曰、心正、則筆正、筆正、乃可法矣(細流抄卷二)。【頼杖】ツラツエ。ほゞづみに同じ。類例「頼杖つき給へる御さま(葵卷)。「物も言はずつらづみをつきて、いみじう歎かしげに思ひたり」(竹取物語)蓬萊の玉の枝の段)。「夜もすがら物思ふ時のつらづみは、眩たるさぞ知られざりける」(伊勢集)「屏風、夜一夜物思ひたる女のつらづみつきたる所」(如意輪(ニヨイリン。如意輪觀音)は人の心を思し煩ひて、つらづみをつきておはする、世に知らず哀れに恥づかし)枕草子は、白樂天にも「醉悲澁涙春盃裏、吟苦支頤曉燭前」(文集卷七)の句があり、名義抄にも「支頤」を「ツラツエツキテ」と訓ませてある。

【釋評】花鳥餘情(第二)の一條禪問は、品定は今までの段と此の段と下の段と三段に書き分けられてゐるのが、法華經の三周の説法の姿を學んだものであると觀てゐる。即ち第一段は女性總論とも言ふべきで、これが法説一周、即ち方便品、次が此の第二段の三種の藝道に比しての論で、これが喩説一周、即ち譬喩品、第三段が各自體験の回想談で、これが因縁説一周、即ち化城喩品に相應するもので、

かの法理を直に説くと、喩を借りて言ふと、過ぎほし方の因縁を説くと、此の三周のすがた、今の物語の作りざまに相似たる也。とし、下に「法の師の世のことわり説き聞かせむ所の心地す」とあるのも、此の心持が寓せられてゐるからであらうと言つてゐる。面白い觀方で、小節や評釋やは排儒・排佛の主義からして一顧だも與へないが、それほどに偏執する必要は無い。儒佛宣布の目的意識からの創作動機説提唱の愚は、契沖・爲章以後の國學者によつて明確に説示せられ、別けて

も鈴屋の玉の小櫛に於ける物語本質論——所謂物の哀れ論——で粉碎され盡してしまつたが、素材や構想や、表現の手法等の側にまでそれを推し及ぼしては、少し乗り越してである。公正ならむとした熱意の餘り、却つて又公正さを危く失はうとさへする嫌が無いでもない。天秤の桿を水平にする爲に片皿の軽い方に分銅を増した爲、今度は此方が少し下り過ぎてしまつたやうなものである。法華八講も屢、催され(枕草子にも屢、見え、源氏にも賢木卷に藤壺中宮の御八講の事が作られてある)、三十講(法華經二十八品の他に、無量義經を初に、普賢觀經を終に加へて講ずる)は御堂關白記で觀ると毎年の常例のやうに行はれ(寛弘五年土御門殿での三十講は紫式部集にも見える。榮華物語初花卷にも其の時の模様が記されてあるが、同卷の記事は紫日記に據つた文詞が多いのに觀ても、此の時の事は、御堂記や紫式部集に據つたもののやうに讀まれるやうな感がある)、供養・説教・論議など始終諸處で絶えず開かれてゐる時代である。道長も熱心な法華信仰者であり、紫式部も斯教に對して可なり眞摯な求心の心持を有つてゐたやうであり、それに關する知識もおのづから相當にあつたと思はれる——唯さういふ方面で自分を示すことを絶えず遠慮し、努めて知らず顔を裝うてゐたのであつたが——から、斯ういふ論議・講説めいた場面を描いたり、或理想・主張を最も効果的に又最も興味的に説き示さうとしたりするに、意識的に若しくは半有意的に、さうした型式に依り、或は利用しようとしたとしても、寧ろ自然ですらある。

が、法華經の三周を學んだか否かは別として、さういふ見を離れて品定の論法を觀ると、やはり整然とした組織・段階を具へてゐる。先づ此のくさりの物語の全體の構成を觀るに、

總 序——光源氏名のみ……うちまじりける。

雨夜の品定——長雨晴間なき……明し給ひつ。

帯木卷

は、きき

實話の一(空蟬) 辛うじて……哀れに思ふことぞ。 / 附 軒端萩 空蟬卷(全卷)

實話の二(夕顔) 六條邊の……思し知りぬらむかし。 / 附 六條御息所 斯様のくだしき……罪避り所無く。 夕顔卷

結 尾

といふ形で、その中の品定は、

I 品定小序 長雨晴間なき頃……

1 起 首 つれづれと降り暮して……

2 序 論

3 本 論

4 概 括

1 實例(一) 妬婦譚

2 同 (二) 浮華女譚

3 同 (三) 柔弱女譚

4 同 (四) 賢女譚

5 同 (五) 賢女譚

6 同 (六) 賢女譚

7 同 (七) 賢女譚

8 同 (八) 賢女譚

9 同 (九) 賢女譚

10 同 (十) 賢女譚

11 同 (十一) 賢女譚

12 同 (十二) 賢女譚

13 同 (十三) 賢女譚

14 同 (十四) 賢女譚

15 同 (十五) 賢女譚

16 同 (十六) 賢女譚

17 同 (十七) 賢女譚

18 同 (十八) 賢女譚

19 同 (十九) 賢女譚

20 同 (二十) 賢女譚

21 同 (二十一) 賢女譚

22 同 (二十二) 賢女譚

23 同 (二十三) 賢女譚

24 同 (二十四) 賢女譚

25 同 (二十五) 賢女譚

26 同 (二十六) 賢女譚

27 同 (二十七) 賢女譚

28 同 (二十八) 賢女譚

29 同 (二十九) 賢女譚

30 同 (三十) 賢女譚

31 同 (三十一) 賢女譚

32 同 (三十二) 賢女譚

33 同 (三十三) 賢女譚

34 同 (三十四) 賢女譚

35 同 (三十五) 賢女譚

36 同 (三十六) 賢女譚

37 同 (三十七) 賢女譚

38 同 (三十八) 賢女譚

39 同 (三十九) 賢女譚

40 同 (四十) 賢女譚

41 同 (四十一) 賢女譚

42 同 (四十二) 賢女譚

(實事人物) (二人)源・頭

(三人)源・頭・馬

(四人)源・頭・馬・式

(五人)源・頭・馬・式・馬

(六人)源・頭・馬・式・馬・馬

(七人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬

(八人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬

(九人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬

(十人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十一人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十二人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十三人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十四人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十五人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十六人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十七人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十八人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(十九人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(二十人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(二十一人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(二十二人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(二十三人)源・頭・馬・式・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬・馬

(二十四人)源・頭・馬・式・馬

(二十五人)源・頭・馬・式・馬

(二十六人)源・頭・馬・式・馬

(二十七人)源・頭・馬・式・馬

(二十八人)源・頭・馬・式・馬

(二十九人)源・頭・馬・式・馬

(三十人)源・頭・馬・式・馬

(三十一人)源・頭・馬・式・馬

(三十二人)源・頭・馬・式・馬

(三十三人)源・頭・馬・式・馬

(三十四人)源・頭・馬・式・馬

(三十五人)源・頭・馬・式・馬

(三十六人)源・頭・馬・式・馬

(三十七人)源・頭・馬・式・馬

(三十八人)源・頭・馬・式・馬

(三十九人)源・頭・馬・式・馬

(四十人)源・頭・馬・式・馬

(四十一人)源・頭・馬・式・馬

(四十二人)源・頭・馬・式・馬

(四十三人)源・頭・馬・式・馬

(四十四人)源・頭・馬・式・馬

(四十五人)源・頭・馬・式・馬

(四十六人)源・頭・馬・式・馬

(四十七人)源・頭・馬・式・馬

それを更に具體的に以下の各論に於て數種の場合を擧げて實證しようとするのである。

こゝより、おだなる女と實なる女との差別を、物によそへて説き出せり。さてそれは唯一事にもあるべきを、同じ譬を三つまで擧げて、終に唯實なる方の一筋に結び寄せられたる筆づかひ、例のいといふべし。さるは、此の實なることの一事なん品定のむれとある事なればなりける。

又、「猶實になむ寄りける」を、

此語上件三つの事をつめたる眼目の詞なるは言ふもさらにて、すべては品定の眼目の詞なることをよく心得て讀むべし。

と論破した評釋の言は肯聲に中つてゐる。

つまり、木工・繪畫・書道の三種の造形美術に卑近な譬を取つて、浮華と實實との優劣を比較し、之を人物の上にも移して、各自の反省を促さうとするのが此の段の要旨なのである。派手で見た目の新奇なや綺羅びやかなのは、瞬間眩惑されることがあるが、直に飽きが來る。流行物といふのは大抵それである。斷髪でもマネキンでももう餘り問題にされたり騒がれたりしなくなつた。洋服萬能から和服主義へ逆戻りした人もある。洋行して來て日本の「善さ」が一層はつきりわかつた人もかなりある。ラヂオですら早慶戦の中繼位がスピーカー備附の店頭に群集をたからせる他、一と頃程の聴取熱の見られないのは事實である。マルキシズムも本場のモスコイ圖書館ですら資本論の十七頁から先は讀まれないとかいふ話だから、日本人の同主義者で、かぶれたり、附焼奴でない人が果して幾人ゐるか甚だ興味深い問題だと思ふ。工藝品でも帝室博物館の表慶館へでも行つてみると、華奢で脆弱な純裝飾用具になつてしまつた近代の作と、何處かがつしりした中に寂びた美しさと深い味とを有つ古代調度との感じの差が、はつきり印象される。繪にしても想像畫は自由奔放、實には似ざらめどさてありぬべし」で、言はばどうにでも書ける。歴史畫になると然うはいかぬ。服

は、きき

飾や建築や風俗史的考證が面倒で、畫家なら誰にでも描けるとは限らない。が、歴史畫よりも實はもつと難しいのは、平凡な普通の自然や生活や事物を畫いた風景畫とか肖像畫とか乃至は靜物の類の方である。此の方は嘘が畫けない。一寸でも嘘があれば、即ち實物と違へば、素人眼にも其の拙さがわかるからである。

韓子曰、有客、爲齊王畫者。問之。對曰、狗馬最難、鬼魅最易。狗馬人所知也。且暮於前不類之故。鬼魅無形者可類改易。

文選云、畫鬼魅易成、好。畫狗馬難成、好。三都賦注(河海抄卷第二)

又、

後漢書張衡傳云、畫工惡圖犬馬而好作鬼魅。誠以實事難形而虛僞不窮也。(細流抄卷一)

と舊註に引いてある支那の古語もある位で(源氏の此の條の本文に「目に見えぬ鬼の顔などの……」とあるのも、右の既に諺のやうになつてゐた支那の有名な語を思ひ寄せて書いたのであらうと考へられる)妖怪の畫なら何とか畫けるが、日常所持使用してゐる自分の懐中時計の面貌を謬なく空で描いてみると言はれると、大抵參つてしまふ道理を言つたのである。書道の神域に至る亦難い。才筆とか達者とかなら未だ庶幾し得る。平凡のやうに見え、無造作のやうに見えて、而も犯すべからざる氣品を具へ、模しても模し得ざる神韻が生動してゐる極致の味は、到底「わる者」は足下にも及びつかぬ所で、恰も緞帳役者と大歌舞伎の名優ほどの相違である。その辯、ちつとばかり出来る「わる者」に限つて「見てくれ」の腕自慢、習ひたての柔道家みだいに、稚氣満ち臭い間はまだしも無事であるが、つひ生兵法の大怪我をしでかす始末、式部が「よしばみ情立たさらむなむ目易かるべき」(四六四頁本文参照)と言ふのもこれが爲である。そして本文の手を書きたるにも、深き事は無くて、此處彼處點長に走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、打見るに、かどくしく氣色立ち

たれど……今一度取り違へて見れば、猶實になむ寄りける。

と論難した心持の中には、一般論ではあるが恐らく、紫女の常に對敵視してゐ、その態度に爪弾してゐる清少を其の目標の一人と意識してゐるであらう事は、推測に難くないと思はれる。前にも引いた(二三八頁参照)紫式部日記の清女評、清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、眞字書き散らして侍るほど、よく見れば、まだいと堪へぬ事多かり。

の一節を前文に比べ讀んでも背けるであらうし、之を又品定總收の一節(後に説く。四六二頁参照)に比較すれば一層明確に理解せられると思ふ。勿論、清女以外、女性よりは、少くとも表面上又事實上、男性の自稱書家達に對しての痛棒でもあることは言を俟たぬ。なほ又紫女は、源氏中には具體的な例として近江君を出して擲論してゐる。

いと草がちに、怒れる手の其の筋とも見えず、深ひたる書きさまも、し文字長に、わりなく山ばかり……(常夏卷)

要するに、三藝道に限らぬ。「萬づの事によそへて思せ」である。「はかなき事だに」斯の通り、「まして人の心」の質實なと浮華などは、信頼の度が雲泥の隔り、小才の利いたモダン都會人よりは、愚直素朴な田舎漢の方が手堅くて有難いのが一般、新奇に恒久性無く、眞理は常に平凡である。

「早う、まだいと下臈に侍りし時、
[口譯] 馬頭もう昔になりましたが、まだ私が官位もずつと低かつた時
衰れと思ふ人侍りき。聞えさせつ
分、可愛がつてやつてゐた女が御座いました。申上げましたやうな質の、
るやうに、容貌などいとまほにも
顔容のところはちと申し分のある方なので、無論若い浮氣盛りには、此の
侍らざりしかば、若き程の好色心
者を生涯連れ添ふ妻にとと思ひ込んでおませず、頼りとは思ひながら、ど

は、きき

地には、この人を止まりにとも思ひとぞめ侍らす。寄邊とは思ひながら、さうくしくて、とかく紛れ歩き侍りしを、物怨じをいたくし侍りしかば、心づきなく、いと斯からで、おいらかならましかばと思ひつゝ、餘りいと許しなく疑ひ侍りしもうるさくて、斯く數ならぬ身を見も放たで、など斯くしも思ふらむと心苦しき折々も侍りて、自然に心治めらるゝやうになむ侍りし。この女のあるやう、もより思ひ至らざりける事にも、いかでこの人の爲にはと、無き手を出し、後れたる筋の心をも、猶口惜しくは見えじと思ひ勵みつゝ、とにかくにつけて、もの眞實に後見、

うも少し物足りなくつて、あちこちと隠れ遊びをして居りましたら、ひどく嫉妬立てますので、心中頗る面白からず、いや斯うやかまし家でなくてもう少し溫和しい女だつたらなあと、ともすれば愚痴をこぼし、それでもあんまりしつこくいろ／＼に氣をまはす有難迷惑さに、自分のやうなつまらぬ男をよく見放しもしないで、どうしてこれ程想つてくれるのかしらと濟まぬやうな氣になる時さへ折々はあるといふ始末で、自然と後には飛び廻るのも控へるやうになるといつた有様でした。此の女の勤めつ振つたら性來氣のつかなかつた事でも、如何かして夫の爲にはと、無い智慧を絞り出し、不得意の方の事でも、流石にやはり夫から駄目だと見下されまいと専心努力して、何につけ彼につけ忠實に世話してくれまするし、毛筋程でも夫の機嫌を損ずる事の無いやうにと心掛けて居りましたので、元々氣性の勝つた方と存じては居りましたが、だん／＼とどうやら折れて來まして和やかになつて参り、不器量な自分の顔も、夫に捨てられてはと盛んに塗り立て、他人に會つては嘸主の氣がひけるだらうと、遠慮して引込んで居り、斷えず氣をつけて身嗜みをしてゐるといふ風なので、次第に見馴れて参りますと、氣立もさう悪くはないのでしたけれど、たつた一つ此の憎い格氣沙汰だけには、どうにも我慢致しかねました。その當時考へましたに

露にても、心に違ふ事は無くもがなと思へりし程に、進める方と思ひしかど、とかくに靡き來てなよび行き、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと、理なく思ひ繕ひ、疎き人に見え、面伏にや思はれむと、憚り恥ぢて、操にもてつて、見馴るゝ儘に、心も怪しうはあらず侍りしかど、唯この憎き方一つなむ、心治めず侍りし。當時思ひ侍りしやう、斯う強ちに隨ひ怖ぢたる人なめり。いかで懲るばかりの業して、嚇して、この方も少しよろしくもなり、さがなさも止めむと思ひて、眞に憂しなども思ひて絶えぬべき氣色ならば、斯ばかり我に隨ふ心ならば思ひ懲り

は、きき

は、こんなに自分なら絶対に背くまいと始終びく／＼ものである奴さうに思へるから、一つうんと懲りる程やつつけて嚇かしてみよう。此の手できつと此の厄介な方も少しは神妙になつて、喧し家の口も緘めてやれると存じまして、それには、眞底いやになつて縁を切つてしまふぞといつた様子を見せつけたらば、これ程私に服従してゐる心なら、確に懲りて改心するは請合と、或時でした、態々無慈悲に冷酷な素振をして見せますと、果して例のやうに熾り立つて食つてかゝるのを、思ふ壺と「斯うどうも情強くつちや、もう堪忍ならぬ。どのやうな深い縁であらうと、今日限りおさらばだ。これつきりの縁と思ふなら、勝手に無茶な邪推をするがい。それとも、末の末まで一緒に添ひ遂げる氣なら、ちつとやそつと辛い事があるつたつて、懐へ忍んでいゝ加減におとなしくしてくれてさ、なあと、こんな角さへ出さなくなりや、そりやあ可愛がつてやるとも。今ちやあ、なる程俺もまだうだがあがらんが、まあ見ろ、やがて立身して他人様方並にもなり、少しは重みもついて來ようといふ時になれば、えゝ、どうだい、指もささせぬれつきとした北の方様で、豪勢なもんだらうぢやないか」とか、何とか、我ながら巧く教育しよるわい、大出來／＼と、内心大分得意になつて、調子に乗つて少々言ひ過ぎたと思ひますと、女はフ、と一寸笑

なむ、と思ひ給へて、殊更に情なく強顔き様を見せて、例の腹立ち怨するを、『斯くおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶えて又見じ。限りと思はば、斯く理なき物疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はば、辛き事ありとも、念じて斜に思ひなりて、斯かる心だに失せなば、いと哀れとなむ思ふべき。人竝々にもなり、少し大人びむに添へて、又竝ぶ人無くなむあるべき』など、賢く教へ立つるかなと思ひ給へて、我猛く言ひそし待るに、少し打笑ひて、『萬づに見立なく、物げなき程を見過して、人數なる世もやと待つ方は、長閑に思ひなされて、心疚しくもあらず。辛

つて、『萬事が見すばらしく、人間らしくもない生活をしてゐる間を、ちつと辛抱して、そのうちに運が向いて好い芽でも吹いて来る時もあるうかと待つて方なら、ちつと暢氣ですけど、まあ氣長に待てて、さまで苦にも思はれませんがね。現在踏みつけにされながら文句も言はずに、亭主の浮氣の自然に直る時が来るまで、馬鹿正直にあてにもならぬ頼みをかけて、幾年もく相變らずのめでたくもない御正月ばかり義理で重ねて行くなんて、御氣の毒様ですがね、妾なんぞにやとでもお付き合ひはまあ出来ませんでせうから、いつその事、お互にすつぱり別れてしまふ時節が来たんでせうよ』と憎々しさうに嘯くもんですから、私はもうカツとなつて、芝居が外れた自棄半分、口から出任せに毒づき散らしますと、女も黙つて居れぬ性分で、いきなり私の指を一本くつと引寄せるなりかぶりついた騒ぎ、私は急に取返し附かぬ目に逢つたやうわざと大げさな表情で、『お、お、こんな不具にまでされたからは、いよ／＼もう明日から御勤へも上られず、人中への顔出しもならぬ。只さへ侮辱を受ける程な低い官位の私が、これでは一層、何として人らしい日が送れよう。出家遁世の外は無いとは、情ないなあ』などと嚇しに出たらめを並べて、『ぢや、いよ／＼今日がお別れだ』と、此の指を『お、痛々』と屈めながら出て行きました。出しなに、

き心を忍びて、思ひ直らむ折を見つて、年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむあるべければ、互に背きぬべききざみになむある』と妬げに言ふ時に、腹立たしくなりて、憎げなる事どもを言ひ勵まし侍るに、女もえをさめぬ筋にて、指一つを引き寄せてくひて侍りしを、おどろ／＼しく託ちて『斯かる疵さへつきぬれば、いよいよ交らひをすべきにもあらず。辱しめ給ふめる官位、いとどしく、何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひ嚇して、『さらば今日こそは限りなめれ』と、この指を屈めて罷出ぬ。『手を折逢ひ見し事を數ふれば

は、きぎ

「手を折りて逢ひ見しことを數ふればこれ一つやは君が憂き節

【歌意】 指折り數へて過ぎ來し方の事を考へてみれば、外には何の不足も無いが、これ一つが何としてもそなたの悪い癖だつたなあ。こんな事になるのも、責任はそちにあるんだ。「手を折りてはその食はれて屈めた指を受け、ふしは「手」指の縁語)

文句はあるまい』と申しますと、そこは女で、急に悲しくなつたと見えまして、それでもおろ／＼聲で、

憂き節を心一つに數へ來てこや君が手を別るべき折

【歌意】 それはこちらから言ふ事です。辛い悲しい涙を小さい胸一つに吞み込み／＼して、今日までこらへ續けて來た末が、今日なんですもの。そちらがい、と言つたつて堪忍がなりませんわ。綺麗さつぱり赤の他人にならうちやありませんか。(「憂き節」一つ「數へ」「手」等皆前の歌を受ける)

などと、それでも負けずに減らず口をたゞいて居りましたがね、ほんたうには無論別れる氣は無いのですが、それなり暫くは手紙もやらす、却つて解放されたやうな軽い心持になつてあちこちと浮かれ歩いて居りますと、然う／＼、臨時の祭の調樂があつた日、夜も更けて、雲がひどく降る大層底冷えのする晩で御座いましたつけ、誰彼、内裏を退下つて思ひ／＼散り／＼に家路へ急ぐ中に、一人氣

原*手を折りてあひみしことをかぞふればとをといひつづ四つはへにけり
紀有常(伊勢物語一六段)

これ一つやは君が憂き節
え怨みじ』など言ひ侍れば、流石
に打泣きて、

憂き節を心一つに敷へ来て

こや君が手を別るべき折
など、言ひしろひ侍りしかど、誠
には變るべき事とも思ひ給へずな
がら、日頃經るまで消息も遣はさ
ず、あくがれ罷り歩くに、臨時の
祭の調樂に、夜更けて、いみじう
雲降る夜、これかれ罷り散る、所
にて、思ひ廻らせば、なほ家路と
思はむ方は、又無かりけり。内裏
邊の旅寢もすさまじかるべく、氣
色ばめる邊は、そぞろ寒くやと、
思ふ給へられしかば、いかゞ思へ
ると氣色も見がてら、雪を打拂ひ

がついて思ひまはしてみますと、はれさて、これぞ我が家と手足を申し
て暢々出来る所は、他にはやつぱり無いのです。いくら物好きが過ぎるつ
たつて、こんな晩に此のまゝ禁中の御夜詰志願でもあるまいし、さればと
云つて、例の氣取り家の宅あたりは、又嘩かし冷えあがる事だらうし、と
いふ氣が致しますので、それに今頃どう思つてるか一つ様子も見てやれと、
雪を拂ひく訪ねては参つたものの、どうも何となくきまりが悪くて鬨が
高いのを、併しわざ／＼斯うしてこちらから折れて来たんだ、なんぼ何で
も今夜といふ今夜は過日來の衝突を水に流してくれるに違ひないと、勇を
鼓して奥へ通つてみますとね、壁に向けて片寄せた燈影がぼんやり點つて、
室の中には、著馴れた柔かな著物の綿でふく／＼したのを大きな伏籠に懸
けて、薰物の香を暖く染めさせ、几帳の垂布まで捲り上げて、今夜ぐらゐ
はと、心待ちにしてゐたらしい様子ぢやありませんか。そうれ見ろ、やつ
ぱり色男は違つたもんさ、へん、どんなもんだいと、此の處ダツと反身に
なつて額を撫でたと思召せ。が、肝腎要の本尊は居ませなんだ。尤も、そ
れ／＼女中共だけ留守居して居りまして「生憎と、親御様の御宅へ今晚は
いらつしやいました」との返事です。實を申すと、過日の大衝突以來、色
めいた歌一首詠んで贈つても來ず、思はせぶりの文一つよこすでなし、唯

つゝ罷りて、なまゝ人悪く爪くはる
れど、さりとも今宵日頃の恨みは
解けなむと思ふ給へしに、火仄か
に壁に背け、萎えたる衣どもの厚
肥えたる、大いなる籠に打懸けて、
引き上ぐべき物の帷など打上げ
て、今宵ばかりやと待ちける様
り。さればよと心驕りするに、正
身は無し。さるべき女房どもはか
り留まりて、「親の家に、この夜さ
りなむ渡りぬる」と答へ侍り。艶
なる歌も詠まず、氣色ばめる消息
もせで、いと直屋隠に情無かりし
かば、あへなき心地して、さがな
く恕し無かりしも、我を疎みねと
思ふ方の心やありけむと、さしも
見給へざりし事なれど、心疚しき

は、きぎ

引籠つたきり、すつかり冷い態度で通して來たものですから、少からず當
てがはづれたやうな工合でしてな、さては、あんなに無理やりに私の自由
を拘束しようとしたのも、夫思ひの眞情からと思ふ
たはおめでたい私の自惚れで、嫌なら嫌でよう御座
んす、此方にはちやんと御代りが出來ましたから、
愛想をつかさなら御早く願ひますつてな腹があつて
の故意の挑戦だつたのではないかしら。てつきり臭いぞと、それまでそん
な女だなどと嘘にも思つてみた事はなかつたんですけれど、餘りむしやくし
やするんでそんなまゝ邪推までする氣になつて居りましたんですが、今來
て、落ち著いてよく様子を見ますと、著物は平生よりも特に心をつけた色
合でして、拵へも私の氣に合ふやう、いやも何から何まで行届いてゐて、
愛想をつかして手を切つた筈の後々まで、感心に男の世話を忘れずにして
置いてくれてあつたのです。こんな位だもの、なあに全く私を思ひ斷つ
てしまふなんて事はあるまいと存じまして、いろ／＼と復縁の相談を持ち
かけてみましたが、女は絶対にそれを拒みせず、又先刻申しましたやう
な、姿を晦まして搜索の迷惑をかけるでもなく、いつも私の顔を洗さぬ程
度に返事をしては「たゞ、これまで通りの御心とちつとも變らぬなら、嫌

原* 歌々殘燈背、壁影
(文集三、上陽白
髮人の句)
(即詠集上、秋、
秋夜)

まゝに思ひ侍りしに、著るべき物常よりも心留めたる色合爲様、いとあらまほしくて、流石に我が見捨ててむ後をさへなむ、思ひ遣り後見たりし。さりとも絶えて思ひ放つ様はあらじと思ひ給へて、とかく言ひ侍りしを、背きもせず、尋ね惑はさむとも隠れ忍びず、かがやかしからず答へつ、「たゞ、ありし心ながらは、えなむ見過すまじき。改めて長閑に思ひならばなむ、あひ見るべき」など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと、思ひ給へしかば、暫し懲らさむの心にて、然改めむとも言はず、いたくつなびきて見せし閉に、いといたく思ひ歎きて、果敢なくなり侍

で御座います。目を瞑つてゐるつたつて、それは無理です。若し生まれ替つた氣で、すつぱりと浮氣を止めて尻を御落ちつけになるやうなら、元々通り一緒になませう」などと言つて居りましたのを、あゝ言つたつて、決して思ひ断れる筈は無いんだからと高を括つて、あんな強情な女は、ちと見せしめに懲らしてやるがいと、故意と、はつきり「改心する」などは言はず、此方も負けずに頑張り合つてゐますうちに、眞底それを苦に病みましてな、たうとうあの世から御迎ひが来てしまひましたつてなわけだ笑ひ事どこちや無くなりました。いやも全く迂濶に戯談もされぬものと、つくづく身に沁みて感じた事でした。安心して家を任せ、一生の頼りにもしようといふ本妻としては、まあこんなものではあるまいかなあと、今になつてしみる思ひ出されます。一寸したささび事でも、ほんとの大切な用件でも、いゝ相談相手になつてくれましたし、染物の方は立田姫と申しても過褒でなし、又裁ち縫ひは棚機の手にも負けは取るまいと思はれる程に、その方の技も揃つて巧みなもので御座いましたがなあ」と、想ひ出を懐かしむやうにしんみりした調子で言ふ。

頬杖をついて聴き入つてゐた中将が此の時口を開いて、「ほんに、まゝになるならなあ、同じ似るでも、その裁ち縫ひの方をうよつぱりだけ切り縮

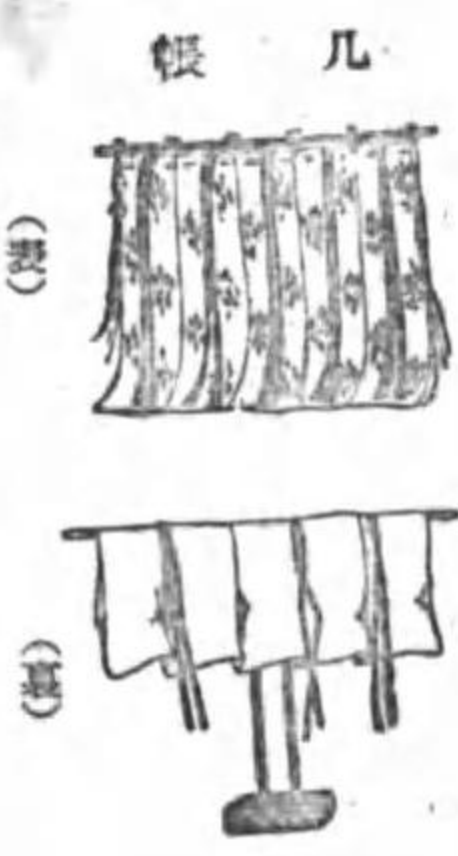
りにしかば、戯れにくくなむ覺え侍りし。偏に打頼みたらむ方は、然許りにてありぬべくなむ思ひ給へ出でらる。果敢なきあだ事を、眞の大事をも、言ひ合はせたるに甲斐無からず、立田姫と言はむにもつき無からず、棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなむ侍りし」とて、いと哀れと思ひ出でたり。中将「その棚機の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞ肯えまし。實にその立田姫の錦には、又如くものあらじ。はかなき花紅葉と言ふも、折節の色合つきなく、はかなくしからのぬは、露の榮えなく消えぬる業なり。さるにより難き世ぞとは、定めかねたるぞや」と、言ひはやし給ふ。

語義

【まほ】眞秀。よく整つてゐるさま、十全、十分。かたは(偏。不完全、不十分)の對。【止まり】終世連れ添ふ人、本妻。【さうくし】淋しい、物足りない。【物怨じ】モノエンジ。嫉妬。【心づきなし】氣に入らぬ。【おいらか】おとなしい、温良。【自然】シネン。【疎き人】他人。【面伏】オモテアセ。不面目、恥。【面起】オモテオコシ。面目、名譽)の對。【操に】固く一筋に、

一生懸命に努めて、常住不斷變る事なく。【もてつく】前出。附け加へる、取りつくろふ。【けしうは】異様に、悪くは。【此の憎き方】嫉妬をさす。【さがなま】不善、邪惡の意で、「さがなまもの」も悪人とか亂暴者とかいふ意であるが、(大鏡中巻、内大臣道隆の條に、其の次子隆家が「世の中のさがなまもの」と言はれたと見えてゐる)此處は「この方(即ち嫉妬)と……さがなまもの……と」對になつてゐて、特に取出して嫉妬とは區別してあるから「口さがなま」の意である。(上段に「人の物言ひさがなまよ」とある其の「物言ひさがなし」の「さがなし」と同じである)即ち「惡さ」でも「口の惡さ」を「唯しい姦しい方」の意である。後段に「此のさがなま者(三四本頁)又それを承けた頭中の詞「かのさがなま者(三八〇頁)とあるのも「惡口家」唯しい姦しい方の意である。後段に「此のさがなま者(三四本頁)行幸卷に近江君(頭中將の娘。顔も所謂「まほ」でなく、少し伶俐でない方で、特に舌から先へ生まれたやうに始終無遠慮にペラペラと喋り立てて衆人の物笑の的になる女)のことを「このさがなま者の君」と言つてゐるのもわかる。【おぞまし】おぞまし、おぞし、おぞし。悍。剛情。おそろしい。つまり悍婦で、所謂「じやく馬」である。【念じて】怪へて、辛抱して。【斜に思ひなりて】い、加減に我を折つて、大抵のところ、妥協して。【言ひそし】言ひ過ぎしは「すこし」の意。若菜上巻にも「由めきそして振舞ふ」とある。【あいな頼み】空だのみ。あてにならぬ頼み。確乎たる目標の無い空な心あて。【指】オヨビ。單に「ゆび」のこと。「おゆび」ともいふ。【あひて】噛みついて、くひついて。【おどろくしく託ちて】大げさに懇んで、大きやうにアツク言つて。【交らひ】人交はり、世間づきあひ、交際。【言ひしろふ】言ひ合ふ、言ひ争ふ。【臨時の祭】リンジンノマツリ、又、リウジンノマツリ。賀茂・石清水・祇園等の諸社で本祭の外に行はれるやうになつた祭で、各、日が定まつてゐる。此處は宇多天皇の寛平元年十一月廿一日己酉始めて行はれて以來、毎年陰曆十一月下の酉の日に舉行せられる賀茂の臨時の祭で、北祭(キタマツリ)ともいふ。陰曆四月中の酉の日の本祭(今は五月十五日)が所謂奏祭(アフヒマツリ)で、單に祭(マツリ)ともいひ、これを北祭と呼んでゐる。北祭とは男山(石清水)八幡宮の祭を南祭といふに對する稱呼。【調祭】テウカク。公事或は宴席で行ふべき舞樂の豫習をするのをいふのであるが、特に賀茂及び石清水の臨時の祭に演ぜられる舞樂の調習を祭日の前に宮中の桂芳坊内の樂所(ガクシヨ、又、ガクソ)で行ふをいひ、更に祭の當日前二日に清涼殿の東庭で試演するを試樂(シヤク)といふ。例へば御堂關日記寛弘三年十一月の條から抄出すれば、廿日己未、臨時試樂、廿二日辛酉、

臨時祭如常、又、試樂が雨天で前日に順延になつた例は、同記寛弘四年十一月に「廿日癸未、試樂依雨明日者」廿一日甲申、試樂(雨天でもやはり前二日に弓馬殿の御下で行はれた事もあつた)それから同記長和五年十月廿九日庚子には「賀茂臨時祭調祭初」と見える。これは石清水の方であるがやはり同記の同年三月の條に「七日辛亥、此今日初臨時祭調祭」九日癸丑、此日調祭、十二日丙辰、天晴、此日有試樂事」とあつて十四日戊午即ち中の午が臨時の祭の當日である。なほ右の試樂のことを亦調祭とも呼んだやうである(公事根源)。枕草子(あがたに)「臨時の祭の調祭などはいみじうなかし云々」又同書(なほ世に)「臨時の祭の(中略)試樂もいとをかし云々」【あがる】別る。分散する。後撰集兼輔の歌の詞書にも「これかれ罷りあがれるに(六四頁参照)【旅寝】外泊の意である。自宅のやうに打解けてゆつくり寝るのでないからである。他へ嫁いだ女が里へ戻る場合ですら、髭黒大將北方が父宮の許へ引取られて歸るのを、年頃習ひ給はぬ旅住(タビズミ)に……」と眞木柱巻に言つてゐる。【なま入わろく】何となくきまりがわるく。「なま」は「何だか」「どうやら」の意。「なまはしたなし」「なまはづかし」「なま腹立たし」「なま腹きたなし」などの「なま」である。【爪くはる】産しくて遠慮する。もじくする。竹河卷にも「あまえて、爪くふべき事にもあらぬをと思ひて……」とあり、後世のものではあるが「茶の「おらが春」に「親のない子はどこでも知れる。爪を唾へて門に立つ」と子供等に唄はるゝも心細く、大方の人交はりもせずして……」の一節もある。【歌々殘燈背壁影】(脚註)白樂天の句(九四頁長恨歌註(九)参照)【籠】コ。伏籠(フセゴ)。香爐に伏せ被せて其の上に衣服を被ひ、香を染ませ、或は單に暖めるに用ゐる籠。冬は火おほらかに埋みて、薰物(たきもの)大きに作りて、伏籠打置きて、裏(ク。日常、ふだん)に著給ふ御衣をば、暖かにてぞ著せ奉り給ふ(大鏡中巻、太政大臣兼通)【引上ぐべき物の帷など……】凡帳の垂布(冬は縹緞、夏は生絹)を捲り上げて、上の横竿(之を凡帳の手といふ)に引掛けてあるをいふ。【帷】はカタビラ、又、トバリ。【正身】サウジミ。本人、當人。【夜さり】ヨサリ。「ようさり」ともいふ。夜、宵。「さり」は「春されば」「夕されば」などの「さり」になるの意。「夜さりつかたは夕方。【直屋隠】ヒタヤゴモリ。ひたすらに屋に籠ること、唯ちつと家の内に引籠つて居ること。和泉式部が石山に籠つた時、御宮(教道親王)からの御歌に「憂きによりひたやごもりと思へども近江の海は打出



は、さ、か、ぎ

てて見よ(和泉式部集第二)。宇津保俊麿巻には、藤原兼雅が琴の音を尋ねて山中に入り、杉の空洞で測らずも、會て一夜の契りを結んだ俊藤女及び二人が間に生まれた仲忠に再會する條、兼雅の詞に「何が強ひても聞えむ。(是非無理テモ伴レテ歸ラウト言フノテハナイ)契り深くば又も夢り來なむ。今日は(帝ノ)御供に候ひつれば、ひたやこもりなりとて(兼雅ガ山中へ入ツタキヌ、一向出テ來ナイトテ、帝ガ構ハズニ)歸り給はむ(御還幸ニナツテシマツテハ)便なかるべし(不都合テアラウカラ)」と言つて歸るところがあるから、家でなくとも、轉じては「すつかり奥へ隠れ籠る」意にも用ゐられたことがわかる。又蜻蛉日記には、物忌の爲籠居中の父兼家へ道綱から見舞をやるに「ひたやこもりならむ。消息聞えに」とある。籠居の意味は無論であるが、「引籠つて鬱屈してゐる」意味にも自ら用ゐられたことが想像される。兎に角、これも「ひたやこもりなり」といふ慣用句が出来てゐた例證である。此處の「ひたやこもり」には「ひたすら閉ぢ籠つて」「更に打解けず全く頑強に固守して」といふ程の意であらう。「ひたは」「ひたぶる(一向)」「ひたすら(只管)」「ひた」と同語源であらうし、「ひたみち(直路)」「ひたもの(直物)」「ひたせめ(直攻)」「ひたぶり(直降)」「ひたにげ(直逃)」「ひたはしり(直走)」或は「ひたものぐるひ(直物狂)」「ひたしろ(直白馬)」などの「ひた」である。「つなびく」細曳く。引張り合ふ、意地張る、すなほに隣はぬ。「戯れにくく」嘘にも戯談は出来ぬ、戯談が眞實になる。「立田姫」龍田姫。秋を司る女神、春を司る佐保姫に對す。昔、奈良の京の西方に立田山、東方に佐保山があつて對立したるより起つた名。なほ立田山は紅葉の名所で、其の錦は立田姫の染め成すと見立てたから、此處は即ち「染色の天才」といふ程の意。「つき無し」不相應、不調和、似つかはしくない。「つき無からず」は、不相當でない、都合でない。「柵機」タナバタ。柵機津女(タナバタツメ)、柵機姫、織女。古昔、機を織る女即ち機織女のことであるが、七月七夕天河で牽牛星(彦星)と會ふといふ織女星をいふ。此處は立田姫に對して、此の織女神を拉して來て、染色と裁縫との技を並べたのである。「長き契り……」といふのが此の二星の交會をいふので、一年一度の年に稀な逢瀬にも譬へられるが、毎年忘れずに一度の逢瀬を樂しみ續ける永久の變らぬ契といふのが一面では又めでたいのである。五節句の一の七夕祭は支那の女子が七夕の夜手藝の上達を織女星に祈る乞巧奠(キョウテン)の風習から來たものである。「具して」そなはつて、そろつて。「うるせく」善く、巧に。若菜下巻にも「宮(女三宮)の御琴の音は、いとうるせくなりけりな。如何聞き給ひし」と源氏が紫上に語る詞がある。宇治拾遺物語(卷十、小槻

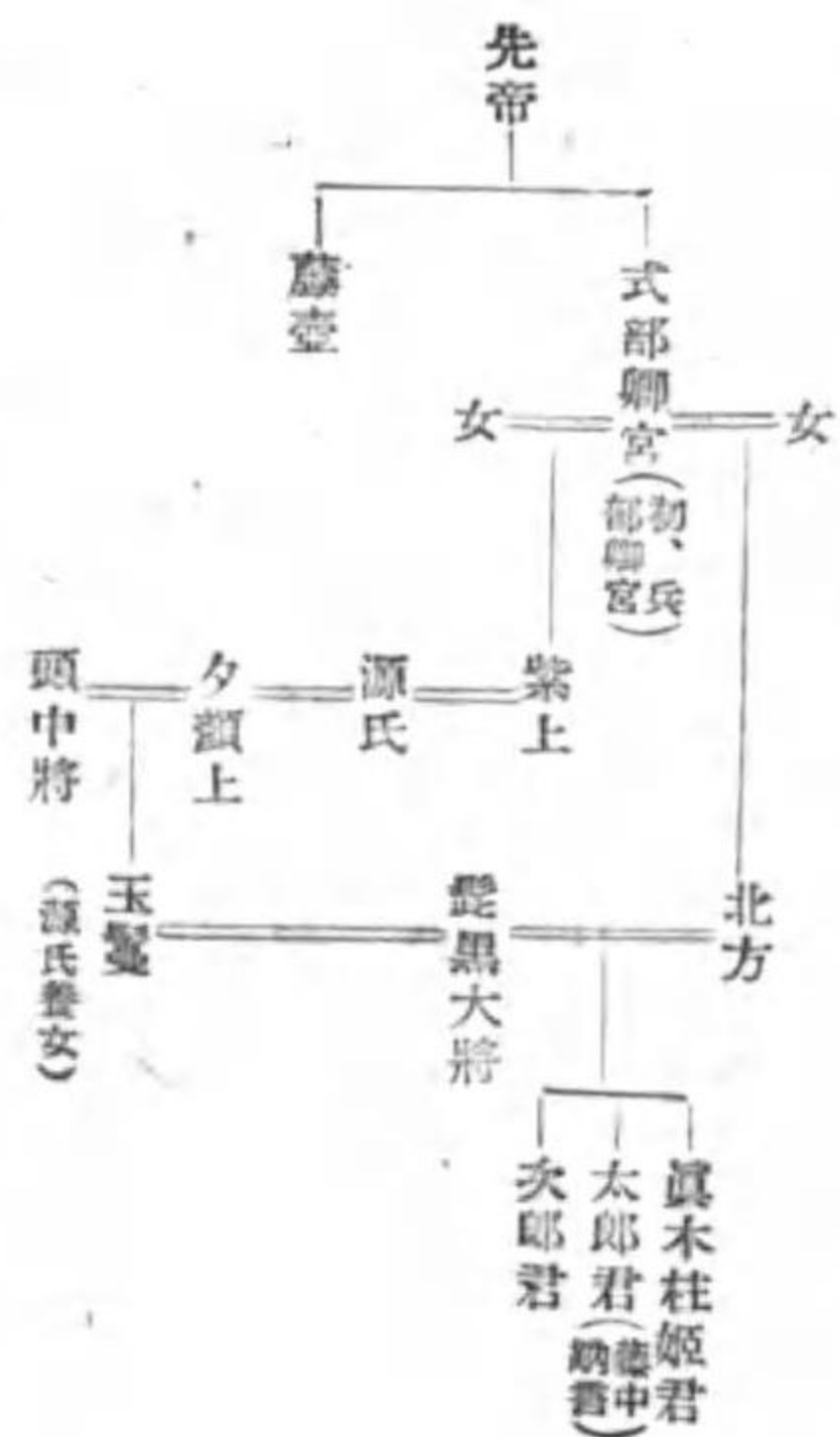
當平の事)の「才賢く、心ばへもうるせかりければ」とあるのは、性質氣だての善良なのを言つたのである。本文、青表紙本は「うるせく」となつてゐるが、河内本の「うるせく」とあるが正しいであらう。尤も「うるさく」でも「煩く」の意とは別に「煩く」の意にも既に平安時代から用ゐられてゐる。「うるせし」と同義にやはり「うるさし」とも此の頃用ゐられてゐたやうであるから、青表紙本の通りでも全然の誤ではない。「たゞ」とには、「うるせい」思ひよりて侍りつかし(枕草子)「梅こそ只今盛りなめれと見ゆるは、作りたるなりけり。すべて花の匂などの咲きたるに劣らず、如何にうるさかりけむ。雨降らば委みなむかしと見るぞ口惜しき」(同、同段)いづれにしても「うるせく」ならば判然する。

【釋評】 これから馬頭の體験談が始まる。つまり總論が終つて愈々各論に移るので、座談會は益々佳境に入る。

先づ第一話は妬婦の見本指食ひ女の物語一席、夫婦喧嘩の喜悲劇一場、こんなのは今でも始終そこいらに轉がつてゐて敢へて珍しい材料でもない。唯、雙方和歌で別れる洒落つ氣が流石に平安朝氣分で、これだけは長屋生活には見られさうもない。馬頭が自身を語る様子が最も生動してゐる。「賢く教へ立つるかなと思ひ給へて」のあたりも愉快だし、「おどろくしく託ち」ながら「この指を屈めて罷出」る恰好が眼に見えるやうである。「さらば今日こそは限りなめれ」も、「會はずに去んでは此の胸が」の伊左衛門が、喜左に歸る／＼と念を押す口氣がある。作り話でもよし、再聞きの間話でも構はぬが、ひよつとしたら作者が知つてゐる實兄惟規の家庭争議の一などでは無かつたらうか。馬頭の人物に惟規の片鱗らしいものを感じないでもない。勿論、事實があつても其のまゝではあるまいし、又馬頭の名稱なり、思想なりについては前にも言つた點があり、惟規の官名は却つて、今一人の「藤式部丞」の方に、そつくり拜借せられてゐる。(藤式部丞といつたつて、惟規には限らず、父爲時も昔はさうだつたし、又寛弘五年頃は藤原資業がさうだつた事は紫日記^{十二}に紫女自身記してゐる通りである。)

鬼に角、此の話題の女は總論の「美相無き家刀自の、偏に打解けたる後見ばかりをして」の類に先づ大體應ずる方で、それよりはすつと「買つてやれる部ではあるが、心一つに思ひ餘る時は」海山に姿を隠す似而非善女でない代りに、「艶に物恥ぢ」どころか「氣色ばみ背かむ」積極組で、「見知れるさまに仄めかし」たり「憎からずかすめな」す微温政策、婉曲戦術ではまだるつこしくて、露骨に「物怨じをいたくし」、正面攻撃を堂々と開始する質の所謂山の神型の女性である。

これは併し普通の人間で、少し下品なところはあるにしても、どちらかといふと、いはばしつかり者の類型であるが、

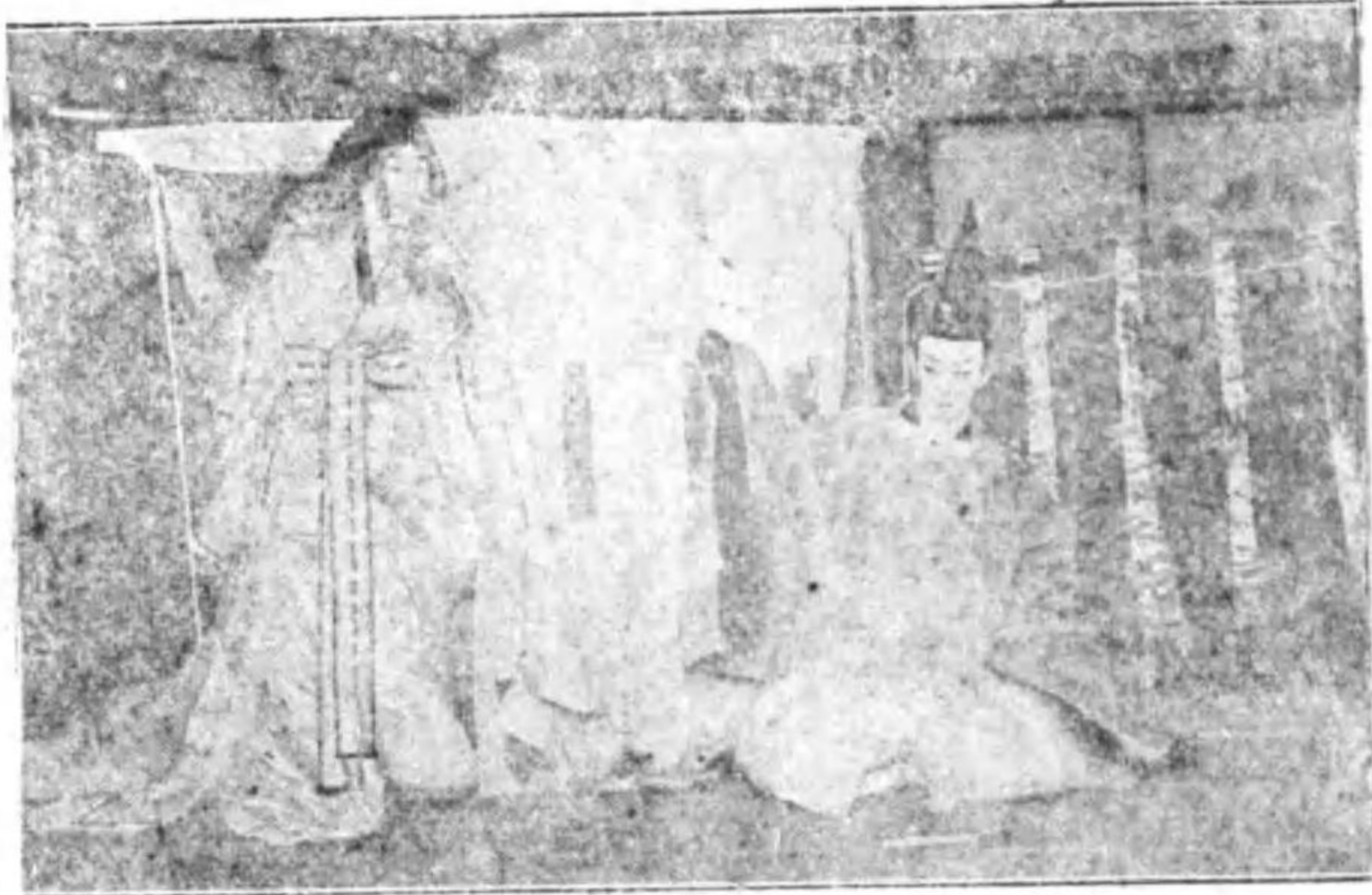


源語中の女性で、典型的のヒステリー夫人は、髭黒大將の北方である。此の方は皇族の御血統で、紫上には異母姉に當る間柄（藤袴巻）なのであるが、髭黒大將（行幸巻）に「色黒く髭がちに見えて、いと心づきなし」とあるので後から附けた呼名。物語に此の名は出てゐない（の本妻であつたのが、何故か嫌はれて、夫より三四歳年上の爲、髭黒から「おはあさん」と綽名をつけられ（藤袴巻）に「姫と號けて、心にも入らず」とある）て始終からかはれてゐるうち、ヒステリーになり、即ち當時で言へば、物怪に憑かれ、狂氣じみてだん／＼瘡せ衰へ、美しかった長い髪も落ち細つて御氣の毒な姿に變り、特に大將が新に玉鬘尙侍と婚する事になつた爲、病勢は頓に昂進して躁鬱症状は彌、激しくなり、終に或雪の夜玉鬘の許へ出かけようと髭黒がしてゐる時、突然發作が襲つて来て、今まで靜に寝てゐると思つた人が、むくりと起きるなり、伏籠の下の火取（香爐）を手にとると見る間に、背後から夫の頭上にさ

つとふりかけたので、四邊は一面の灰神樂、目といはず鼻といはず白い粉だらけで、大騒ぎを演ずる場面さへある（源木柱巻）。夜中ながら早速祈禱が始まる。北方は盛んに喚き立て嗚り狂ひ、招かれた加持の僧に「夜一夜いみじう打たれ

引かれ泣き感ひ明した果てにグタリと寝入る。ほつとした大將は益々愛想をつかしてしまふ。その癖、男が熱してゐるほど、新妻の玉鬘の方は實は大將が好きではないのである。此の事があつて後、最早捨て置かれずに、當の北方は娘の眞木柱君と一緒に——男の子二人だけは夫の手に留めて——父宮の邸へ引取られねばならぬ不幸な結末を見るのは、止むを得ぬ成行で、現時でも屢、耳にするヒステリーの妻を持つ家庭悲劇そのまゝである。

それよりも更に凄い恐ろしい妬婦物語は名高い六條御息所の生靈の怪奇である。（恰も歌舞伎座三月興行の中幕に、此の物語に取材した山田流の秘曲「葵の上」を更に岡鬼太郎氏の手で劇化せられた「源氏物語葵之巻」が上演せられてゐる。光君の羽左衛門、葵上の宗十郎、そして六條御息所は梅幸といふ役割、初めの葵上寢所の場の箏曲は今井慶松、それ以後の御息所居間の場の方は長唄が使つてある一幕二場物で、最初は六代目が出し物にする筈だつた由である。能の源氏物にも「葵上」がある。金春禪竹の作で面白いものである。前の箏曲の詞章もこれか



葵之巻 歌舞伎座上演

六條御息所(梅幸) 光君(羽左衛門)



能の葵上

(シ) 梅若高三郎

に男の胸に食ひ入つて、他の女を一人残らず影も留めぬやうに追ひ退けてしまはねば止まぬ根強さに比べては、火取を



才藝も勝れた美人型の方で、凄絶といった、何處かかう押れ難いきつゝい所のある女性である。而もねつとりした、しつこい愛が、蛇のやう

投げつけ、指に食ひつく兒戯は足下にも寄りつけぬ嫉妬振りである。年齒ばかりでなく源氏も此の人には一日置いてゐる姉さんのやうな愛人である。

かの御息所はいといとほしけれど、まことのよるべ(正妻)と頼み聞えむには、必ず心おかれぬべし(チツト氣ツマリダラウ)。年頃のやうにて見過し給はば、然るべき折節に、物聞え合はする人にてはあらむ(何かノ時ノ相談相手ニハ持ツテヨイノ人ダラウ)など、流石に殊の外には思し放たず。(葵巻)

御息所を我が物とするまでは、源氏はきつい熱心であつたが、やつとの事で靡かせてしまふと、もう態度が前のやうではなくなつてしまつた。特に紫上を發見してからは言ふまでもない。代りに今度は女の方が、積極的に變つた。一度許した上は、年齢もあり、世間體もあり、それに淋しい孤獨に元來が無理に眠らせておいたのを、一世の美男光君によつて點ぜられた性の業火が、撥けるやうに燃え上つては、我人共に戀の炎に焼き盡くさねば承知せぬのである。秋は更けて男の影も見せぬ夜がれの寝ざめ、夢現にいつか魂は殻を蛻けて憎い人の浮かれ歩く後を追ひ覚める。なにがしの院の荒れ邸、さらでも變化の現れさうな無氣味な夜、

己がいとめでたしと見奉るなば、尋ねも思はさで、かく殊なる事なき人(大シタ女テモナイ者)を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつられ。

と、枕上に立つは幻の女、「晝も空をのみ見つる」弱い夕顔上とて、一たまりもなく取殺されてしまふ。案山子の弓にも似た光の君が引き抜いた太刀の威しに、何の効きめがあらう(夕顔巻)。併し御息所の情の遠引に、あやしの垣根にかほそくうつろふ花の夕顔では不足な對手、神の御前の桐葉とめでたさを競ふにもふさはしい草の名の大殿の上こそ、深き戀路の仇であつた。而もその賀茂の祭の御輿の日、測らず途で出遇うた雙方の物見車の所争ひから、思ひもよらぬ見苦

は、きき

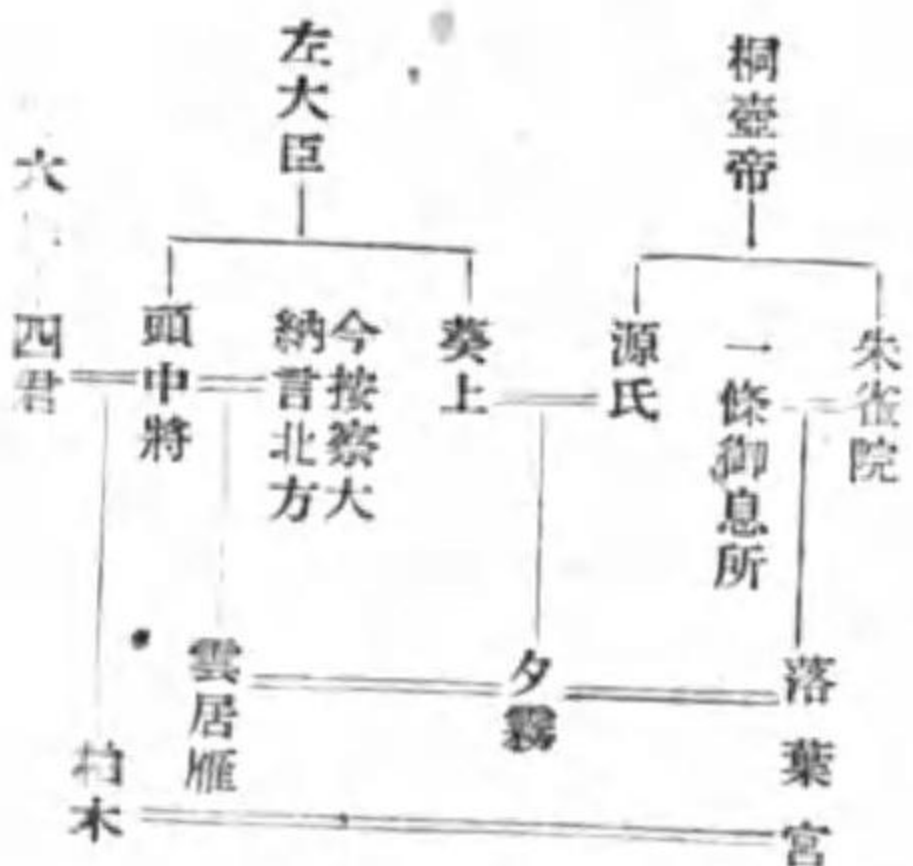
しい恥を與へられて（これが葵卷の有名な車争ひで、御息所の方は車の欄など皆押し折られて、ひどい侮辱を受けた）は、忽ち悔し妬まし怨めしの挑み心一筋に燃え熾つて、「少しも打微睡み給ふ夢には、かの姫君（葵上）とおぼしき人のいと清らにてある所に往きて、とかく引きまきまきり、現にも似ず（正氣ノ時トハ似ツカヤウナ）猛く厳き一向心出で来て、打ちかなぐるなど見え」ることが度重なる怖ろしさ。恰も懐胎の大殿の上は、苦しみ抜き惱まされ盡くして、若君（夕霧）の誕生の慶びに續いて、生靈に精魂を吸ひ取られてであらう、終に俄に絶命してしまつた。此の女君の可愛さうなのは勿論であるが、病妻に憑靈して夫を怨ずる御息所の、まさしくとした聲音に、悚然として駭き慄れた源氏の君よりも、更に「恐ろしく歎かしく、苦しさをあまさまさに我と我が身が疎ましくさへなつたのは當の生靈の主、六條御息所である。妬ましく、口惜しく、心は波立つ。けれども流星はしたくない復讐などたくらまう見下げ果てた心にまではなり下つてゐぬ。結局は自分から苦しみを求めたつらい戀の報と思ひ諦めねばならぬ」「身一つの憂き歎きより外に、人を悪しかれなど思ふ心」は自分に毛頭無い筈である。丁度齋宮になつて伊勢に下る娘に、先例は無くとも附添うて、いつそつれない人の事を忘れてしまへる遠い國へ行つてしまはうと思ひ定めてゐる自分である。それが「物思ふ人の魂は、實にあくがるゝもの」と、澤の螢の形容だけでなく、昔語りの荒唐でなく、他人の上の噂でもあらうことか、生身のまゝの自分に打消し難く體驗せられた罪障の深さ忌々しさ、そののみか、半醒半睡の「我にもあらぬ」心地で、魔縁の所行を荒けなく加へに往つて戻つたと思つて、ふと正氣に還れば、怪しいと言はうか、凄いとやはうか、正しく彼處の壇で焚かれた護摩の名残、御衣なども唯芥子の香に染みかへり」而も幾度、髪を洗ひ、著物を著更へても、ちつとも消えず落ちぬ不思議は、愈、身の毛もよだつ業因の限りと言はねばならない（葵卷）。其の後、終に決意して娘と共に伊勢に下り（賢木卷）、源氏が須磨に漂はれてゐる頃も伊勢から長い見舞状を送つてよこし（須磨卷）、齋宮の代替りに歸京して六條の宮

に住み、病を癒て尼となり、程なく娘の將來を源氏に托して逝去された（薄櫻卷）。生きて人を惱まし自らをも苦しめただけに止まらぬ此の靈魂は、死んでも亡びぬ妬心を留めて、今度は大殿の姫君の位置に代つた紫上の病臥につけ込んで、祟りを始め（若菜下卷）、終に又此のかけがへの無い分身をも源氏の掌中から死の國へ奪ひ去る（御法卷）目を早めたのは、全く底ひ知れぬ執念の鬼であつた。勿論如上の怪奇の一々の事實は、心理學的に又心靈學的に、普通に十分説明の出来る現象であるが、（唯、芥子の香の染み込んで脱けないのだけが、一寸超科學的であるが、これもヒステリー症患者の自己暗示、乃至は錯覺、その文學的誇張といつた形で一應の解釋も出來ぬ事はない。これだけ科學に目を瞑つて怪談味を漂はせて置くのも亦面白い。）傳説的には、かういふ女性の心持が民俗化した形を取ると、所謂丑刻参りの出現となるのは當然で、謠曲「鐵輪」乃至は辰橋傳説の宇治の橋姫の怪（匂卷）は、形の上では、つまり六條御息所の心靈的行動を一層常識化説明化具象化したものと言つてよい。

扱此の執拗な嫉妬心は、自ら嫌ひ、自ら恐れ、自ら警めてゐる所であるには違ひないが、恐らくは作者たる紫女自身の人知れず苦しませられてゐた賦性の一ではなかつたかと思ふ。唯彼女が努力して修養と戒心によつて此が因となることから自身を救はうとして惱んでゐたのではなかつたかと思ふ。なほ言はば、若し明確な自意識が無かつたとすれば、却つて潜在情念としては人一倍激しかつた人であつたやうに感ぜられるのである。濟輩の清少納言や和泉式部に辛辣な評語を投げつけて自ら遣るのも（紫日記）、必竟此の心持に根ざしを置く競争意識の發露、自身をして自らの優越を知的にも確認せしめようが爲の本能的な努力に他ならない。一面から觀れば、愛の詩篇五十四帖も亦實に此の心持が筆端から溢れ出て奏で續けられてゐるのだと言つても大きな誤ではない。此の心持が熾烈な人でなくて、あのやうな日本最大のもので最も深みのある戀愛小説に何の執筆の興味が湧かう。作者は餘りによく描き上げ、と言はうよりは餘りに完全

に描き上げた女主人公紫上の御蔭で、作者自身がそのやうな完全な女性と錯認せられ尊仰せられ過ぎてしまった。此處でも藝術の力の大きさ底深さに駭かされ考へさせられるものがあるが——無論作者は紫上にならう近づかうといふ不斷の努力は決して懈らぬことが認められる。又、紫上になり得た瞬間も、或は本性紫上と共通したものを有してゐることも信じられ得る。随つて作者も亦紫上と全然別箇の女性ではない。唯、當然以上に過大視されて來てしまつたといふだけである、——眞實の生地はかのおさましい六條御息所、物語の上では比較にもならぬ程紫上とは違つた性格の所有者である此の齋宮の母御息所とすら、決して全然の他人ではあり得なかつたのではあるまいか。(その御息所に感じが非常に似たと作者自ら記してゐる明石上は、源語の女性中で最も現實の作者に近いやうな氣のする人物である。唯それ、極端な思ひあがり家である一方、又極端な用心家で反省家で殊更な謙抑家である。内心を出来る限り外面に現はさぬやうに努めてゐる惻巧な女である。随つて御息所のやうな心持があつても、色にも出す氣遣はないのである。)否、その完全理想の女人紫上にも、なほ此の心性だけを、たつた一つの缺點として賦與したのは、彼女を超人間にしてしまふことから救うてゐると同時に、盡きざる興味と心にくさを覺えさせられるのである。愛——嫉妬——それが女人の生命であり、全姿であり、醜さであり、美しさであり、呪はしいものであり、尊いものである、といつた觀念と體感とが其處に作者によつて遺憾なく示されてゐるのを見るからである。

そしてもう一つ附け加へて言ふならば、前にも觸れたが、かの筒井筒のやうな無邪氣な幼などの戀が初めは壞かれたけれど(少女卷)、終に本意の如く成就してめ



でたい家庭を作つた夕霧と雲居雁(藤裏卷)の間にも、やがて平和を脅かす波風が立ち初めて、故柏木権大納言の北方落葉宮と三角關係が出来たやうになつた事は、振分け髪のみ事(女君)をも、今は眞劍に夫にすねる可愛い「鬼」に化せずにはおかず(夕霧の愛人には、他に父光君の腹心惟光の娘で五節の舞姫を勤めた藤裏侍もある)、「そんなに子供みたいになつてばかりゐるせむか、もう慣れつこになつちやつて、この鬼も近頃ではちつとも怖くないや。もうちつと神々しいところを添へなくつちやな」と夕霧に茶化されるのに應戦して、

何事言ふぞとよ。おいらかに死に給ひぬ。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし。見捨てて死なむは、うしろめたし。(何言ッ
 テンノヨ。ツベコメロヲタ、カナイデ、オトナシク死シテオシマヒナサイ。イ、エサ、ヲタシモ死ニマス。ホンニ、見レバ目障リ、
 聞ケバ有難クナシヨ、ソレカツテ、ヲタシダケ死シテヤツテ、後へ一人残シテオクノハ氣ガカリダシサ。)(夕霧卷)

と眼瞼を眞赤にしてゐるいちらしい雲居雁の怨み言、此の邊は紫女の小説中に於ての對話の妙筆に接し得る機會を與へてくれると共に、嫉妬の本體をまさしくと此處に見るやうな氣がする。

獨占欲が主體たること勿論であるが、空想の無いところに嫉妬は無い。不まじめなところにも嫉妬は無い。そして嫉妬は彼女を一層敏感にし、彼女を一層雄辯にし、弱い女を驚くべく強くする。指食女も火取の北方も、生靈の御息所も、第三者からこそ滑稽にも笑止にも見え、男からこそ疎ましく不快に感ぜられようが、當の女にとつては笑ひ事ではない。愛の尺度を自身で計つて無理に夫に見せようとする焦躁が、却つて喜劇をも將た悲劇をも生むのである。おちついてゐて、黙つて夫に計らせる要諦を、物定めの博士の假面を被つて、紫女は諄々と説くのである。法の師の場にしては聽聞の善男の數が五指を屈するにも足りぬのが勿體ない位である。

ところで、此の馬頭の告白の第一話は、女も「さがな者」に違ひないが、男にも十分弱味もあり、勝手もある。鬼に角

馬頭の癖に「じやく馬馴らし」は見ん事失敗の一幕を演じた。つまりは責任は雙方にある。けれども元來は實直で夫を愛すればこそその指食である。狂言の威嚇が時の機から眞實の夫婦喧嘩になり、別れ話にまで進展してしまひ、騎虎の勢、洒落でもあるまいが文字通りの手切れとなり、雙方表面は終まで頑張り合ひ通して妙な事になつてしまつたが、惡たいから掴み合ひ、果ては三行半と紋切型の不縁沙汰の後で、腹の中では可笑しいやら恥づかしいやら、急に愛人が懐かしくなつて、昨日寢耳に水の心配をさせた親御を呆然と後へ残したまま、けろりとして元の家へ舞ひ戻る、といったレヴィウほどではなくとも、男の足はやはりそちらへ向く、女の胸は男の歸るのを待つてゐる。雲降る調樂の夜更けの光景、馬頭がいろ／＼にやきもきするだけ、別れた女房が忘れぬ證據、それも尤も、見捨てた人を流石に後見する伏籠の暖かさこそ、彼にとつて何物にも替へ難い感恩の恵であらねばならぬ。もとより女一通りの業は、何もかも人並勝れた技倆の上に、「はかなきあだ事」でも「眞の大事」でも、立派に夫の相談相手になれる内助の功いやちこな賢夫人、概論の所謂「公私の人のたゝすまひ、善き悪しき事の目にも耳にもとまる有様を」それ／＼ちやんと「聞き分き思ひ知る」方で「立離れて」も「我が心と思ひ得る」頭腦、何事にも隅々まで注意が行届く老練な主婦、つまり「常は少しそばそばしく、心づき無き人」であるが、何としてもいさといふ場合には決して夫に負けを取らせぬ有り難い女房である。偏に打頼みならむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひ給へ出でらるゝ。

○辱しめ給ふめる官位いとしく……(本文)
評釋に

この段いさ、か聞きにくし。位の下に字の脱けたるにや。

とある。原本が如何であつたかは別として、脱字・脱文があつたとせずとも、此のまゝで通せぬことはない。それよりも「辱しめ給ふ」といふ意味に少し明瞭でないところがあるやうに思はれる。

上に、見だてなく物げなき程を云々と、女の言へるにあたりていふ也。(小楠、六の卷)

といふのが宣長の見解であるが、そしてこれは既に岷江入楚(第二)にも全く同様に釋せられてあるところであるが、「萬づに見だてなく云々」は、成程詞だけは失禮だが、「人敷なる世もやと待つ方は、長閑に思ひなされて、心疚しくもあらす」と女は言つてゐるので、馬頭の官位の卑賤なのを特に侮辱したのではない。寧ろそれは我慢が出来ると言つてゐるのである。而もそれは前に馬頭の方から自身「人並々にもなり、少し大人びむに添へて」と言つてゐるのを受けてゐるのである。すべてを承知で、わざと「おどろ／＼しく託」つのであるが、自分から言ひ出したのを、寧ろ容認しようとするしてゐる女の態度に、特に「辱しめ給ふめる」とおつかぶせるのは、女がいゝ氣になつて自分の腑甲斐無さを嘲弄したといふ風に故意に曲解した振をして言ふのか、それとも軽い意味でつひ口に出してしまつたのかでない、少し辻褃が十分には合ひかねるし、どちらにしてもピンとは來ない。かういふ意味で兎に角「聊か聞きにくし」感を漠然廣道が抱いたのは無理ではない。湖月抄の註には、

恥辱をあたへられしと也。

とあるだけで、少し意味が明瞭を缺くが、特に他に説明の語がないのと、その語氣とから見て、指に食ひつかれた事實をさすやうにもとれる。それならば、寧ろはつきりするが、併し「官位」が辱しめられたといふのは少し大仰過ぎる。そこでなほ一つ目につくのは、此處の女との對話で、「斯くおぞましくは」から「並ぶ人無くなむあるべき」まででも、

は、きき

「斯かる疵さへ」から以下でも、馬頭の詞中、女に對して敬語を用ゐるところは此處の「給ふ」の他一箇處も無いことである。前の所は、嵩にかゝつて威壓的に言ふのだから、敬語を用ゐないので、食ひつかれてから急に此處だけ皮肉に用ゐたといふのかも知れぬが、それでも少し變である。而も女が特に侮辱したのなら、その皮肉も利かうが、さうでないのは前に述べた通りである。喧嘩腰と言ひ條、女の詞にも敬語が無いのは、一般的抽象論のつもりで言つてゐるとすれば、一層辯護の出來ぬ事はないが、此の對話は、源氏君初めの前で馬頭が追想的に語る事件中のそれであるから、直接引用法でなくともよいわけで、それだから一層、源氏達に對しても、自分等の對話に敬語を省いたとも觀られぬことはない。下の段に留守の女房共の詞を引いて「親の家にこの夜さりなむ渡りぬる」と答へ侍り」とあるのも間接引用法で、實際は敬語を使つて主人たる馬頭に答へた筈である。(勿論、追想的敘述でも直接法を挿むことも出来るし、後の木枯の女に話しかける殿上人や、又式部丞に應待する女の詞など、さうである) 若し間接法だとすると、愈、「給ふめ」が可笑しいことになる。或は此の「給ふ」は四段の敬語助動詞ではなくて、下二段の謙稱の助動詞かも知れない。「めり」への接続は終止形からであるし、而も共に終止形は同形の「給ふ」であるから、形の上では區別はわからない。もし謙稱の方だとすると、「辱しめてをりまする官位」といふ意味になり、源氏達の前で語る詞としては極めて自然に聞えるのである。と、「折角頂戴してゐる官位も、これでは低い上に一層幅が利けなくなつて、とても人並の出世など覺えない」といつた意味に解せられて來るわけである。唯、「辱しむ」といふ語を、後世のやうな意味に此の時代も使つてゐたか、即ち「汚す」といつた用法と同じに(軍記物などには既に「丞相の位をけがし」(延慶本平家)「信賴などが身を以て大將を汚さば」(平治物語)などの用例が見える)用ゐられてゐたか如何か——さういふ想像も決して不自然ではないし、可能でもないやうに考へられるが——未だ的確な用例を發見せぬから、斷定は姑く避けるけれども、私見を述べて疑を存して置く。口譯だけは假に在來の解に據つておいた。

○手を折りて………え怨みじ。(本文)

諸説紛々である。此の馬頭の歌は伊勢物語(一六段)の紀有常の歌の上句を取つて作つたことは前にも言つた通りで論なきところである。そして本歌の下句に「十といひつ、四つ」と數字があるので、此の方にも「これ一つやは」といひ又それを受けて「心一つ」と言つたのである。問題は「これ一つやは」が中心で、而も(一)その「やは」の解し方が重要な論點をなし、それに關聯して(二)「これ一つ」の意味、次に(三)「君が憂き節」は、(イ)「君が憂き(十)ふし」か、(ロ)「(君が)十(憂きふし)」かといふ釋、及び(四)「え怨みじ」が(1)男自身の心持を言つたのか、(2)女に駄目を押したのか、(3)「君が」の解し方が人々によつて異なり、それが又錯綜して煩雜である。

細流でも岷江入楚所引の箋(三條西實澄の説)でも、萬水一露でも、舊註は大體「やは」を、大してむつかしく考へず、普通の用法即ち反語の意味に解してゐる。で、全體の意は、

歌の心は、指を折りて逢ひ見し中の憂きふしを數ふれば、是のみならずさまなりしと也。

といふ湖月抄の註で先づ代表されてゐると見て差支ない。「是のみならず……」は細流の「まは是一にてもなきとなり」とある方が寧ろはつきりしてゐる。箋に「此の一事に限らずとかこちたる也」とある「此の一事」が嫉妬を抽象的に指すやうにも一寸聞えるが、「やは」を反語と見るのは同じで、それに嫉妬以外には馬頭は女に大きな不満が澤山あるのではない事を自身言つてゐるのであるから、やはり「今日の悒氣騒ぎ、つまり指食事件」を指した事は明らかである)そして「え怨みじ」も、前掲の(四)の(2)に屬する方の

今は女もえ怨みじと、馬頭が言ふ也。指を食ひし事をかこちていふ詞也。(弄花抄)

といふ解が妥當とせられてゐるやうで、岷江入楚も（細流の著者稱名陸公條の説と併せて引用してゐる）、湖月抄も之に随つてゐる。即ち

指折り數へて、これまでの事を考へてみれば、おまへからつらい目にあはされるのは、今日に始まつた話ではない。みつともない情氣沙汰は度々の事、全くもう厭々だ。いや、おまへも俺に食ひつくほどの事までしたし、これで腹の蟲もい、加減をさまつたらうぢやないか。

といふ意味になるので、さうすると、それに應ずる女の歌の意は、

つらい目にあはされるつてのは、こちらの事よ。私つて者が腫としてゐるのに、昔を忘れて散々氣儘の浮れ放題、幾度獨りで泣いたか知れませぬ。それでもその度に口惜し涙をちつと胸一つに採へて今日まで来たとの詰りが、仲よく折れ合ふめでたさもあらうと、これがほんとの水の御別れになつてしまふなんて。

といふことになる。舊註の解釋もこれで、ひどく不自然でなくよく通するのである。

ところが新註では宣長以後「やは」を反語と見ないので、右とは變つた解釋を來すことになる。即ち小櫛の説では、「やは」は只「や」の意で、反語ならば古文には必ず「一つかは」とあるべきであると主張するのである。守部（別記）も廣道（評釋）も此の意見に賛し、廣道は更に之を補つて、

やはの辭は、ふくめたる所にて結ぶ格にて、うきふしの下にナルべきといふ辭をいひさしたる其べきにて結び竟る意也。（評釋）

と註してゐるので一段明快な解となつた。唯、宣長は、なほ「これ一つ」を舊註のやうに「唯此の度の一ふし」といふ意に解してゐるので、さう解して、而も「やは」を反語と認めまいとするには、「君が憂きふし」といふ所で調和的な解釋を施すと共に、「此の度の一ふし」も指食事件といふ結果にだけ觀點を置く代りに、その指食事件を惹起した今日の大叱言、乃至夫婦喧嘩といふ側に重きを置いて解する他はなくなる。故に

君がうきふしは、女の馬頭を憂しと思ふべきふし也。指を折りて逢ひ見せしより、なだの年月を數へて、其の間の事を思ふに、君が我を憂しと思ふべきことは、唯此の度の一ふしのみ、そはあらめ、外にはなしと也。次の言に、え恨みじといふも、此の意にてこそ確なれ。（小櫛）

といふ註解を與へてゐる。即ち前に示した（イ）（君が憂き）（君が憂シト思フ）（十）（ふし）（事）（）の方である。「え恨みじ」も舊註とは少し違ふが（2）の方で、

今までおまへが愠氣しても私は此つた事一つなく、小つびどい目に會はせたのは今日が始めて。よく／＼胸に手を當てて考へてみ

なう、恨みなんぞ言へた義理ぢやあるまい。といつた解釋である。それを女は「叱られた事こそ無けれ、叱られるよりもつらいあなたの浮氣、明暮の苦しい胸の裏を察しませずに、さりととはつれない御詞」と逆襲するわけになる。これも亦一解釋である。守部も、

「只此度の「これひとつは君が「われをうしとおもはん」うきふし「ならん。外に、うきめ見せし事はなし」えうらみじなどいひ侍れば（湖月鈔別記）

と補述してゐて、略、同説である。然るに廣道は別の意見で、

舊説の僻事なるよしは小櫛に辨へられたるが如し。さて小櫛の説も猶いかに也。これ一つとさしたる詞は、此度の「一ふし」をさして言へりとは聞えず。すべてこれなどいふ時は、一つの物をとらへてさす語の例なれば、一時の事としては似つかはしからず、なほ嫉妬をさして「へり」とぞ聞ゆる。（評釋の帯木卷餘釋）

といふのが「これ一つ」に對する解、随つて

歌の意は、指を折りてあひ見し年月の間の事を數へて見るに、唯此の物れたみの一つや君がうきふしなるべきと言ひて、其外の事は、うしろみの事も、我に盡くしたる心も、皆まめやかなりしものと、含めたる意也。（評釋）

といふ解釋に到達するのである。斯く好意的に傾いて來ると、「え恨みじ」が(2)の方では、そぐはなくなる。そこで、馬頭が女に對ひていふに、女の馬頭をえ恨みじといふ意としては、事がらの情程かならず。よくく味ひ考ふべし。(帯木卷餘釋)と首をひねらざるを得なくなり、其の結果、(1)のやうな解が生じ、それが爲に又「君が憂きふし」も(ロ)の「君が(十

憂きふし」我ニトツテノツライフシ、即チ缺點」といふ意に取られ、
うきふしといへるは、馬頭が心に憂しと思ひたるふしと見るべし。さらば、え恨みじといへるも、馬頭が女をえ恨みじといふ意となりて、事なく聞ゆるなり。すといはずして、じとしもいへるは、女の方を推量りて言へるやうに聞ゆれど、猶さにはあらじ。俗言にユメユメ恨ミハスマイといふ意なれば、さても聞ゆる也。(帯木卷餘釋)

といふ丁寧な解説を要することとなり、
物れたみの外には、さして憂きふしもなかりしかば、今別るとても、其方なばえ恨みじと馬頭のいへる也。さる故に女もさすがに悲しくなりて打泣きたる也。(評釋)

といつた釋に落著いた。即ち「え恨みじ」は「いや、十分感謝はしとる」といふほどの意味になるのである。大風一過流石に互に少し平靜の自分を取戻した氣味、嚇しの鬼の面がすれて、弱い男の生地がチラと顔を見せた形と解すればよいわけになる。

結局、概括して言へば、(A)舊註式、(B)宣長式、(C)廣道式、といふ三様の主な解釋が在ることになる。私は、(1)の「やは」については(A)を採らず、(B)(C)に隨ひ、即ち反語と見ないで、感動の助詞と見た。(11)の「これ一つ」は(C)に贊するもので、その理由として、廣道の意見の他に、本文の前後に
唯この憎き方一つなむ、心をさめず侍りし。
とあるを旁證として補説する事を附加したい。(三)も(C)即ち(ロ)の方、「オマヘノ困ツタ習癖」といふ意に解した。

以上大體廣道説に追隨したのであるが、(四)だけはC(即ち1)を採らず、(2)特に(B)説——但し詳説はしてないが、上に意譯しておいた——のやうに觀たいのである。もとより御芝居ではあり、別れ際に急に未練が出て軟化しかけるのも、あり得ない事ではなからうが、流石の馬頭も芝居が外れた自棄半分の言葉戦ひからいつのまにか本氣の喧嘩になり、指には食ひつかれ散々な態に、負け惜しみと意地づくで、やつぱり大衝突のまゝ、雙方其の日の勝敗を決せず相引きに引いた方が、自然でもあり、そして後段が對照的に一層引立つて來る。「言ひしろひ侍りしかど」や「誠に憂べき事とも思ひ給へずながら……」や、「艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いと直屋隠に情無かりしかばあへなき心地して……」などの文句もきつぱりして來る。折れ過ぎてしまつては「斯かる疵さへつきぬれば……」の嚇かしも、「さらば今日こそは限りなめれ」の強がりも、餘り利目が無さ過ぎて可笑なものになる。無論、男の方は實は弱いので、女の方が案外に強硬でもあり、持久戦でもあり、罵詈雑言でも或は猫撫で聲でも、受けつけはせぬのであるが、それだけ男の方が表面強く出ないと對應しない。廣道は「これ一つ」を「物ねたみ」と解したはよいが、その餘勢で、「其外の事は……含めたる意也」の方を少し重く見過ぎた嫌がありはせぬか。女が「流石に打泣きて」といふのは、馬頭が急に折れて來たからではなくて、平生此の人の爲には身だしなみもよくしてゐる自分が、女の身にあられない、取りのぼせて指にまで食ひついた淺ましさ、その大詰が愈、ほんとの離別かと思ふと、夫の別れの歌と辭に流石に悲しくなつたのである。而も男に駄目を押されて、そのまゝ黙つて居られはせぬ。言ひ分は此方にこそ、たとある筈、早速に尻取文句で相手の歌の結句を其の儘引取つてやりかへしたので、寧ろ自然な應答でなければならぬ。

なほ眞淵(新釋)が此の條の「手を折りて」のやうに古歌を取つて來るのが物語文の一手法であると説いたのを、廣道

(帯木卷餘釋)が駁して、それは適例でなく、此處では「指を屈めて」といふ詞の縁から、彼の句を用いたまでで、寧ろ下句を變へて面白く言ひなした手腕の方を稱揚すべきであると論じたのは、論無く肯定出来る。

兎に角、馬頭の歌が伊勢物語一六段のかの歌から出てゐる事は明らかであるが、そして其の一六段と家出女の話との交渉は前に言つたが(二九五頁参照)、又同段の紀有常は

三代の帝(仁明・文徳・清和)に仕うまつりて、時に遇ひけれど、後は世變り時移りにければ、世の常の人のこともあらず。人からは心美しうあてはかなる事を好みて、他人にも似ず貧しく經ても、なほ昔よかりし時の心ながら、世の常の事(生活ノ爲ノ仕事)も知らず……

といふのであるから、馬頭の所謂「もとはやんごとなき筋なれど、世に經るたつき少く、時世移るひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、惡びたる事ども出で来るわざなめれば」といふ場合にそつくり該當する人物で(有常は名虎の子。其の先は孝元天皇の曾孫武内宿禰の男、角宿禰に出でゐる)、馬頭そのまゝではないけれど、尼になつて出て行く妻に、離婚すると言ひ條いくらか氣の毒で、何か贈物をしてやりたくも「貧しければするわざもな」い素寒貧で何といつても「心は心として事足らず」の仲間「萬づに見だてなく、物げなき程」の「人數」ならぬ生活者たる點に於ては同斷である。そしてこれは女の方から出て行くのではあるが「年頃あひ馴れたる妻」で、離別を夫も承知の上である。又「手を折りて」の歌を受けて指食女が其の句を取つて一首詠むのも、同段の有常の「手を折りて」の歌を受けて親友が其の句を取つて

年だにも十とて四つは經にけるを幾たび君を頼み來ぬらむ

と詠んで送るのと相應じてもゐる。いづれは一六段が此の指食の條に影響し、ゐる事否み難い。

それに關聯させて考へることが出来るやうに思はれるのは、右の一六段の他、二二一段や一一九段と家出女の話との關係や、二三段の筒井筒の話や既に述べたところであるが、その二二一段と二三段との間の一小話も亦注目惹く點がある。

此の二二一段は、ふとした事から一旦別れた男女が、やつぱり思ひ斷れなかつたと見えて、女の許から、

憂きながら人をばえしも忘れればかつ恨みつゝなほぞ戀しき

と言つてよこしたので、「さればよ」といひて、男」が

逢ひは見て心一つを川鳥の水の流れ絶えじと思ふ

とは言つたが、其の夜泊りに行つて、「秋の夜の千夜を一夜」と契つて「いにしへよりもあはれにてなむ通ひける」といふ、これはめでたく和合する物語である。馬頭も「まことに變るべき事とも思」つてゐず、女も「流石に我が見捨ててむ後をさへなむ思ひ遣り後見」、自分は留守でも、別れた夫を「今宵ばかりやと待ちける様」分명한雲の夜寒の暖い心持「さればよ」と心驕りする「男の鼻の下まで、右の段が御手本のやうな氣がする。唯、指食女の方は逆に却つて「艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで」、最後まで強情を張り通して、夫に思ひ知らせたところが面白い。

○げにその立田姫の錦には、又如くものあらじ。(本文)

此の一節の解は新舊諸註の中で小櫛の宣長が群を抜いてゐる。前文に「立田姫と言はむにもつき無からず」とあつて指食女が染色の技にも優れてゐた事を馬頭が賞讃してゐるのを受けたのは言ふまでもないが、それが爲に、此の句も亦單に彼女が染色に巧であつた事を中將が重ねて稱へたので、次の文も花紅葉も色の染まり方がまづいのは榮えないといふ意味だとするのが舊註の一般で(花鳥だけは「如何に手が巧な女でも、立田姫には及ぶまい」といつた一層誤つた解を下し、これは岷江入楚も難じてゐる位で問題にならない)あるが、宣長は、之を採らず、

これは其の女のやうな聞き、げに其の女に如くものあらじと、女のすべての上を賞めたる詞也。唯、物染むる方のみを賞めたるに非ず。「錦」と言へるは唯「しく物」と言はん爲の縁のみにて、その「錦」を言はんとて、上の語によりて女を立田姫とは言へる也。(小櫛、六の卷)

と論じたのは眞に卓見である。立田姫は野に山に紅黄絢爛の錦を染めなす秋の女神である。「しく」は「敷く」と「如く」とに掛けたのである。次の「花紅葉云々」も此の立田姫の錦から導き出されて来たのである。即ち、馬頭が「立田姫と言つても溢美ではない」と語つたのを引取つて中將が、女を「立田姫」にしてしまつたのである。同時に女を「立田姫の錦」に喩へたのである。「その」といふ語にも注意せねばならない。

○はかなき花紅葉といふも……定めかねたるぞや。(本文)

此の一節も舊註は大抵的を外れた解釋をしてゐる。やはり小櫛の説が一番しつかりしてゐるが、「はかなき……」は本妻とも定むべき女は、大方何事も足らばでは悪しかるべき由にて言へるにて、はかなき花紅葉だに云々なれば、まして妻とすべき女は何事も足らばではといふ意也……

と解し、「さるにより」は

此の上に、まして妻とすべき女は、大方何事も足らばではかなはずといふ意を含めたる物也。……さて其の含めたるを承けて「さるにより」といふ也。

と説き、「定めかねたる」は、湖月抄所載の「師説」に女の早世した故、「世は定め難き物ぞ」と釋してあるのを論難して、「定め難き」は女の事にこそあれ、世の事にはあらず、つひのよるべとも定むべき女は、有り難き世の中なる故に定め難き也。と言つてゐる。廣道も大體、宣長の意見に賛して之を採用してゐる。今假に宣長説を準據として、此の條を口譯してみ

ると、

いやよく理想的な女だ。正に美しい立田姫の錦だ。世間廣しと雖も、恐らく其の錦に及ぶ女は、他にたんとはありませぬ。早い話が、つまらぬ花や紅葉のやうなものでも、皆が皆美しいとは限らず、季節々に色合が調和しないで、どうも感じがはつきりせぬやうなのは、少しも映えず、人の目にも悦ばれずしまふ道理。だもの、まして無くて叶はぬ條件がいろ／＼と要る理想通りの妻といった女は、なか／＼どうして容易に手に入らぬのが世の中だと、誰もが妻定めには一苦勞も二苦勞もするのさねえ。

といふやうになる。これでも十分意味は通ずる。唯、「……消えぬるわざなり」から「さるにより」へ移るのに、少し論理の飛躍がある。宣長の填補した章句を「さるにより」から逆に演繹して來る事が、無條件で可能だと容認され得べきかが猶一の懸案である。私は「色合つきなくはかくしからぬ」といふのと、「露の映えなく消えぬる」といふのに別の意味を認めて、卑見に基づいて前掲本文の口譯のやうな釋を試みてみた。満足とは思はぬが、それで「さるにより」だけは滑らかに解けるやうに思ふ。

なほ「定めかねたる」は宣長の論の通りである。「世の定め」などでは決してない。「此の品々を辨へ定め争ふ」「我が物と打頼むべきを選ばむに……えなむ思ひ定むまじかりける」……心に叶ふやうもやと、選り初めつる人の、定まり難きなるべし「定めかねていたく打敷く」の「定め」である。即ち「妻定め」である。所謂「雨夜の品定め」である。全段の最も中心點を成す主要な語である。いゝ加減の軽い語では無し。そして「難き」は無論「これはしもと難つくまじきは難くもあるかな」の「難き」である。「難つく」の「難」などもなす

さるにより難き世ぞとは、定めかねたるぞや。

は、つまり後段(三八〇頁参照)の

されば……何れと終に思ひ定めすなりぬる、そ世の中や。

である。

は、きき

「さて又、同じ頃罷り通ひし所は、人も立ち優り、心ばせ誠に故ありと見えぬべく、打詠み走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき、皆たどたどしからず、見聞き渡り侍りき。見る目も事も無く侍りしかば、このさがな者を、打解けたる方にて、時々隠ろへ見侍りし程は、こよなく心留まり侍りき。この人亡せて後、如何はせむ、哀れながらも過ぎぬるは甲斐無くて、屢、罷り馴るゝまゝに、少し眩く、艶に好ましき事は、目につかぬ所あるに、打頼むべくも見えず。かれぐにのみ見せ侍る程に、忍びて心かはせる人ぞありけらし。神無月の頃はひ、月面白かりし夜、内裏より

「口譯」馬頭「それから又、その同じ頃通うて居りました今一人の女は、品もすつと優れて居りますし、心柄も相應の淑女らしく受け取れて、歌も達者なら、手もすら／＼と走るし、琴も上手といふわけで、まあ手八丁口八丁、殆ど出来ぬものは無いと感服してゐた方で御座いました。それに一寸した顔でも御座いましたし致すんで、今お話致したや、かましや、を氣のおけぬ山の神にして置きました、内證でこつそり此の女と時々逢瀬を樂しんで居りました間は、家が面白くないせゐも手傳つて、唯もう現を抜かして居りました。指食ひの山の神が果てました後は、可愛さうとは思ひながら、なくなつた者はどうにもならないので、今度は愈、誰憚らず、足繁くこちらへ乗り込むやうになりました、だん／＼馴染を重ねて参りますとです、少々早や鼻について來まして、派手であだつばい所がどうも氣に入りますななだ、とてもこれは今後生涯苦樂を共にして行ける見込は無いと、いつか又足が自然遠くなりまして、偶にしか顔を見せませんなだ間に、隠し男を他にこさへてゐたらしいのです。十月の頃、いゝ月夜の晩でしたが、内裏から退下らうとして居りますと、丁度そこへ或殿上人が來會はせまして、私の車に同乗させてくれと申すんで謝絶もならず、實の處、その晩はその女の家へ行かうかなと思つてたんですが、これちやあ、どもならん

罷出侍るに、或上人來會ひて、この車に相乗りて侍れば、大納言の家に罷り泊らむとするに、この人の言ふやう、「今宵人待つらむ宿なむ、怪しく心苦しき」とて、この女の家はた避きの道なりければ、荒れたる崩より、池の水、影見え、月だに宿る住處を過ぎむも流石にて、下り侍りぬかし。もとより然る心を交せるにやありけむ、この男いたくすゞろぎて、門近き廊の簀子だつものに尻をかけて、とばかり月を見る。菊いと面白くうつろひ渡りて、風に競へる紅葉の亂れなど、哀れと實に見えたり。懐なりける笛取り出でて吹き鳴らし、「陰もよし」など、つゞしりは、きき

で、急に親父の大納言の家へ行つて泊らうと、車を遣りますとな、途中で今しも女の家へさしかゝつたと思ふと、車の中でその人が思ひ出したやうに呟いて、「今夜、私を待つてゐさうな宿が、妙に氣にかゝる」と申しましたね、いや丁度此の女の家が又、是非通らんけりやならぬ其の道筋だつたものですから、荒れた土塀の崩れから中庭の池の水が見えて、月まで影を宿してゐる此の家を、むざと素通りは出來かねるといふわけで、のこ／＼車から降りて行きます。おや／＼と狐につままれたやうボカンとして私は後姿を見つめて居りますと、どうして／＼昨日や今日の仲ではないらしく、疾うの昔から出來合つてゐたといつた様子、男の奴、かうひどくそはそはしながら、門の側の廊の縁側らしい所に腰をちよいと下して、暫く氣取つた風で月を眺めてゐます。庭一面の菊が霜に移ろうて美しい色に映え風に争つて紅葉が紛々と亂れ散る風情、何とも言へません。そのうちに男は懐から一管の笛を取り出して鳴らしはじめ、時々「陰もよし、御水も寒し」なんてぼつり／＼詠ふのです。すると、内から

原* 飛鳥井に、あすかぬに宿りはすべし、オケ、かげもよし、みもひも寒し、御秣もよし
(催馬樂、飛鳥井)

歌ふ程に、能く鳴る和琴を調べとのへたりけるを、うるはしく掻き合はせたりし程、けしうはあらずかし。律の調は、女の物やはら

源氏物語繪入 (慶安三年板)



かに掻き鳴らして、簾の内より聞えたるも、今めきたる物の聲なれば、清く澄める月に折つき無からず。男いたく感でて、簾の下に歩み来て、『庭の紅葉こそ、げに踏み

子は、女がやさしく掻き鳴らして、それが簾越しに外へ漏れて来るのですが、随分と派手な現代的な器樂なもんですから、丁度、場合も其の晩のやうな澄みきつた月にしつくり調和してましてね。男はえらく感に堪へたといふ様子で、簾の側まで歩み寄つて來ましたつけが、殿上人ふむ、紅葉は宿に降り敷きぬ、か。なるほど、此の庭の様子ぢやあ、道踏み分けて訪ふ親切者も、どうやら無さうな』などと厭味を言つてみます。それから庭の菊を一枝手折つて、

『琴の音も菊も得ならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめける

【歌意】 琴の音といひ、菊の色といひ、申分の無い此の宿なのに、どうしてまあ選りに選つて私みたいな木側の坊を引きとめたんかなあ。(「引き」は琴の縁語)

口*三七〇頁

【釋評】參照

まづい御相手で、いやはや』と言ふかと思ふと、又『もつとい』と聴手が御入來の節は、遠慮は御無用、悉皆取つときの御手並も出ませうでな』などと、すつかりふさげきつて甘えかゝりますと、女の奴、變に氣取つた聲を出して、

木枯に吹き合はすめる笛の音とむむべき言の葉ぞ無き

【歌意】 いちめるのも大抵になさいましょ。ひう／＼吹き荒ぶ木枯に合奏するやうな、すばらしい御笛のまさまを、吹き散らされる木の葉同然の私風情の音

分けたる跡もなければ』など妬ます。菊を折りて、

『琴の音も菊も得ならぬ宿ながらつれなき人を引きや留めける悪かめり』など言ひて、『今一聲聞きはやすべき人のある時に、手な残い給ひそ』など、いたく戯れかゝれば、女いたう聲繕ひて、

木枯に吹き合はすめる笛の音を引き留むべき言の葉ぞ無き

と艶き交すに、憎くなるをも知らで、又、箏の琴を盤渉調に調べて、今のかしく掻い弾きたる爪音、かど無きにはあらねど、眩き心地なむし侍りし。たゞ時々打語らふ宮仕人などの、飽くまで戯れよみ好色たるは、さても見る限りはをか

(琴)の葉、ちるる、御引きとめ申上げるなぞ、大それた真似が出来ようと御思ひになつて。(笛)は殿上人。琴は自分。その「琴」に掛けた「言の葉」の「葉」は、木枯の縁。「引き」は琴の縁語)

と、いやつき合ふので、私は蹴つ飛ばしてやりたい程、もう胸はもや／＼致しますのを、知らぬが佛の女めは、又々、今度は箏の琴を盤渉調に調べて、華やかな浮々した現代張りで揚々と弾いてる爪音、才女は確に才女ですけれど、聞いている此方が赤くなる位、いやどうも、すつかり當てられてしまひました。唯ちよい／＼慰み半分の相手にする官女などの、思ひきりあだつぼくて色氣たつぷりなのは、さうやつて無責任な戀愛を享樂してゐる間は、寧ろ随分面白いものですが、假令、稀々の通ひ所でも、兎も角もそれをば妻として一生頼らうと致すには、こんな女はどうも危つかしく、殊に少し出過ぎ者だと氣がさしまして、その晩の事を口實に、たうとう斷れてしまつたやうなわけで御座いました。指食女に木枯の女、此の二人の事を考へ合はせてみますると、若い時の心でさへ、やはりさうしたやうな餘り才走つたのは、ちとどうも恐れ入る方で、信じきれない氣が致しました。この齡になつてから後は、ましてさうとしか思へなくなる事で御座いませうよ。貴君方ななさ、下地は好きなり御意のまゝ、手折らば落ちむ萩の露、拾はば消えよう玉篠の上の霞、といった派手で華奢なあだつば

しくもありぬべし、時々にても、さる所にて忘れぬよすがと思ふ給へむには、頼もしげ無く差過いたりと心置かれて、その夜の事にことつけてこそ罷り絶えにしか。この二つの事を思ふ給へ合はするに、若き時の心にだに、猶さやうに持て出でたる事は、いと怪しく頼もしげ無く覺え侍りき。今より後は

い女ばかりが目について、面白い相手と思召すでせう。ま、ま、今に御らうじませ。もう七年も経てば、きつと思ひ知つて、成程と御合點のゆく時が参りますよ。いや、悪い事は申しませんから、拙者が柄にも無い忠告に従いて、色目を使つてしなだれかゝるやうな女には、必ず御警戒なさいませよ。取返しのかめ失策をしかして、男の名まで汚してしまはずにはおかぬのですからね」と懇々と誠める。中將は例によつて頻りと頷く。光の君は片頬に微かな笑を浮べて同感といつた顔つき。『どちらにして、あんなり聞きいゝ感心した話ちやありませんねえ』と一言いつて笑つておいでるのである。

ましてさのみなむ思ふ給へらるべき。御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶にあえかなるすきくしさのみこそ、をかしく思さるらめ。今さりとも、七年餘りの程に思し知り侍りなむ。なにがしが賤しき諫にて、好色撓めらむ女には心置かせ給へ。過して、見む人の爲、頑なる名をも立てつべきものなり」と誠む。中將、例の頷く。君少し片笑みて、さる事とは思すべかめり。「何方につけても、人悪く、はしたなかりける御物語かな」とて、打笑ひおはさうす。

原*折りて見れば落ちぞし
ぬべき萩の枝もたわ
むに置ける白露
(古今四、秋上)

【避きぬ】ヨキヌ。よけられぬ、避け難い、即ち此處は「必ず通過せねばならぬ」の意。眞淵・雅家等は單に「通り道」の意に「よきぬ道」を解しようとしてゐるが、契沖・廣道・守部等は「避け得られぬ」意でなければならぬとしてゐる。「過ぎぬ」では無

い。假に「通り道」の意として「過」の字を宛てるとしても「過ぎぬ」と連體形でなければいけないから、はやり「避きぬ」であらう。眞木柱巻に、三途川のことを「かの瀬はよき路無かなる」とあるのと同じ語で、同じ意味(言ひ方が反対であるだけで)と思はれる。随つて「ヨキヌ」で「ギ」と濁つてはいけない。【月だに宿る住處を】河海抄に「雲居にて相語らば月だにも我が宿過ぎて行く時はなし」拾遺八、雜上、伊勢)を引歌として擧げてある。恐らくこれから出たのであらう。併し引歌なしでも解釋は十分出来る。【ナメろきて】浮かれて、そはくして。【簀子】スノコ。竹簀のやうに細板を渡し並べた縁。【うつろひ】霜にうつろつて色が變つてゐる。【陰】ヨシ……【脚註】催馬樂(サイマラ)飛鳥井の詞句。飛鳥井は一説に京の二條萬里小路の清水と花鳥餘情に見えるが、契沖(源注拾遺)は蜻蛉日記に據つて大和の明日香に在りとしてゐる。陰は木陰。「みもひ」は水で、「もひ」は水を容れる器の聲(モヒ)から轉じたのである。即ち木陰はあり、飲料水も冷たし、馬の飼料もたつぷりある絶好の宿り場所だとの意で、殿上人がこれを誦ふのは「宿りはすべし」の謎で、今夜泊りたいと仄めかすのである。【つゞしる】幾る。一ロづつ歌ふ。ほつり〜歌ふ。「つゞしり歌」といふ語は末摘花巻にも「御つゞしり歌のいとをかしき」と見える。【和琴】ワゴン。倭琴(ヤマトゴト)・東琴(アツマゴト、略してアツマ)ともいふ。我が國固有の琴、上古から用ゐられる六絃の樂器であるが、平安時代に朝鮮樂器などに倣つて作り變へられた。神樂及び雅樂に用ゐる。【けしうは】怪しうは。變では、まづくは、わるくは。【律の調】リチノシラベ。律(リツ)又はリチは呂(リヨ)に對する音調の稱、前者は陽で後者は陰。(泥酔して言舌の不分明なのを「るれつがまはらぬ」などいふのも「呂律」の語から來たものらしい)又、律は「秋の調」といふ。雅樂に於ける調子は元來支那の俗樂からの傳來で、即ち右の二種あり、呂調(呂旋)、又は呂。支那の商調は正樂、律調(律旋)、又は律。支那の羽調は俗樂の調とせられてゐた。その基礎を成す音階の名稱が所謂宮(キユウ)・商(シヤウ)・角(カク)・徵(チ)・羽(ウ)の五聲である。催馬樂は奈良時代の民謡だったのであるが、外來音樂の樂器をも用ゐて伴奏するやうになり、平安時代の主要な聲樂になつた。併し樂曲として今日傳はるものは、「安名尊」山城「席田」叢山(以上、呂調)、「更衣」伊勢海(以上、律調)の大曲に過ぎない。「飛鳥井」も即ち律調で、尻上りの感情的な旋律(今日傳はる呂調も實は一種の律調に變つてをり、元來の律調は更に一層感情的な旋律になつてゐる)であるから、此の月下の艶かしい場合に恰當するのである。【今めきたる物の聲】「物」は樂器。眞木柱

卷に「物の音など調べ、懐かしき程の拍子打加へて遊ぶ」又、若菜下巻にも「萬づの物の音」物を整へ知る導しるべし など、皆其の意味に用ゐてある。弄花抄に「和琴なれば、今めきたる物と云々」とあり、小櫛は「弄花よろし」とだけで説明してない。「今めきたるは物」だけにかゝるか、「物の聲」にかゝるか、いづれにもとれる。物だけとすれば、神代以来の樂器を「今めきたる」では一寸矛盾するやうでもあるが、前述の如く、此の時代に新型に改作せられたらしいから、却つて不都合ではない。が、勿論樂の調子も其の爲に一層、今めかしい管であらうし、「物の聲」まで掛けて解する方が寧ろ自然のやうに感ぜられる。常夏巻に「秋の夜の月影涼しき程、いと奥深くはあらで、蟲の聲に振鳴らし合はせたるほど、氣近う今めかしき物の音なり。事々しき調もてなししどけなしや（仰々しい彈奏振りか如何ニモ浮華アアル）。この物よ、さながら多くの遊び物の音、拍子を整へ取りたるなむいとかしこき。（他ノ諸樂器ノ音色ニ合セ出スコトノ出來ルノガスバラシイ）。倭琴とはかなう見せて（見カケハツマラヌ日本ノ琴ト見セテ）、際もなくし置きたる琴（無上ノ樂器ニ作り上ゲタ琴）なり。廣く他國の事を知らぬ女の爲となむ覺ゆる。……唯、はかなき同じ清振すがびの音に（ホンノ一寸調ベタ、大シテ他ト變ラヌ清振ダケテ）萬づの物の音籠り通ひて言ふ方も無くこそ響きのぼれ」とあり、少女巻には「大臣（頭中將）和琴引き寄せ給ひて、律の調のなか／＼今めきたるを、さる上手の亂れて振ひ彈き給へる、いと面白し」とも見える。下の段の「箏の琴を……」の「今めかしくも、彈き方も派手でモダンなところがある」と見ても差支ないが、なほ曲調をさして言つたのであらう。【箏】サウ。支那傳來の琴。十三絃の樂器。【盤涉調】パンシキチウ。これも律調で、所謂十二律即ち壹越イチコツ（支那では黃鐘クワウ）。以下之に準ずる。斷金ダン（大呂タイ）。平調ヒヤウ（太簇タイ）。勝絶シヨウ（夾鐘ケウ）。下無シモ（姑洗コ）。雙調サウ（仲呂チュ）。龜鐘フシ（蕤賓スビ）。黃鐘クワウ（林鐘リン）。靈鏡ラン（夷則イ）。盤涉パン（南呂ナン）。神仙セン（無射エキ）。上無カミ（應鐘オウ）の中の盤涉を第一音宮に置いた音階に因る曲調。（なほ十二律は十二箇月や十二支などにも配せられる。盤涉調は八月・鈴木服の玉の小櫛補遺に「樂のすがた、盤涉調は輕はづみなる物なり。さるに因りて此の女のみさまに取合はせて『今めかしく云々』といふなり」とある。

【参考】 古代音樂の事は日本音樂講話（田邊尚雄著、岩波書店）、音樂の原理（同著、内田老鶴圃）、もつと簡單には、やはり田邊氏の雅樂通解（古曲保存會）などが良い参考になる。古いところでは拾芥抄（三卷。放實書房）や體源鈔（寫二十卷。豐原統秋著）や正續

群書類從の管絃部などがよい。古事類苑舞樂部にも資料が集められてある。舞樂の説明書としては續類從に入つてゐる教訓抄が貴重な資料であるが、近時古典全集に上下二冊として收められたので非常に便益が増した。神樂・催馬樂にもこれらは關聯してゐるが歌舞音樂略史（小中村清矩述。近時岩波文庫に收めて普及した）、日本歌話史（高野辰之博士著、春秋社）等必讀の書である。神樂・催馬樂の註釋は古く一條兼良の梁塵愚案鈔（上下）があるをはじめ、熊谷直好の梁塵後抄（四卷）（註釋十二種に附して收載）、橋守部の神樂譜入文（三卷）及び催馬樂譜入文（三卷）（全集第七に收載）、本居大平の神樂歌新釋（五卷。本居大平全集所收）、今井似閑の神樂歌催馬樂注解（寫二卷）等、新しいものでは神樂催馬樂通解（一冊。今井彦三郎著、明治書院）がある。

【かど】才。能。はたらき。【さる所にて】兎も角一つの通ひ所として。【いとおつて】事託、託。假託して、か／＼つて、口實にして。【あえか】弱々し、華奢な。【見む人】夫。【例の】例の如く。

【釋評】これが馬頭の告白の第二話。第一話中の喧嘩別れの後、臨時の祭の調樂の夜更けて、歸らうとしたがさて家路は無い自分だつたと語る詞に「氣色ばめる邊はそゞろ寒くやと思ふ給へられしかば」と言つてゐるのが、此の女の事である。指食女とは正反對な性情の女で、前者が山の神型ならこれは娼婦型、彼が強情のしつかり者なら此の方は凄腕のしたゝか者、一は愚直で田奥のあるプロ的——但し保守思想の——家政婦式、他は派手で都會香の熾烈なモダンブル的——但し少しマルクスかぶれのしたやうな——女給式、つまり、恐しく融通の利かぬ家庭中心主義者と、ジャズに合はせて次々と男をなぶつては戯しむ皮相な唯物的官能主義者と、言ひ換へれば、洗煉せられてない、垢脱けのしない實質派と、浮華な、見た目は眩惑的だが内容の乏しい技巧派との對照、（で、大體は例の「實」と「見る目の情」との比較に應ずるのだが）即ち後者は總論の所謂「初めの難」の好範例である。そして女に於ける「初めの難」は又即ち普通の男の先づ最初に誘惑せられる陥穽である。

人品から教養から、それに第一容貌も較べ物にならぬと来てゐるから、例の「さがな者」を喚大明神と奉つておいて時々其の眼を竊んでは忍ぶ逢瀬を樂しむ相手には、家庭が光澤の薄い實質一方の經濟主義而も嚴重監視附拘束生活とある反動氣分も手傳つて、其の實「表面ばかりの情」が大した親切に見えて「こよなく心留ま」るのも、無理はないと言へ、おぞましい限り。大衝突で別れた糟糠の妻がほんとにあの世へ旅立つてしまつてからは、結句大つばらで乗り込めるわけと、だん／＼繁々通ひ馴れてみると、これはしたり、「目についた女房此の頃鼻につき」で、夢中に打込んでゐた當時、傾倒禮讃してゐた美點の數々に限つて、それが上手な白粉の上塗、すつかり化かされきつてゐた自分の醜態、今更類から火の出る思ひ、あゝあ、何といつても牛は牛連れ、ではない、馬は馬連れ、やつぱり本木にまさる末木なし、なくてぞがみ／＼家の戀しかりける、自分さへ早く心がけを直せば、指食騒動も持上らなんだを。憎い奴ながら何の彼の言つたつて我が家の大黒柱、守本尊、在りし日の不心得赦させ給へ。南無指食信女得脱成佛、と頻りに殊勝な氣になつて來たその矢先に、偶然とは言ひながら皮肉に、これでもかと思せつけられた古狐の人を人とも思はぬ戯けた様體、苦々しいやら馬鹿々々しいやら、むしやくしやすするが又よい薬と有難く、これで全く夢が醒めてしまつた。と、これが馬頭の追懷談の二の替りの方である。

此の二つの類型的な女性、並びにそれに關した事件についての経験から、馬頭が割出した判定は流石に穿つてゐる。

唯時々打語らふ宮仕人などの、値くまでざればみ好色たるは、さても見る限りはをかしくもありぬべし、時々、いゝ、いゝ、忘れぬよすがと思ふ給へむには、頼もしげ無くさし過いたり心置かれ……

一般論としては正に間然する所無き觀察である。若し作者が現代に生まれてゐたら「宮仕人」で「職業婦人」とでもしたであらう。或は「音楽家」「女優」などと置き替へたかも知れない。それとも「宮仕人」は「きうじ人」でも「女給仕人」

と改めるに違ひない。無論個々の場合としては、職業婦人で模範的な夫人になつた方もある、女優さんが立派な奥様になつてゐる事實もあれば、女給さ から一躍華族様へ玉の輿に乗つた實例もあること、なほ宮仕人で、大學者大江匡衡の妻として恥づかしいどころか内助の務を十分以上に果した赤染衛門があり、九重の奥に勤仕した由縁で、所謂「思ひかけぬ幸ひ取出づる例ども多かりかし」と羨まれるが同じである。又、言ふまでもなく、女流音楽家だつて女優・ダンサー・乃至はマネキンだつて、女給だつて、普通の職業婦人なら尙の事、何もすべてがすべて「飽くまでざればみすきたるは」といふ誂へ向きの條件通りの人づくめでもあるまいこと、なほ宮仕人にだつて現に作者式部のやうな女性もゐると同じである。さうかといつて、前に娼婦型と、氣の毒な境遇に在る人々の汎稱を引合に出したが、當時にも商賣としての遊女がゐたのも事實だが、宮仕人の中にも

佗びぬれば身を浮草の根を斷えて誘ふ水あらばいなむと思ふ(古今、卷一八、雜下)

と秋波を送る小野小町のやうなものもあれば、御堂關白道長から戯れに「うかれ女の扇」と書いて押揄はれた其の扇面の持主和泉式部のゐたのも(和泉式部集第二事蹟である。時代の違ひはあり、又和泉なぞ娼婦視されたら大に不服であるに相違ないが、外觀的にはやはり釋明にかなり骨の折れるであらう生活記録を印して、當時にあつてすら親友赤染衛門に歌で諷諫せられたり(和泉式部集第二・赤染衛門集・新古今、卷一八、雜下等)、性格の異なる紫式部に痛棒を見舞はれたり(紫日記)してゐる。當今でも侮蔑的な意味でなく、和泉型の人も見出せば、自認清少の亞流なぞも寧ろあり過ぎる位に思へる。要するに此處では概觀的論評なのである。つまり「などの」の論なのである。そしてこれは飽くまで家庭主婦としての適不適の評なのである。細君候補選擇の立場からの批判なのである。碎いて言へば、遊び相手として面白い異性が、生涯を托すべき家庭の良妻と、必ずしも常に一致するものではない。やはり「さても見る限りは」である。遊び相手

として面白いのは、遊び相手として面白い事以外でも、以上でもあり得ない、といふのである。遊び相手と言つたのがあつさり過ぎるなら、「性の」と蛇足の註釋を添へたつて一向構はぬが、「戀愛遊戲」だけに限らず——原文に泥まらずに單なる遊び相手の場合にも當てはまる。尤もそれもやつぱり性の遊戲の一部だといへばそれまでだが、兎に角、流行語の友愛結婚とやらいふのなぞも、かうした問題に逢着する事數四ならずであらう。實際問題としては、なか／＼複雜でデリケートで、假定的な説明などでは何の役にも立たないわけであるが、抽象論、原則理論としては、先づ馬頭の此の判断は決定的のものとして常に遵奉せられて大過なきを得るに庶幾いものであらう。即ち前の總論で「萬づの事によそへて思せ」と言つて、工匠・繪畫・書道の上に譽を取つて、繰返し／＼説いてゐる論旨を、妻定め、結婚生活の上に就て實例を擧げて述べた末の歸結として、もう一度復そこへ返つて來たのである。

そこはかとなく氣色ばめるは、打見るに、かど／＼しく氣色だちたれど、……今一度取り並べて見れば、猶實になむ寄りける。である。

はかなき事だに斯くこそ侍れ。まして人の心の、時に當りて氣色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思ひ給へ侍り。

なのである。極く大ざつばに言へば、新奇と平凡、冒險と堅實、才氣と愚直、所謂「今様」と「古代」即ちモダンとクラシカルで、家庭主義、家族主義、内實主義、夫唱婦隨主義、夫外婦内主義からすれば、やはり質實で少々物足りぬ所はあつても、どちらかと言へば新しがりやでない女性が安全第一といつた論結になる。別の立場に移して言へば、西洋主義と東洋主義、世界主義と日本主義、國際主義と國家主義、といつた對立にも通ずる。或はギリシア主義とヘブライ主義とも言へよう。小乗の意味での所謂藝術主義と所謂道德主義でもよからう。文化と素朴、遊樂と緊縮、社交と内助といつたわけで、個人の自由を絶対に尊重したギリシアですら、婦人は貞節と柔順とを二大美德とし、非社交的な家庭

主婦たることを生命として教育せられた。スバルタ式指食女房には驚かぬ「物定め博士」も、當今のおふけなき尖端婦人達には、きつと肝を潰して尻に帆掛けること正に請合である。全く以て昔も今も「氣色ばめるあたりはそぞろ寒くや」に違ひない。馬頭なか／＼味な事を言ふ男である。相當の年齒になれば一層さうした嗜向を目ざすと加判するもの肯ける。源氏の君は今年十七歳、もう七八年も経つと廿四五——つまり馬頭位の年頃——今だつて検査済、選舉權も直に與へられようといふ年輩になる。まして早熟の此の時代、思ひ當る日を其の邊の見當で要望しておいても無理ではな。い。(源氏が廿四歳頃は賢木巻で、その前年に父桐壺院崩御、その又前年源氏廿二歳は葵巻で葵上の逝去、紫上との新枕、それから翌々年の廿六歳が須磨の謫居である)兎角、青春の頃は派手好み、モダン熱、

御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉簪の上の霞などの、艶にあえかなるすき／＼し。

のみが目に留まる。「なにがしが賤しき諫にて、ステツキガールの媚態や、銀座裏のカフェーの嬌唇には心置かせ給へ」と、昭和馬頭はエヘンと此處で一つ勿體振つて大きく咳拂ひをする。頭中は彌、傾聴して座を乗り出す。唯、心にくいのは、片頬に微笑を浮めて、例の口の悪い横槍を一本入れてみる源氏の君である。

○神無月の頃ほひ月面白かりし夜……(本文)

此の一節は敘述が委しくないで、全體の意味を一貫しては取りにくいやうな所がある。故に廣道は「……とて」の下に脱文があるかと言ひ(評釋)、宣長も初めは、其處に詞が多く脱したのであらうと考へた(或抄に擧げたとして評釋に引く鈴屋翁説、及び小櫛)。宣長は後には「今宵人待つらむ……」を馬頭の詞と觀、そして「この人の言ふやう」の「の」は、もと「に」とあつたのであらうと推測し、「……とて」は下の「下り侍りぬかし」にかゝるので、「下り侍りぬかし」も